

付
編
部
落
史

勇 払

一 部落の起源

勇払は石狩低地帯の太平洋岸の入口に位置していたから、前期松前藩領時代、シコツ一六場所への物資の集散地として、毎年、交易の時期になると和人が出入りした。寛政三年（一七九二）の東蝦夷道中記には次のように述べている。

「ユウフツ。平地にて河岸。谷地の中通りて河を船渡しにて運上屋に至る。此処は蝦夷住居なく運上屋一軒あり。板倉二棟、弁天社一社、運上屋並居の東は河岸にて、西は大河の淀なり。請負場は皆山奥にあり。」

『東蝦夷地道中記』 寛政三年

千歳市史は、当時の勇払について「いぶつ（※勇払）は、この一六場所の物資を積み出す土地であつて産物を生産するところではなく、したがって家臣のもらう給地ではなかった——。ここは運上屋があるだけのところであつた。」と記している。

北方問題の急迫があり、ついに幕府は寛政十一年（一七九九）以来東蝦夷地の支配を松前藩からその直轄に移し、ここに役人を駐在させて政務を掌らせた。勇払に人が住むようになったのはそれからである。ここは、その自然的経済的条件によつて人が住みついた土地ではなく、当時の政治情勢によつて新しく見直され、それを契機として集落を形成するようになった土地ということができようであろう。

二 自然環境

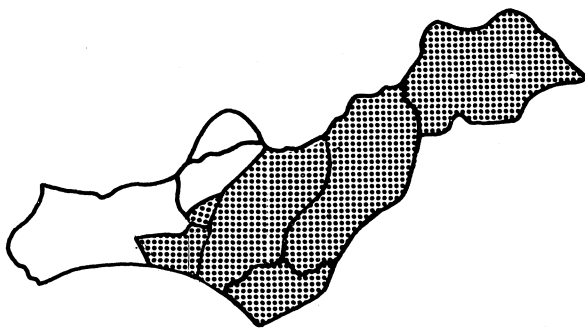
位置 勇払は本市東方一二キロに位置し、本市中最も古くから栄えた地であると面積る。明治初期から『勇払郡勇払村』と称してきたが、明治二十八年の鵠川外六カ村、同三十年、厚真村、同三十三年、安平村の分村により面積上の変遷があった。明治三十五年四月、苫小牧村の二級町村制の実施により『苫小牧村大字勇払村』となり、現在は『苫小牧市字勇払』である。

地形 地形はおおむね平坦で火山灰地であるが、地形形成を物語るようにと植物に砂丘が走っている。

大きな樹木はほとんどみられないが、灌木とあし原から、この地独特の原野、湿原植物がみられる。ホザキシモツケ、サワギキヨウ、ナガボノシロワレモコウ、エゾミソハギ、タチギボウシなどがよく見られ、ハスカップ、野イチゴなど多い。

動物 原野であるため大動物は少ないが、その昔はエゾシカが日高方面からの渡り途中期には極めて多かった。小動物ではキタキツネ、エゾイタチ、リス類、野ウサギ、コウモリ、ネズミ類、爬虫類ではカナヘビ、シマヘビ、アオダイショウ、アマガエルなどが見られた。

魚類は勇払川、小沼にフナ、ウグイなどの淡水魚、勇払川には古くからサケのぼり、十月末から三月にかけて大量のアカハラがのぼったほか、旧河川ではヤチウナギ、カラス貝も棲息していた。鳥類は草原、灌木地に四季を通して



初期の勇払村（明治27年まで）

見られる。セキレイ類、カッコウ、ホオジロ、ベニヒワ、シギ類、山バト、ヒバリ、トビ、タカ、アオサギ、白鳥、カモ、ガン、フクロウなど多種多様にわたった。

昆虫類は、オサムシ類、トンボ類、蝶類も各種アゲハ、エゾシロチョウ、ヒヨウモン類、シジミ類も多い。

三 発展衰退の状況

(一) 幕藩時代の勇払

松前藩領 北海道史のうえで、蝦夷地の様子が少しずつ明らかになってくるのは、松前氏が江戸幕府の傘下に時代の勇払 名を連ねるようになってからである。慶長八年（一六〇三）徳川家康が幕府を開くと、松前慶広は翌九年大名に列せられて蝦夷島の統治権を握った。しかし、広大な島内を支配することは容易なことではなかったから、幾度かの和人とアイヌの抗争のあと、藩は島内を和人地（松前地方）、蝦夷地（奥地）に分け、和人地には従来から住んでいたもののほかはアイヌの居住を許さず、蝦夷地には和人の居住を禁止したのである。この期の勇払に和人の居住するもののがなかった理由の一つはこの制約があったからである。

藩はまた、米産のない自藩に特殊な知行制度をとっていた。島内の和人地、蝦夷地の適当な場所を選んで、そうち、行政的、経済的に重要な場所を藩主の直領とし、その他の場所を知行地として上級家臣に与え、その地でのアイヌとの交易による利益を彼等の扶持にあてさせるといふ特殊な制度をとっていた。

藩主や藩士の交易する場所を商場（ばうば）といった。はじめは知行主が自ら船を仕立てて出向いたが、だんだん代理者を送るものが多くなった。交易は当初、船中またはアイヌの家などが使われたが、後には交易所が設けられるようになった。寛文蝦夷の乱（一六六九）の前後から、藩はきびしい財政難に直面していた。鷹、砂金産出の減少によって、藩は二

大財源を失っていた。藩は根本的な財政の建て直しの必要に迫られていた。藩政の改革が行われ、積極的な商業資本の導入が行われた。場所請負制度の採用である。

場所請負制度とは、従来、藩主、藩士によって行われていた商場の交易権を、一定の運上金を納めることを条件として全面的に商人に譲り渡すものであった。知行主を場所持といい、商場を場所と呼ぶようになった。この制度は、寛文年間のはじめから享保年間のはじめにかけて一般化したといわれている。

各場所には交易の場所として運上屋がたてられた。苫小牧沿岸から千歳川にかけての一帯の地には多くの『場所』があつて、時代によって増減があつたが、一般にシコツ一六場所とよばれていた。天明五年（一七八五）から六年にかけて行われた幕府御普請役佐藤玄六郎の調査は「シコツ、運上屋十四所、海岸里数数十里余、六戸海岸に在り、八戸はシコツ川の岸にあり」と報告している。しかし、当時の勇払は『場所』の中に数えられていない。生産の地ではなく、したがって家臣の知行地ではなかったからである。しかし、ここは、千歳川（当時はシコツ川といった）勇払川を通じて太平洋に出る交通至便の土地であつたから、運上屋が設けられて、奥地の産物が集められていたのである。

前期松前藩領時代の蝦夷地は蝦夷交易を中心とする時代であつたから、和人とアイヌは毎年勇払に集まつて交易していたということができらるであらう。それがいちやく注目をあびるようになったのは、ロシアの北方接近が問題になったからである。

幕府直轄

松前藩がはじめてロシア人の南下を知つたのは宝暦十年（一七六〇）といわれる。明和二年（一七六

時代の勇払 五）から同三年にはエトロフ島、ウルップ島に出没している。識者が蝦夷地の危機を説く声は次々に高まつてきて、早急に境界の取締り対策をとらなければならなかつたが、同時にその温床をなすものは場所請負制度の弊害であることが認められた。利潤の追求に急な請負人のアイヌの酷使虐待、取引の不正は目にあまるものがあつ

て、彼等を離反させるにいたつていたからである。

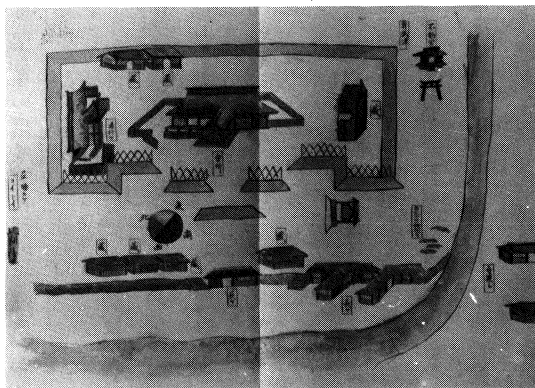
寛政十年（一七九八）、幕府は蝦夷地の直轄経営を決意、蝦夷地取締御用係を任命してその準備に着手し、翌十一年正月、東蝦夷地浦河から知床までの地とその付属の島々を、当分幕府の用地として仮に上知し津軽、南部の二藩にはこれが警備について司令したが、松前藩の申し出によって、同年八月十二日にはさらに知内までの地をこれに追加した。シコツ一六場所が直轄地に入ったのはこれからである。

直轄の眼目は、対外的にはロシアとの境界の取締り、対内的にはその進出を可能にするアイヌ政策の改革にあった。悪弊の多い場所請負制度を廃止、アイヌを撫育^{ふいく}して仁政をしき、彼等が外人の扇動誘惑に乗ることのないように教導しようとするものであった。

アイヌとの交易は従来 of 制度を廢して幕府の直接取扱に改めた。取扱所の運上屋は会所と改め、ここには役人が詰めて、支配人、番人、通辞などを指揮して交易の公正を計った。会所付近には、米、塩、網、産物などを納める倉庫や大工、鍛冶などの作業所、通行人や人馬の継立てなどにあたるための下宿所、旅宿所などが設けられた。会所の建物は、小さくて五〇坪、大きいものになると一〇〇坪以上の大建築で、多くは床の間つきの座敷を設けて上級官吏の宿泊に備えられていた。

従来は、請負人関係者以外はまったく場所に行くことが出来なかったが、直捌^{じきさく}になると、希望者には出稼ぎを許し日用品その他を融通したが、中には妻子を伴つて来るものもあった。

場所そのものも整備された。シコツ一六場所は統一されて勇払場所となり、その会所は勇払に置かれ、今日の千歳には出張番屋を置いて奥地の産物の交易や千歳越えの事務に当たらせた。当初、勇払会所は川東にあったが、波受けによる決壊がげしかったので、文化元年川西に移転した。これが現在の『会所跡の碑』の位置である。



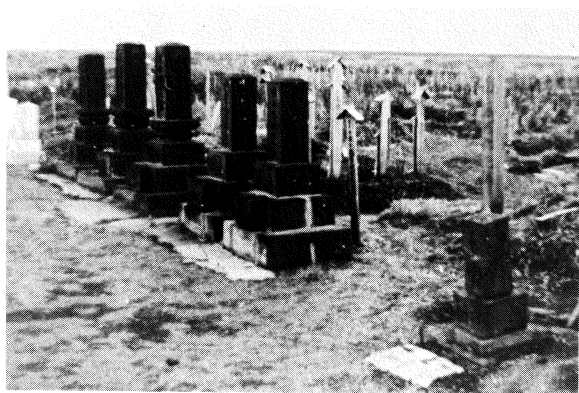
勇払会所配置図（文化6年）
〔市立函館図書館蔵〕

最初の勇払会所詰役人の氏名は明らかでないが、寛政十二年の「庚申蝦夷千役」には高橋次太夫、河西祐助、月輪安済、大司馬伊織、翌享和元年の「蝦夷道中記」には河西祐助、原新助、河田甚太郎、望人三作が記されており、享和三年建立の勇武津不動には願主として高橋次太夫、河西祐助の名が刻まれている。

これらの記録に残る河西祐助は八王子千人同心の一員であった。彼が会所詰として勇払に赴任を命ぜられたのは、東蝦夷地仮直轄の翌年、寛政十二年春であった。彼は妻子を伴って来たが、この地でその妻を失った哀話、現存する妻の墓と、その墓に刻んだ彼の詩によって世に知られている。彼は勇払に勤務すること八年、文化四年（一八〇七）九月、有珠に出張中三七歳をもって客死した。樺太に、千島に、ロシヤ人の進出がはげしく、奥州の諸藩には増兵出兵が命ぜられ、幕府は新たに蝦夷地防御総督を任命派遣した時であった。その当時の勇払の状況は津軽藩士山崎半蔵によって次のように伝えられている。

五月二十六日勇払着、河西祐助と大筒の試みをなす。五月二十八日、沙流在住折原政吉妻、支配人の妻、鶴川地役の家内、河西祐助の子、同召使の女、その他何人の家内妻妾様々に相うらみ云申し、泣き嘆き、晴衣の帯衣裳をも惜しみいたわる心もなく、泥砂に引きまぶれ、歩み得た足血に染みて急ぎ船に乗り行く有様、しきりに戦国時代の事ぞ思い出されける。これと申すも、婦女子をば彼等に探り出されぬよう、重き役人よりふれいだす振合なりしかば、下々に至り夢想にさわぐもことわりなり。

（山崎半蔵『蝦夷日誌』 文化年間）



旧蝦夷地開拓移住隊士の墓
〔昭和30年〕〔苫小牧市史編さん室蔵〕

祐助は、寛政十二年の緊急配備以来八年間、このへき地に在って幼児をかかえながら警備と行政に身をささげたのであった。

同じ寛政十二年春、祐助より一足先に来た八王子千人同心に原半左衛門とその部下の一隊がある。半左衛門は同隊千人頭の一人だが、幕府の蝦夷地直轄のことを知るや同心の子弟等をひきいて警備開拓のことにあたらうと出願し許可されて、弟新助を副隊長とし、応募した一〇〇名を五〇名ずつの二隊に分けて白糠、鵠川に移住した。この人員はさらに五〇名追加になったので、これも両地に配分した。鵠川隊の指揮は新助がこれにあたった。

こうして現地に入った彼等は、その冬、寛政十二年から十三年の春にかけて、辛苦と恐怖にみちた生活をおくる。病気が多発し、毎月死亡者が絶えなかったのである。しかし、そういう生活に耐えながら、彼等は鵠川畑作場だけでも数一〇町歩の開墾を達成した。

享和二年（一八〇二）二月、幕府は蝦夷地御用掛を廃して蝦夷奉行（同五
月、箱館奉行と改める）を置き、ついで七月、東蝦夷地の仮直轄を永久直轄に改め、翌三年、蝦夷地経営費予算を半減する
原半左衛門、同新助が箱館奉行所に登用されて移住地を去ったのはその翌年文化元年（一八〇四）である。こうして蝦
夷地の原隊は解散するが、配下の者は希望によって地役雇として奉行所に採用され各地に派遣された。彼等が移住し
てから解散に至るまでの期間は四カ年に過ぎなかった。

寛政十一年にはじまった幕府の東蝦夷地仮直轄は、享和三年（一八〇二）には永久直轄に改められ、さらに五年後の

文化四年（一八〇七）には全島を直轄したが、対外関係の静穏に赴くのを待って文政四年（一八二二）これを松前藩に返した。この間、文化十年（一八一三）東蝦夷地であつてきた幕府の直掬を止め、その監督のもとに場所請負制度を復活している。

この時期、勇払には官営の諸施設が設けられ、役人のほか支配人その他の雇人が配置されて、行政、交易事務の充実が計られたが、荒涼たる土地の様子に変わるところはなかつた。

なお、文化年間の勇払は次に記すようなものであつた。

出荷物 椎茸、魚油、干鮭、秋味

一、会所一カ所、支配人一人、通辞二人、馬索一人、手傳八人、番人二十四人

一、下宿三カ所、板倉四カ所、荷物板倉三カ所

一、辨天社一カ所、会所附屬夷船二十艘

一、会所付持底船二艘、会所付川船十四艘、左馬船三

右勇武津、近辺に山なく海岸かけ拂の浜辺にて、浜手に住所なく薪木も求め難く、浪立荒く片瀬海岸もなき所故、夷人も三里より十里迄の内外住居也。此処に稼きなきも廻船出入の場所、又は奥地への道筋故前々より会所あり。夷人食物は四季共に魚物にて取続き来れども海魚なく、河魚をして其食とす。

初秋より千歳川場所より各稼の産物干鮭二里程の山中を背負い運び、夫より五里余川船にてニウブツ迄積手傳にて、御用地になり春夏の内海漁の試稼を始め、秋より冬は千歳川にて鮭漁のみ。夷女は場所により作物をも仕付、又はウバユリ、フクシヤの類を取りて食物の糧に供し、厚子を織りて男女の衣料に用ふ。

こういう中で目につくのが「御用地になり春秋の内海漁の試稼を始め」ということで、これは、寛政十二年に白老場所のアイロではじまった鰯漁業が漸次この地方にも普及して来たことを指すものと思われる。

東蝦夷地各場所の直捌制を場所請負制にもどしたのは文化十年（一八一三）であつた。「介抱専らに取計候に付、蝦夷人ども難有がり、伏従厚く相成候。」蝦夷人ども産業繁栄いたし、不平等もないようになったと見たからである。

こうして、各場所の入札が行われ、勇払場所は松前の阿部屋仁兵衛に落札し、翌文化十年から七年間請負うことになった。請負人は幕吏の監督下にあつて、従来の企業業務のほか、アイヌに対する撫育、介抱、役人警備兵の便宜供与、公文通送人馬継立、難破船の救助、治安維持のための備品消耗品の整備、外国船発見の際の急報等、いろいろな公的義務が課せられていた。

特筆すべきことは、このころから、当地方の海ではイワシの生産が盛んになつて来たことで、松浦武四郎の「初航蝦夷日誌」は、文化九年（一八一二）当場所の主要産物がサケや椎茸にかわつて、干粕（イワシのメ粕）が第一であつたことを記している。このことは、今までアイヌの生産に依存してきた場所経営から、請負人の資本投下による漁場経営に変わったことを意味すると同時に、経済的にはアイヌ産物の集散地に過ぎなかつた勇払が、海漁を開始することによつて生産地になつてきたことを示しているのである。

松前藩復領 寛政十一年（一七九九）の東蝦夷地仮直轄以来二二年、文政四年（一八二二）十二月七日、松前藩は旧時代の勇払 領に復することを許され、ついで翌五年五月、まったく引き継ぎを完了して松前奉行は廃止される。

奥地島々追連々御取締相整、夷人撫育、産物取捌等、万端居合、安堵の事に候。

『新北海道史―第二巻通説一』 昭和四十五年 北海道

幕府の直轄以来の施政によつて、万事軌道に乗つて心配がなくなつたので、旧家に対する特別の配慮で復領を許す

というのである。文化三年（一八〇六）から四年にかけての事件後、ロシアはヨーロッパ、小アジアの対策に忙しく、ほとんどわが辺海に現れなくなった。国際事情にうといわが官民はようやく心がゆるみ、辺防を軽んずる風が生じてきた。当時蝦夷地の経営は、困難に瀕した幕府の財政に大して貢献する見込みもなかった。こういう諸種の事情がなんらの功績もない松前氏の強い請願によってその復領を許すことになったといわれている。

幕府は復領に際して、直轄中の施政方針を堅く守って、アイヌの撫育を計るとともに、辺防の備えを嚴重にし、万一非常の際には津軽藩および南部藩と協力すべきことを指示した。また、アイヌに対しては、アイヌ撫育や産物取引の方法は、今後とも万事直轄中と異ならないから安心して業務にいそむようと申し渡した。

松前藩の藩政は、さきに本道を領有していた時と大体違いはなかったが、知行制については大きな改革があった。蝦夷地および和人地をすべて直領とし、知行地として場所を与えられていた家臣に対しては、そのかわりに米および金を支給することになった。この制度は、松前藩が場所を支配することによって、請負商人に対する統制力を強化し従来の場合請負制度の弊害を除去しようというものであった。

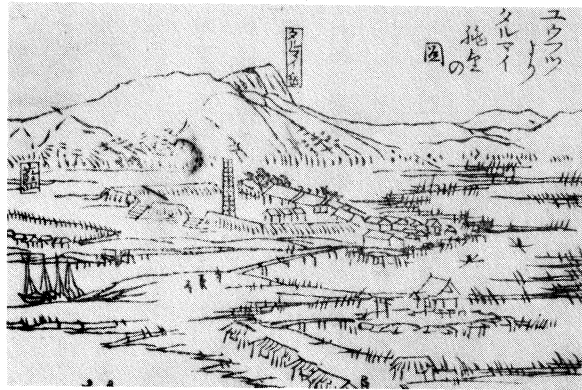
蝦夷地防備についても、幕府直轄時代を踏襲し、東蝦夷地、西蝦夷地計一カ所に勤番所を置いた。勤番は警備だけでなく、蝦夷地の行政監督をも任務とするもので、請負人によって場所に派遣されている雇人の監督、その所管になっている交通設備の確かめ、新規事業の検分や許可、密売買の取締り等万般の取締りにあたった。

ユウフツには、はじめは勤番所がなかったらしいが、天保九年（一八三八）の記録には次のように記されている。

一、ユウブツ 人数六人、内上下三人、足軽三人。

是はユウブツよりミツイシ追の場所支配役所也。

天保十五年の配備状況は



松浦武四郎のえがいた勇払
〔市立苫小牧図書館蔵〕

頭役士 一騎、徒士 一人、在住足輕 二十五人

で、人員も兵器も一段と増強されている。

しかし、このようにしてようやく復活した松前の統治も、幕府の期待したようにはならなかった。綱紀はゆるみ、政務は乱れ、前時代に幕府が鋭意改革したものは、全くくずれてしまった。

藩の内政がこのような折から、しばらく姿を見せなかった外国船が、復領の引き継ぎを終わった翌文政六年（一八二三）幌泉沖に現れたのをはじめとして、たびたび近海に接近するようになった。これらの外国船の出没に加え、国内では有珠岳の大噴火、奥羽地方から次いで全国的な凶作による蝦夷地への米の移入減少等天災や飢餓が相次いだ。松前藩の出費は増加の一途をたどり、それが直ちに場所請負人の運上金の増額となり、請負人の生産増強策は交易の不正やアイヌの虐使とつながった。こうしておそった蝦夷の怨嗟の声は、再び識者の眼を蝦夷地に向けさせ、北方防衛とアイヌ

撫育のための蝦夷地再直轄が論議の焦点となった。そして、これを早めたのは神奈川条約による箱館開港であった。

松前藩復領時代の本道は政治的には混乱の時代であったが、勇払場所海辺の漁場開発によるイワシ漁業の発達、美々山道の開削による交通網の整備等によって、産業や交通の面で、重要性を加えつつあった。弘化二年（一八四五）この地を調査した松浦武四郎は詳細な記録を残している。その中から勇払の様子を抜き書きして見る。

ユウブツ 此地南向、当嶋第一の暖気なる所といへり。（中略）山遠くして而薪にはとぼしけれども、チトセは此附場所故此沼を冬出

し置。其自由もまた妙なり。裏の方沼多くして而船通用至極よろし。運上屋南向。前に土手を築、玄関、座敷美々敷建たり。勤番上下とも止宿所になる。又西部ソウヤ、唐太両場所勤番並石カリ勤番半分程も此処に川通り来り、止宿し而馬繼立に相成事。馬多し。水わるし。

(松浦武四郎『初航蝦夷日誌』弘化二年)

非常備蔵や勤番所があり蔵も多く立ち、高い櫓が立っていて魚群の来るのを見張るようになってゐる。夷人小屋も二〇軒余あり賑やかなところである。勤番の人数は、目付代上下四人、徒士上下二人、足軽二人計八人が詰め、武器を備えて白老から三石までを支配していたという。

当時、勇払場所は松前の山田屋文右衛門が請負っていたが、苫小牧の海岸はすでにイワシ漁場として多くの出稼業者が入っていて、日誌には随所に「漁小屋多し」の記事が見える。

幕府再直轄 文化十年以来、日本の北方問題は表面平穩のうちに過ぎて来たが、ロシアは極東政策を放棄せず、**時代の勇払** 通商開始の機会をうかがっていた。それはロシアのみではなかった。

嘉永六年(一八五三)六月、アメリカは水師提督ペリーを派遣してわが国に和親通商を求め、翌安政元年(一八五四)正月再び来航、幕府は同年三月、神奈川条約を結んで、翌二年三月から伊豆下田、松前地箱館の二港を開港することを決定したが、諸外国はこれを黙視することはなかった。同年八月にはイギリス、九月にはオランダ、十二月にはロシアとそれぞれ同様の条約が結ばれ、鎖国の扉はここに改められたのであった。

幕府はこれらの条約にもとづき、安政元年六月、箱館奉行を置き、松前藩には箱館ならびにその附近五、六里の地方の返上を命じた。

このように蝦夷地が国際的な関係を持つようになると、松前藩のような小藩では広大な蝦夷地を経営することは出

来なくなる。まず、国防上の問題が論議の焦点になった。松前藩の対蝦夷政策は旧態依然で、アイヌは請負人の虐待にたえかねていたから、新たに出入する外国人に帰服するかも知れないという心配も出て来た。こうして、幕府は安政二年（一八五五）二月、松前藩に対して、東部木古内以東、西部乙部以北の東西蝦夷地島々までを上知させ、その警衛、収納、アイヌ撫育の一切を箱館奉行に管轄させた。箱館奉行は各地に調役下役、同心、足軽を在勤させ、さらに主要地に調役をおいてこれを統轄、また組頭を各地に巡回させて取締りに当たらせた。安政三年（一八五六）の調書によれば勇払場所は室蘭詰調役の所管下にあり、次の幕吏が在勤していた。

ユウフツ 調役下役 鈴木庄助

同心 木村源次郎

同 三宅五郎治

（『苦小牧町史』 昭和十五年 苦小牧町）

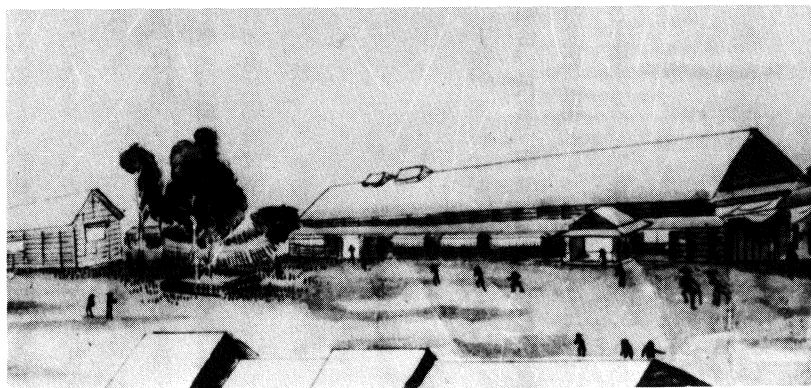
下役、同心は妻子をともなつて在住、防備、産業、行政の全般にわたつて所掌していた。警衛は箱館奉行の下に、仙台、秋田、南部、津軽および松前の五藩に命ぜられたが、東蝦夷地シラオイからシレット岬までの一帯と島々は仙台藩の持場となった。この元陣屋はユウフツに置くように指示されたが、藩から地理的、地形的に不適當であるからと上申があつて安政三年（一八五六）、白老に変更された。安政二年の勇払の武備は「公務日誌」によれば

ユウフツ勤番所前台場有之、差掛見分致す。百目筒三挺あり。当所勤番頭役河野藤蔵、徒士一人、足軽四人、在住二十五人

で、この地方では充実した備えであつた。

アイヌの撫育を前直轄時代にもどすことも重要な方針であつた。場所詰役人、請負人には具体的な指示が出され、

（『北海道史―第二卷通説一』 昭和四十五年 北海道）



勇払会所の景（安政元年、一瀬紀一郎）
〔市立函館図書館蔵〕

アイヌに対しても申し渡しがあった。請負人がアイヌを使用したい時は役所に申し出て許可を受けるようにしたのもその酷使虐待を防止し、適正な交易や賃金の支払いを行うように監督しようというものだった。その後、安政六年九月、奥羽六藩に蝦夷地の約半数を領地として与え統治させたが、各藩は財政が窮迫していたし、幕府もその後の内憂外患の中で政策は次第に後退していつて実を結ぶことなく終わってしまった。

この時代の場所経営は従来どおり商人に請負わせた。ユウフツ場所は、松前の山田屋文右衛門が引き続いて請負った。産物はイワシ八分、サケ二分、シカ皮の産出も多かったが、相変わらずタルマイ浜のイワシ漁が多く、松浦武四郎をして「実に夏日の漁時、諸方よりの出稼多く、是東部第一の漁場也。」（東蝦夷日誌）といわしめた。

こういうタルマイ浜の盛漁、会所元勇払の繁栄とは別に、時代は急速に変わりつつあった。慶応三年（一八六七）十月、江戸幕府は崩壊し、同年十二月維新の新政府が成立して蝦夷地の行政は新政府の手によって行われることになった。

当時の勇払について八戸伊与吉は次のように語っている。

- ・ 森ヨリ旧室蘭へ川崎デ渡海。
- ・ 永住人別々漁場ノミ。

・樽前（水島彦右衛門）、別々ノ附近樽前神社アリ。

・^{オボツ}覚生ニハ三軒、錦多峯ニハ太田又兵衛外一軒。

・小糸魚 白嶋万吉、土堀、外鍛治屋。

寺（東京芝ノ別レト云フ）僧ハ神主トナリ、後之レヲホゴス。

・苦小牧 四軒、可、相馬、白沢。

納屋 勇拂管内 別々ヨリ勇拂三十三ヶ所（番人ノミ、米ヲ買ヒ食ヒ越年ス）。

・勇拂 会所、一年交代（半数）十二月切上ゲ、旧二月国ヲ立チテ来ル。

・会所 女ナシ。間口四十間、奥行凡七十間。

建物 米倉一、酒倉一、網倉一、皮倉一（鹿、狐、熊）、一番、二番、三番倉（シントク、ハツチ、宝物、反物等、アイヌノ宝物勘定ニ用フ）。

・公儀住宅 三棟、同心二人上役二人。

・同心 三宅五郎次（増毛詰トナル）。

・上役 鈴木庄助、鈴木歳郎（此地ニ死ス）、鈴木歳郎死後松村平之助。

・同心 三宅五郎次の後、武川亀次郎、久保常七。

・現在ノ神社竜神社ナリ。慶応元年之建、神体ハ山田文右衛門ノ身内ノモノ千年神社ニ納メタリ。

・五百石ノ船ハ一里位沖ニツク。河舟丸木舟百モアリ、漁場ニ渡ス。山田文右衛門五ヶ所。土人ハ漁場ニ三百人余。土人小屋三十七。

・台場 簡單ナル岡（クレヲツミ、一ケノ砲アリ。径三寸長サ三尺。後、脱走者室蘭ニ持チ行ク）。

・仙台ノ脱走者四十人来ル。釧路へ逃グ。露西亜ノ船沖ニ見ユ。

・川口 時々（二年ニ一度）川口ヲ切ル（鮭ノ取レ方違故）。

・昆布取リ七十人モ寄セ来リテ宿ル。浦河、様似、幌泉ノ漁夫ナリ。

・半里上流ニ鮭倉アリ。

〔『京野某探録』とあるガリバン刷りだけで他は不明〕

(二) 明治初年の勇払

慶応三年（一八六七）十二月九日、維新政府が成立し、蝦夷地は新政府に帰属することになった。

翌慶応四年（一八六八）九月八日、年号は明治と改められたが、これに先立つて同年四月、蝦夷地民政の担当機関として箱館裁判所が置かれ、五月一日、開庁を見た。裁判所は間もなく箱館府と改称した。箱館府は地方行政を進めるため、蝦夷地数カ所に出先機関を設け、北辺の警備と地方の開発を進めようとした。交通の要地として古くから東蝦夷地の中心であつた勇払には役所が設けられ黒沢伝之丞を頭として一名が配置された。役所の庁舎には旧仙台藩勤番所があてられ、玄関には鉄砲が並べられ、ものものしい警備ぶりであつたといわれる。

当時、勇払の会所はアイヌ三〇〇人を使用する大漁場経営であつた。春の漁期には出稼人も多く大変な賑わいであつたが、夏に入ると次第に減り、秋には越年する番人その他若干の者が残るだけの寂しいところになつてしまふのもこの地方の特徴であつた。

明治二年七月、官制の改革があつて箱館府は廃止され、新たに開拓使が設けられたが、勇払役所は開拓使に引き継がれてそのまゝ存続した。同年八月、本道は各省藩、土族、寺院などの分領支配による開拓を進めることになり、勇払役所はその引き渡し事務を行ったが、勇払外二郡が高知藩の支配地になると翌三年、勇払役所は廃止された。

蝦夷地が北海道と呼び改められたのは明治二年八月十五日である。道内は一一国八六郡に区画され、勇払村は胆振国勇払郡に所属することになつたのである。

明治二年八月、高知藩は分割支配による蝦夷地開拓を出願し勇払郡、千歳郡、夕張郡の割渡しを受け、翌三年五月本道に向かった。支配地開拓は、開墾地の主点を千歳附近におき、これに主力を送った。藩のたった開拓施策はもっぱら農業振興であつたが、勇払村は交通上の要地、行政、治安警備の基点であつたから開墾所（会所）を設け、これを中心に一〇数人（多い時は二〇人以上）の役員と若干の大工、人足をおいた。ただ、その漁業政策については一切を漁場持（明治二年九月、開拓使は場所請負制度を廃止）に任せていた。

高知藩の分領支配期間は短かつた。明治四年五月、政府は開拓使庁を札幌に置き、ついで八月、全道を開拓使の統治に改め、各郡に出張所を置いた。勇払郡出張所は勇払村におかれ、漁会所の一部を借りて庁舎としたが、翌五年五月高知藩から土地人民等の引き継ぎを完了した。同藩の支配期間は約二カ年にすぎなかつた。

この時の引継書の「永住人別雇人別書上」によると、勇払村の永住人は野口禎藏（家族二人）だけよりない。これに對して「勇払郡諸道具調」には、役宅、旅館の設備の豪華さを次のように述べている。

「一々品目ヲ省略スルト雖、役宅通行屋ノ設備ハ北辺ノ設備ノ夫レトハ思ハザル程ノ設備ニシテ、家具食器夜具等ハ言フ迄モナク至レリ盡セリノ用意ニシテ、通行屋モ一度二五、六十人ハ不自由ナク收容シ得ラルルノ設備アリ。蓋シ北辺交通不便ニシテ急場二間ニ合ハザルト、當時、相当ノ人物ノ巡視通行アリタルヲ以テ、此場合ニ備ヘタルモノナリ。」

（『苫小牧町史』 昭和十五年 苫小牧町）

交通、行政に加えて、この地方の経済の中心地だった勇払村は、旅客の往来も多く、巡視の高官の宿泊も多かった。それ相應の設備が必要だったことがわかる。しかし、ほとんどイワシ漁業以外に生産事業のなかつたこの土地は、出稼漁夫による限られた期間の賑わいであつて、漁場持も会所雇人も永住人として土地に住みつくものではなかつたことを物語っている。

(三) さびれ行く勇払

明治五年三月、開拓使は室蘭港の重要性を認め、札幌、室蘭間に新道を建設することにした。こうして、この新道は本道の基幹路線となったが、このことは、勇払村に大変革をもたらす結果になった。新道は植苗から苫細（苫小牧）に結ばれ、勇払はこの路線からはずされた。長い間、太平洋岸と日本海岸を結ぶ交通の要地であつた勇払は、その使命を終えたのである。

勇払はすでに開拓使出張所の所在地として適地ではなくなり、旅客の通過する者も激減した。勇払詰細川元教が「昔日咽喉枢要ノ地モ今日寂寞閑散ノ地ニ変ジ候姿ニ御座候」として、庁舎を苫細（苫小牧）に移転するように具申したのは翌六年五月であつた。細川は同年六月、札幌詰に転じ、後任には黒沢正吉が着任したが、細川の意見書は採用されて、同年九月二十七日、苫細に移転した。

先に交通の要地から外され、今また出張所の移転によって行政の中心の地位を失うと、勇払に残るものは漁場だけであつた。しかも、このころから漁業行政方針にも改革が見られ資本家の交代がはじまつた。この時期はまた、漁業の衰微期に入つた時期でもあつた。タルマイ浜の漁業はイワシ漁によっておこりイワシ漁期に操業する他地方の漁業資本家によって維持されてきたから、イワシの回遊の減少によってこの地方の漁場は火の消えたように衰退して行つた。大日本再生製紙の工場建設まで、長い間、勇払部落は零細漁業者によって、かろうじて維持されて来たのであつた。

明治の中期、勇払村にも農家の移住を見、人口が急増した時期があつた。それは、安平地区が勇払村と植苗村に属していたころ、年代にしていえば、明治二十四年、北海道炭鉱鉄道会社が夕張、追分、岩見沢間に鉄道を敷設し、翌二十五年、追分、室蘭間に延長開通を見るにいたつたそれ以後である。特に、同二十七年、早来に駅が設けられるや、

鉄道沿線に農耕適地を求める移住民が絶えなかった。この結果が同三十五年十月の安平村分村独立である。この勇払村安平地区の変遷はあったが、それは勇払の歴史の流れを変えるものではなかったのである。

この項を終わるにあたって、明治中期の様子を語る佐藤アキの談話をかかげておく。

私は勇払育ちで、明治二十二年十一月二十九日に生まれました。勇払の小学校の第一期生で、入学したのは二十九年の八月二十八日です。

その頃の勇払は、日高街道がまだ旧道の時で、今の『会所跡の碑』のあたりを中心にして二、三軒の人家がかたまっていました。漁もあり人の往来もあって、大変繁昌していました。中でも西川健助さん——、この人は大きな漁場を持っていた人で、小学校をたてる時には大変力をつくしたのですが、この西川さんの家や、ハタゴ屋（旅館）をやっていた木村さん、柴田さんの家は大変立派で、大きな屋敷をかまえていました。

西川さんの家には、ウルシ塗の赤い一抱えもある角柱や、はめ込みの立派なレンジ窓がありましたし、高足の客膳が百枚もあってそれも、一の膳は黒塗、二の膳は朱塗で揃っているという立派なものでした。（中略）

西川さん、木村さんにつづくのはハタゴ屋をやっていた八戸、小笹家、それに相木さんという豆腐屋さんなのですが、皆相当裕福なぐらしをしていました。これも、私が小学校に入る頃から不漁になってきて、だんだん人家もへり部落がさびれてきました。（中略）私が小学校に入ったのは七つの時で、もう浜も漁が悪くなってきたが、卒業した頃からはますます不漁がつづいて、勇払はさびれるばかりでした。

（佐藤アキ談 『明治中期の勇払』 昭和三十四年 杉林良彰）

（四） 勇払の復興

勇払が復興するまでには、長い期間を待たなければならなかった。その間、北海道の開拓計画が進められていて、

当地方にもいろいろな動きが出ていた。

大正五年には、勇払原野開発を主目的とする胆振開発期成会が設立され、同十二年には勇払原野開発同盟会が結成された。同十四年には勇払原野の測量調査があり、昭和二年には丸拓会社によって開発に着手された。この年、日高拓殖鉄道、苫小牧軽便鉄道両社線が国鉄に買収され、日高線の開通を見た。北海道緬羊牧場株式会社は勇払に広大な用地を買収して牧場の経営に着手したのが翌三年である。これが後に山陽国策パルプの前身大日本再生製紙株式会社用地になる。沼ノ端、勇払地帯の湿地改良のために第一排水幹線を掘さくしたのは同五年である。

漁港築設

勇払の復活について一つの有望な計画が試みられたことがあった。それは苫小牧の漁業基地をここに設けようという構想で

ある。苫小牧の沿岸漁業が不振になると沖合漁業に注目する動きが出て来た。町をはじめ漁業家有志によつて漁港築設が真剣に検討された。まず考えられたのは勇払河口を浚渫しここに漁港を設けることであつた。

大正十三年、町は本腰を入れてこれが実現にとりくむことになった。勇払川は川口になると海岸沿いに西に流れて海に入る。これを直線に切り換え、この川口に船を入れようという計画であつた。この工事は同年十月に完成したが、丁度このころ建造中であつた発動機船憲政丸が完成したので、その初航海をかねて勇払川に乗り入れることにした。しかし、この試みは失敗に終わった。川口の砂が潮流のために動いて浅くなり船を入れることが出来なかつたのである。これが完全を期するためには巨額の投資が必要であつた。勇払は



勇払川河口（昭和50年）
〔苫小牧市史編さん室蔵〕

一つの機会を失ったのである。

勇払築港

苫小牧の将来を決定づけたものは苫小牧工業港（現苫小牧港）の築港である。この運動は昭和四年の苫

の計画

小牧漁港築設期成同盟会によって公式に始められたが、同十三年には北海道庁長官戸塚九一郎の「勇払

―石狩運河構想―」の発表があり、翌十四年には道庁土木部によって『勇払工業港修築計画』がたてられた。苫小牧地方の漁業の活路を勇払漁港に求めた苫小牧、近接町村の運動は、勇払工業港築設計画によって現実の問題になったのである。それが幾変遷をへて現在の苫小牧港になり、さらに東部苫小牧港計画に発展する。一度は勇払に焦点を合わせられたこの壮大な夢も、こうしてその実現を見ることがなく去ってしまった。

再生製紙

こうして低迷する勇払に復興の灯を点じたのは大日本再生製紙株式会社の工場建設である。漁業の

工場建設

勇払は工業地として登場することになったのである。

亀谷治三郎が部落区長になったのは、昭和十一年ころだが、工場建設当時を回想して語る。

その頃の部落の戸数は、弁天、マコマイを通して全部で約六十戸、今の勇払の中心地には二十戸程、商店といえば八戸さん位のものでした。そこに突然持ちこまれたのが工場建設の話でした。地価が上る心配がある——ということで最初は町役場にも内密にということでした。

いよいよ工事にかることになって労働者が入って来ましたが、住宅がありません。私は隣の八戸さんとも協力して、自宅の居間は勿論、牛舎、雑倉までも提供し、雑魚寝をさせて間に合わせました。

（近江謙三『国策パルプ勇払工場小史』未発表）

工場用地は、はじめ北海道緬羊牧場株式会社から約三九万四、〇〇〇坪を購入、のちに工場敷地と鉄道用地との間の国有地約七万一、〇〇〇坪の払下げを受けた。この工場建設にあたっては、つきもののような小作人などの紛争

は全く見られず、買収用地外の排水路その他の用地も地元在住の亀谷文太郎、柳谷富一から進んで寄贈を受けるなど交渉は順調に進んで、昭和十五年十一月二十五日、地鎮祭が執行され、ここに待望の勇払復興の第一歩はふみ出された。地鎮祭は勇払開村以来の盛儀であつた。当時の工場資料は次のように地鎮祭総記を載せている。

皇紀二千六百年十一月二十五日

大日本再生製紙株式会社ガ工場建設ノ第一歩ヲ勇払ノ大地ニ印スル日ナリ。

此日、前日迄ノ雨晴レ上ツテ北海稀ニ見ル晴朗ナリ。

西南ノ風稍強ケレドモ、寒氣和ヤカニシテ絶好ノ地鎮祭日和ト云フベシ。

此ノ好天ニ恵マレテ、参列者ノ数遙ニ予定ヲ突破シテ、総員二百數十ヲ算ス。蓋シ斯ノ如キ盛儀ハ勇払開村三百五十年以來嘗テ是有ラザリシ事ナラン呼。

茲ニ特記スベキハ、当日勇払部落民ノ感激欣喜其ノ極ニ達セシコトナリ。

ココ數年來、勇払部落ハ、漁場ノ不振、農作ノ不況等ニヨリ衰微其ノ極ニ達セリト云フ。村内亦紛糾絶エズ、村社蛭子神社ノ如キ荒廢ニ委セタルモ敢テ省ミルモノナキ状態ナリシト謂フ。

偶々、本年五月、縣社樽前山神社々司、村社蛭子神社々掌兼務ヲ命ゼラレタルヲ機トシ、部落有志ト相謀リ、神殿ヲ修復シ、特ニ祈願祭ヲ執行シテ部落ノ隆昌ヲ祈リ、從來ノ紛糾ヲ解消シテ村内一致ノ協同和衷ヲ誓フ。

夫ヨリ半歳ヲ出デズシテ、勇払大発展ノ基礎トスベキ盛儀ニ遭フ。村民ノ感激ハ想像ニ余リ有ルモノアリ。此ノ日、部落常会ノ決議ヲ以テ各戸ニ国旗ヲ掲揚シテ慶祝ヲ表シ、部落内婦女子ヲ動員シテ來客接待ノコトニ当ラシム。

尚、後日、期ヲ選ビテ村社ニ感謝祭ヲ執行スル予定ナリト聞ク。

地鎮祭ハ予定ノ如ク午前十時開式、午前十二時無事終了セリ。

（近江謙三『国策バルプ勇払工場小史』未発表）

当日の盛儀、部落民の感激の様子が偲しのばれる。しかし、こうして、いよいよ工事にとりかかっても、生活環境はまだ調わず、従業員、工事関係者の苦労は大変なものだったのである。国清ハツエはこう語っている。

私達が来たのは昭和十六年でした。その頃は駅はもとの所（日高線移設前）で、駅前は工場建設の木材の土場になっていて、支那（中国）から持って来た機械が假小屋を造って入れてありました。

家といえば稲塚さんと森さんの二軒位で、駅前に千里という一杯屋があつて、その主人がたてたアパートが今のおもちゃ屋さんのの近くにありました。アパートといっても、真中に土間の廊下が通っていて、その両側に八畳間と六畳間が三部屋づつならんでいる。粗末なアバラ屋でした。私たちはその八畳間をかりて入りましたが、流しもなく、便所も一年位あとにやっと出来たというような所でした。あたりは一面のカヤ原で、飲水もないので、家の傍のカヤ原を分けて穴を掘って、その水を使いました。雑布をつけると真赤になりネチャネチャするような水でした。ウジの入った水を飲んだという話がありますが、本当にそんな水でした。後で穴の底に木炭を入れ、砂利を敷いて見ましたが、やっと少しよくなりました。

電気はなし、ランプをつけようにも売っている店もなしというようなことで、半年位たつて電気がついた時には、皆で嘆息ためいきをついたものでした。

（近江謙三採録）

このような苦労はあつたが、工場建設は一挙に勇払を活気づけた。人口は急増し、住宅街が出来、市街地が膨張していった。関連企業や他工場が進出し、各種施設が整備されて行つた。大日本再生製紙株式会社は、その後多くの苦難を乗り越え、国策パルプ工業株式会社、山陽国策パルプ株式会社と変遷をへながら工場を拡張し、それにつれて、勇払部落もまた目ざましく発展した。

苫小牧港は、今、勇払まで掘り込まれ、ここに埠頭を築造している。一方、苫小牧東部工業港計画は、いろいろな

問題をかかえながら進められている。勇払は、いま、苦小牧市の将来計画の中で動いて行こうとしているようである。

四 社 会

社会環境 明治十七年三月十五日調「戸口及事務報告」によると、
 の変化 当時の職業別戸数人口は次の通りである。

勇拂郡苦小牧村外一五ヶ村現在永住人戸口調（抄）

勇 拂				村 名		別	
旧土人				職業		計	
	雑業	商業	計	本 籍		寄 留	
				戸数	人口	戸数	人口
一	三	四	七	一	二八	一	一三
一	一二	一六	二八	一	一五	一	一〇
一	七	六	一三	一	一五	一	一〇
一	五	一〇	一五	一	一五	一	一〇
一	一	三	四	一	一八	一	一〇
一	一	一五	一六	一	一〇	一	一〇
一	一	九	一〇	一	一〇	一	一〇
二	一	六	七	一	一〇	一	一〇

（『苦小牧町史』昭和十五年 苦小牧町）

部落に商業を営むものが出来たというのは、会所が廃止になってからであろうが、土地の住民で漁業を営む者が居ないというのは、当時の勇払の特異性を物語っている。

明治期も後半に入ると、場所請負制以来の漁業経営形態がくずれて、地元業者があらわれて来る。しかし、このころから漁は不振の一途をたどり、他に代わるべき産業を持たない部落は衰微するばかりであった。

こういう状態にあった当時の部落は、大日本再生製紙株式会社の勇払工場建設によって一挙に変ぼうする。それは

産業的には漁業地より工業地への転換であり、社会的には杜宅街、市街地の形成であった。

亀谷治三郎が部落区長になった昭和十一年ころには「勇払の戸数は弁天、マコマイを通して約六十戸、今の中心地域には二〇戸ほど、商店は八戸商店位のものであった。部落は極度に衰微し、由緒ある神社祭典の費用さえも調達するに困難していた」というその時に突然の工場建設の話である。住民の喜びは察するにあまりあるものがある。

戦後一〇年間の人口動態

年 度	人	口
昭和二一	国策杜宅	杜宅外 合 計
一一二	一、二五五	六六七
一一三	一、三六六	八〇三
一一四	一、五九三	一、〇三八
一一五	一、六六四	九四三
一二六	一、八三五	一、一〇五
一二七	二、二九	一、三三三
一二八		三、四六二
一二九		
一三〇	二、三三六	一、六六六

『結晶』 勇払中学校より作成

茲に特記すべきハ、当日勇払部落民ノ感激欣喜其ノ極ニ達セシコトナリ。

ココ数年来、勇払部落ハ漁場ノ不振、農作ノ不況等ニヨリ衰微其ノ極ニ達セリト云フ。村内亦紛糾絶エズ、村社蛭子神社ノ如キ、荒廃ニ委セタルモ敢テ省ミルモノナキ状態ナリシト謂フ。

偶々、本年五月、縣社樽前山神社々司、村社蛭子神社々掌兼務ヲ命ゼラレタルヲ機トシ、部落有志ト相謀リ、神殿ヲ修復シ、特ニ祈願祭ヲ執行シテ部落ノ隆昌ヲ祈リ、從來ノ紛糾ヲ解消シテ村内一致ノ協同和衷ヲ誓フ。夫ヨリ半歳ヲ出デズシテ、勇払大発展ノ基礎トスベキ盛儀ニ遭フ。村民ノ感激ハ想像ニ余リ有ルモノアリ。」

(近江謙三「国策バルブ勇払工場小史」未発表)

工場の地鎮祭の記録にはこのように記されている。

こうして、昭和十五年十一月二十五日、地鎮祭が終わり、いよいよ建設工事に着手すると、部落は一時に活気づいて来た。まず、新聞販売店や雑貨店が出来た。駅の乗降客も一日七、八人だったものが二、三

○〇人にふくれ上がった。教員一人教室一つという小学校も大きくなって操業開始の昭和十八年には二六五人になっていた。杜宅街の人口膨張とともに、市街地も大きくなって行った。

この地域の職業構成も多様化して来た。これを小学校の在籍児童保護者について見たのが次の表である。

勇弘小学校児童保護者職業別分類

(昭和三十六年度)

職業区分	人	百分率
農業	六九	七・五
漁業	三四	三・七
工業運輸	四八九	五三・六
単純労務	一三六	一四・九
専門技術	四二	四・六
事務	四一	四・五
販売	三四	三・七
サービス	四三	四・七
その他	二四	二・六
計	九二二	

『学校基本調査』により作成)

注 通学区域内調査のため、弁天地区を含んでいる。

こうして、部落は大日本再生製紙株式会社の工場建設によって復活し、同社が国策パルプ株式会社と合併発展するに従って充実して来た。

これに加えて、日本ヒューム管株式会社苦小牧工場、北海道ロックラパイプ苦小牧工場の進出があつて、この土地の社会環境も一変してしまつたのである。

社会施設 大日本再生製紙——国策パルプ工業株式会社勇弘工場の充実 の建設によって住民の激増した勇弘は、その発展にともなつて次々と社会公共施設が整備された。その主なものは次の通りである。

昭和十五年

工場建設決定、地鎮祭が行われると、この年消防団が組織された。

同 十七年

児童数の激増を予想、国民学校が新築移転した。また、巡査派出所が設けられた。

同 十八年

郵便局が設置された。地域住民の努力によって、市街地自家用受電施設が完成し点灯が実現した。

昭和二十二年

戦後の学制改革によって小学校高等科が廃止になり代わって義務制の中学校が設置された。

同 二十五年

市営バス勇払線が開通した。

同 二十六年

はじめて公営住宅一〇戸が建設された。

同 二十七年

苫小牧高等学校勇払分校（定時制）が開校した。

昭和三十二年、水道（簡易）給水開始、同三十六年、消防署分署設置、同三十七年には部落を二分していた国鉄日高線移設、勇払駅移転新築、はまなす保育園が設けられたのが同四十年、翌四十一年には公民館分館（後に地区公民館と改称）が開館した。

こうして、その昔、江戸幕府によって東蝦夷地の要地として開かれた勇払は、漁業地として振興し、魚族の回遊を失って衰微して久しかったが、大日本再生製紙株式会社の工場建設を機として工業地として復活、市街地の発展に伴って公共施設、社会施設は次々に充実して来たのである。

市街地電 勇払市街の点灯は部落会の事業にはじまったものである。亀谷治三郎はその事情について次のように**化の実現** 語っている。

この市街の電気は、再生製紙の工場が出来た時につけたものです。工場が出来て社宅には明々と電気がついている。町のはう

ンブで不自由をしのいでいる。長い間辛抱して来たからランプの灯には慣れている——といえはそれまでですが、お隣に電気がついて見れば、不自由で不自由でがまんの出来るものではありません。そこで私は当時部落会長をしていましたから、自家用電気としてでも点灯したいと思いました。そこで会社の勇払工場建設責任者の梅岡さんにお話して協力をお願いしました。

清水組から電線を借りる約束をし、町役場の土木電気課長を西田（信二）先生がやっていましたから資材を出してくれる様に頼んだのです。西田課長の話では資材はないということで、それから藤田係長に聞いて見るとあるという。また、課長に聞いてみると電柱だけ足りないというので、それを出して貰うことにしました。今度は電線の手配です。工場の電気工事を請負ったのは清水組というんですが、工場工事の時は私の家を無料で開放して使って貰ったのですが、そんな縁故で梅岡さんに話して、配給になれば返すからという約束で、——その頃は戦時態勢で物資は全く配給制度になっていましたから——清水組から借りて工事しました。今の国道（旧国道）ぞいに勇払三十番地、今の日通の長屋あたりから勇払橋までの間です。これが昭和十八年です。

ところが、そのうちに戦争がはじまりました。梅岡さんが本社に行った時に、勇払に貸した電線は現物でかえる見込みはないのだから買ってもらえと言われたからと言ってこれたので代金を支払いました。これが八百円です。会社でもいろいろ考えてくれたらしく、その中から四百円を寄附してくれましたが、それに加えて更に千円あまり寄附してくれました。これで部落会館をつくろうと思って家を買ったのですが、部落で反対があつたので、日通さんに千二百円で売りました。

そのうちに、電気施設は配電会社に買収になりました。それが昭和十九年頃ですが、その買上げ金として五百何十円かが出ました。こんな訳で、電気事業は個人は一銭も出さなくてすみしましたし、工事完成の祝賀会も二回もやりましたよ。

勇払市街の点灯の発端は、自家用受電施設として部落が自力で工事したものであった。

（近江謙三採録）

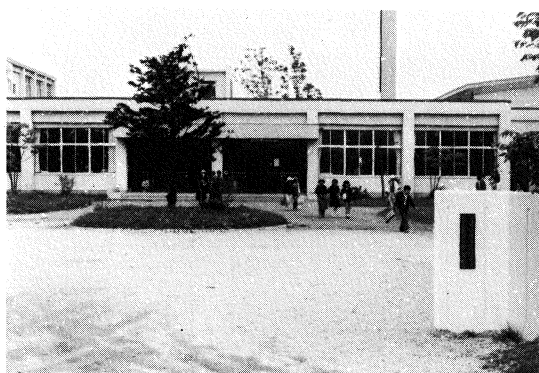
五 教 育

勇 弘 勇弘は古い歴史を持ち、明治初年まで役人の常駐した土地であったが、容易に住民の定着がなく、苦小
小学校 牧に比べて初等教育機関の設立は遅れていた。

明治二十六年、部落民は相談会を開いて協議をまとめ、西川健助、木村平吉、植田礼吾の三名を新設学校世話係に
選出して、苦小牧尋常小学校の勇弘分校設立を出願した。これが許可になったのは同二十八年十月であったが、一カ

月後の翌十一月には独立して、勇弘尋常小学校となった。その後の学校は土
地の経済事情にともなうて、時に独立しあるいは分校となつて変遷を重ね、
ようやくその基礎が安定したのは昭和十一年以降である。

昭和十六年四月一日、「国民学校令」の制定によつて小学校は国民学校と改
称する。一方、同十五年五月、大日本再生製紙株式会社が設立され、その工
場建設が決定すると、人口も急激に増加し、これにともない児童数も増え、な
お激増が予想されたので、同十七年、校地を新たに求めて校舎を新築移転した。
工場は戦災にあり、その復旧後間もなく施設撤去を命ぜられるなど苦難の道
を歩んだので、その従業員子弟を多く収容する本校には陰に陽に影響するこ
ろが大きかった。幸い、工場の再建計画、拡張計画は順調に推移するととも
に、その後、他工場の立地もあり、社宅街、市街地は膨張し、学校も急速に
学級増加、増築を重ねてきた。



勇弘小学校（昭和51年）
〔苦小牧市史編さん室蔵〕

勇払小学校学級増加状況

年 度	尋常科	高等科	備 考
昭和 一五	一		再生製紙会社地鎮祭
一六			
一七		一	校舎新築移転
一八	五	一	再生製紙工場操業
一九	六	一	
二〇	七	一	終戦・再生製紙国策パルプ合併
二一	六		
二二	六		勇払中学校創立
二三	七		国策パルプ施設撤去
二四	八		同右再建操業
二五	九		
二六	一〇		
二七	一二		
二八	一三		
二九	一四		
三〇	一五		国策パルプ工場倍増計画着工

(近江謙三「父母と教師の歩み」による)

なお、創立当初の小学校に入学した佐藤アキは、当時の模様を次のように語っている。

この頃の小学校は、苫小牧尋常高等小学校勇払分校と言つて、尋常科が四年で終り、その上に補習が二年ありました。生徒は六、七人位よりいませんでしたが、小学校に入る人のとしはきまっていませんでしたから——私は七つで入りましたが——同じ学年でも、大きい人も小さい人もまじっていました。

私の入った時の先生は、佐藤順三郎という士族の先生でした。

学校には行っても行かなくてもそれは自由だったので、昔の寺小屋のようなものですが、本だけはきちんと定ったものを使って勉強しました。

(杉林良彰、宮田政直採録)

亀谷治三郎は、小学校校舎改築移転の事情について次のように語っている。

会社の設立に伴つて、学校は急速に拡張しなくてはならない。戸塚長官(北海道庁長官)は、国有地であつた現在

の位置を選定し、建築費の半額は会社で寄附し、残りの半額は会社の町への納付税金をあてました。

(近江謙三採録)

勇 弘 大日本再生製紙株式会社の工場建設による住民の急激な膨張は国民学校——小学校の膨張となり戦後義
中学校 務制として設置された新制による中学校の膨張となつて行つた。

勇弘中学校は、昭和二十二年六月二日、苫小牧町立東中学校勇弘分校として開校された。当時、勇弘小学校に併置
その二教室がこれに当てられ、一学年四五名、二学年二七名をここに収容し、三学年は苫小牧の本校に通学、専任教

諭一名、講師には小学校長、同教諭計四名が兼務発令された。戦後、物資窮乏の中での発足であつたから町村の苦悩は大きかつたが、教員の不足もはなはだしかつた。専任教諭の配置は一名より出来なかつた。九月になつてさらに一名の追加があつた。施設、設備、備品はほとんど小学校のものを借用した。

教員数が極めて少数だったので、小学校の職員室に同居し、備品その他も兼用のようにしてすませるといふ状態であつた。

当時、独立校舎を持つてゐるのは苫小牧の東、西両校と錦岡だけであつた。校舎の独立の要望はこの年からすでにあがつてゐた。しかし、それは多額の経費を要し、町財政の耐えうるところではなかつた。相当額の地元負担はやむを得ない見通しであつた。

昭和二十二年十二月十七日、独立校舎問題は、中学校の父兄のみにては事重大



勇弘中学校（昭和38年）
〔苫小牧市史編さん室蔵〕

なる事業なりとの理由により、小学校父母と先生の会と合同の役員会を開き、勇払中学校独立促進期成会（仮称）を設立して事を進めることに意見一致し、同会準備委員会の結成にとりかかることになった。

〔結晶〕昭和三十年 苦小牧市立勇払中学校

こうして、翌二十三年三月五日、勇払中学校独立期成会を結成し、中学校の独立校舎および教員住宅の建設、教具教育諸施設の完備を目的としての運動を展開することになった。この年、中学校は、前年本校に通っていた三学年も地元に通学し、在籍数は五二名の増加を見ていたばかりでなく、併置の小学校もまた一学級を加えなければならなかったのである。

この時期に国策パルプには重大な問題がおこっていた。総司令部よりの工場設備機械の撤去返還命令である。

昭和二十三年六月、国策パルプ勇払工場の機械設備が中華民国に返還される問題が再燃。七月いよいよ決定するため、再建か否かの決定まで校舎建設運動中止のやむなきにいたる。実際運動を開始する寸前にこの悲運に遭遇するとは。建設の明年度完成不能となるは残念なり。

〔結晶〕昭和三十年 苦小牧市立勇払中学校

同二十三年十月、工場は解体撤去したが、同月、工場再建計画により建設工事に着手して危機を脱した。翌二十四年二月、工場職員三名を講師に依頼、同年四月一日、本校は苦小牧市立勇払中学校として独立、学校長外専任教諭二名講師七名、生徒総数三学級一五〇名の規模になったが、なお、小学校に間借りしていたので、校舎の建設は緊急を要する事態に立至っていた。

勇払中学校独立促進期成会は学校独立の目標を達したが、校舎建設問題については、苦小牧市は二十四年度予算に計上することが出来なかった。建築費地元負担の募金を計画していただけに期成会は一時苦境に立たされた。

七月、この問題も事態が好転、九月、校地決定、十一月、第一期工事着工、翌二十五年五月一日、第一期工事が完成した。ところが、新校舎に移転入居したのが同年九月一日になっている。飲料水がなかったのである。当時の河田義治校長は次のように語っている。

校舎の検定が終ったからすぐに入るようにとのことであつた。しかし、水の用意が全くなかつた。至急打込みポンプ一本を設けて貰つた。それが六月である。しかし、その水も飲めるようなものではなかつた。

〔結晶〕昭和三十年 苦小牧市立勇払中学校

後に水道がつくまで、生徒は勇払駅（旧）の付近まで湿地を渡つて貰い水に通つた。これが解決には工場専用飲料水の導入よりなかつた。工場の好意と部落全戸、全校生徒の労力奉仕によつて小学校、中学校に水道が敷設された。これが完成したのは同年十二月二十八日であつた。

続いて第二期工事として付属建物が同じ十二月三十一日に完成した。

戦後の教員事情は特殊なものがあつた。有資格者が容易に得られなかつたのである。勇払中学校にあつてもその事情は同様であつた。当初、専任として一名、ついで一名が追加されて、初年度は二名の教員より発令がなかつた。このため、講師制がとられ、小学校長、同教諭と、さらに地元勤務の国策会社職員を加えてこれにあてられた。この変則な状態は二十五年まで四カ年続けられた。この問題が解決したのは同二十六年からであつた。

こうして、混乱の中に出発した中学校は二十五年年度の校舎建築、二十六年年度の全員専任教員配置をもつて独立形態を完成し、逐次学校規模を拡大して現在に至っている。

勇払高

戦後、義務教育諸学校の整備と並行して高校教育にも新しい制度が設けられた。旧制中学校に代つて新等学校 制度による高等学校が設けられたが、勤労青年のためには定時制による課程が設けられて教育の機会が拡

充された。

勇払には国策パルプ工業株式会社勇払工場があり、これを中心に市街地や関連企業があつたが、ここに働く青年は苫小牧の学校に通学することは不可能であつた。これらの青年にも高校教育を受ける機会を与えなければならぬといふので、地元選出市議會議員田中正経を中心として運動が進められ、昭和二十七年四月、苫小牧高等学校の分校が勇払中学校に併置されたのである。青年学校卒業者およびこれに準ずる学力のある者は二学年に編入されたから、初年度の分校は一学年二学年の二学年で構成された。翌二十八年には北海道苫小牧勇払高等学校として独立、設置者は苫小牧市に変更になつた。こうして、同三十年三月、第一回の卒業生を出すことが出来た。

この学校は創立当時から苦難の道を歩んでいた。この前年二十九年十月、北海道教育委員会は、生徒在籍数過少の学校として三十年代より生徒募集停止の方針であつた。これに驚いた地元は生徒数の確保に奔走するとともに、PTA地元有志等は数回にわたつて陳情、ついに存続することに決まつた。

こうして、教諭、講師も充実し、一時は在籍一〇〇名に達したこの学校も、ついに昭和三十三年度から生徒募集を停止、以後毎年一学年づつを卒業させ、同三十六年三月、第七回生七名、開校以来合計七〇名の卒業生を送り出して廃校になつたのである。

六 宗 教

恵比須 勇払に、いつから神が祭られるようになったかは明らかでない。この土地は勇払場所の中心であり、神社 方行政、交通、産業の中心地として多くの人が集まつたから、相当古い時代から場所請負人などによって祀られたものがはじまりであろう。勇払の祠堂で文献的に一番古いのは寛政三年（一七九二）の『東蝦夷道中日記』に

出てくる弁天社である。

これが松浦武四郎がこの地を調査したところには不動堂、稻荷社、弁天社とふえている。

明治二年三月、政府は政令を発して、社寺を創立し、また猥^{みだ}りに僧尼となり、あるいは佛名、題目の石塔、供養塚地蔵尊を建立することを禁じ、もしやむを得ない由緒があれば、特に請願して許可を受けさせることにしたが、ついで同八年五月、内務省達によって社寺所有地を調査し、勇払外六郡の郷社村社の社格が定められた。当地の分は次の通りである。

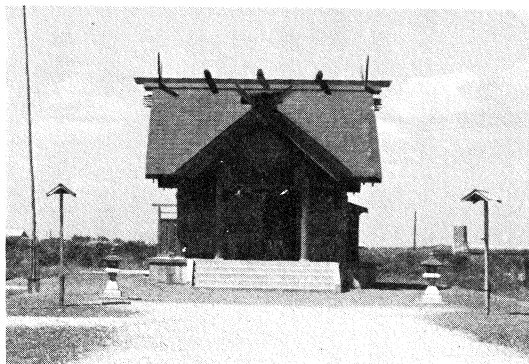
所在地	社格	社名	祭神
勇払村	村社	恵比須神社	事代主神
同末社	稻荷社	保食神	

(『苫小牧町史』 昭和十五年 苫小牧町)

旧社殿に建っていた石柱には、社名を『蛭子神社』と刻んでいるが、これが『恵比須神社』と改められたのは、昭和二十七年三月二十日である。

旧社殿は、間口二間、奥行三間半、江戸時代の建築様式を伝えるものといわれ、天井は花づくしの極彩色の格天井、柱には『かえるまた』などの装飾彫刻が用いられていて、漁場の盛時をしのばせるものがあつた。

この文化財もたびたびの修理によって原形を損じ、そのうえ、新社殿が出来てからは管理の手も行き届かず、倒壊の危険が生じたので、昭和三十七年十



恵比須神社(昭和48年)
[苫小牧市史編さん室蔵]

月十四日、遂に解体撤去された。

神社の維持、管理、祭典の執行は地元の氏子有志があたってきたが、部落の衰微にともなつて、それは容易なことではなかった。祭典の経費にも窮して、小学校の運動会費の寄付とだき合わせてやっと調達したこともあつたという。昭和十五年にいたつて部落は転機に遭遇する。

当時、数年来の不漁が続き、部落は極度の困窮状態にあつた。部落内には争いがたえず、神社もまた荒れるがままになつていても、誰もかえりみるものがなかつた。たまたま、樽前山神社の宮司が社掌の兼務を命ぜられたのを機会に部落有志と相計り、神殿を修理し、祈願祭を執行して部落の隆盛を祈り、住民一致の協力和平を誓ひ合つた。その後、再生製紙勇払工場建設がきまつたのである。

恵比須神社と国策パルプとは切つても切れない縁に結ばれた。同社の配慮によつて、神社は新たに敷地を求めて新築され、昭和三十一年九月二十日、現在地に移転した。

恵比須神社社殿建築費概要

一、建築費	一、五四七、九〇九 ^円
・社殿建築並附属工事費	一、二〇七、七五七
・社務所建築並附属工事費	三四〇、一五二
一、建築費寄附金	一、九二四、〇五〇
・国策パルプ関係	七〇〇、〇〇〇
・部落、国策従業員	八〇七、〇五〇
・その他	四一七、〇〇〇

〔『恵比須神社関係書類』 恵比須神社〕

ここには今、嘉永三年（一八五〇）奉納の元恵比須神社御宮、文久四年（一八六四）奉納の石燈籠、石造円形手水鉢等二十三点の奉納品が苦小牧市指定文化財として保存されている。

附記

一、恵比須神社の御神体は、明治二十二年江差より遷し祀ったものである。明治の大漁繁栄時代は六月十五日を祭典日として白老から宮司が来た。その後、不漁不作続きで部落は衰微するに至ったが、大正初期に至り地元総代有志が相談の上、祭典を樽前山宮司に依頼する関係上七月二十日に改め、さらに同様の事情から昭和九年ころから九月十五日、その後再び改めて八月二十日と定めて現在に至っている。

二、蛭子神社を恵比須神社と改めるに当っては、昭和二十七年二月二十八日付で申請し、同年三月二十日付で認可された。

（亀谷治三郎、片石宮司談による）

浄生寺 勇弘が正式に寺院の管轄下に入ったのは文化元年（一八〇四）である。

江戸時代の末期になると、対外国関係が重要な問題になり、警備のために幕府や諸藩から派遣されるものも多くなつた。寺院の建設を制限していた当時であったが、幕府は特別な事情を認めて三カ寺を建設した。このうち、勇弘場所は様似の等澍院の管轄下に入った。しかし、これは江戸幕府統制下のことであつて、勇弘には久しい間寺院はなかったのである。

浄土真宗本願寺派教団の一員として布教のため来道した杉林良彰（富山県出身）は、昭和三十年三月、勇弘一五一番地ノ三に建坪一三坪の仮本堂、庫裏兼用の寺院を設け、説教所勇弘教会と名づけた。

昭和三十三年十月、同教会は本願寺ならびに所轄省の認可をえて寺号を『浄生寺』と改め、宗教法人として登記した。

寺号の由来——勇払教会は宗教法人として登記するにあたり、寺号の命名を南喜一氏に依頼した。この時、氏は次のように提示した。
浄原（じょうげん）寺 浄生（じょうせい）寺
浄原の『原』は勇払原野の原であり、浄生の『生』は勇払復興の基となった再生製紙株式会社の『再生』に仏教的意味を持たしたものである。説教所は土地の歴史と仏教的意味から後者を選んだのである。

（杉林良彰談、近江謙三採録）

昭和三十九年、苫小牧工業港築設工事の進展にともない、国道と国鉄の移設工事が行われ、寺院は移転しなければならなくなったので、勇払一三八番地の一の市有地に敷地四五〇坪を借り受け、ここに九三・一四平方メートルの本堂兼庫裏を新築し、同年九月六日、完成移転して現在に至っている。

勇払波切 妙見堂の中に安置している石碑の台石には『勇武津不動』と
不動尊 刻んである。勇武津は勇払である。

不動像の建てられたのは享和三年（一八〇三）五月、願主は高橋次大夫、河
西祐助、苫小牧では最も古い文化財の一つになっている。

寛政年代から享和、文化年代にかけては日本は鎖国から開国へ、封建国家
から近代国家へと移行する激動の出発点となった時期である。ロシアの千島
列島南下から、幕府は蝦夷地を直轄することにして、各地に勤番の役人を派
遣したのが寛政十一年、翌十二年には八王子千人同心原半左衛門手付の一隊
五〇名が開墾警備を命ぜられて鷗川に移住する。一足おくれて同じ八王子同



勇払波切不動尊（昭和48年）
〔苫小牧市史編さん室蔵〕



勇払会所跡の石碑除幕式(昭和33年)
〔苫小牧市史編さん室蔵〕

心河西祐助が幕吏として勇払駐在を命ぜられる。この冬、これらの者の間に多くの病人、死者が出て悲惨を極める。河西祐助の妻梅が病に伏して床についたのもこの時である。内憂、外患が重なり重なってきたのである。行政の責任者として高橋次太夫、河西祐助の心痛は大きかったであろう。悪霊を払い災害悪毒を除き、使命を果たし得ることを祈ってこの不動尊は建立されたものであらうと思われる。

爾来一五〇年、はじめは露天に建てられたであろう石碑には、いつしか上屋がつくられた。漁業を主とした当時は漁夫、漁獲物、漁具、必需品の運搬は海運によらなければならなかった。人びとはこの不動尊を波切不動とよんで航海の安全を祈った。

その後も長い間、人知れず参詣する信者がたえず、地元では毎年七月二十七日、八日を期として祭典を行っている。現在の新堂が出来たのは昭和四十一年七月である。

七 史 跡

勇払にある史跡では『勇払会所の跡』と『蝦夷地開拓移住隊士の墓』が苫小牧市指定文化財の史跡として、『開拓使三角測量勇払基点』が北海道指定文化財の史跡として保存されている。

勇払会 所跡 地元住民の間に会所跡を永く保存しようという話が具体化したのは昭和十一年であった。

ロシアの北方進出が問題になり出したのは一、七〇〇年代である。蝦夷地

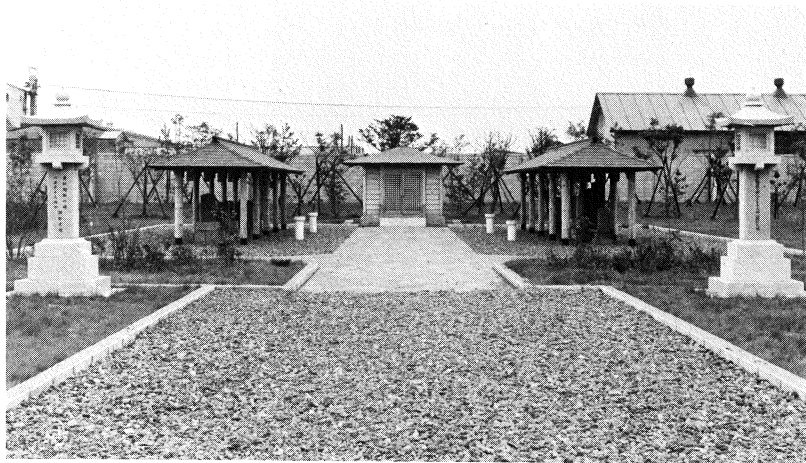
は侵略の危機にさらされているとして国内は騒然となった。寛政十一年（一七九九）幕府は東蝦夷地を直轄支配に改め南部、津軽二藩に警備を命じ場所請負制度を直営に改め、各地の運上屋を廃して新たに会所一〇カ所を設けて出先機関とした。勇払場所には従来数カ所の運上屋があったが、これらは勇払会所一カ所にまとめられた。これによって、勇払は一躍この地方の政治、経済、交通上の要地となり、やがて、苦小牧市が地方中核都市となる端緒をひらいた。部落民は、この由緒ある会所の跡を永久に保存しようと考えたのである。昭和十一年十一月一日、勇払開基三五〇年祭執行の折、当時小学校地内にあったこの地に標柱がたてられた。この木柱は、その後腐朽倒壊したので同二十八年に再建されている。同三十一年三月十日、苦小牧市はここを苦小牧市文化財記念物（史跡）として指定した。これを機運として木柱を永久建造物に改めようということになって、同三十三年に出来たのが現在の石碑である。この間の事情について、勇払自治会は次のように報告している。

多年宿望の会所跡の木柱を石碑に取替えることが出来た。特に、市教委の当初予算では自然石によることになっていたが、地元民全体（国策パルプ杜宅を含む）から一戸三〇〇円、計二万七、三〇〇円の浄財を仰ぎ、御影石による永久記念碑を建立することが出来た。

『昭和三十四年度定期大会議案』 勇払自治会

蝦夷地開拓 この墓地が苦小牧市指定文化財記念物（史跡）として指定されたのは昭和三十一年三月十一日である。
移住隊士の墓 った。

寛政十一年（一七九九）、東蝦夷地が幕府の直轄地になると、勇払には会所が置かれ、役人が駐在して地方行政の中心となった。ついで同十二年、八王子千人同心原半左衛門手附の一隊約五十名が移住して来たが、慣れない気候風土のために発病する者が多く、次つぎに死亡者が出、その霊はここに祭られた。その後、幕吏、場所請負人配下の関係者など苦小牧市開拓の先駆者の霊もここに祭られ、地元の墓地として長く使われて来た。



勇払史跡墓地（昭和49年）

〔苫小牧市史編さん室蔵〕

勇払墓地が新たに設けられ、石碑が多く移転すると、この墓地は無縁の石碑の散在する荒涼の地と化してしまった。勇払自治会は墓地进行を整理し由緒ある石碑を保存することを苫小牧市教育委員会に陳情、同委員会は昭和三十年十月十四日、関係者を招いて「史跡保存協議会」を開いて対策を協議、「苫小牧市文化財保護条例」に基づき史跡保存措置を適用」することにし、同年十一月、教育委員会は勇払自治会の協力を得て用地一〇〇坪を整備、周囲を盛土、木柵によって区画し、先駆者の石碑を同地内地蔵尊の前に集め、覆小屋、休憩所説明標を設けて保存と顕彰の策を講じた。

市の方針が決定すると、自治会は国策パルプ勇払工場に要請して資材（一一万円相当）の提供を受け、手塚俊恵氏を請負人として工事に着手、その完成をまつて十一月二十八日に移転、慰霊祭を行った。

『当時の勇払自治会長 田中謙治氏談』

これらの石碑は、昭和四十八年、苫小牧市開基百年に際して、隣接地に史跡公園を設けて移され、旧墓地は標識をたてて保存されている。

開拓使三角 三角測量勇払基点が発見されたのは、昭和三十
測量勇払基点 七年六月一日であった。

この基点は北海道開拓史上貴重な遺跡である。未開発の北海道には正確な地図がなかった。開拓使は、開拓事業の推進に先立って測量の必要を認め、吏員を派遣して内陸踏査を進めていたが、正確な北海道地図を作成するため、明治六年三月、開拓使雇ゼームス・アール・ワットソンを測量長に命じて翌四月から測量を開始した。

ワットソンは札幌に来て準備にかかり、同年七月、基点選定のために石狩川の上流を踏検したが、適地を得られず、ついで勇払と鷗川の間にこれを求めて基線を描き、その両端に標石を建てて測量をすすめた。測量は明治十年に中止されたが、その結果をまとめた北海道三角測量図は、北海道地図の基礎となり、その事業はわが国の三角測量による陸地測量の基礎となった。道史ならびにわが国測量史上貴重な史跡なのである。

この基点は関係者によって長い間さがし求められてきた。そしてついに見出したのが地元在住の三名であった。当時の状況を教育委員会に報告した勇払小学校長の公文には次のように述べている。

本年五月末、勇払市街浄生寺檀家集會の際、住職杉林良彰氏と佐々木松治氏の間にたまたまこの話が交された時、傍に同席していた菊地広一氏から『それらしい地盛りがある』という話が出され（中略）翌六月一日夕刻三人で現地に至り、菊地氏がスコップを持って発掘にあたつた。約八十程掘り下げたところ、それらしい石柱を掘りあてたので、郷土史研究にあつた小学校長に通知、資料と照合の結果、ほぼ原点と認定されたのでこれを埋没復回し、二日、教育委員会、図書館に通知して指示を待つこと



勇払三角測量基点の基石
〔昭和37年〕〔苫小牧市史編さん室蔵〕

にした。

『苫小牧市立勇払小学校関係書類』 昭和三十七年 勇払小学校

この基点は同四十二年三月十七日、北海道文化財に指定され苫小牧市によって管理されているが、同年十月十七日北海道百年遺跡訪問キャラバン隊の手によって記念標柱がたてられ現在に至っている。

八 産 業

勇払の 明治元年（一八六八）大政は奉還されて明治維新となり、蝦夷地は箱館裁判所（後、函館府と改称）の所管と漁業 なる。ついで翌二年、開拓使がおかれるや、場所請負制度は廃止されたが、請負人の嘆願によってこれを漁場持と改め、山田文右衛門が発令された。同二年七月、この地方が高知藩の支配地となると、藩は漁場持を罷免しその直営として新しい支配機構を作つて漁場を経営した。この時、その土人回り役を勤めたのが南部大畑の八戸伊与吉で、これが現在の勇払の八戸家の先々代である。

同五年五月、高知藩はその支配地を返上、開拓使に引継ぐと漁場持制度は復活し、山田文右衛門は勇払郡漁場持に任命された。文右衛門は、植田甚蔵外その一族をはじめ代人を各漁場に配置し、四〇人程度の和人と二〇〇人以上のアイヌを使役して漁を行つたほか、トマコマイ以西の漁場は出稼人に貸し与えた。

このころからタルマイ浜には不漁が見られるようになって来た。同六年二月、出稼人総代から開拓使勇払郡出張所に次のような嘆願書が出されている。

追年薄漁相続、其上来増其外諸品ニ至追前代未聞ノ高価ニ相成、出稼人漁業渡世向行届兼候ニ付、年々箇所引拂者モ不少、出稼渡世仕候者モ無御座候。（中略）右ニ随ヒ、永住人モ渡世永統難相成候。空家等処々相見、誠歎敷次第ニ奉存候。――

『苫小牧市史』 昭和五十年 苫小牧市

こうして、税額の引き下げを願ひ出たのだが、この困窮の内情は漁場持も同様であつた。明治六年以降の漁場持制度は収税金の増大、アイヌ使役賃金の定額制、出稼人渡世による新開漁場の出現などで漁場持の地位がきわめて不安定であり、漁場経営は極度に苦しくなつていた。

明治八年四月、山田文右衛門は漁場持を辞退した。その後、漁場持の発令はなかつたが、文右衛門の代人であつた植田甚蔵がそのあとを引継いで漁をつづけていた。開拓使は同九年九月二十一日、漁場持制度を廃止して新規割渡しを行うことにしたが、勇払郡ではすでに山田文右衛門が漁場持を辞任し、植田甚蔵や出稼人によつて漁が行われていたので、その対象とはならなかつた。漁場持制度廃止の目的は自営漁民の育成にあつたが、この地方は出稼ぎの自営漁民による漁が盛んで、地元の郡村民の漁場は極めて少なかつた。この形は、この後もずっと続いて行く。

明治十年の勇払村私有漁場

漁場名	場所	所有者
鰯、鮭兼漁場	勇払村	勇払村 植田甚蔵
鰯漁場	"	"
"	"	"
鮭漁場	"	"
"	イヌンナイ川	"
"	オタケシ川	"

『苫小牧市史』 昭和五十年 苫小牧市

この期の漁法は、ほとんど曳網による漁法であつたが、サケ漁では一部に建網や巻網が使われたほか、河川では小地曳網が使われた

明治初期からの漁は、年によつてかなりの豊漁不漁が目立つてくるが、同十五年以降は薄漁が重なつて漁場経営は苦しくなつていった。

明治十三年十一月、植田甚蔵が死亡すると長男植田礼吾が相続する。だが、礼吾の代になつてからは不漁の年がますます多くなるとともにアイヌ雇漁夫の極端な減少、出稼人漁場



勇払の海岸（昭和48年）
〔苫小牧市史編さん室蔵〕

の発展にともなう渡島、南部地方からの漁夫集めの困難などが重なって植田漁場は同二十年に放棄され、この土地の漁業利用権は新しい願人に割り渡されることになった。

植田漁場の放棄によって、これらの漁場のうち、勇払地区は同村の西川健助に許可され、サタップ、マコマイは別に新規の出稼人に割り振りされたが、これらの新規出稼人は漁の仕込み、漁夫集めなどに困難して次々に代わっていった。こうして漁場は同二十年代後半には三井物産の手におちた。

明治三十一年、函館の豪商石垣彦三郎は漁場経営者として苫小牧村に進出、三井物産の漁業権一切を借り受けたが同三十五年にはこれを譲り受け、さらに漁場を拡張、一方、門別村の飯田信三は、明治二十一年ころから樽前浜イワシ漁に進出、はじめは樽前、覚生地区を、その後期には勇払をはじめ、苫小牧、小糸魚、錦多峯と全般的に漁場を拡張、こうして、苫小牧の漁場の大半は両者に占められるようになるのだが、明治三十五年当時、勇払の西川健助は勇払村において四力統の漁場を持っていた。西川は山田文右衛門などにつかえた後、勇払で漁業、旅人宿、駅通取扱人、郵便取扱人、勇払・白老・千歳三郡副総代などを勤め、郡内の実力者の一人に数えられるようになった人である。

樽前浜の漁業は、特定の漁業権者が相当の漁場を所有し、その一部または全部を漁業権を持たない他の漁業者に賃貸して行う漁業が多かった。亀谷治三郎は次のように語っている。

私の知っている所では、三井物産系の石垣彦三郎さんと、同じ函館の飯田信三さん

が漁場の権利を持っていて、私の父の亀谷次郎吉は明治三十年頃ここに（勇払）に来たのですが、父と福田隆太郎さん、それと後に鵠川に移って旅館を経営した木村（平吉）さんらがこの漁場を借りていました。

『亀谷治三郎談』 昭和三十年 近江謙三採録

明治の末期から大正初期にかけて、漁業人口、出稼人、漁獲高とも減少し樽前浜は一つの岐路に立った。

大正七年、石垣彦三郎は、その不漁から漁場を手離すことになった。王子製紙(株)会社は中村捨次郎にこれを買いとらせた。飯田（大正三年、信三死亡、妻ゑい相続）も大正十四年にその漁業権を中村に譲渡した。終戦後、漁業制度の改革により新漁業法が公布されて中村は漁業から手を引くことになり、新たに苦小牧漁業協同組合が設立された。亀谷治三郎は前記談話につづいて次のように語っている。

戦争が終って集中排除法が出来た時に漁業法も改正されて、実際に営業する者でなければ漁場は持てないことになったので、王子的さんの漁場（中村捨次郎名義）も政府に買い上げになりました。それを漁師達が「苦小牧漁業協同組合」名義で借り受け、組合員の共同漁業権として漁区を割りあてて営業することにしたのが今の形です。

『亀谷治三郎談』 昭和三十年 近江謙三採録

こうして、勇払の漁業は、その創始期以来イワシ漁業によっておこり、他地方の資本家によって経営されて一時盛況をきわめたが、明治年代に入ってから次第に不振になり、西川健助の出現はあったが、ほかに有力な地元漁業者の育つ余地もなく、終戦後漁業権は地元漁民の獲得するところとはなったが、ついに零細漁業から脱却出来ぬままに推移して来たのである。

農業と 当地は火山灰地のうえに、湿润で農耕には適さない。農事はほとんど行われないが、それでも多少の記牧畜録は残っている。一番古いものでは寛政十一年（一七九九）にさかのぼる。

東蝦夷地を直轄地とすることに決したこの年、幕府は役人を各地に派遣駐在させた。役人はそこで多少の農耕を試みたであろう。その報告が、同年三月、蝦夷地出役出願の八王子千人同心原半左衛門の志願書審議に重要な役割を果たしたことは明らかである。すなわち、その願書を検討した蝦夷地取締掛の上申書には次のように記している。

此度追上地被仰出候東蝦夷地の内、ユウフツ竝ムカハ、サル辺別て作物相応出来可仕土地柄に有之——」

〔『八王子市史』 昭和四十二年 八王子市〕

こうして、彼等は「年月農業に相馴、山野奔走達者成同心二三男、厄介人等望之者取集差遣候はゞ、実に御固めにも相成可申儀」として評議を通り翌十二年正月十四日をもって許可されたのであった。

しかし、この勇払の地は、来て見ると農耕適地ではなかった。彼等は鷓川に移住してここに開発場を持ったのである。

その次の記録は第二次幕府直轄時代に入った安政五年（一八五八）になる。当時、箱館奉行は熱心に農業の奨励にあつてゐた。しかし、漁業の利益が大きく、効果の少ない農業を試みる者はなかった時代であった。

安政三年、勇払会所詰となつた調役下役鈴木庄助は、この箱館奉行の意を受けて、勇払場所所で藍の栽培を試み、同五年には藍玉七十五個、目方にして二二貫五〇〇匁を製造するという好成績であつた。これは奉行から高く評価された。同十月、奉行所から各場所所に次の達しが出されている。

藍作の儀蝦夷地にては別て弁利有益の作物につき、新開場又は古畑の内えも蒔付、精々出方相進候様可致（中略）若製造方不都合向はユウフツ場所御手作場え葉藍にて差出候はゞ、其筋に見合、相場を以て買上候事。

右の通り東西場所々々え可被相触候。

〔『苫小牧市史』 昭和五十年 苫小牧市〕

天保十四年（一八四三）には三反三畝一〇歩、前記安政五年（一八五八）には一反六畝一五歩、万延元年（一八六〇）には二反九畝一〇歩が場所支配人等によって開墾耕作された記録が見える。

明治に入って二十年代以降、鵜川上流の各村、厚真村、勇払村・植苗村のうち早来、シアピラ地区等の周辺地に入植する者がふえて、いずれも農村として急速に発展分村していったが、現在の勇払地区が農地として発達することはなかったのである。

この勇払農業史において、戦後特異な存在を示したのが、勇払土地利用研究所であった。



勇払農場の木製サイロと働く人たち（旧緬羊牧場）
（昭和35年）〔苫小牧市史編さん室蔵〕

同社の前身は昭和四年ここに広大な牧場を開設してこの原野の開発にいった北海道緬羊牧場株式会社であった。しかし、その事業は所期の目的を達することが出来ぬままに、昭和二十年、国策パルプ工業株式会社を背景に「勇払農事株式会社」に改組、目標を牧畜に切換え、牛乳の生産と土地改良に重点を移した。しかし、その内容には著しい成績の改善は見られず、火山灰地の営農の是非が論ぜられる状態であったので、昭和三十一年、北海道立農業試験場にその経営と技術指導を仰いで改善計画をたてたが、その実施段階に入った昭和三十三年、社名を「株式会社勇払土地利用研究所」と改めて試験研究を実施することにした。しかし、その結果はわずかに酪農経営に光明を見出すに止まった。その後、その用地は工業用としての立地がより有効であるとの判断から、同四十四年十月、同地を引き払い、主力を早来町字安平の有限会社早来ファームに移転した。

牧畜の歴史もまた、寛政年代にさかのぼる。

東蝦夷地が幕府の直轄に移されると、奉行は各会所に馬を配置した。

特例として挙げられるのは八王子同心原半左衛門手付の者たちへの馬の支給がある。寛政十二年、移住して来た彼等は、その冬から翌春にかけて多数の病者、死者を出したので、冬季の過ごし方よろしからずとして、運動のために「荒馬九疋、右の者共へ預け遣し」とした。

寛政十一年、最初に東蝦夷地に移入したのは馬六〇頭、牛四頭であったが、牛は勇払場所でも飼育しただけであった。これらの馬および牛はすべて官有で、文化九年、直轄行政をやめた後は、場所請負人に管理を託して使用され、明治に入っても、汽車の発達するまで、長く荷物の輸送に使役された。

勇払で牧場を経営したのは石垣彦三郎である。彼は明治三十一年、三井物産の漁業権を借り受け苫小牧に来たが、漁況によって浮沈のはげしい漁場経営を安定させるために漁、農兼営を提唱したのである。

一朝不漁の事あるや自己の困憊不遇は延いては地方経済界に波及すべき干渉や大なり、漁農兼営を以てすべきは漁業者に命ずべき時代の要請たり。於是早く已に彼は錦多峯村、勇払村其他の各地に数百万坪の牧場及農耕地を購入し農業及畜産の奨励に努力せり。

『開道五十年記念北海道開拓功労者』 昭和十二年 北海道庁

石垣彦三郎の牧場が勇払にあったことは、亀谷治三郎談話にも出ている。

この時（中村捨次郎名義で王子製紙が漁場を買収した時）石垣さんは、漁場から牧場、そのほか勇払に持っていた財産一切を譲りました。石垣さんが手離した牧場は、つい二、三年前まで私が管理していました。

『亀谷治三郎談』 昭和三十年 近江謙三採録

勇払の 勇払地区の工業の先鞭をつけたのは弁天といわれ、京野某の筆記は、

工場 次のように述べている。

其ノ頃、此ノ附近ニ鹿ノ罐詰ヲナシタル工場ノ跡アリ。即チ之レヨリ前ニモ先住者アリシ事ウカガハル。其ノ後、綿谷（善右衛門）氏宅ヨリ約二百間バカリ離レシ所ニテマツチノ軸木製造ヲ経営シタル者アリ。

（京野某筆のガリバン刷りによる）

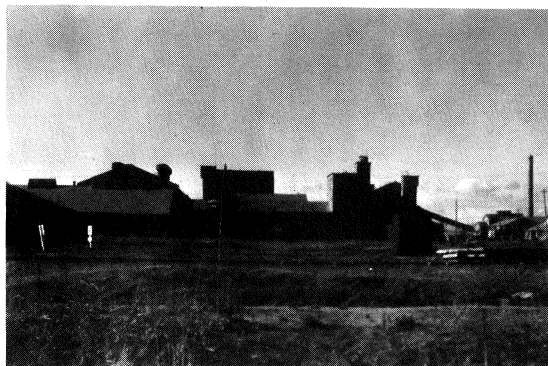
勇払復興を決定的にしたのは、昭和十五年の山陽国策パルプ株式会社の前身、大日本再生製紙株式会社勇払工場進出であった。

○山陽国策パルプ株式会社勇払工場

山陽国策パルプ株式会社勇払工場は、大日本再生製紙株式会社勇払工場として発足し、戦後、国策パルプ工業株式会社と合併してその勇払工場となり、さらに山陽パルプ株式会社と合併、山陽国策パルプ勇払工場となった。

昭和十二年は太平洋戦争の発端の年である。満州に発した蘆溝橋事変は日華事変に発展した。このころの日本のパルプ事情、とりわけ国内パルプの自給事情は王子製紙系の製紙用パルプで九〇・八%を占め、人絹パルプにいたっては、国内必要量約二九万トンに対して、王子系諸工場で年産わずかに六万トン程度に過ぎなかった。急増する需要に応じて諸会社が相次いで設立され、それぞれの工場建設がはじまった。こうして、国策パルプ旭川工場をはじめとして、パルプ工場の新増設が相ついで行われた。しかし、このころには非常時局対策として消費の節約が強く叫ばれはじめていたのである。

昭和十三年夏には洋紙、製紙用パルプの輸入制限、人絹パルプ増産にともなう製紙用パルプの供給減等の処置がとられて「紙飢饉」という言葉が話題に上るようになった。雑誌や教科書、ノートなどまでが節約を叫ばれ、港の情緒を彩



国策パルプ勇払工場（昭和25年）
〔苫小牧市史編さん室蔵〕

る五色のテープの使用も問題になるようになった。昭和十三年八月、政府は新聞紙については一割二分、雑誌類には二割、そのほかの諸用紙には三割の消費節約の命令を出した。古新聞紙、古雑誌などの古紙の回収再生や代用資源の活用などが強い要望となって表面化して来た。しかし、これらの古紙が紙として再生されるものは比較的わずかであった。それは、印刷したインキを分離してとりさることが技術的に困難なうえに歩留まりが悪く、企業として採算がとれなかったからである。

時局の要請は急であつた。この時、この難問題に解決の道をひらいたのが南喜一であつた。勇躍した南は僚友水野成夫を訪ね、水野はその企業化に乗り出すことを約束した。

昭和十三年末、再生パルプの公式実験が目黒の林業試験所において農林省関係者立合いのもとに行われ、八六%の歩留まりを示した。それは画期的な発明の公式証明であつた。両名はただちに特許を出願するとともに、事業の企業化にのり出した。

しかし、きびしい時局下であつた。物資動員計画のもとに、諸物資の強力な統制が行われていたところである。新しい企業を起こすことは文字通りの困難なわざであつたが、両名は少しもひるむことなく、連日連夜、関係者の説得に奔走しつづけた。

こうして、創立運動は次第に力強いものになっていったが、その事業計画は、当初の計画に相当の変更が加えられなければならなかつた。紙の消費制限の強化によって、古紙の大量回収にやや疑問が生じてきたこと、紙の再生

だけでは、将来とも大規模な企業への発展性がなく安全性にかけること、大規模な回収によって古紙の値上がりをおこすおそれのあること、古紙再生であっても相当量のパルプを必要とすること。

こうして、当初計画は再検討が加えられ、再生設備と同時に、木材からのパルプ製造施設もあわせて設置することに変更し、年産三万トンの製紙工場を北海道に建設することになった。

すでに戦争はますます激化していて、資材、特に鉄材の不足が目立っていた。この時である。わが国の南支那占領地域に製紙機械の遊休設備があつて、交渉によつては売るらしいとわかつたのは――。

昭和十五年二月、南は関係者と同行、空路広東に飛んだ。

難航に難航を重ねた会社設立も、こうしてようやく見通しがついた。資本金一、〇〇〇万円は、今までのいきさつから国策パルプが借り入れて融資することになった。こうして、昭和十五年五月二十七日、設立登記を完了して、ここに大日本再生製紙株式会社は正式に発足した。取締役社長石倉己吉、南喜一は専務取締役、水野成夫は常務取締役に入った。

工場建設候補地には、北海道南部地方の数カ所があげられ、最終的には勇払に決定した。そこには、北海道庁が発表した北海道開発計画があつた。それは、当時の北海道長官戸塚九一郎の構想に基づく雄大なプランであつた。

勇払五万町歩の広大な原野は、全面樽前火山灰地帯であつて、農耕地には不適當ではあるが、原野両側の山嶽地帯の鉱物資源は優に大工業地帯をつくるだけの埋蔵量を持つている。勇払に港を作るならば、この地方と本州とを近距離で直接結びつけることが出来る地の利を得ている。この故に、勇払川から千歳川をへて石狩川を結ぶ運河を掘り、太平洋と日本海を結んで交通運輸の便を計り、これによつて勇払地方を一大工業地帯たらしめよう。

というのがその構想の大綱であつた。北海道庁は、これが実現のために、工場誘致に本腰を入れて努力していたのである。この構想はまた、国策にそい、国土開発の推進体となるべきであるという会社創設の使命観と、未開の地にこそ工場を建て、やがて北海道の一大工業地帯に発展させて行こうという、水野成夫の理想主義的情熱をうつものでもあつたであらう。

南喜一は當時を回想して次のように述べている。

南支から歸つて、水野から工場敷地が決まつたと聞くや、私はすぐ勇弘にでかけた。早、秋も深く北海道は肌寒い頃であつた。苦小牧からうす汚い日高線の汽車に乗りかえて勇弘におり立ち原野に立つて、敷地をここにきめたと聞いた時、少なからず私も驚いた。なるほど、煙ふく樽前の活火山を遠望し、太平洋の荒い波音を耳にしながら、襟裳岬から室蘭にいたる海岸線、夕張山脈を手前にはるか彼方には十勝、大雪などの山々をも望見し得る五万町歩の勇弘原野のながめは雄大であり大陸の情景を彷彿とさせた。だが、このような土地に工場を作ることの困難さを思ふと、実際どうかと懸念されたのであつたが、水野から雄大なその考えをうちあけられて、一瞬の疑念はたちまち解消した。

（『国策ニュース一〇〇号記念』 昭和三十八年 国策バルブ勇弘工場）

用地ははじめ、北海道緬羊牧場株式会社から約三九万四、〇〇〇坪を購入し、のちに工場敷地と鉄道用地との間の国有地約七万一、〇〇〇坪の払下げを受けて、合計約四六万五、〇〇〇坪を所有地とした。

昭和十五年十一月二十五日、記念すべき地鎮祭が執り行われた。

工場建設については、先に記した南支那広東省営製紙廠の機械が買収出来たので、これをもとにして、抄紙機二台を設置し、年産二万トンのバルブから紙までの一貫生産工場とし、会社創立計画当初の主目的であつた古紙再生計画は第二次計画にまわし、第一次建設に引きつづいて実施することになった。

工場の建設にあたつて一番困つたのは機械の組立であつた。何分、正確な図面が一つもなかつた。昭和十五年秋ころから機械が順次到着したので、勇払駅前臨時の仮小屋をつくり、抄紙機の仮組立を行つてからようよう作図にかつた。ボイラーや発電機も川崎の石川島タービン工場に直送され、ここではじめてスケッチ図を作るといふ有様で、その苦労は容易なものではなかつた。

工場の敷地内には、相当の起伏高低があつたが、一般には地下水が高く湿潤で雨天の時は広い範囲にわたつて水溜りが出来た。まず第一に地下水を下げなければならなかつた。用地の周囲に排水溝をほることにし、昭和十六年に入ると残雪のころからこの工事がはじめられた。

建物関係の設計ができると、順次本格的に工事がはじまつていったが、資材関係にも苦労がたえなかつた。物資統制の時代である。建築用資材は、香港、マカオ、広東周辺で購入したものが非常に役立つたが、これだけでは到底足りるはずもなかつた。特に、セメントや機械製作用、補修用の鋼材、非鉄金属類の入手には筆舌につくしがたい困難を味わつた。ようやく手に入れた配給キップも品物がないために現物化するまでに苦心した。しかし、これらの難問題も、陸軍省や関係官庁の特別のはからいでどうにか解決されていった。

工事完成は、昭和十七年夏と予定されていた。しかし、資材の調達の困難さに加えて、工事計画にも平時と異なる事情があつた。こうして、関係者の必死の努力にもかかわらず、約一カ年も予定がおくれたのはやむを得ないことであつた。

このころ、勇払に來た人びとは、一年間を原始的なランプ生活で過ごした。工事人夫の宿泊の場所もなかつた。仮設住宅だけでは間に合わず、亀谷治三郎宅や八戸寛三宅の台所まで借用して寝た。

当時、現地で仕事をした社員はこもごもに語っている。

「一般の従業員で現地に一番乗りしたのは十五年の十一月だったと思う。未開の土地は覚悟の上だったので驚かなかったが、電氣と水のないのには苦しめられた。」

「飲料水も、家の裏に穴を掘って間に合わせたが、鉄分を含んで油の浮いている野地下水で、洗濯物に色がつくようなものだった。」
「合宿といっても、はじめは何の設備もなく、七、八人が一部屋に雑魚寝するという有様で、よく頑張ったと思う。」

（『国策ニュース』昭和三十三年 国策パルプ勇払工場）

工事が進むにつれて、未開地勇払もだんだんひらけて行つた。まず、新聞販売店や雑貨店などが出来た。駅も一日七、八人の乗降客が二、三〇〇人にふくれ上がった。一学級一教員の規模だった小学校も新築移転して大きくなった。こういう中で工事は進んで行つた。しかし、当初一、〇〇〇万円と予定した建築資金は、物価の高騰その他の事情で大幅の不足をきたしたが、その追加調達は困難を極め、工事計画はたびたび変更された。用水沈澱池計画は半減、用水汙過池^{ろか}工事はとり止め、晒設備^{さくし}も縮小を余儀なくされた。ピーター一六台の計画は一二台に変更されたが、仕上室の建物と製品倉庫は半減するなど、設備全般にわたって極力圧縮、惨憺たる苦心の結果、ようやく一万トン生産設備が完成し、待望の試運転のはこびになったのは昭和十八年四月十三日であった。この時には主要機械のうち、広東から購入補修したものと、新たに発注したものとの割合は半々になっていた。

こうして、工場建設に着手以来二カ年余、ついに第一期工事の全工程を終えた勇払工場は、洋紙生産施設をもって昭和十八年五月一日、正式操業を開始したのである。

勇払工場は一号模造紙を主として、二号模造紙と包装紙をあわせて生産して行つた。しかし、その実績は、当初計画年産一万トンに対して、最も成績をあげた同十九年でさえ七、五〇〇トン（生産能力の七五％）にすぎなかった。一方には、資材不足にともなう機械補修の不備が生ずるとともに、他方には、多くの経験工を含む応召兵の続出があつた

からである。従業員の応召による欠員は、工場を操業の存続、休止の岐路に立たせて、女子挺身隊や勤労動員学徒によつて、かろうじて運転を続けていたのである。

工場操業後の戦局の影響を第一の危機というならば、終戦直前の連合軍による空襲は第二の危機といわなければならない。この時の爆撃によつて、工場の重要な部分が災害を受け、それ以後は運転を休止したまま終戦を迎えたのである。

昭和二十年、戦争末期の連合軍による国内空襲はますます苛烈さを加えていた。陸軍監督指定工場の指定を受けていた勇払工場の周囲一帯には、陸軍の一個大隊が駐屯していて、敷地内にも将兵の出入が激しくなった。生産用器材や薬品もまた軍の利用するところとなった。このような切迫した状況下にあつては、工場もまた臨機応変の対策を考えていかなければならなかった。南は自ら工場長を兼務して勇払に出むいて来た。

対策の第一は空襲による被害を最少限度に止めることであつた。南は着任して工場を巡視するや早速手をつけたのが火災防止対策であつた。工場内の建築物間の渡り廊下を取り除かせたり、建築物の出入口に煉瓦を積ませるなどの防護対策が直ちに行われた。これがすぐに役立ったのである。

同年七月十四日、十五日――、それは終戦の直前である。ついに連合軍アメリカ艦載機の来襲を見た。二日間にわたる激しい襲撃である。

十四日午前十時ころであつた。苦小牧市の上空にアメリカ海軍艦載機グラマンが現れるや、うち七機が別れて編隊をくみ、みるみるうちに工場の上空に迫つた。随所に激しい機関銃の掃射をあびせてロケット爆弾、焼夷爆弾を投下して去つた。幸い、その日は命中弾は少なく被害は少なかったが、従業員の驚きと狼狽は大きかつた。老幼婦女はその夜から避難にうつり陸続として勇払街道に続いた。

翌十五日、夜明けとともに再び空襲警報が発せられ、ラジオのニュースは刻々と危険をつたえていた。午前十時、グラマンは再び来襲、午後一時、またまた第三次の空襲を受けた。

この日の襲撃は工場の中心部を狙っていた。前日は木釜室そのほかの建物を襲って生々しい弾痕を残したものの大事にいたらなかったが、今日の狙いは違っていた。工場の中心部のピーター室は焼夷弾の集中投下攻撃によって、ついに火を発し物すごい勢いで燃え上がった。駐屯部隊の高射砲も、何等なすところがなく、敵機は思うがままに上空を飛んで、建物全部が燃え上がるまで離れず、旋回をくりかえしては爆撃を続けた。

この執拗な攻撃に、南工場長を陣頭とする工場側は、学徒挺身隊、地元警防団、苦小牧消防部の応援をえて、必死の消火作業を続けたがおよばず、ついにピーター室二階木造部分八〇〇坪を焼失した。

この日の空襲による被害は、その後の操業のうえからは決して軽微であったとは言えないが、人的被害を一人も出さず、隣接の抄紙室、晒室への延焼を食いとめることが出来たことは、せめてもの幸いであった。

この後の復旧工事は、資材の入手が困難なために、焼跡の整理に止めている間に終戦をむかえ、操業を再開したのは十月も半ばを過ぎていた。しかし、操業したというものの、資材調達特に石炭入手には極度に困難して、翌二十一年になっても、年間操業日数はわずかに一〇〇日に満たないという惨状たる有様であった。

この間、国策パルプと再生製紙の合併が両者の間に検討され、昭和二十年五月には正式調印の運びとなった。工場は国策パルプ工業株式会社勇払工場と呼ばれることになった。しかし、資材入手の困難は、その後も暫くつづいた。石炭不足がようよう緩和されて愁眉^{しゆうび}をひらいたのは同二十三年に入ってからである。

勇払工場生産関係資料推移統計表

年 度	生産度（ポンド）	操業日数	配炭量	備 考
昭和一九	一六、八〇一、七六三	三三三	三一、〇六〇	
二〇	七、四六三、一五四	二一〇	二三、〇二〇	・七月空襲、ピーター室火災 ・八月終戦
二一	三、四一九、八五〇	九五	一一、九五四	・混乱期続く
二二	六、四五一、八三二	一一五	八、三七八	・混乱期続く

（近江謙三『国策パルプ勇払工場小史』未発表）

工場の応急修理を終えて、ようやく生産操業の再開を見たと思う間もなく、翌二十一年八月、再び危機がおとずれた。占領軍による製紙機械撤去返還の指令である。それは、戦時中、南支那において占領した機械による工場施設であるという判定であり、説明も抗議もゆるされない至上命令であった。指令は関係者に深刻な衝撃をあたえた。それは工場の存廃に関する危機であり、従業員の生活に関する問題であるばかりでなく、手塩にかけて来た施設への愛着への打撃でもあった。

機械の解体、撤去作業が開始されたのは同二十三年七月であったが、同年十月には再建が決定した。製造設備のほとんどは撤去されていたから、再建計画は全く新しい角度から検討されなければならなかった。

勇払に工場建設を決定した有力な理由の一つは、北海道庁が提唱した国土開発計画の一環としての勇払原野の開発計画であった。しかし、これは戦争のために実施にうつされずに終わった。製紙原料として付近の豊富な潤葉樹を利用することが出来るならば、勇払工場は競争力のある有利な地位に立つことが出来る。主脳部の意見は一致した。こ

ここに、潤葉樹を原料とする洋紙製造の研究に総力をあげて実を結んだのがクラフト法の採用であった。

しかし、この決定はまたまた暗礁に乗り上げた。認可の実権を持っていた占領軍総司令部のクラフト法による製造方法に対する強い反対意見である。国策パルプ工業は、政府と司令部との間にはさまれて交渉に時を過ごしている間に、勇払工場では汽罐が入荷し、その基礎や抄紙機の基礎が出来上がりつつあった。そうそう交渉に日数をかけているわけにはいかなかった。会社は商工省に強い決意を述べた。こうして昭和二十四年二月十九日、「パルプ関係を保留し、製紙関係を第一期計画として実施すること。また、原質関係は、一応、化学パルプを生産する計画としておくこと。」とし、次の再建計画が決定された。

勇払工場再建決定計画

一、直ちに再建に着手し、第一次工事として、洋紙及び和紙年産五千トン、第二次計画として晒クラフトパルプ年産一万トンの設備を完成する。

二、第二次工事は、ピーター室、抄紙室、仕上げ室、汽罐室、発電室、用水取入室設備一式を昭和二十四年秋を目標として完成する。

(近江謙三『大日本再生製紙と勇払』昭和五十年 機関誌苫小牧市史編さん No.9)

こうして、波乱をきわめた再建計画は、最終決定をみ、本社首脳部、現地勇払工場従業員、一般在住者はようやくく愁眉をひらくにいたった。

工事は昭和二十三年末から着工され、同二十五年二月に完成、同二十三日から運転が開始された。施設の解体撤去以来一年七カ月にして、ようやく操業は再開されたのである。

パルプ生産を主目的とする企業が相ついで設立され、生産が急速に増大したのは、人絹パルプの輸入が困難になってきた昭和十二年ころからである。こうしたいきさつから昭和十三年六月、支那事変のさなかに、パルプ自給計画の

中核企業として国策パルプ工業株式会社が誕生したのであった。

国策パルプ工業の設立が、各方面の強力な支持を受け、時代の脚光をあびてデビューしたのに対して、大日本再生製紙株式会社は、当時、経済界では全く無名の水野、南らの血のじむ努力によって、かろうじて築き上げられたものであった。

勇払工場の沿革は次のようになる。

昭和二三・一〇 総司令部より工場機械一式の撤去命令を受け、中国政府へ返還のため解体撤去。

二三・一〇 工場再建計画に基づき紙製造部門の建設工事に着手、二四年三月、工事完了、運転開始。

二五・三 晒クラフトパルプ製造設備の建設工事に着手、二七年三月、工事完了運転開始。

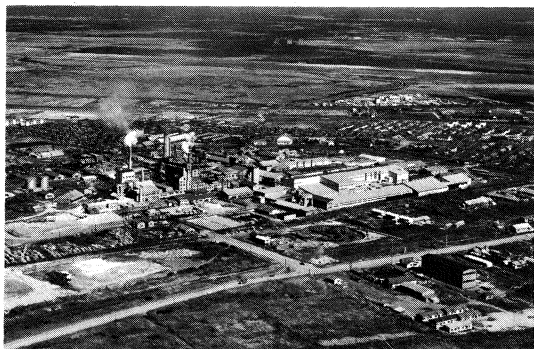
三〇・一〇 工場倍増計画に基づく紙製造設備の増設工事に着手、三二年二月、工事完了、運転開始。

三五・八 アート紙設備建設工事に着手、三六年八月、工事完了、運転開始。

三九・六 コート紙設備建設工事に着手、四〇年一〇月、工事完了、運転開始。

四五・四 パルプ製造設備建設工事に着手、四六年一〇月、工事完了、運転開始。

四六・一〇 GCF製造設備建設工事に着手、四七年三月、工事完了、運転開始。



国策パルプ勇払工場（昭和43年）
〔苫小牧市史編さん室蔵〕

（近江謙三『国策パルプ勇払工場小史』などより作成）

昭和四十七年、国策パルプ工業に新しい時代を迎えることになった。山陽パルプ株式会社との合併である。

山陽パルプ株式会社は、昭和二十一年の創立、主力工場を中国地方に置き、溶解パルプ、上質紙を中心に木材の综合利用をすすめて来た会社で、国策パルプ工業とは似かよった方向を目指して来た。国内経済は転換期にあった。両者は、この合併によって、資源、設備、人材の効率的な運用と企業の総合力の強化を計ったのである。

昭和四十七年三月三十一日をもって、勇払工場は、山陽国策パルプ(株)勇払工場と改称した。

○日本ヒューム管株式会社苦小牧工場

日本ヒューム管株式会社が苦小牧に工場を建設したのは昭和三十二年であった。

苦小牧地方は積雪がほとんどないために通年操業が可能であり、その主原料である良質の砂、砂利の入手が容易であると同時に、札幌を中心とした道央需要圏にある等立地条件が良好であった。

当時、王子製紙株式会社苦小牧工場は、二〇八インチマシンの増設を決定し、その工場用水を錦多峯川から取水することになり、この送水管として同社は大量のヒューム管の発注を受けた。最初、会社は函館工場での製造を行う予定であったが、苦小牧市より苦小牧市工場誘致条例の適用、市有地のあっせん等による活発な工場誘致の要請があったので、勇払においてその敷地の提供を受けてこれに応じたのである。

同年二月、工場建設が決定するや、直ちに工事に着手、四月からヒューム管の製造を開始した。初年度の従業員数四〇名、その生産実績はヒューム管六、五〇〇トン、セメント製品八〇〇トンであった。

その後、公共下水道事業、土地改良事業およびビルディング、工場等の大型建築物の建設の急速な進展に対応して、同三十六年にはPCパイプ工場、同四十二年には各種建築物の基礎に使われるコンクリートパイル工場を建設、以後、逐年製造設備を増設しその製造品目も、創業時のヒューム管の外、推進用ヒューム管、CPヒューム管、PCパイプ、

RCパイル、PCパイル、PCボックスカルバート等多岐にわたっており、生産量も同四十七年度六七、〇〇〇トン、同四十八年度七五、〇〇〇トン、同四十九年度五八、〇〇〇トンの実績をあげている。

同工場は、苦小牧工業港建設にともなう初期の誘致運動の成果として記録に残る工場である。建設当時の様子を初代工場長松尾好一は次のように語っている。

その頃、王子さんから工場増設に伴って取水用のヒューム管の注文が来たので、これを現地で作って納めようということになって函館にいた私が派遣された訳です。工場建設といっても、納期に合わせて製品を出すことが先決問題ですから、職員の住宅なども考

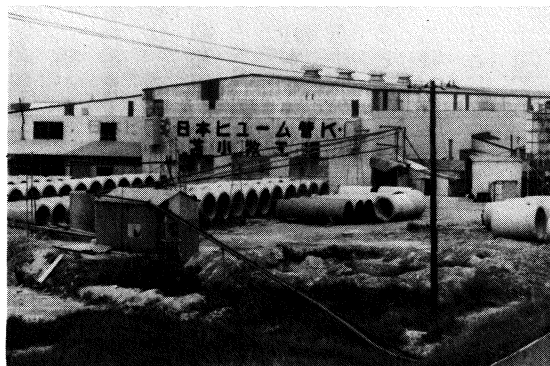
えている暇はありません。皆單身赴任で飯場に寝泊りしていました。建築工事のかたわらで機械の取付作業でした。まるで戸外同様の作業でした。(中略)

技術者や幹部職員は、函館から長期出張として来ていたのですが、製品の注文もふえて、会社では常置工場として拡張して行く方針をきめました。そんなこんなで、一度函館に帰った私はまた来るようになりました。昭和三十五年五月一日付、今度は転任ということで、家族をつれて来ました。

(松尾好一『建設当時の思い出』昭和四十二年「郷土の研究」第二号)

○ その他の工場

日本ロックラーパイプ株式会社が苦小牧工場を建設したのは昭和三十八年六月である。その他、山陽国策パルプ関連の諸工場に加えて、最近は苦小牧港の勇払地区掘込みにつれて、この地区にも多くの工場が建設され、また建設されようとしている。



日本ヒューム管勇払工場 (昭和50年)
〔苦小牧市史編さん室蔵〕

樽 前

一 部落の起源

北海道の歴史は本州府県と違った特異の経過をへて来ている。その幕藩時代、蝦夷対策から松前藩は和人が蝦夷地に住みつくことを禁止し、その出入にも制限を加えていたから和人の部落形成はずっと遅れている。

もちろん、苫小牧市内にも先住民の遺跡は数多く発見され、また、現在も発掘されつつあるのだが、それは植苗静川地区が中心であって、この地域には未だそれがないから、土地の歴史を語る場合は和人の足跡をたどることになる。こういう記録では、元禄十三年（一七〇〇）、松前藩から幕府に献上した全島地図及び松前嶋郷帖が最古のものとされているのだが、この中で初めて「たるまひ」の名が出てくる。

松前藩は家臣の知行地として『場所』制度をとったが、天明六年（一七八六）、幕吏山口鉄五郎、佐藤玄六郎等の調査記録『蝦夷拾遺』には「タルマへ、運上屋一戸」と記されている。当時、勇払を中心とする苫小牧は湿润不毛の地で生産物がなく、家人の給地とはならなかったが、樽前は違っていたようである。給地のアイヌ取引が商人による場所請負制に変わっていった元文二―三年のものと推定される『蝦夷商賈聞書』によれば、当時の樽前の状況は次のように述べられている。

一、樽前、川也。志摩守様へ運上金揚り。秋生鮭、塩引計也。

この記録によれば、タルマイ場所は松前家の直領で運上金は三カ年で七拾両であった。

樽前を含む鶴川から苦小牧、千歳周辺は場所の数も多く、寛政十一年（一七九九）の幕府直轄以前には、一般に「シコツ一六場所」と呼ばれていたのだが、当時の記録で最も古い記録とみられる『松前国中記』（年代不明）には樽前関係について次のように記している。

因藤官司殿、タルマイ、産物、干鮭、鹿ノ皮、品縄、秋味有

樽前場所の支配者は『蝦夷商賈聞書』によれば直領であり、『松前国中記』（年代不明）は因藤官司、『松前国道中記』（年代不明）は因藤豊太郎、『東西蝦夷地場所附』（安永九年）にも因藤豊太郎となっている。この時代の給地（場所）は代々家臣の世襲制となっていたのが普通であったから、樽前場所は初め直領であったが、のちに因藤家の給地となったものと推定される。

こうして、当時から樽前には和人とアイヌの交流があったのであるが、先にも書いたように、この時代は和人の蝦夷地入地制限時代であったから、和人の住居はなく、また、先住民の遺跡も発見されていない。

その後、寛政十一年から幕府直轄時代に入って行政は松前藩から幕府の手に移り、海漁が開発されて樽前浜のイワシ盛漁時代が来るが、その漁期は時期的であったために、漁業は出稼業者によって行われ、定着する者はなかったと思われる。

ここに定住者が見られるようになったのは、いつのころから明らかではないが、記録にあらわれてくるのは万延年間からである。

二 自然環境

地形と

樽前部落は、樽前火山の裾野が太平洋に接する間の平野部に位置している。地質は、樽前火山の台地部は集塊岩、凝灰岩を主とした第三紀層の上を第四紀の火山碎屑物が被っている。平野部は樽前降下軽石堆積物で被われ、その下に低位泥炭層が分布している。

地質

河川は、部落内を樽前川が流れ、河口から約四キロメートル上流には凝灰岩を浸蝕してできた樽前ガローがあり、平坦地の苦小牧市にあつては他に見られない見事な景觀を呈している。また、同部落背後の台地周辺には多数の湖沼群が点在し、これらは樽前湖沼群といい今後の観光資源として有望な地域である。

植物

同部落周辺の植物は、海浜、平野、樽前山麓の三地带に分けることができる。海浜地帯には、ハマボウフウ、ウンラン、ハマエンドウ、シロヨモギ、キンミズヒキ、ハマニガナなどの海浜植物が見られる。平野部はかなり開墾されているが、各所に良好な植生が残っている。エゾミソハギ、ツリガネニンジン、クサフジ、ホザキシモツケ、ナガボノシロワレモコウ、ハンゴンソウ、エゾスカシユリ、サワキキョウ、ヒオウギアヤメなど低湿地を好む植物が多く、湖沼群の湿地帯ではミツガシワの大都落があり、モウセンゴケも見られる。樽前山麓の台地は、ミズナラハルニレ、ヤチダモ、キハダ、ナナカマドなどの樹木が繁茂し、林床、林縁には草本植物の種類も多い。

動物

大型動物はキタキツネ、エゾヒグマ、エゾリス、エゾイタチ、ユキウサギなどが見られるが、特にエゾヒグマは人里近くまで現れたこともあった。

鳥類は、カルガモ、マガモ、ハジビロガモ、オオハクチョウ、ミヤマカケス、コムクドリ、オオバン、ウグイス、アオジ、ノジコ、コウライキジ、クマゲラ、ノビタキ、シジュウカラ、アカシヨウビンなどが記録されている。昆虫



樽前地区から見た沼と樽前山
(昭和48年)〔苫小牧市史編さん室蔵〕

類は、樽前湖沼群周辺にトンボ類が多く、特にマイコアカネは道内では少ない南方系のトンボである。その他、オニヤンマ、ミヤマアカネ、アキアカネなど種類も多い。草原には種類数は少ないが、ゴマシジミ、フタスジチョウ、ヒメシジミなど勇払原野の低湿地を代表する蝶が多く、鳴く虫の王様といわれるカンタンも非常に多い。

魚類は、フクドジョウ、ウキゴリ、ハナカジカ、ウグイイトヨ、エゾトミヨ、スナヤツメ、ヤマメなどが樽前川に生息している。また、樽前湖沼群にはソウギョ、ハクレンなどが放流され、釣りマニヤの良き対象となっている。

三 沿 革

初期の 樽前部落は前期松前藩時代からその家臣の給
樽 前 地として和人が出入りしていたことは前項での
べた。

寛政十一年（一七九九）、幕府は東蝦夷地（太平洋岸）を直轄地として支配することにしたのだが、箱館地方におこっていたイワシ漁は、このころには蝦夷地にも及んできて、

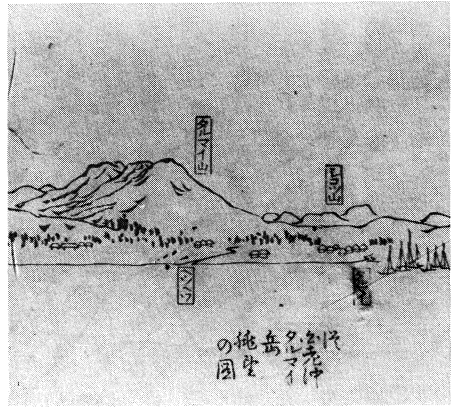
寛政十二年、白老のアイロで魚油、ノ粕の製造がはじめられ、次第にひろがったようで、後にはこの地方がむしろ発達して、勇払場所樽前浜は文政年代以来、出稼者が増加してその主産地となった。この時代、樽前はその中心であったと思われる。松浦武四郎は「初航蝦夷日誌」その他の記録で、その状況を詳細に伝えているが、ここでは文久三年の東西地理取調紀行「東蝦夷日誌」第三編ユウブツ領の項から抜粋してみる。

「比辺は皆南受の暖地にて、沙浜。浪打際より上に（二、三丁）路有。蹟く石一ツなく、鰯屋左右に立並び、酒肆、茶店もさまざまの暖簾さげ、中々に言さへぐ、蝦夷人の里とは思われず、その繁昌いわん方なし。」

当時の盛況がしのばれる。ただ、それは、当地方漁業の典型的な姿として後年まで長くつづくのだが、この繁盛はイワシ漁期に限られたものであったし、また、場所請負制度時代、幕府直轄時代を通じて箱館方面から出漁する出稼漁業者の操業であったから、収益はすべて箱館に持ち去られて、土地の経済力につながるものではなかったのである。こうして、久しく土着する者もない無人の里に、ようやく定住する者が現れてくるのは明治初年のころであったろうと思われる。明治二年、当地方は高知藩に割渡されたが、同五年には開拓使の支配下におかれていた。この時の事務引継書には樽前の項に「永住人四戸、会所持の出張番屋一戸（二坪）」とある。漁期には「蝦夷人の里とも思われず」というほど賑わうこの土地も、明治期に入っても、漁期を過ぎれば住む人もまれな寒村に変じる状態だったのである。この状態は、北海道開拓の大動脈、札幌、室蘭間の国道が開通（明治六年）しても、地方行政機構が整備されていっても、あまり大きな変化はなかったようである。

豊業移民 今の部落の基礎が出来たのは明治三十年前後である。

の入植 開拓使がおかれてから、北海道の移民が増加していったといっても、その数はまだ少なく、当地方への入地は少なかったようである。それが、ようやく実を結び出したのがこの時期にあたっている。それは、苫小牧



東蝦夷日記のタルマエ
〔市立苦小牧図書館蔵〕

の行政史が戸長時代から勇払郡各村戸長役場時代、苦小牧外数カ村戸長役場時代をへて、二級町村制が施行されて、現在の苦小牧市域を苦小牧村として統一された時期（明治三十五年）にあたる。

この時期には移民が急速にすすみ、行政区画の変更があつて、明治二十八年には鷗川外七カ村が分村独立し、同三十年には厚真地区が、同三十三年には安平地区が独立した。

この当時の樽前部落は、当時の農業戸数調べによれば、

明治三十年、戸数六戸、人口一九名、同三十四年戸数二七戸、人口一〇四名

（『苦小牧町史』 昭和十五年 苦小牧町）

となつてゐる。此内平吉談によれば、この時期、明治二十八、九年から

三十年前後にかけて、樽前農業の旧家、国坂、池田、此内、加藤、伊藤、その他の諸家が入地している。

この時期はまた、苦小牧に工業のおこつた時期でもあつた。それは、マッチの軸木、小箱の製造である。明治三十四年の工場数は一四に及び、そのうち、樽前には次の二工場があつた。

第二北海社 明治三十三年七月創立

太田製軸所 同 三十四年七月創立

（『苦小牧町史』 昭和十五年 苦小牧町）

原動力はいずれも人力、持主は太田小一郎、製軸所は現在の白老営林署樽前事業所の附近、第二北海社はオポップ川下流といわれている。（此内平吉談）

この時期の畜産もまた、有名であった。

苦小牧地方は、冬季積雪が少ない上に、白老、樽前から錦岡にかけての一带は馬糧に適する笹が多かったので、冬になると各地から馬の放牧に集まった。しかし、地元の持馬は少なかったようである。これも当代の特徴の一つといつてよい。

民有未墾 前述したように、漁業によつて注目された樽前も、それは大資本の掌握する漁場の他貸漁業であつて**地の入植** 出稼漁民が多数出漁はしたが、地元漁民が育つということはほとんどなかった。この当地の産業史の方向を転換したのは、明治三十年前後の農家の入地移住である。しかし、それも、当時は専業農家として独立するまでにはいたらなかったようである。ある時は漁業の手伝いに出、また、ある時は労務の賃稼ぎによつて補うというよう

な零細経営だったのである。

こういう状態に、やがて大きく変わる時期が来る。それは、昭和六年にはじまる民有未墾地の開拓入植である。戸数二〇戸前後の部落は、この民有未墾地開放（約六〇戸）と、昭和八年の通称広川牧場の開放（一四戸）によつて急速に変わり、同十年の国勢調査によれば公務員、漁業者をあわせて、戸数九五戸、人口五五一名の一大部落にふくれ上がっていた。

また、この民有未墾地入植は、樽前部落の農業に革命をもたらした。入植早々につかつたのが冷害凶作である。これを契機としてとり入れられたのが畜農業であつた。こうして、樽前部落の農業は、畑作単一

新聞 樽前民有未墾地の状況を報ずる
（昭和11年）〔堀江敏夫蔵〕

形態から、稲作、酪農経営の方向に進んで行くのである。

生活環境

昭和六年の民有未墾地入植は樽前部落発達史上の一大転機であった。漁業は相変わらず他地方漁業者の転換が漁業権を持っていたし、その漁獲成績もあがらなかったが、農業は戸数の増加と耕地の拡大、乳牛の導入によってその地位を確立した。とは言え、農家の資力乏しく、農地に地力のないこの土地は、零細経営に終始して生活文化の向上充実に余力をさくゆとりがないままに推移した。

昭和二十年、太平洋戦争が終わると、復員して来た若者を中心に樽前には新しい動きが起こって来た。青年団活動がそれである。また、このころ、部落会が組織され、呼応して部落行事、社会教育活動が行われるようになった。

一方、学校教育関係では、戦後の新教育制度によって義務制中学校が新設されて、部落は小学校、中学校二つの公立教育機関を持つことになった。

陸の孤島であったこの土地にも、ラジオの共同聴取施設が設けられ、やがて、小学校に公衆電話が架設される一方市営バスが開通するようになった。さらに、多年の要望であった電気が導入されて、各戸点燈が実現するなど、その生活環境は、戦後十年にして一変するに至ったのである。

新しい

戦後の部落の新しい動きは農業経営にも見られた。

出 発

昭和六年以降入植した開拓農家に開放された民有未墾地は、水田耕作地として区画された土地であったが、造田されたのは、そのうち西部地域に限られていた。それが、戦後の食糧不足から、全面的に造田しようという動きが起こって来た。同二十八年、約三〇戸を組合員とする樽前土地改良区が組織され、約三〇町歩の造田が行われた。しかし、これは一〇年を経過しないで中絶するに至った。耕地の水もちが悪く収量が少ないうえに、国内産米の過剰から政府が減反政策をとったからであった。

ら、松前藩の直領または家臣の給地にも指定されていたし、江戸時代末期にはイワシ漁業が隆盛をきわめたこともすでに述べた。しかし、この時代には、時期、時期に和人が出入りするだけで、この土地にはアイヌの部落の遺跡さえもいまだ発見されていない。

明治二年、北海道の分割支配制度が創設されると、高知藩はこれに応募して出願、夕張、勇払、千歳の三郡の割渡しを受けた時、開拓計画の第一は勇払地区の海岸に船の入る土地を得ることであった。この出願について開拓使は



樽前部落の一部（昭和50年）
〔苫小牧市史編さん室蔵〕

樽前は今、第四の転機に立っている。苫小牧市東部開発計画の着手によって地価は高騰した。柏原、弁天地区の農家は用地買収によって営農地を離れ、新しい土地を求めて当地に移って来た。一方、樽前は酪農を志すものにとつては、その保有農地が狭小に過ぎる。他に土地を求めて転出する者が出て来た。こうして、昭和四十五年を前後して、この部落には転入者、転出者の交代が行われた。さらに、景勝、静寂の地を求めて宗教、医療、観光施設が進出して来た。北海道ならびに苫小牧市はまた、ここを都市近郊農村として育成しようとしている。こうして、今、ここは、新しい農村として歩みはじめているのである。

四 社 会

社会環境 樽前が古い時代から太平洋岸の通路にあたっていたこと
の変遷 は、地形上当然であろう。また、幕府の蝦夷地直轄以前か

「この地は、東地第一の生産物があり、沖合いにて荷役しているが何の支障もないのでタルマイを使用するように——。」と回答している。この件は高知藩の希望にそわないで実現しなかったが、当時、要路には相当に注目された土地であつたことがわかる。また、同五年六月、函館、札幌間に電信の線路架設の計画があり、函館、森、長万部、室蘭、札幌とともに、樽前にも電信局の設置が計画された。これは、後に中止されたが、このことは、当時の樽前が漁業の中心地として、人の移動、貨物の取扱いが多かつたことを物語るものと考えられる。

明治初年の当地の様子は、高知藩の引き継ぎ書によつて知ることが出来る。その内容は次のとおりである。

タルマイマデ一四丁。

一、ヘツヘツ、此所平地。通行歩行渡。小川橋有。ユウフツ郡白老郡境杭有。

一、タルマイ、此処平地通行。小川橋有。鰯漁業出稼小屋有。権現社有。

一里杭有。会所持出張番家有。ヲホフ迫一里。

一、ヲホフ、此処平地通行。小川橋有。鰯漁業出稼小屋有。一里杭有。ニシタフ迫一里。

また、神社の書上を見ると次の二社が記されている。

一、権現社 梁間三間、桁間三間 一棟

一、稻荷社 全 九尺 全 九尺 一棟



樽前の海岸地帯（昭和50年）
〔苫小牧市史編さん室蔵〕

永住人としては次の人々があげられている。

樽前村永住人

池田 菊松 家族三人

永山市之助 同 四人

竹花小藤次 同 一人

佐々木徳松 同 一人

ヲホフ村永住人

水島彦右エ門 家族二人

稲藤清之助 同 二人

永住人の持馬調べでは

一、持馬 五疋 樽前村 菊松

一、同 三疋 ヲホフ村 彦藏

一、同 二三疋 同 清之助

(『苫小牧町史』 昭和十五年 苫小牧町)

このような部落の状態は、あまり変化なく続くようである。明治十五年の『測地概要』には次のように記している。

「小糸魚(コイトイ)(※現糸井(ニシタツ))、錦多峯(ニシタツ)(※現錦岡) 覚生、樽前ハ苫小牧方面ニアリテ、樽前山ノ麓ノ広野ニアリ、札幌街道(※札幌、室蘭間国

道)ニ跨リ、村民家居星羅碁布、概ネ海ニ沿フノミ、マダ完全ナル村落ヲナスニ至ラズ。其戸数三、四戸ヨリ七、八戸ニ出入シ、人

口亦從ツテ寡シ。墾成モ四反乃至五反歩ニシテ算スルニ足ルモノナシ。猶、該村ハ函館ヨリ寄留シテ漁業ヲナスモノアルヲ以テ、或

付編 部落史・樽前

ハ其ノ雇役ニ就キ、或ハ牧馬ヲ業トシ、貨物ノ運搬ヲ兼ヌ。」

（『苦小牧町史』昭和十五年 苦小牧町）

当時の近隣各村の様子をよく写し出している。

旧幕領時代から明治初年にかけては、地方の行政は、事実上場所請負人の勢力下にあった。明治二年、開拓使の設置にともない、その勇払役所が設けられ（六月）、ついで、場所請負制度が廃止され漁場持制度に改められると、当地方は山田文右衛門の持場所となる。先にあげた「高知藩支配勇払郡千年郡里数小名書上」に出ているタルマイの項の「会所持出張番家」は、この山田文右衛門管理の勇払会所の出張番屋であったと思われる。

高知藩支配時代をへて、再び開拓使直轄時代になると、勇払にはその出張所（勇払郡出張所）が設けられ、樽前には樽前抜所がおかれる。

開拓使は、郡出張所の末端機関として、住民の中から戸長を任命して行政事務の一部を取り扱わした。また、そのほか、住民側からの役職人をつぎつぎに設置した。この中に総代人というのがあった。この総代人制度は同十一年に戸長の補助者に改められ、後に議決機関として選挙制に改められ、地域住民の意向がとり入れられるようになったが、同十三年には定員を二名に増員して、樽前村の水島彦右衛門が加えられた。これが、地元民の行政に参画した最初の人であった。

明治十三年八月

植田 惣吉（苦小牧）

水島彦右衛門（樽前）

（堀江敏夫 『明治前期における地方行政制度について』 昭和四十八年 機関誌苦小牧市史編さん No. 6）

明治十六年の郡総代人名簿を見ると、その人員は四名になっていて、水島については次のように記されている。

氏名	資産	職業	族籍	住所
水島彦右衛門	三〇〇円以上	漁	平民	勇払郡樽前村六番地

（『札幌県治類典―総代人』 明治十七年 札幌県）

こうして、苫小牧は多くの変遷を重ねた戸長役場時代（明治五年以降）から二級町村制施行による苫小牧村時代（同三十五年以降）に移り、その間、総代人制もそれに応じて変遷していくが、水島彦右衛門は、同三十一年、三十四年にも総代に選ばれているから、おそらく、総代人制時代のほぼ全期間を通じて勤務し、初期の苫小牧地方行政に貢献したものと思われる。

樽前には、明治初年に少数の永住人が定着したが、その後は目立った人口の増加がないままに経過したことは先に述べた。これが着実に発展するようになったのは農業移住者の入地があつてからである。その最初が誰であつたか資料的に明らかでないが、古老此内平吉によれば、現在に続く旧家の最初の入地者は国坂茂平であつて、それから、その縁故をたよつて次々に移住して来たのであつた。明治二十八年は鷗川外五カ村が苫小牧外一六カ村から分村した年であるが、国坂茂平が来住したのはそのころだつたと推察される。当時の様子を此内平吉は次のように語っている。

あのころ来たのは国坂（茂平）さん、それから池田（理兵衛）さん。私の家よりも加藤さんが一寸早いのではないかな。私の所と伊藤さんとは大体同じらしい。ここに来る前は同じ所（札幌市丘珠）にいたんだから。国坂さんもそうなんだ。国坂茂平さんが先にここに来て、いい所があるから来ないかということであつたらしいんだね。

（『樽前の歴史を聞く』 昭和五十年 機関誌苫小牧市史編さんNo.9）



樽前の農業（昭和48年）

〔苫小牧市史編さん室蔵〕

明治四年、各地永住民に借用宅地または開墾地の私有を許したが、同五年には北海道土地売買規則及び地所規則が定められ、同十九年六月には土地の払下規則の発令があり、同三十年三月、これを廢して北海道国有未開地処分法を設けた。これは、土地の払下制度を付与制度に改めたものであって、開墾、牧畜または植樹の希望者には無償で土地を貸与し、その事業が成功するとそのまま事業者の所有地として給付するといふものであつて、こうして民間に給付された土地は、その後二〇年間に租税も免除されるという優遇策がとられていた。樽前に移住農家が多く入つて來たのはこういう時期であつたのである。

こうして、これらの人々はポータルマエ川をはさんで入地したのだが、そのころは、別々川の国道ぶちに最上（喜平）、土橋、その奥に上西といふ人々が住んでいたといふ。当時の戸数は新旧合わせて、せいぜい二〇戸程度だつたと此内平吉は語っている。

私らの入つたころは、二〇戸せいぜいだったね、明治三十年代になりますかね。一番古いのは水島というのが居たんだがね。その次が最上喜平、どっちも旅館らしいんだよ。といふのは、加藤の婆ちゃんに聞いたんだが、池田さんが入つた時はそこに泊まつて小屋がけしたんだといふから――。

（『樽前の歴史を聞く』 昭和五十年 機関誌苫小牧市史編さんNo.9）

二〇戸の部落に旅館が二軒あつたといふことは今では考えられないことだが、当時、漁期の人の出入りが多いため

に備えられたものであつたろうと思われる。本市史編集長の堀江敏夫は「そのころの実力者は旅館をかねていたらしい。」と語っている。

これから約一〇年後に新開墾者は国有未開地の払下登記をすませることになるのだが、胆振支庁の土地台帖には次のように記されている。ただし、この以前は不明である。

国有未開地払下げ者一覧（樽前地区）

地名	地番号	反町別	処分年月日	氏名	備考
大字 樽前村	二二〇	一二、二九二二	三十八年二月	藤本良之助	処分法第三条二依ル
	二二	三、六六二八	四月	池田理兵衛	
	二二	三、五二二三	〃	石川政助	
ポントタルマイ	二二三	三、〇五二五	四十年二月	国坂茂平	処分法第三条二依ル
字ポントタルマイ	二二四	二、七七〇八	四十一年十月	此内平次郎	第二条二依ル
〃	二二五	二、五八二四	十二月	伊藤福蔵	第三条
大字 樽前村	二二六	二、〇九〇九	四十二年十月	池田理兵衛	第三条
字 別々	二二七	二、二二二五	十二月	堀畑継太	第二条
字 樽前	二二八	二〇四、三三二一	四十三年二月	内務省	
字 別々	二二九	二、九三二七	四十三年三月	村田仁次郎	第二条
字 樽前	三三〇	一、八七〇八	四十三年九月	柳原好五郎	〃
〃	三三一	二、二三三七	〃	全人	〃

（『国有未開地地番号簿』胆振支庁耕地管理課蔵より作成）

明治三十三年、二級町村制が実施されると、近隣各村が分村していつて苫小牧外六カ町村となり、同三十五年四月からは苫小牧村と呼ばれるようになった。この当時の調書によって樽前の戸数人口を知ることが出来るので摘記して見よう。

戸数の増減一覽表（樽前）

	明治三〇年	三二年	三三年	三四年
戸数	一九	二三	四六	五七
人口	一二五	一三七	一九六	一八一

（『北海道戸口表』各年 北海道庁）

部落民の経済力を見る一つの資料として、町村会議員選挙資格者調書がある。当時、一定以上の資産のある者でなければ選挙権がなかったからである。第一回苫小牧村会議員選挙権有資格者調べを見ると該当者は五名よりなかったことがわかる。

町村会議員選挙有資格者調べ

地租十錢以上 納ムル者	一	直接国税五十錢 以上納ムル者	一	耕地一丁、宅地百 坪以上有スル者	五	平均額以上ノ町 村税ヲ納ムル者	一	計	五
----------------	---	-------------------	---	---------------------	---	--------------------	---	---	---

（『苫小牧町史』昭和十五年 苫小牧町）

戸長役場時代の苦小牧地域の総代人には、樽前村より水島彦右衛門が出ていたが、二級町村になってからの苦小牧村会議員には誰も出ていない。ただ、いつから制度化されたか現在明らかでないが、村(町)制の連絡機関として区長が任命されるが、此内平吉、伊藤仙太郎の記憶によって、その人脈を記せば次のとおりである。

記憶に出てくる最初の人は伊藤福蔵、ついで池田平治郎、加藤良平、此内平吉、池田栄次郎と続く。最初は町村長から指名してきたが、加藤良平のころから部落で選出して上申発令するようになったという。こういう形が終戦まで続いて部落会の自治形態に変わったのである。

樽前から会議議員として選出されたのは高坂永松が最初である。高坂は昭和七年五月の選挙で町会議員に当選以来町議として四期、市議として三期、同三十四年四月まで、計二十一年間議会にあって活躍したのであった。

この間、人口は徐々に増加してきた。特に北海道庁が旧樽前共同牧場を買収し、民有未墾地として開放したことにより、昭和六年以来続々入植するようになってから、戸数は一躍激増する。昭和十年の国勢調査表によれば、戸口、人口は次のようになっている。

樽前	地区世帯数		人口	
	男	女	計	
九六	三〇三	二四九	五五二	

これが、終戦後の昭和二十二年には、戸数一二〇戸、人口六一三名に増加している。

ラジオの 終戦後の樽前は、学校教育、社会教育の分野に画期的な発展をとげたのであったが、生活環境にも著共同聴取 しい変化があった。ラジオの共同聴取の実現、市営バスの開通、部落内点燈の実現等がそれである。

生活文化への関心は、開放された戦後の日本の新しい意識の現れの一つであった。ラジオの発達と情報の聴取、享受は激変する社会が求める必然の要求でもあった。各地の農村は続々として共同聴取放送施設の設置を計画する機運にあった。樽前部落には電気が入っていなかったから、情報と娯楽を求めてもラジオの聴取は出来なかった。外部との連絡は一日一回の郵便によるより外はなかった。この部落にとっては、隣部落社台のラジオ聴取はうらやましいものであった。

たまたま、社台駅鉄道官舎に駅員の好意があったので、有志はここから有線でつないでラジオを聴取することを考え、最初は試験的に約四〇戸に配線して見た。これが昭和二十八年五月のことである。結果は良好であった。そこで希望者をつのり、樽前ラジオ共同聴取組合（組合長田中興八）をつくり、市の助成を受け、受信装置本機を社台集乳所に設置、管理人にその操作を依託し本放送を開始した。組合加入戸数約九〇戸、配線約四キロメートルに及ぶ施設であった。これの完成は同年八月である。この完成によって、ラジオの共同聴取はもちろん、漁家地域をのぞく部落内の連絡通報は円滑に行きわたるようになった。

この施設は、同三十三年の部落電化の実現によって廃止されたが、それまでの約五年間、部落内の連絡と娯楽の提供に大きな役割を果たしたのである。

バスと電 樽前は久しい間交通機関に恵まれず不便をかこっていた。道南バスは国道を走っていたが、ここには話の開通 停留所がなかった。部落の出入りは国鉄社台駅の乗降に頼るしかなかったのである。

昭和三十一年九月三十日をもって樽前中学校は閉校になり、錦岡中学校に合併して校名も凌雲中学校と改めた。生徒は錦岡に通学することになった。その見返りが市営バス錦岡線の樽前乗入れである。開通式は同年十月一日であった。この日から樽前は新しい足を得たのである。



樽前部落に入った市営バス
(昭和31年)〔近江謙三蔵〕

この年、さらに加えられたのは通信の便——公衆電話の開通であった。それまでの通信の方法としては、一日一回の郵便の配送よりなかった。緊急の場合は隣部落社台の郵便局の公衆電話に頼らなければならなかった。当時、農山漁村通信施設の充実を計るために電話架設促進法が公布され、その予算は国費で支出されることになった。苦小牧市はそれをへき地の小学校に設置するように措置した。その最初の電話が樽前小学校に架設されるようになった。その開通は同年十一月五日であった。

部落電化の実現 部落電化は長い間の懸案であった。しかし、人家の点在するに過ぎないこの部落では、電力会社の営業線の導入は無理であった。

昭和十七年ころ、ポンタルマエ川周辺の農家が自家発電を計画したことがあった。国坂方円を中心とする付近の農家は利用組合を作り、町の助成をえてここに小発電所をつくって点燈した。しかし、管理が行き届かず短

期間で中止しなければならなかった。

昭和二十五年九月、白老営林署は樽前川上流に小規模のダムをつくって自家発電をはじめた。しかし、それはかうじて事業所の用をたすものに過ぎなかった。このころ、別々川尻の漁家集落は社台から営業線を延長して点燈するようになったが、部落の大半を占める農業地帯は依然として未電化地帯であった。

ランブ生活から脱け出したいという願いは容易に実現の見通しが立たなかった。戦後の混乱、電力の逼迫、経済の

貧困がそれに拍車をかけていた。

やがて、世の中が落ち着いてくると、無電化地帯の解消は社会問題として取り上げられるようになった。樽前の電化問題はこの時期に再燃して来たのである。

昭和二十七年八月、部落の有志は高坂永松宅に会合してこの問題の促進について協議し、同月二十一日、樽前小学校をかりて「樽前部落無燈火解消促進大会」をひらき、あらゆる困難を打開して自力で点燈を実現することを決議し、樽前電化促進委員会（委員長高坂永松、副委員長伊藤仙太郎、池田栄次郎）を設けて積極的活動に入るようになった。

活動の第一段階は電化可能区域の想定とその工事費の算定、電力会社の電力供給の可能性の確認であった。

予算概算は苫小牧市に依託してつくられ、電気供給力については翌二十八年五月、電力会社から可能見込書が発行され、第一段階の運動は実を結んだのである。ここに、第二段階の運動に入るべく委員会は解散し、新たに樽前電気利用組合（委員長高坂永松、副委員長伊藤仙太郎、池田栄次郎）が組織された。同年五月二十五日のことである。

不幸はこの年におこった。翌二十九年につづく二カ年の冷害凶作である。

樽前の電化問題にはいろいろな障害があった。地域が広大で膨大な工事費が必要である。電力会社の営業線の対象にならないから、需要者は電気を会社から買い、自分で送電設備を作って点燈しなければならない。ところが、この部落は貧困零細な農民集団だからその工事費の負担は容易なことではない。そういう困難な条件があったこの地方が冷害凶作に見舞われたのである。目的の達成は不可能ではないかと危ぶまれた。

資金の調達には、まだ大きな問題がよこたわっていた。各自には事業の達成に必要な資金を一時に出資するだけの力はない。どうしても市の補助金と国庫の長期融資に頼らなければならなかった。国庫融資を受けるためには、借入母体となる農業団体が必要であった。苫小牧の場合、この農業団体に問題があったのである。

政府は農山漁村の電化を促進するために、電化促進法をつくって融資の道を講じていたが、苦小牧の場合、農業協同組合と酪農協同組合の二つの農民の団体があつて樽前の場合も農家の所属はそれぞれに別れていたからどちらの組合に頼るということは出来なかつた。さらに加えて、いずれの組合も経営が苦しくて借入母体としての資格に疑問をもたれていた。

部落の苦悩は大きかつた。もり上がった声ではあつたが、計画が具体的に検討されるに従つて、その困難さが浮き彫りにされて来た。少なくとも、現在の条件のもとにあつては、全戸点燈を希望することは到底不可能なことであつた。しかしいつたん燃え上がったこの機会を逃がしては、それはいつ訪れるとも思われなかつた。道は一つより考えられなかつた。幸い、小学校は部落の中心地にあつた。第一段階として市費による小学校の電化を実現し、それを基礎として逐次各戸点燈に拡大していくより方法はない。それが苦境に立つた部落の判断であつた。幸い、高坂組合委員長は

電気が欲しいとの子供の作文（昭和32年）
〔近江謙三蔵〕

当時市議会議員であつた。こうして苦小牧市、同議会に根強く了解工作が進められて行つた。

翌二十九年八月二十日、部落では電気利用組合と部落会の合同総会を開いて、部落電化第一期計画として小学校までの幹線工事に市費支出を陳情する件を審議決定した。

この直後に不幸がおそつて来た。九月、台風が全道を吹きまくつた。通称一五号台風である。青函連絡船が沈没し、四四一名の死者を出し、各地に風倒木の被害が大きかつた。苦小牧の最大風速は三七・八メートルに達し六億六千万円

の被害を出した。農村の打撃も大きかった。樽前の電化問題も終息のやむなきに至るだろうと噂された。しかし、部落の期待は根強かった。組合、部落会に父母と先生の会を加えて再度方針を協議し前回の決議を確認した。

苦小牧市当局は樽前電化に強い関心を持っていて、この陳情の取り扱いに慎重であつた。学校までの工事費を負担することは不可能ではないが、それは、その後の各戸の工事費補助のみちをとぎすことになり、かえつて部落電化を遅らせることになりはしないかとの配慮があつた。むしろ、当時の懸案であつた苦小牧市農業協同組合、苦小牧市酪農協同組合の合併を促進し、これによつて国庫融資の道をひらき、一気に部落電化を計るべきだと考えていたのである。この意向と助言によつて、部落は新たな曙光を見出した。部落側は、組合總會をもつて

一、全部落の電化を目標にすること

一、国庫の長期融資を導入すること

二つの方針を決定した。組合は本来の全部落電化に方向を修正したのである。このころ懸案の両農協合併問題も進んでその解決は時間の問題であつた。

運動は順調に進行するかに見えた。昭和三十年一月、長期融資借入関係書類資料が苦小牧市と苦小牧市農業協同組合に提出された。電柱はクレオソート注入材の使用が原則だったが、素材使用認可申請のみちがあつた。二月にはその許可願を通産局に提出した。電力供給可能見込の期間は一カ年だったので、その延期の手続きもとられた。苦小牧市農業協同組合、苦小牧市酪農協同組合の統合は困難を極めたが、それも六月の設立總會をもつて成立した。

しかし、問題はまだ残っていた。この新組合は財政的基礎が弱くて、まだ国庫融資を受ける力を持っていなかったのである。電化問題は苦境に追いこまれて焦燥し苦悩した。組合は再び苦小牧市に陳情書を提出する。その中に当時の事情について次のように述べている。

過去において幾度か部落をあげて努力して参りました。しかし、微力及ばず資金の調達に最大の希望をかけてまいりました農林漁業電気導入促進法による長期融資借入につきましても、未だに申請の手續きを取り得ない事情におかれております。

(『樽前部落電気関係資料綴』樽前部落会蔵)

この苦しみも、翌三十一年に入つて、ようやく明るい方向を見出すことが出来た。苦小牧市農業協同組合は市の援助を得て、ようよう経営の基礎を確立し、樽前の電化問題を取り上げるに至つたのである。苦小牧民報は次のように報じている。

「苦小牧市字樽前の電化は融資もほぼ確定的となり、市農協も(四月)二十三日の総会で中金(農林中央金庫)融資三百万円の転貸を議決したので、本年度の着工は間違いないものと見られるに至つた。」

(『苦小牧民報』昭和三十一年四月二十五日号)

同年六月五日に、苦小牧市農業協同組合は理事会で「樽前の電化につき、農林漁業資金の借入れで実施する」旨の最後決定を行い、部落ではこれを受けて、組合の総会をひらいて「電化促進法による資金借入承認に関する件」外一二項にわたる案件を審議決定した。八月には工事計画の第一次見積が出来上がった。

一、工事費 五八五万一、五七三円

一、延長 一万七、五七九メートル

一、所要電柱 三〇八本

一、対象戸数 六七戸

(『樽前部落電気関係資料綴』樽前部落会蔵)

いよいよ、待望の工事は間近にせまつたように感じられた。

こうして、昭和三十一年は希望の春を迎えたのだが、苦難の道はまだ終わらなかった。予期しない災厄が襲って来た。それは数十年来と言われる冷害凶作の襲来である。新聞記事拾って見よう。

・低温多湿、大小豆一ヶ月遅延（七・二四）

・水稻、樽前地区その他三分作（八・二二）

・数十年来の凶作、農民ぼう然自失（九・一二）

・凶作危機突破大会開く（九・二三）

昭和二十七年以来、この運動がはじまってから既に五カ年をへていた。この間の運動の経過は変転きわまりないのであった。農民は冷害、水害、台風に悩まされ続けて来た。そこから組合の運動の方針がたびたび揺れ動いて来た。幸い、長期融資借入の目途はついても、組合員にとっては各戸工事費の調達に不安があった。そこから疑惑や不満がふき出して来た。運動は最後の段階に来て結束が乱れかけていた。それが表面にふき出して来たのが一部組合員の組合脱退問題であった。当時の組合事務局長発の文書（一一・二七付）から写して見よう。

組合脱退の御希望を伺いました。考え方や事情は一戸一戸違うと思いますし、組合の計画ややり方についても皆さんによくわかっていないこともあるようですので、膝をつき合わせてとつくり話し合いをして見たいと思います――。

（『樽前部落電気関係資料綴』 樽前部落蔵）

結局、動揺は経過が長く情報が断片的に伝えられていたことから憶測と疑惑を生んでいたことが了解されたのだがこの事件が内部的な問題解決の一つの山であった。

こういう混乱があったのも、連年の凶作による経済不安が大きかったからである。そこに各戸の負担を極力軽減する努力が必要であった。先に述べた注入電柱の代わりに素材電柱を使うこともその一つであった。工事請負業者に電

柱を現物支給することにして、その用材を営林署から払下げを受け自力で伐採製材したのもその一つであった。王子製紙株式会社送電線交差地点の地下ケーブル資材を同社から提供を受けたのもそれであった。市の助成金の申請はもちろん、学校や教員住宅の点燈については、組合員と同様に規模に応じて市に負担してもらったのもそれであった。

こうして、地元の準備は着々と進んでいったが困難はまだまだ続いた。先に内定していた国庫融資の件が難しくなってきた。凶作に痛め付けられて来た部落の借入金返済能力に農林中央金庫は疑問を持っていたのである。地元代表者、苫小牧市農業協同組合、苫小牧市当局は再三再四陳情に出向いたが、容易に受理するとは言わなかった。十月、十一月、十二月、組合長は必死に奔走した。

昭和三十二年に入る。

この年一月、工事の正式設計が苫小牧市によって行われ、それに基づいて二月二日に一一社によって入札が行われた。業務は苫小牧市が代行した。その結果、東邦電気工業株式会社が三九六万三、八三一円（各戸屋内線を除く）で落札し苫小牧市農業協同組合との間に正式契約が交された。この工事に対する市条令による助成金は一〇八万四、七三〇円、学校関係の受益者分担金として市費二六万円支出が決定した。

これで準備は完了した。あとは着工を待つばかりのように見えた。しかし、難関はまだ続いていた。

部落——樽前電気利用組合では、組合員の一時支出金の負担を出来るだけ軽くするために建柱の人夫作業を組合員で請負うように業者と契約していた。しかし、時期が悪かった。工事が二月から三月にかかっていた。積雪の少ないこの地方である。地面は厚くコンクリートのように凍っていた。人力では至難の作業であった。折から救農土木事業が重なっていて、これも年度内に完了しなければならなかった。作業の遅延は工事の契約期間内完成を不可能にし

責任問題に発展する可能性があつて憂慮された。

こういう困難に直面していた時期に現れたのが自衛隊であつた。

陸上自衛隊北部方面隊通信大隊が樽前に演習に來たのは二月の初旬であつた。旧中学校々舎が宿舍に貸与された。この時、たまたま彼等の目についたのが校庭の一隅に積まれていた電柱材であつた。電気工事は通信隊の専門分野であつた。「あれは何ですか。」そういう質問から電気工事のこと、冷害凶作の苦境が語られ、それが上司に伝えられて協力の内意となつた。早速正式の陳情があり、隊は演習として協力することを決定した。

部隊が建柱工事のために現地に到着したのは三月一日、翌二日から三日間で完了するはずであつた。

しかし、この工事は予想をこえる難工事であつた。厚く凍結した火山灰の地面は機械力をも容易に受けつけなかつた。穿孔車のドリルはたちまち摩滅して破砕式の車両に取りかえなければならなかつた。自衛隊新聞「朝雲」はこの工事について次のように伝えている。

『作業隊長鬼木二佐以下一六〇名が現地入りしたのは三月二日だつた。工事現場は勇払原野特有の火山灰で、雪は少ないが吹きつける雪風は可成りきびしく（中略）、その上、地表面から二尺（約六〇センチメートル）くらいはコンクリートのようにかちかちに凍結しており、加えて地中至る所に木株や岩石があつて工事は困難をきわめた——』

（『朝雲』 昭和三十一年 自衛隊新聞）

こうして、工事日程はさらに三日間延長しなければならなかつた。

苦労に苦労を重ね、障害を一つ一つ踏みこえて來たこの工事も、遂に難関を脱した。別々の奥から部落のすみずみまで見事に電柱の立並んでゐる様子を見て、視察に來た市の理事者は「どんな金持ちでも、ここまでは電気は引けない。」と感嘆したのであつた。



電気のついた樽前部落（昭和32年）

〔苫小牧市史編さん室蔵〕

その後の工事は順調であった。四月五日、札幌の通産局の検定をおえ、翌六日には仮検定書が手渡された。

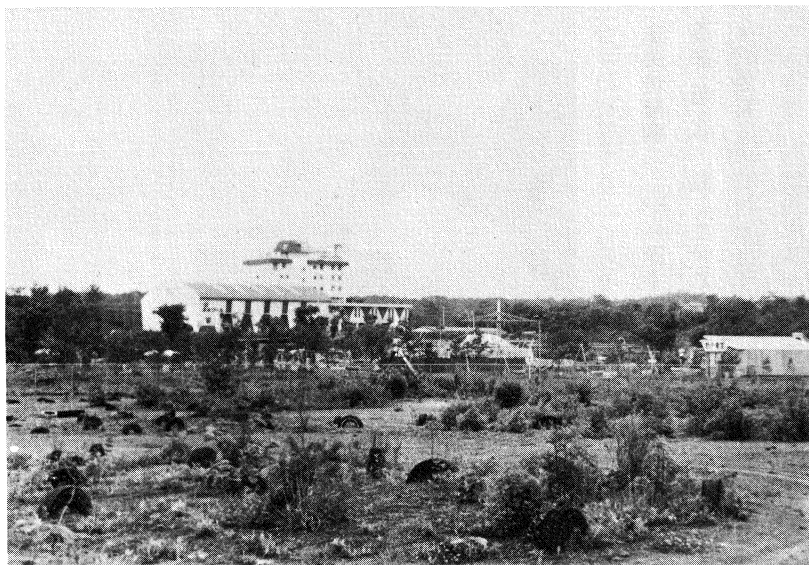
この日、春風に地盤のとけたぬかるみを踏んで、社台の自家用施設分岐点において、関係者立合いのもとに、ささやかながら記念すべき通電式が行われ、高坂組合長の手でスイッチが入られた。

この夜から、多年、無燈火を嘆いて来た部落の各戸には、あかあかと電燈がともった。苫小牧市、苫小牧市農業協同組合の支援もさることながら、たびたびの凶作にもめげず、約六カ年の悪戦苦闘を乗り越えて、樽前は遂に自力でこの困難な事業を達成した。それは、樽前の歴史を画する大事業であったのである。

それから十四年、樽前電気利用組合は順調に経営され、昭和四十六年末には需要戸数一一八戸、使用電力二三四、三キロワットに増加したので、同四十七年一月十九日、一、四三六万三、〇〇〇円をもって北海道電力株式会社を買収するところとなって現在に及んでいる。

道央佐藤病 院の転入 昭和四十四年、苫小牧東部大規模工業港計画が具体化するにもなつて、佐藤病院の柏原分院も移転しなければならなくなった。そしてその移転先に選ばれたのが当地である。

移転開業は昭和四十五年十二月一日、保有面積二〇万五、三〇〇平方メートル、ベット数二二二床、精神科の専門病院であるが、閉鎖的療法から自然の中の開放療法へと新しい医療の方向を目ざして各棟の施設を整えている。



樽前ハイランド（昭和50年）
〔苫小牧市史編さん室蔵〕

同四十八年一月、この病院には特別養護老人ホーム緑陽園（二〇〇床）が附設された。寝たきり老人を収容している。

レジャー施 樽前は大小さまざまな沼と清流に恵まれ

設の進出 て知る人を引きつけずにはおかない。この自然の景観に着目したのがTBS不動産であった。苫小牧森林組合所有地を買収した同社は、昭和四十五年十一月十五日、ここに一大レジャーセンター「TBS樽前ハイランド」を建設開業した。水と緑を最大限に生かした大規模レジャー施設である。

これと別な行き方をとっているものに森田遊園がある。

森田哲也の経営である。森田の所有地内にある小沼（森田沼）を中心に、市民に静かな憩いの場を提供しようとして造園、昭和四十九年五月一日に公開したものである。

こうして、農村樽前は、更に保養地としても新しい方向を展開してゆくかに見えるのである。

五 教育・文化

樽前小学 苦小牧市立樽前小学校は、大正十一年六月十二日に創始された覚生尋常小学校樽前特別教授場にはじ

校の沿革 まる。

苦小牧の小学校教育は、明治九年の苦小牧仮教育所にはじまっているが、当地方は出稼漁民の漁業地であつて永住人が少なかったから、学校設置の気運はなかなか来なかった。こうして樽前、覚生、錦多峰（錦岡）、小糸魚（糸井）に散在する児童を集めて覚生に小学校―苦小牧小学校覚生分校が設けられたのが明治二十三年であつた。その後、この分校は独立して覚生尋常小学校となつた。

明治の末年から大正年代にかけての樽前は、農家の移住に加えて林業もおこつて児童数が増加したので、大正十一年六月、民家を借りて地元で教育出来るように改められた。これが覚生尋常小学校所屬の樽前特別教授場であつた。学校沿革誌ではこの間の事情を次のように記録している。

「本村ハ活火山樽前山ノ麓ニ位置シ地層ノ大部分ハ火山灰ヲ以テ形成セルガ故ニ、産業方面ノ發達遅々トシテ振ハズ、ワズカニ沿岸ニ於テ漁ル者アルニ過ギズシテ、コノ地ニ永住ヲ志ス者少ナク、為ニ戸數ワズカ、從テ就學兒童ノ如キモ數名ヲ算スルニ過ギザレバ學校ノ設置ナク、依ツテ從來ハ隣村ナル覚生尋常小学校若クハ社台尋常小学校ニ通學ナシ居リシ処、近年ニ至リ漸ク此ノ地ニ住居シテ土地ノ改良ヲ計リ農耕ニ従事スルモノ、將又製炭業ニ従事スルモノ、日ヲ追ツテ其ノ數ヲ加ヘ、就業兒童ノ如キモ自然之ニツレテ増加シ參拾余名ヲ數フルニ至リタレ共、如何セン通學距離ノ遠キタメ、幼學年兒童ノ兎角欠席勝ナルタメ、義務教育ノ趣旨ニモ反スルコト大ナルヲ以テ、茲ニ一時ボンタルマイ川ノ下流沿岸国道ノ北方ニ在ル和美加一氏ノ所有ニカカル四間ニ二間ノ堀立小屋（柵屋根）ヲ借り受ケ修理ヲ加ヘテ、覚生尋常小学校ニ在學中ノ兒童參拾八名ヲ收容シ、大正十一年六月十二日ヨリ覚生尋常小学校所屬

樽前特別教授場トシテ開校スルコトナレリ。宇高准訓導コレガ教授ノ任ニアタリ、宇高登美代用教員トシテ裁縫教授ノ任ニアタル。改造及開校祝賀会費計九拾五円八拾参銭ヲ要セリ。」

『学校沿革誌』樽前小学校

樽前の児童が地元の学校に通学するようになると、覚生小学校の児童はほとんど錦多峰からの通学生になったので校名を錦多峰尋常小学校と改称することになり、樽前特別教授場もそれにともなつて、錦多峰尋常小学校樽前特別教授場と改められた。ついで、錦多峰小学校は同十月、錦多峰に校舎を新築移転、旧校舎が不用になったので、その解体材をもつて樽前特別教授場が建設されたのである。

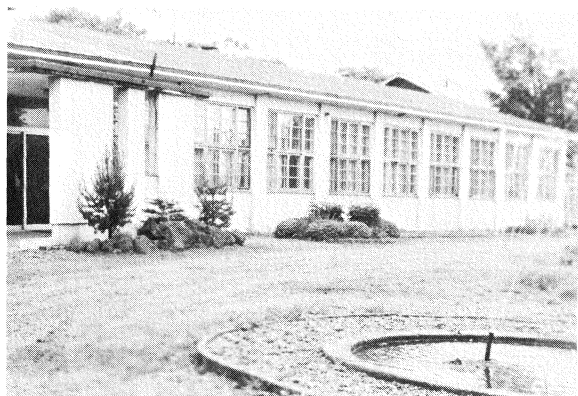
「大正拾老年拾月四日、覚生尋常小学校々舎新築落成ニツキ、従来ノ校舎不要トナリタレバ、樽前村民ニ於テ之ヲ移転改築シ、以テ樽前校舎に充ツベク管理者ノ諒解ヲ得テ、大正拾老年拾月参拾日、左記平面図ノ如キ改築ノ上棟ヲ了シ、同年拾壹月貳拾日全部落成セルヲ以テ、同月貳拾五日児童職員移転シ、翌拾貳月八日之ノ落成式ヲ挙行セリ。」

『小学校沿革誌』樽前小学校

本校は、その後校舎を増築したが、昭和六年以降開拓入地によつて児童数が急増したので、同九年四月一日、苦小牧町立樽前小学校として独立した。

やがて、日本は戦争時代に入つていく。国民学校令が施行されて、同十六年四月一日、校名は樽前国民学校と改められ、尋常科は初等科と改称された。

従来、高等科に進学を希望する者は他校に通わなければならなかったが、同十八年四月一日から国民学校に併置されたので教室の増築が必要になり、そのために校舎の位置を変更することになった。移動工事は部落総出の労力奉仕によつて行われた。この工事は同年九月に終了した。ついで、職員室（十月）、玄関（十一月）が出来、教室が完成した



樽前小学校（昭和50年）
〔苫小牧市史編さん室蔵〕

のが十二月であったが、これに先立ってグランドの拡張も行われた。これは児童の手によって行われ七月に完成した。

これより先、青年の教育機関として同七年四月一日、青年訓練所が小学校に付設されたが、これは同十年三月三十一日に廃止になって翌四月一日から農業青年学校にかわった。

戦時中の農村の学校経営は、市街地の学校とはまた異なった姿を持っていた。本校の卒業生柳原勇はその思い出を次のように書いている。

「戦争は激烈を極め、銃後の守りは家庭に残る老幼男女によることを余儀なくされてまいりました。国民経済も日増しに苦しく、食糧難に直面してまいりました。馬鈴薯や南瓜が主食になったのもこの時からでした。農家の担い手は戦場に相つぎ出征、食糧増産の要請は農家にとって大変な重荷でした。この頃の学童も農家にとって重要な存在として援農にかり立てられたのでした。」

（『学校沿革誌』 樽前小学校）

昭和二十年八月、戦争が終わると日本は連合軍総司令部の占領下におかれ、教育は戦時教育体制の停止とその切りかえ、不適当な内容の削除と修身、歴史、地理の授業停止が指令された。教育は混乱のうちに新学制が実施され、それに基づいて同三十二年四月一日から校名が変更された。国民学校は再び小学校と改められ、ついで高等科は廃止されて義務制の中学校に移行して行ったのである。

その後の小学校は順調に推移して来たといっている。

校舎が老朽化したので同三十年には鉄筋構造の近代的校舎に改築され、同三十二年には電気点燈が実現して教育条件が整備された。学級編成基準の改正にともなうて学級は増加し、同三十九年には六学級編成となり、学級増加にともなうて普通教室、特別教室もまた増築された。

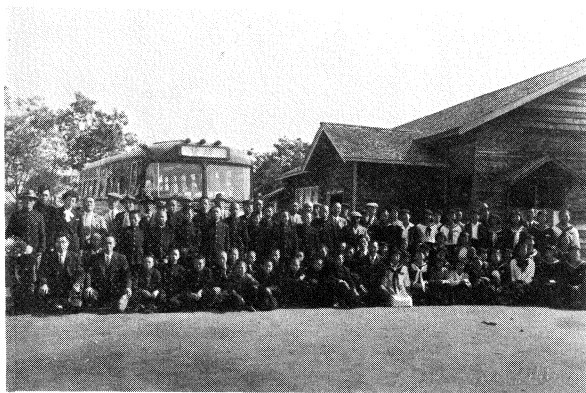
しかし、こういう状態は長くは続かなかつた。地域社会は変化していた。人口の流出があり、新しい企業が進出しても従業員には通勤が多くなつた。こうして、在席児童は減少し学級数も遞減して現在に至っている。

樽前中学 樽前中学校のはじめは、昭和二十二年六月一日、小学校高等科を改編して出発した苦小牧西中学校樽前校の設置 前分校である。

この土地の小学校には初め高等科がなかつたから、希望者は苦小牧小学校高等科に入学した。これらの生徒は苦小牧に借家を借りて自炊したのである。この不便も昭和十八年、樽前国民学校に高等科が併置されてから解消した。これが戦前の推移の概要である。

戦後、学制が改革された。義務教育は小学校六カ年、中学校三カ年計九カ年に改められて、苦小牧には東中学校、西中学校の二校が新設された。自然、小学校高等科はこれに転換する形になり、初年度は一年を義務制とし逐次三カ年をもつて完全義務制に移行することになった。こうして樽前小学校高等科は苦小牧町立西中学校樽前分校となり、一学級編成で小学校に間借りする形で同二十二年六月三日、入学式が行われた。翌二十三年四月、苦小牧は市となり、その九月、西中学校は弥生中学校と改称した。

中学校は同二十四年度から三カ年の完全義務制を実施しなければならなかつたが、当時全国各地の市町村はその財源に苦しんでいた。二学年までは高等科時代の教育を何とか充当して間に合わせることも出来たが、三学年まで義務制ということになると収容する教室がなくなる。市当局も一時は、三年生は本校に通学させようかという論が真剣に



樽前中学校（昭和30年）

〔近江謙三蔵〕

話し合われたのである。そこで部落では建築費の一部を負担してでも地元で通学できるようにしたいという強い要望がおこって、小学校々地内に校舎を建てることになった。総額七五万円、うち部落負担二十三万円であった。

新校舎に移転学習するようになったのは同二十四年四月一日からである。二十三年度の一カ年間を全学年が小学校々舎の一教室で不自由をしのいだわけである。

昭和二十六年四月一日、中学校は本校弥生中学校から独立、苫小牧市立樽前中学校となり、同五月二十日には盛大な独立記念式が行われた。

こうして十年の歳月が流れた。教育の進展にともなって、やがて小規模学校の教育効果、財政効果が問題となる時期が来た。樽前中学校は二学級編成になっていたが、こういう小さい学校では教員定数が少なく、教材教具も十分に揃えることは出来ない。他の学校と併合して相当規模の学校にする必要があるという考え方である。こうして、本校は同三十一年九月三十日をもって十年の歴史を閉じ、翌十月一日、錦岡中学校と併合、凌雲中学校として新しいスタートについたのである。

青年団 樽前に文化活動の芽がふき出したのは終戦直後であった。それは豊栄青年団の結成を最初として奔流の活動 ように動き出した。

青年団活動のはじめは大正五年の樽前青年会である。昭和八年、青年訓練所が設立されるにともなって青年団は再



樽前豊栄青年団（昭和25年）

〔苫小牧市史編さん室蔵〕

構成され、同十五年には大日本青年団が出来て全国一本に統轄されたが、戦時色に駆り立てられたために郷土に立脚した青年の動きとしては見るべきもののなかった。

樽前豊栄青年団は、終戦直後の二十年十一月に結成された。当時のいきさつを水口俣一は次のように書いている。

「昭和二十年八月、突如として敗戦、終戦を迎えました。――復員した時は、かわす言葉もなく、職場を失い家をなくした多くの復員軍人。子や夫を戦野にさらした無情の嵐は遺族の前に吹きつけていたのです。この時、若者同志、心をよせ合うように集まって来たのが豊栄青年団結成の動機であったと思います。この寒村にも八〇余名の男女団員を擁し、励ましの場として、憩いの場として、教養の場として若者の欲求がすべてここで満たされた感じがいたします。」

（『学校沿革誌』 樽前小学校）

この青年の動きに方向を与えたのが当時の小学校長浦島満寿夫であり、仲間の動力の中心となったのが佐々木孝一であった。豊栄青年団は意欲的であった。それが苫小牧連合青年団結成にまで進み、ついで、北海道青年団体協議会に役員を送り出すようになった。

社会学級 樽前社会学級の最初は同二十二年五月三日、樽前小学校に開設した公民学級である。やがて社会教育の活動法の施行にともなうて同校の母親学級や青年団の教養講座を吸収して同二十四年度から社会学級として再発足、その間同二十七年度には文部省の研究委嘱学級ともなっている。

樽前社会学級は、他の部落内諸団体——部落会、父母と先生の会、婦人会、青年団と一体となってそれぞれの研修部門を協力し合い、各団体から選出された委員によって運営されている。

樽前の場合、社会学級は単なる学級生の教養機関ではない。その役員構成に見られるように、部落内のあらゆる社会教育団体と協力し、全部落民の文化教養活動の中心となつて活動しているところに特徴があるのである。

その他の 樽前小学校父母と先生の会は、昭和二十二年七月二十二日、小・中学校父母と先生の会として創立され、団体活動された。中学校々舎の設立問題から、荒廃した小学校々舎補修問題、教員住宅充実問題等多くの問題の解決にあたるとともに、労をおしまず学校に協力することを通じて、父母住民の和をつくり教育を理解する道を歩んで来た。同三十五年、本会は社会教育優良団体として苦小牧市の表彰を受けた。

このほか、婦人会、若妻会が組織されて活動している。

六 宗 教

樽前の宗

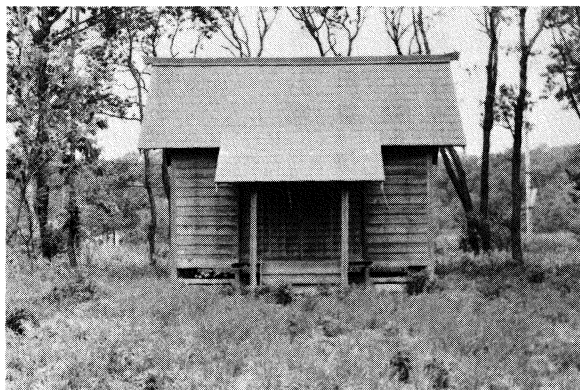
樽前の神社、寺院のはじまりはよくわからない。松浦武四郎の東蝦夷日誌によれば「其己前、慈寛大

教沿革

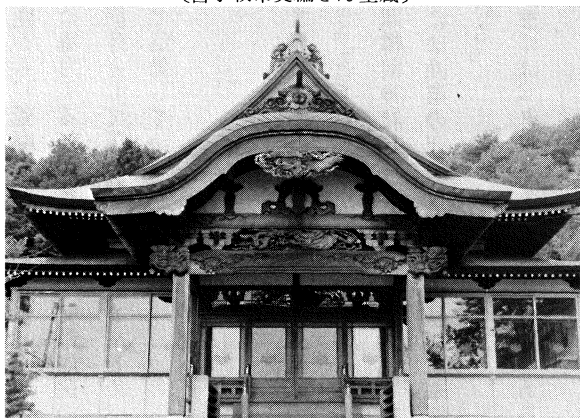
師の建立の堂も有しと言傳う。」とある。彼の調査に來た時には「垂舞山の拝殿有。本尊は円空鉦作の觀

音有」と記している。この本尊は現在錦岡樽前神社に移されたものである。苦小牧町史は「寛文又は文化年間に樽前山麓に移され、その後覚生、錦多峰、時には漁業の守護神として勇払にも奉祀された事があるが、現在では錦多峰の樽前神社に安置されてある。」と記している。

明治三年五月の太政官、高知藩の引継書には、「タルマイ 権現社有」とある。



樽前神社（昭和48年）
〔苫小牧市史編さん室蔵〕



樽前山観音寺（昭和50年）
〔苫小牧市史編さん室蔵〕

樽前 樽前神社は、もと神社 覚生にあったものの別れといわれ、遙拝所として樽前に建立されたのが明治三十七年、樽前神社として独立したのが大正七年といわれている。これについて此内平吉は次のように語っている。

これが樽前に移ったのが明治三十七年なんだが、その時の様子がわからない訳だ。——その神様だが、三十七年に持つて来た時の御幣があつてね、「遙拝所」

と書いてあるんだ。——そして、大正七年に改築した時に白老八幡宮の宮司の鈴木健治という神主が神様の名前を書いてくれた。

この神社が今の位置に移ったのは昭和四十年九月十八日である。

樽前山 宗教法人樽前山観音寺が樽前に移つて来たのは、昭和三十八年春である。代表役員郡司英徳は先に市内

観音寺 字中野に修養道場をひらき、かたわら社会福祉に貢献して来たが、港の掘り込みと共に同地が不適当にな

（『樽前の歴史を聞く』 昭和五十年 機関誌苫小牧市史編さんNo.9）

つたために新たに樽前の地を卜して道場を開山したのである。総敷地面積約三万平方メートル、総本堂のほか、六角堂、護摩堂、おこもり堂、鐘楼堂、三三観音巡拝道場を有し、四時有缘の信者の参詣がたえない。

七 産 業

樽前の 樽前がその昔、領主の直領または家臣の知行地であったことは先に述べた。そこでは、蝦夷地の他の場

漁業 所と同じように、アイヌによって川にそ上して来るサケが捕獲され交易品に使われていたであろう。

寛政十一年（一七九九）この地は幕府の直轄のもとに勇払場所の中に編入され、従ってアイヌのとする産物の交易も勇払会所の管轄下に入った。

文化十年（一八二三）、幕府の場所直捌制は廃止されて場所請負制が復活、文政四年（一八二二）には蝦夷地は松前藩に返されるが、この間の現地の様子を伝える記録はほとんどない。ただ、この間にこの地方のイワシ漁が開発されて次第に盛大になっていったことは注目すべきことであった。苫小牧沿岸の漁業は一言に言えばイワシにはじまってイワシに終わるのだが、イワシ漁はその盛期にはこの地方の代表的漁場として活況を呈したのであった。

江戸中期以降、作物の栽培には金肥が不可欠であったが、その製産の中心は九十九里浜の干イワシであり、需要の伸びに従って蝦夷地のニシン粕が注目された。幕末に至って同浜のイワシ漁が減退すると、その補充は蝦夷地に求められ、苫小牧沿岸のイワシ漁業が注目されるようになり、樽前粕の名をもって一躍脚光をあびるようになったのである。

当地方で最初にイワシ漁をはじめた記録は寛政十二年、白老場所アイロに、イワシ油搾取のため、釜三個を据え付けたのにはじまると言われる。前時代に箱館地方におこったものが、この時代に蝦夷地におよんだのである。文化二年の記録によれば、イワシ粕および同油を出す場所は様似、根室、国後、択捉の諸場所であるが、今の胆振、日高の各場所でも

少々ずつ行われていたようで、のちにはむしろこの方面で発達し、中でも勇払場所樽前浜は、文政年代（一八一八—）以来、出稼人が漸次増加してイワシの主産地となった。漁法はイワシのよりしだい引網をもつて漁獲し、メ粕として移出された。天保（一八三〇—）年中、勇払場所の産額は、二、三千石であったが、嘉永六年（一八五三）には八千石に達し、白老、沙流、新冠、静内、浦河、様似の諸場所の各数百石に比べて傑出していた。この中心が樽前浜（苦小牧沿岸）樽前であったのである。こうして、安政六年（一八五九）には樽前粕は上等品として名声を得て一段と発展し、樽前浜の東部（マコマイ、ユウフツ）は請負人が直営し、西部（トマコマイ、コイトイ、ニシタツプ、オボツプ、タルマエ）は出稼人漁業渡世と称する出稼自営漁民に解放して漁が行われ、桑や綿の木の肥料として箱館商人をへて、関東、中部、関西方面に送られていたのである。

松浦武四郎の「東蝦夷日誌」の記事は前に引用しているので、ここには、弘化二年（八四五）の記録を「初航蝦夷日誌」から転載して見る。

「タルマイ（中略）箱館より二八取多く出来り居て鰯小屋多きが故に、小商人並に茶屋様之ものも出張、其繁華なることは東部第一番也。其式八と云割方は漁獵のもの二分は運上屋請負人に納（おさめ）、八分を我が納とする也。然し此式分の運上は上（かみ）え納るにはあらず、皆請負人の収納となる也。其故に此場所請負人は只此二八の運上に而漁事一切無と而も利の有る場所とかや。又西部ヲタルナイ等もこ、と同じ事に而、二八にて自分漁は無とても宜しき由也。」

（松浦武四郎『初航蝦夷日誌』弘化二年）

この漁場借り出稼漁は、ずっと後までこの地方の漁業の特異形態としてつづくので、この記録をもう少し続けて見よう。

「此二八取の若干なることを云ば、鰯取中間と申もの有て、箱館市中より同在に五十三軒有とかや。此株、また今ふやすこともな

りがたく、先年より右の通りに有るとかや。其老軒に而も大なるに到ては八十人百人づつも漁者を南部、津軽辺に雇入ること。小きといえども二十人、三十人位づつ雇入る。六尺釜而煮干粕と致し運送すること仲々筆状しやすきにあらず。」

（松浦武四郎『初航蝦夷日誌』弘化二年）

箱館またはその近在の業者が南部、津軽方面の漁民を雇い、場所請負人の漁場を借りて漁場に出稼ぎしていたことが知られる。

この当時、後期松前藩領時代の場所請負人は山田文右衛門であった（途中、一時、山田寿兵衛）。明治に入って、開拓使は場所請負制を廃止したが、それは漁場持制度として残り、同九年にこの制度が廃止され出願者に出漁が許可されるようになったが、この地方は以前から出稼業者によって操業が行われて来たから特に変化はなかったのである。

明治四年の樽前浜出稼人、永住人イワシ漁業者一覧表によると、タルマエからトマコマイまでの漁業者は出稼人一名と永住人一名によって行われているが、当地関係者は次の一名になっている。

区 分		場 所		名		前		本 居 住 地	
出 稼	人	タル	マエ	（興村）	六兵衛	箱	館	大	町

（堀江敏夫『樽前浜のイワシ漁業①』昭和四十九年 機関誌苫小牧市史編さんNo.8）

明治五年五月には府県割渡し制度が廃止になって、樽前浜は開拓使に引き継がれるが、この年、樽前浜に入った漁業者一四名のうち、当地関係者は次の二名であった。

区分		場所		名前		本居地	
出稼	人	タル	マエ	興村	六兵衛	函館	大町
〃	〃			白鳥	宇兵衛	〃	内澗町

(堀江敏夫『樽前浜のイワシ漁業①』昭和四十九年 機関誌苫小牧市史編さんNo.8)

出稼渡世人は、南部、函館地方の出稼漁夫を使っていたが、漁夫などは三〇名から四五名程度と規模は小さいが、支配方、船頭、帳場、賄役、大工、漁夫などの職制があつて、賃金は一漁期単位の支給であつた。

イワシ漁は春と秋の短期間の勝負であつたが、その後のメ粕製造、魚油製造などの作業もあつて、人手を最も多く必要とし、相当の仕込みが必要であつたから、出稼漁業渡世はすべて函館商人ないしはこれらと密接な関係のある者であつた。白鳥宇兵衛は有珠郡漁場持で函館のイワシ漁株仲間問屋のそうそうたるもので、その外のもも、それに準ずる者が少なくなつたのである。

しかし、このころから樽前浜のイワシ漁は危機に入つて来る。薄漁が重なつたうえに、開拓使の取締り、米増をはじめ諸品の高騰によつて漁民の営業は不利になつて来るのである。

開拓使は自営漁民育成策をとつたが、その最も大きな政策の一つに、明治十年十二月に制定した「北海道地券条例」があげられる。これによつて漁業関係では河岸、海岸などの海産干場はすべて官有地として、漁業者に貸地許可をしたが、勇払郡海産干場所有一覧表によると当地関係者は次のようになってゐる。

住所氏名	場所	地券授与年月日	坪数	地価
函館地蔵町 樋口 与四郎	樽前村 イワシ漁場	明治 一三・三・二	二、四九〇坪	一六六、〇〇、〇厘
樽前村 水島彦右衛門	覚生村 〃	明治 一八・一〇・二三	五〇〇	

（堀江敏夫『樽前浜のイワシ漁業①』昭和四十九年 機関誌苫小牧市史編さんNo.8）

海産干場の地券所有は事実上の漁場所有を意味し、その占有利用権を得るものであったが、これによると、明治十八年にはじめて樽前村永住人漁業者として水島彦右衛門が出て来るのである。

水島のあとに進出して来るのが飯田信三で、明治二十一年には覚生村に海産干場の貸下げを受けているから、この時期から樽前浜イワシ漁業に進出したものと思われる。樽前村に進出したのは同二十五年になる。

村名	場所	地目	氏名	貸下月日
樽前村	別々	干場	飯田信三	明治二五・一二・二六
〃	〃	畑地	〃	〃

（堀江敏夫『樽前浜のイワシ漁業②』昭和五十年 機関誌苫小牧市史編さんNo.9）

こうして彼は、その初期には樽前、覚生地区を、後期には勇払、苫小牧、小糸魚、錦多峰と全般的に漁場を拡張し明治三十五年にはイワシ地引網漁業において二三権、サケ定置漁業において三権の漁業権を得て、石垣彦三郎とともに樽前浜の二大漁業家となった。

樽前浜の漁業の危機は明治初年にすでにあらわれてきたが、同二十年代は比較的定安したものであった。それが三十年代に入ると大きな変化を見せて来た。樽前浜の漁業の大半はイワシ漁であり、この地方に入る漁業者はそれを目的とする出稼業者であったことはたびたび触れて来たが、そのイワシ漁が明治三十二年の大漁（八、七八〇石）を最高に、年々はげしい豊漁不漁の差があつて、七、〇〇〇石を超えることは何年に一度という状態であつたが、このころから苦小牧地元の漁業家が、ようやく目につくようになって来るが、樽前村は飯田信三に握られていた。

このころの漁業の特徴は、特定の漁業権者が相当数の漁場を所有し、この一部または全部を他の漁業権を持たない漁業者に他貸しして、漁獲の二割五分を受けるか、現金をうけるかによつて賃借権を設定して行ふものが多かつた。大正二年の当地の他貸状況は次のようになってゐる。

漁業権者	漁場の位置	借受人	期	間	条件
沙流郡門別村 飯田信三	樽前 (畠第一〇七号)	苦小牧村樽前 野村孫次郎	同	大正二・六・一〇 二・八・三〇	この期間の収獲物の二割五分にて
〃	別々 (畠第一〇九号)	白老郡社台村 加藤長八	同	二・六・一〇 二・八・三〇	〃
〃	樽前 (畠第一〇二号)	上磯郡茂別村 吉田仲太郎	同	二・六・二〇 二・八・三〇	〃

（堀江敏夫『苦小牧地方漁業史』昭和五十年 苦小牧市史編さん室）

此内平吉は当時の様子を次のように語つてゐる。

漁師はね、おもに函館の方からやつて来た。樽前の浜は飯田という人が全部やつていたからね。

春先、五月ころに先発隊が汽車でやつてくるわけさ。そして準備して、こんどは本隊が船で——帆をかけて——人から荷物から食



樽前の漁場風景（昭和50年）
〔苫小牧市史編さん室蔵〕

糶から全部積んでやってくるわけさ。そして漁をすませて七月下旬ころ帰ってゆく。とるものというといワシさ。地元の漁師というのはいなかったね。

（『樽前の歴史を聞く』昭和五十年 機関誌苫小牧市史編さんNo.9）

ここに見られるように、幕藩時代以来発達した場所請負制度は、明治二年に一応解体を見たとはいえ、その後は有力な特定漁業家が広大な沿岸漁場を占有して来た。終戦を迎えて、連合軍総司令部の強力な指導のもとに農地改革が断行されたように、漁場所有制度も旧制度に代わるべき新しい漁業制度が必要とされた。

こうした中で、漁業権をすべての生産漁民共有とする民主的な制度を内容の中心として、新漁業法が昭和二十四年十一月二十九日、第六回国会で成立し、同年十二月十五日、法律第二六七号をもって公布された。これによつて苫小牧沿岸の漁業権も苫小牧漁業協同組合が所有することになり、樽前の漁業家もその組合員としてその共同漁業権によつて操業出来ることになり別々川川口に集落をつくつたが、大きく発展することはなかった。

苫小牧東部大規模工業団地造成計画にもなう苫小牧東港問題が起こると、苫小牧沿岸はもとより、胆振、日高の操業に影響を受けるところから関係漁業協同組合と、その補償について協定交渉が行われている。こうして、樽前の漁業は、今や大転換の時期に遭遇しているのである。

樽前の 現在の樽前の産業の中心は農業である。しかし、その発生は古いことではない。

農業 この土地の開発が漁業にはじまった。そのうちにわずかに定住者が出て来た。それは漁期外の漁具の管理をする番人であつたかも知れない。また、漁期の日雇労務を主とする者であつたかも知れない。この人達は自分の家のまわりに畑を作った。これが樽前の農業のはじまりと思われる。明治五年の「勇払駅取付調」に、当時の耕作反別を記している。当地関係分を抜き書きしてみよう。

一、畑 一反七畝二歩

タルマイ村第一番屋敷居住 池田 菊松

一、畑 二反五畝五歩

タルマイ村第二番屋敷居住 永山 市之助

一、畑 二畝二歩七厘

タルマイ村第三番屋敷居住 竹花 小藤治

(『苦小牧町史』昭和十五年 苦小牧町)

明治十一年の「札幌本庁管下各郡村ニ於テノ耕産ノ收穫表」中の関係分を見ると、当地の耕作物の大要が推察出来る。

村名	播種反別	品目	收穫高	品目	收穫高	品目	收穫高
樽前	町・〇・〇六・一三	虹豆	三〇合	馬鈴薯	一三三〇合	蘿蔔	一、一〇〇〇本
						葱	二、〇〇〇〇把

(『苦小牧町史』昭和十五年 苦小牧町)

明治十七年の戸口調べによると、農漁一戸である。

（初期の農業）

樽前に農家が定着し出したのは明治二十八年ころからと考えられる。此内平吉談話を引用して見よう。

私は明治三十四年の春に来て、家の爺さんは内地（本州）で木引（杣夫）をやっていたし、そんなわけでマツチ工場に入ったわけさ。そこに二年位いて、大体、国坂（茂平）さんを頼って来たんだから、その家のそばにうつった。池田（理兵衛）さんが来たのとそう違わなかったらしいよ。今、八五になる人が六つで来たというんだから。明治二十三年生まれだ。数え年だがね。国坂茂平さんが先にここに来て、いい所があるから来ないかということでも来たらしいんだね。

（『樽前の歴史を聞く』 昭和五十年 機関誌苦小牧市史編さん No. 9）

ここに出てくる八五になる人というのは加藤フサ（旧姓池田）である。

もともと、この地方は農業適地とは言えなかった。国道沿線は乾燥地であつたが、それから奥、山側は湿地であつた。このわずかな乾燥地も火山灰地で一面にハンやカバの林であつた。当時の開墾の苦労を池田兵次郎は次のように語っている。

生い茂る雑木の伐採や火山灰の少ない土地を選びながら開墾がはじまつた。当時は全部あわせて畑が二・三ヘクタール、やっと開いた畑には大豆や小豆を植えたが、なにせ火山灰の多い畑、ろくなものかとれるはずがない。くる年もくる年も実の入らない大豆や小豆をみつめて途方に暮れた。当時、一俵が三円四十銭だった内地米も買うことが出来ず、イモやカボチャばかり食べて過ごしたことも珍しくなかった。

（『大地に生きる』 昭和四十三年 苦小牧民報による）

当時は、北海道開拓の奨励策があつて土地は無償で入手出来たが農法は素朴なものであつた。それだけに農家も農

業だけでは生活がなり立たなかったようである。大正、昭和の時代にかけて、農家も馬車追い、漁業の手伝い、出稼ぎといった仕事をしていたのである。再び此内平吉談話を引用しよう。

農業と言ったってね。当時の農業って土地は無償交付だったから、まず出願して、ここからここまでと決まるでしょう。昔のことだから、道具と言っても鋤でおこすしかない。唐鋤一つで、とても何町歩って土地は開けないから、大体七分通り開くと払い下げてくれる。そんな農業でも私の子どものころは、私は大正三年の卒業（小学校）なんだが、そのころだったら随分出来ましたよ。主作物は小豆、燕麦、大豆、それにトウキビだね。農家といってもね、みんな半農半漁だね。漁があれば浜（漁場）に手伝いに行つたんだから。漁があると、頼む頼むと言つて来られたものだ。行けば賃金がいいでしょう。みんな、子どもの果てまで引っぱって行つたもんですよ。

（『樽前の歴史を聞く』昭和五十年 機関誌苫小牧市史編さんNo.9）

こういう状態だったから、農家の戸数が目立って増えるということもなかった。大正十二年の樽前納税組合名簿を見ると、その戸数中第一は製炭業関係（二八戸）ついで造材、公務員などで、農業は約一〇戸程度に止まっている。

（民有未墾地の入植）

樽前が農業地として変ぼうするのは昭和六年以降の民有未墾地入植以来である。

この民有未墾地は、元樽前共同牧場として国坂方円等二〇名の組合が払い下げを受けた土地であつたが、のちに佐々木治助、中嶋誠次、国坂方円の手をへて北海道庁に買収され、水田用地として六〇戸に分割開放されたものである。その開放状況は次のようになっている。

年 度	昭和六年	七年	八年	九年	以後同 一二年 まで	計

戸数	三二	九	六	一	一三	六〇
----	----	---	---	---	----	----

〔室蘭毎日新聞切り抜き〕 昭和十二年

その面積は此内平吉によれば次のようになる。

樽前牧場（六三二町ながし）の外に国坂さんの土地が一〇八町あった。それを合せて開放したわけさ。

〔樽前の歴史を聞く〕 昭和五十年 機関誌 苫小牧市史編さん No. 9

このほかに、昭和八年には通称元廣川牧場三七〇町歩を一四戸に分割、酪農地として開放しているから、農家戸数として一挙に七四戸の激増を見樽前は農業地としての実質を持つようになるのである。

しかし、戸数においてこのように増加したこの開墾地も、その開墾は容易なことではなかったのである。それは未開の湿地帯、灌木地帯であった。しかも不運にもその年は冷害凶作に見舞われた。開墾は挫折するかと思われた。この危機を乳牛の導入によって切り抜けたのである。それが今日の酪農の基になった。

昭和四年九月、厚真村高坂永松外一二名は開放地を視察して土地の分割を出願、同六年三月から漸次入地して来た。その大半は道内出身者だったが、愛媛県外本州方面の出身者も含まれていた。

開墾は同年五月からはじまった。湿地と灌木が多く、排水と抜根にあら



樽前の農家（昭和28年）
〔苫小牧市史編さん室蔵〕

ゆる辛苦をなめた。初年度には田畑一三〇町歩、次年度には八七町歩、三年度は一〇三町歩、四年度には七〇余町歩こうしてわずか四カ年間に三九〇余町歩の田畑をつくり上げて、全道自力更生展覧会において表彰される実績をあげたのである。

昭和三十年十二月十一日、入植二十五周年物故者慰霊祭が行われた。この時、高坂永松は往時を振り返って次のように語っている。

昭和六年四〇戸が入植したのを手はじめに、同八年には七三戸となった。この大半は道内出身だったが、愛媛県六戸、石川、宮城山形、兵庫県各一名が含まれ、株屋の親方や魚屋など、その前身は雑多だった。入地したその日から、馴れぬ手にクワを持って荒地にいどまなければならなかった。道路はない、排水溝もない。一帯はヒザまで水びたしになる湿地帯だった。

開拓小屋を建てた。夫婦たちは汗みどろになって湿地帯に取り組んだ。しかし、その年は収穫は皆無、六〇年来の大凶作に見舞われた年だった。持って来た金は初年度の営農資金と生活資金につきこんでしまった。今のようにあれやこれやという補助や融資がない。わずかに四割の（農林省）開墾補助のみが政府の助成策だったのである。入植一年にして来春の生産資金などおよびもつかなかった。落後者が続出しそうだった。だが、初志貫徹の決意を持った人々がリーダーとなり、互いに食糧を分け合い助け合った。団結の尊さを知った。

翌昭和七年、前年の冷害凶作に苦しんだ人々に朗報がもたらされた。『ただクワをふるって未開の湿地帯にいどんでも人力には限りがある。勇払原野の農業はやはり酪農で行くべきだ。その資金を融通してやろう。』という協力者があらわれた。国坂方円、加藤良平、川村勘三郎の三氏であった。一千円の資金を出してもらった。当時としては大金であった。これによって、同年野幌、江別の酪農地帯から牛二四頭、馬四頭を導入、翌八年にはさらに牛六頭を導入した。これが現在の樽前の酪農の基礎になった。

不安な医療問題で忘れることの出来ないのは、当時、苦小牧町表町に病院を開業していた医師野口孝太郎氏である。一切の医薬代

を無料にしてくれたほか、一〇名の開拓者の身元保証人を引き受け、十三年には拓殖診療所を開設して初代所長になって、辺地住民の保健衛生に尽力した。また、錦多峰小学校樽前特別教授場の教員であつた金頼助氏は、大雨で水が沢から押し出して道路が決壊した時、全生徒を背負つて救出してくれた。

これらの五氏は、すでに故人となつてゐるが、当部落の開拓の恩人として今も尊敬している。

〔高坂永松氏の記録〕 昭和三十年 近江謙三蔵

（有畜農業の導入）

地力の低い火山灰地と気候不順による冷害水害をくり返して来た樽前は、大規模の地力培養事業、耕土改良事業が行われなければ、畑作地帯として経営することには無理があつた。昭和六年の民有未墾地入植者が、いちはやく有畜農業を取り入れたのは賢明であつた。

樽前の乳牛導入は伊藤仙太郎にはじまる。此内平吉談話を引用しよう。

民有未墾の方で牛を入れる一寸前に伊藤（仙太郎）さんが入れた。今野（勇吉）さんが室蘭の方のユートピアとかいう所から三匹だつたかい牛を買つて来て伊藤さんにあげたわけさ。そこで伊藤さんは乳をしぼりはじめた。ところが、その乳の持つて行き場がないでしょう。苦小牧の中野まで自転車で行つたものさ。その次が民有未墾の開拓の時――。

〔『樽前の歴史を聞く』 昭和五十年 機関誌苦小牧市史編さんNo.9〕

こうして民有未墾地開拓者によつて乳牛が導入されてから、それは、次々と普及されていった。しかし、樽前地区は農家の保有面積が少ない。乳牛の増加を願つても放牧地が少ない。これが対策としてとられたのが、昭和二十三年に設けられた市営樽前放牧場である。

一方、資力のない者の救済策もとられた。親牛を借りて子牛で返すという方法である。これが昭和二十六年制定の

市有貸付家畜制度である。こうした対策によって有畜経営は末端まで普及していった。

こうして、戦後の食糧増産政策は有畜経営時代ともなって、昭和二十年には七〇頭程度になっていた乳牛が、同三十年には一〇八頭、同三十四年には待望の二〇〇頭になって二〇〇頭祭が行われたが、四十年には遂に二五〇頭に達した。

樽前の農業経営はまた、苫小牧市の農業経営の典型である。苫小牧市の農業振興方針を見るとそれがよくわかる。次に昭和三十一年度のそれをあげてみよう。

一、耕土培養事業

一、有畜経営の確立

・乳牛導入増殖

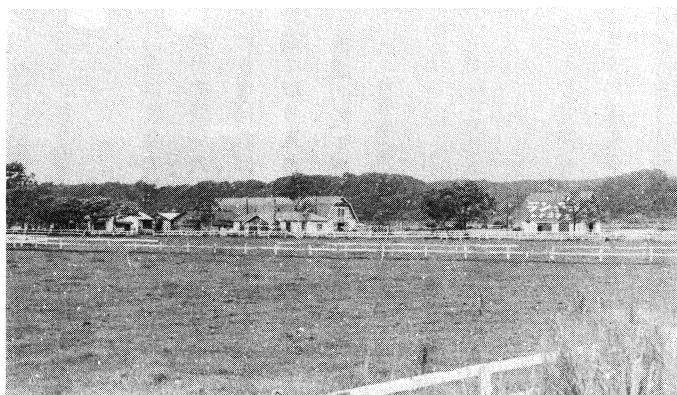
・草地改良

融資七〇パーセント、自己資金三〇パーセント

・酪農経営付帯施設の整備拡充

融資による畜舎、サイロ、堆肥舎の建設促進

(「市勢要覧」昭和三十一年 苫小牧市)



樽前牧場（昭和45年）
〔苫小牧市史編さん室蔵〕

樽前に有畜経営——酪農が取り入れられたいきさつは前述のとおりだが、生産力のない貧困なこの土地には、見逃せない特殊な経済上の事情があったと思われる。伊藤仙太郎の談話にそれを聞いて見よう。

農家とは言っても（経営規模が小さいから）家族がそれぞれにいろいろなことをやっていた。山に行つて働くとか、馬車追いやるとか、出稼ぎするとか、結局、どの家も純然たる専業農家ではなかったわけだ。畑作収入が上がらないから、それも仕方がなかったんだ。それに、第一現金がないでしょう。現金がなければ生活出来ないんだから。日金が入らないでしょう。雑穀をとつたつて秋にならなければ金にならない。以前は年に二回払うとか三回払うとか、暮れに秋の收穫の金で払うとかいうことがあった。ところが時代が移るとそういう風にいかななくなつて来た。それが、牛というものが入つて来てから、案外、出稼ぎがなくなつて来た。毎日牛の世話をしなければならなくなつたし、それに日金も入るようになったし、そういうことなんだ。

（『樽前の牧場について聞く―伊藤仙太郎』昭和四十九年録音 近江謙三蔵）

こうして樽前の有畜農業は定着した。しかし、昨今の農業経営の形態は変わつて来ている。苫小牧東港建設にとまなう東部大規模開発計画によつて、それらの地域の農家が樽前に転入して、養豚、養鶏、肉牛飼育に転じるとか、本格的酪農を志す者は大規模農場を求めて樽前から転出するとかいう現象である。一時数十町歩に及んだ水田も草地その他に転換して今は全く見られない。樽前の農業形態は転換期に来ているかに見えるのである。

（昭和二十五年の大水害）

樽前はたびたび冷水害凶作に遭つて来た。その中でも、最大のものは昭和二十五年の集中豪雨による大水害である。

八月一日午後四時ころから苫小牧地方一帯を襲つた豪雨は、二日午前六時には遂に四七五、八ミリメートルに達し中心地の各道路は水深一メートル前後の川と化し、全戸数の約九〇%、九、〇〇〇戸が浸水、一〇戸が倒壊した。この水害は樽前の農地をも洗い流したのである。堀川満は次のように記録している。

「午後から降り出した雨は次第に強さを増し、やがてバケツをあけるくらいの豪雨となった。夕方になつても一向に勢いはおとろ

えを見せず、雷鳴と稲妻が入り交つてすさまじいかぎりでした。

たしか午後九時ごろだと思えます。家族一同雨脚の強さに驚いている矢先、家の中の畳がむくむくと持ち上げられ、同時にものすごい勢いで濁流が押しよせて来ました。別々川が一挙に氾濫したのです。

稲妻の光を通して見る別々から二群にかけては、一面、満々たる人造湖のようでした。別々川から下へ流れた水は、国鉄室蘭本線にさえぎられて、旧国道は此内さんのところまで完全な大川のようでした。二群の人達は筏や小舟でなければ往来出来ないありさまでした。

この水害は、樽前始まって以来の大水害となり、別々の畑地は約八〇町歩が完全に砂礫と化し、樽前川では樽前橋、更生橋が流出し、山崩れのため第五群の松永さんでは牛馬が圧死するなど悲惨な事故が続出しました。水はその後三日も四日もひかず、一面の泥土の中で目まぐるしい復旧作業が一月もつづきました。特に別々の完全復旧には、えぐられた個所の埋め立てだけでも一冬中かかったようです。」

この年樽前の畑作稲作は壊滅したのである。

〔『樽前小学校沿革誌』 昭和四十七年 樽前小学校〕

（稲作と土地改良区）

苦小牧で本格的に稲作が行われたのは明治二十年代の末期、植苗村勇振であつたと言われる。樽前の元祖については此内平吉のように語っている。

樽前の元祖は苦小牧の古戸さんらしいんだ。別々に古戸の水田の跡というのがあつた。

〔『樽前の歴史を聞く』 昭和五十年 機関誌苦小牧市史編さん No. 9〕

昭和六年に入植した高坂永松外に開放された民有未墾地は、もともと水田適地として開放されたものだが、これが

造田されるまでには相当の年月がかかっている。昭和十年の樽前反別調べによれば、当時造田していたのは四戸、うち民有未墾地関係者（別々川流域）二戸、その他二戸となっている。

水田反別調べ（大正十年末）

場所	流域名	大正十年現在 の反別数	次年度造田 見込の反別	平均收穫高	所有者	備考
樽前村 別々	別々川	一二反	三反	一〇斗	前川専作	
同	同	一二	三	一二	瀬田川富吉	
樽前村 タルマエ	無名沼	七	二〇	四	国坂方円	新田にして播種期の遅れによる
同	タルマエ川	五	一〇	七	松本松太郎	播種期の遅れによる

（『苫小牧町産業指導方針』 苫小牧町）

国坂方円、松本松太郎の水田耕作は永続せず、その後、民有未墾地別々川沿岸から山手中央地域にかけての、樽前山手西地区が水田地帯として開発されるに止まっていた。

戦後の日本は深刻な食糧難に襲われていたために、戦時中の配給米制度はその後も長く続いていた。「農家が配給に頼らなければ米も食べられないのは情ない。この地帯はもと水田地帯として開放された所だから米をつくらう。」と提唱したのは高坂永松であった。こうして、畑作の開拓入植者を中心に、既存農家を加えて造田組合「樽前土地改良区」を作ったのが昭和二十八年であった。組合員三〇余名、造田計画三五町歩、資金関係は自己資金二〇%、長期融資四〇%、国庫補助四〇%、組合長には村上斉が選ばれた。

当初の計画は、樽前を中心として苫小牧を一丸とした組合をこしらえようという大きな構想があったが、結局は樽

前川よりの三五町歩になったという経過があったという。

用水は樽前川から導水し、同二十九年に用水路工事を行い、三十年から三十一年にかけて造田工事が行われた。

水田は計画どおり完成した。しかし、収穫は期待したようにはいかなかった。次々と脱落する者が出て来た。村上齊は当時の模様を次のように語っている。

まず一、二年、まあ五カ年間くらいというものは種だけとつたところではないかな。最初の二年くらいは種くらいもとれなかった。(水もちが悪くて)ザルに水というようなものだった。水さえもてれば結構水田もとれるもんなんだがね。(それでも)七、八年もたつたところかな、平均六俵くらいはね。ずっと通していえば、平均なら三俵か四俵だろうが岩淵、木村、沼端、あの辺なら水もちがいいから、いい米をとつたね。それで三十一年度から客土をやつたんです、二、三年やつたかね。でも、やっぱり一回ばかりではね。それさえやれば、あるいは止めなくてもよかったかも知れない。第一、用水(路)が水害でこわれたりしてね。とるものがないからね、それで、一年で止めた人もあれば、二年で止めた人もあった。

(『村上齊氏に聞く』 昭和四十九年録音 近江謙三蔵)

そのうちに政府の農政の方針が変わつた。米作の過剰時代の到来である。それまでの増産奨励等が減反政策に変わつて、休耕する者には奨励金が交付されることになった。これが土地改良区の死命を制することになって米作するものはなくなつてしまった。

この減反政策、休耕田奨励金制度は五十年度をもつて終わる。樽前の米作の動向は未知数である。

(道営畑地帯総合土地改良事業の発足)

苦小牧の農業地は、ここ数年来減つて来ている。この新興都市の農業問題は新しい目で見直さなければならなくなっている。樽前地区道営畑地帯総合土地改良事業がその答えの一つである。

総合土地改良事業としては苫小牧市では樽前地区が初めてであり、農地造成、農業整備などの事業に大きな期待がよせられている。

この事業は、昭和四十九年度を初年次に五カ年計画で実施される。総事業費は四十八年度当初算定で五億六、〇〇〇万円、受益戸数六八戸、受益面積五三〇ヘクタール、事業内容は、農道の改良舗装、明きよ、暗きよ排水路の整備、営農用水、農地造成を総合的に行おうとするもので、事業費は国が六〇%、道が二二・五%、地元（市および受益者）が一七・五%ずつ負担することになっている。

苫小牧市は都市開発が先行して来ており、農業は限られた地区に縮小されて来ている。この限られた地区で、いかにして農業振興を図っていくかが苫小牧市農政上の課題であり、この改良事業はそのかなめとして注目されているのである。

（椎茸栽培）

苫小牧で椎茸栽培が奨励されるようになったのは、戦後間もない昭和二十三年度からである。樽前では目立った発展はなかったが、さいきん、佐々木シイタケ園のように、農家の副業から独立するものが出て来た。

（養鶏業）

養鶏ではイースタンハイブレッド農場、株式会社たまごの国の進出がある。

特に、たまごの国は本社を樽前におき、成鶏舎（二三棟）育雛舎（三棟）鶏卵パック詰舎（一棟）その他の施設を備え、飼育数四万五、〇〇〇羽、一日約二万五、〇〇〇個の鶏卵を生産している。

（養豚業）

養豚を企業として行っているのは北海共栄ファームである。同社は昭和四十六年二月、市内弁天より移住した黒畑

徳治、飯田久三郎、新田義明、黒畑新作の四名が共同で作った農業法人であつて、農業経営の新しい方向と言われている。

彼等は市内樽前と隣接白老町社台に牧場五〇ヘクタールを購入、同四月、国の総合施設資金から三、〇〇〇万円の融資を受け農事組合法人北海共栄ファーム（組合長黒畑徳治）を設立、社台を酪農基地、樽前を養豚基地とし、ここには豚舎四棟を建て、初年度の総収益、酪農部門一、六〇〇万円、養豚部門一、二五〇万円をあげ順調に経営している。

（肉牛の飼育）

乳牛減少と入れ代わりに多くなつたのが肉牛の飼育である。これは別々地区が中心になつていて、すでに常時一〇〇頭保有を目標とする専業者もあらわれている。

牧畜業 当地に馬の飼育の記録が出て来るのは明治初年である。高知藩の引継書にこの地方の永住人の持馬の記の発達 録がある。

樽前村永住人 菊 松 五疋

オボツブ村永住人 彦 藏 三疋

同 清之助 一三疋

ニシタツブ村永住人 勝次郎 三疋

同 忠 藏 八疋

（『苦小牧町史』 昭和十五年 苦小牧町）

もともと、本道では馬の私有は禁止されていた。これが解禁になつたのは文久年間といわれる。開拓使時代にいたり移民が増加するに従つて牧馬を業としようというものがあらわれて次第に頭数が増えていったのである。

苦小牧地方は積雪が少なく、寒暑ともにきびしくなく、馬糧になる小笹も多かったが、特に錦岡、樽前地方はその適地とされていた。明治十六年の民間牧畜実況調査復命書に次のように報告している。

「小糸魚、錦多峰（錦岡）、覚生、樽前、以上ノ各村ハ地位最モ牧畜ニ適セリ。シカレドモ、民家稀ニシテ放牧ニ従事スルモノナク近村ノ牧馬ココニ来リテ群遊ス。」

さらに翌十七年の復命書にも

「樽前、社台、白老ハ積雪オオムネ浅クシテ、頗ル笹原ニ富メリ。故ニ冬季積雪中ハ、西部各郡ノ馬持争イテ当所ニ輻輳ストイフ。」

（『苦小牧町史』 昭和十五年 苦小牧町）

此内平吉談話は、明治の末年から大正時代にかけての状況だが、当時においても、この様子はあまり変わらなかったようである。此内は次のように述べている。

いやあ、いたね。大したもんだった。越年になると、岩内とか、あっちの方からまで、十一月ころになると皆持つて来たもんだ。そして冬越しして、春になると持つて帰る。そのうちで一番大きかったのは社台の相木林太という人だった。これは何百頭と持つていた。それに苦小牧の中山清作、回という人も大きかった。それらが全部樽前に放していた。四〇頭から五〇頭に種馬一頭ずつつけて放しておく。自由放牧さ。それが、どういうものか、いつの間にか減ってしまったね。

（『樽前の歴史を聞く』 昭和五十年 機関誌苦小牧市史編さんNo.9）

放牧は無秩序に続けられて来たようである。前記復命書は続けてこう書いている。

「本道ノ牧馬者、一般ニ放育シ、穀物ヲ与エ舎飼セズ、官有地ニ放育シテ制令ヲ無視シテ顧ミザルモノノ如シ。移住者アル時ハ己レノ所有地ヲ縮小セラルルガ如キ感ヲナシ居レリ。当地亦シカリトス。」

明治から大正年代に入っても、この遺風は改められなかったようである。此内平吉談話はなお続けている。



樽前の放牧場（昭和48年）
〔苦小牧市史編さん室蔵〕

夏もおつ放しき。だから百姓は畑を荒らされて困るわけさ。そこで自衛手段さ。チャシを回して。それでも畑に入つて来たら、つかまえて賠償金をとるわけさ。

（『樽前の歴史を聞く』昭和五十年 機関誌苦小牧市史編さんNo.9）

こういう事情があつたからであろう、明治十六年、六カ村（樽前、覚生、錦多峰、小糸魚、苦小牧、植苗）共同秣場が設けられた。

一、二〇九万九、五二〇坪

但シ、南北一里半、東西二里。

一、位置、西北ハ樽前山ヲ負ヒ、小糸魚村東端ヨリ白老郡界別々川ニ接シ、南東ハ海ニ面シ、樽前、覚生、錦多峰ノ三川ニ跨リ、街道ヲ距ル凡ソ一一町余。
一、自生草、笹、葦、茅、其他雑草等ニシテ、最モ多キハ笹ナリ。

（『苦小牧町史』昭和十五年 苦小牧町）

馬放牧地は町内五カ所に設けられた。その中の樽前共同放牧場は次のようになっている。

一、位置 苦小牧町大字樽前村字樽前

一、地積 三三七町九段四畝七歩

この放牧場は、酪農の振興策と共に新しい目で見直す必要が生じて来た。昭和三十年に完成した苦小牧市有樽前放牧場は、農家の草地保有面積が少なく、乳牛の増殖に支障をきたしたことからとられた対策であつた。こうして、放

牧場の役割は、馬から牛に中心が移って来たのである。

民間牧場は、明治三十八年、設立の樽前共同牧場にはじまる。国坂方円ら二〇名が組合組織をもって国管地の払い下げを願ひ出て、約十三年をかけて大正六年に完成したのがこの牧場であつた。これは昭和三年に北海道庁に買収され、六〇戸分に分割、民有未墾地として開放された。

現在、樽前には民間の牧場が四つある。いずれも軽種馬牧場であつて、このうち、内藤牧場が一番古い。

樽前関係民有牧場一覽表（昭和四十八年現在）

地区	名 称	所有者	頭 数			
			サラブレッド	アングロアラブ	トロッター	その他計
樽 前	藤 沢 牧 場	藤沢武雄	一八	四	一	二三
同	苦小牧ランチョウ	共同経営	三四	三	一	四〇
同	佐 藤 牧 場	佐藤 貞	二	一	一	二
同	内 藤 牧 場	内藤 武	二〇	一	一	二〇

（『苦小牧市民有牧場台帳控』 昭和四十八年 苦小牧市）

樽前の 林 業 当地の林業は従来から、あまり見るべきものがなかつたようである。明治三十年代にマツチの軸木製造が行われたが、短期間にすぎなかつた。

造材も一時はかなり行われていたようである。此内平吉は次のように語っている。

かなり造材に入っている。御料林もやったけれども、民有林にそのころは随分木があつたからね。

（『樽前の歴史を聞く』 昭和五十年 機関誌苦小牧市史編さんNo.9）



樽前の原始林（昭和35年）
〔苦小牧市史編さん室蔵〕

木炭の製造が盛んであったのは大正年代と考えられる。彼等は木炭を製造し原料が不足するとすぐ移動するという有様であったから、その期間、部落の戸口の変化がはげしかった。

大正十二年の部落納税組合加入者名簿によれば、当時の当地の戸口の過半数は製炭業関係が占めていたことがわかる。その概要を集計すれば次のようになる

職業	人員
製炭業	五
炭焼業	二三
馬車追	六
杣夫	七
飯場	一
帳場	一
日雇	三
農業	一〇
漁業	六
其他	九
計	七一

（『事務報告』 大正十二年 苦小牧町）

此内平吉は次のように語っている。

木炭も随分やっていたよ。専業です。親方が山を買うわけさね。そして炭がまをきざいて焼子に賃金をやって焼かせるわけさ。その運搬を私ら馬車追いをして請負ったんだがね。一時は随分出たもんですよ。

（『樽前の歴史を聞く』 昭和五十年 機関誌苦小牧市史編さんNo.9）

この木炭製造も同十二年までであった。部落の戸数は翌十三年から激減するのである。

錦 岡

一、部落起源

地名の 錦岡の地は古くから錦多峰（ニシタップ）と呼ばれていたが、昭和十九年に錦岡と改称、昭和二十五年には由 来 国鉄室蘭本線の錦多峰駅も錦岡駅に改められた。

錦多峰の語原については、次の諸説があるが、はっきりした説はない。

①「Nishitap」（ニシタップ）・樹木収縮するところ＝永田方正『蝦夷語地名解』

②「Ni・us・tapkop」（ニ・ウシ・タップコプ）・樹木が群生している丸山＝知里真志保『アイヌ語入門』

③「Nishi tap」（ニシタップ）・雲を被りたる山＝ジョン・パチエラー『アイヌ語地名考』

最近の地名解としては、

④「Nis-tap」（ニシタップ）・空つくような山＝扇谷昌康『苫小牧市のアイヌ語地名』

がもっとも新しいものである。この場合の「山」は樽前山を指している。

錦 岡 錦岡地区の遺跡はごく最近になって発見されたもので、まだ完全な発掘作業を行っていないため詳細にの遺跡 ついては不明であるが、土器片からして縄文後期から擦文時代で、このころから丘陵部ないし平野部の台地に人類が住みついたものと推定される。

昭和四十六年発見の工専遺跡は苫小牧工専の裏、小糸魚川と錦多川にはさまれた台地にあり、無柄石鏃一本が発見

されている。同じ年に発見された大沢遺跡は大沢の沼西岸丘陵部に位置し、石器、土器片が発見され、円筒上層式に相当するものと思われる。泉沢遺跡は同四十八年、市清掃センター向かいの丘陵斜面で擦文式土器の破片が発見されており、今後の発掘による説明が待たれている。

二 自然環境

位置 国鉄苦小牧駅から西へ一〇キロメートル、錦岡駅があり、ここが錦岡の中心である。東は小糸魚川、西は覚生川を境として、北は樽前山、南は太平洋に面した地域である。

地形は、海岸に沿って幅一キロの海岸平野と、樽前山の裾野の延長である丘陵部から成っている。海岸平野部は、縄文時代の早期・前期・中期のころ、海水面以下であったと考えられる。

地質 錦岡の地一帯は、歴史上多くの噴火の記録をもち、現在も噴煙をあげている樽前山の火山灰であつくおおわれている。

昭和四十六年、錦岡からほど近い丘陵部の突端で発見された糸井第二遺跡の地層をみると、次のような堆積状況がみられた。

第一層・腐植土層（一〇センチ前後）

第五層・樽前C層（四〇センチ前後）

第二層・樽前A層（三〇～四〇センチ）

第六層・第二黒色土層（三〇センチ前後）

第三層・樽前B層（五〇～七〇センチ）

第七層・樽前D層

第四層・第一黒色土層（二〇センチ前後）

また、昭和四〇年、公営住宅裏の段丘部斜面で温泉が噴出したことは記録に新しい。

錦岡

海岸平野部の草原、錦多峰川流域の湿原、海岸段丘上の山林と多様な地形で植物も豊富である。

の植物

公営住宅団地付近の錦多峰川流域の湿原には、水芭蕉のみごとな群落が春の訪れを告げていた。海岸に近い鉄道線路の両側には、一面のヨシ原の中に咲くハナショウブ、キスゲが初夏をいろどっていた。

海岸平野部には、いくつかのハンノキが自生しているが、これらの多くは南からの強い風に影響されて、海岸から丘陵部の方へなびいたまま変形していた。

丘陵部では、イタヤ・アサダ・ナラ・シナ・ホウ・セン・カツラなどの樹木が多く自生していた。

錦岡

多様な自然環境のなかに多くの野鳥が生息している。

の動物

湿原では、ウグイス・コヨシキリ・オオヨシキリ・オオジシギなど、山林では、シジュウカラ・コガラ・シマエナガ・シロハラゴジュウカラなどがみかけられる。

コウライキジが人家の近くまでやってくることもあり、冬にはトビの大群が海岸でエサをあさっていることもある。ヒグマは多く、かつては放牧の馬がしばしば被害を受け、人間が襲われたこともあった。キツネにだまされて一晩中、沼のまわりを歩かされたという話も伝えられている。

三 部落の変遷

部落の

錦岡はもとと漁業の出稼場として発達したもので、その初期には現在の駅を中心とする地より、むしろ覚生がその中心地でこの地に小学校が設置されたことからこれもこれが知られる。

明治四年、高知藩が行った勇払郡永住人調査では、ニシタツ村永住人として、川村善右衛門一二人（息子夫婦と二世帯）、中山栄蔵三人、三国忠兵衛四人、鈴木勝次郎三人となっており、いずれも海岸線に居住し漁業手伝と若干の畑

地を所有し耕作もしていたから、この人たちが開村の人とみてよい。

明治二十三年十月、覚生尋常小学校設置出願書では樽前、覚生、錦多峰、小糸魚の四カ村で戸数一三戸、人口八二八人となっていて、そのほとんどが漁業関係者となっていた。内訳で見ると樽前三戸、覚生六戸、錦多峰三戸、小糸魚一戸であった。

明治二十七年、青森県から現駅前付近に三戸が移住、漁業のかたわら農事に従事しその基礎がかためられていったが、同三十一年二月一日、北海道炭砒鉄道錦多峰駅の設置により駅を中心に発展し、西部四村（樽前、覚生、錦多峰、小糸魚）の中心地としてその地位が確立した。

西部の 大正九年の第一回国勢調査では錦多峰、覚生地区で一四一戸、七八六人となっており、しかもそのほと中心地 んどが錦多峰駅を中心とする地区に集中し、まさしく西部の中心地となった。このため、従前の覚生小学校は大正一一年八月、錦多峰小学校と改称し、翌十月には錦多峰に移転した。

錦多峰駅設置以後のいわゆる発展期には各種官公庁派出所や団体、会社など次つぎに設置、設立されたが、その主なものは次のとおりであった。

明治三二・二・一	錦多峰駅営業開始	明治四二・四・一二	樽前山大噴火円頂丘ヲ顕ハス
三六・一・一	帝室林野錦多峰分擔区設置	四五・三・三一	錦多峰特別教授場廃止 本校併合
三九・頃	燐寸軸木工場設置	大正 四・三・三〇	錦樽青年団設立ス
四〇・四・一	錦多峰特別教授場開校	七・二・二八	帝室林野樽前分担分離ス
四一・一一・一	在郷軍人分会錦多峰班設立ス	七・四・一四	錦多峰保線丁場創立ス

大正 八・三・	御駐蹕碑改建立ス
八・七・二五	四川村運送店開業
九・九・一	日本養狐會社事業開始
一〇・七・一	浜砂採取事業開始ス
一一・三・二三	錦多峰處女會設立
一一・四・一	覺生小学校保護者會設立
一一・四・一	錦多峰巡查駐在所設置
一一・五・一	錦多峰自警團設置
一一・六・一二	樽前特別教授場ヲ分離ス
一一・六・一二	樽前青年團分離ス 從前ノモノヲ錦多峰青年團トス
一一・八・一〇	忠魂碑建立
一一・八・一七	錦多峰小学校ト校名改称ス
一一・一〇・一三	小学校ヲ大字錦多峰ニ移転新築
一一・一〇・三〇	錦多峰火防衛生組合設立
一一・一〇・三〇	錦多峰私設消防組織ス
一一・一・三一	共同運送店開業
一二・一〇・一〇	錦多峰巡查駐在所廢止ス
大正一五・三・二三	地神社建立
一五・五・二五	錦多峰農事実行組合設立
一五・七・一	錦多峰青年訓練所開所
昭和 二・二・一	錦多峰運送社開業 二店合同 最初一印ト称ス
三・四・一六	森林防火組合設立ス
三・四・三〇	実行組合牧場營業開始
三・六・一	作田高之助翁碑建立
三・八・一	錦多峰郵便取扱所開所
三・八・一七	馬廐神建立
四・三・二三	錦多峰女子青年團ト改称
四・八・一	公設錦多峰消防組ニ昇格
四・九・一六	無集配三等郵便局ニ昇格
五・二・二四	甜菜耕作改良組合設立
五・一・二三	青年訓練所後援會設立
七・二・二八	償還組合設立
七・七・一五	地藏尊ヲ現墓地内ニ安置
八・二・七	改正ニ依ル農事実行組合設立

昭和 八・一一・一	吉田蟹罐詰工場設置	昭和 九・九・一〇	産業組合青年聯盟設立
九・三・一	養狐事業閉鎖ス	一〇・四・一	改正二依ル実業青年学校設立
九・四・一	錦多峰実業青年学校設立 (青年訓練所充当)	一〇・七・一八	錦多峰漁業実行組合設立
九・八・一九	錦多峰小学校同窓会設立	一〇・八・一五	郵便局ニテ電信電話取扱開始

〔錦多峰村ノ沿革〕 昭和十年 錦多峰尋常小学校編

錦多峰は川村嘉市を苦小牧水産組合長、村会議員に選出し、産業的にも行政的にも力を得て、大正末期からは農業木炭製造も盛んとなり、漁業を中心としながらも各方面に幅広く独特の部落を形成していった。

住宅地として 戦後苦小牧は港湾の築設、臨海工業地帯の造成にともなつて急速に発展し、錦岡、糸井地区は住宅発展する錦岡 地として一変した。特に、昭和三十九年度から六カ年計画で公営住宅用の宅地造成を開始し、同四十年から一部公営住宅の建設がはじまり、同四十三年度には一三〇戸を建設した。その後においても公営住宅の増設と一般住宅地の造成が相次ぎ、既存部落とは別に新しい住宅団地が形成され、人口も急速に増加、昭和二十五年二三五世帯、一、三一〇人が、同四十年五二四世帯、二、二四六人、同四十九年二、二三八世帯、六、五六九人と二十五年からみると五倍になった。

また、昭和四十年四月には国立苦小牧工業高等専門学校の新校舎が落成し、新しい分野を開いた。
ゴルフ場の樽前カントリークラブ、最近にいたつてはジョイランド樽前などレジャー施設も設けられた。
市においてもこの人口増加にあわせ、昭和四十八年四月一日に市役所錦岡出張所、公民館分館を開設したのをはじめ、各種公共施設、社会福祉施設の設置を行い、錦岡地区はもはや部落とは呼べない発展ぶりで、本市の住宅地とし

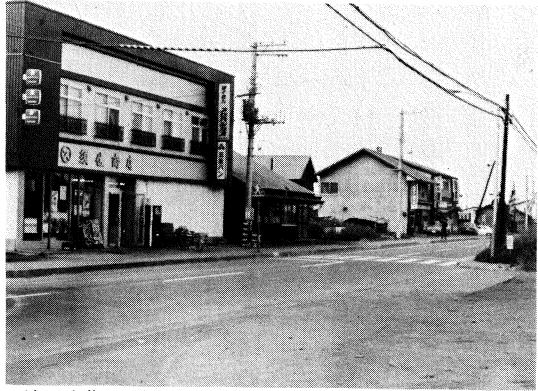
て極めて重要な位置にある。

四 産業の概要

(一) 漁業

樽前場所と 安政年間（一八五四―一八五九）に蝦夷地を踏破した
ニシタツブ 松浦武四郎の『蝦夷日誌』に次の記事がある。

付編 部落史・錦岡



錦岡市街地（昭和50年）〔苫小牧市史編さん室蔵〕



錦岡公営住宅団地（昭和50年）〔苫小牧市史編さん室蔵〕



錦岡ときわ団地（昭和50年）〔苫小牧市史編さん室蔵〕

此辺は皆南受の暖地にて、沙浜浪際より上に（二十三丁）路有、蹟く石一ツなく、鰯屋左右に立並び、酒肆・茶店もさままの暖簾さげ、中々に言さえず蝦夷人の里と思はれず。其繁昌いはん方なし。（廿余丁）タルマイ（川幅五、六間、小休所有）本名ヲタルヲマナイにて、沙路有義也……後略……同くフシコニシタブ（小川）、アシリニシタブ（小川）、フシコは古、アシリは新き義、ニシタブは昔し此川上に森が有、其に何時も雲が有しと、依つて号し也。……後略……

（松浦武四郎『蝦夷日誌上巻』昭和三十七年 時事通信社）

樽前は、すでに天明六年（一七八六年）に国藤与惣治が年間三兩の運上金を納めて場所として開発しており、文化三年（一八〇六年）には、遠藤甚次郎が運上金五兩を納めて場所を経営していた。

以来、樽前場所として栄えており、寛政十二年（一八〇〇年）に白老で創始された鰯油・鰯搾油製造の新方法を文政八年（一八二五年）勇払郡で移入して魚粕を製造、安政年間には「樽前粕」として声価があがつて本州方面にも積み出しており、酒肆・茶店があつて蝦夷人の里とも思われなほ繁盛していたらしい。

それにくらべて、錦多峰はただ一面の沙地（砂地）で定住者のいない原野・浜辺であつたと思われる。現在の錦岡駅付近に社殿のある樽前神社も、当時は樽前にあつた。おそらく樽前部落の人たちが豊漁を願つて造営したものと思われる。

したがつて、松浦武四郎日記によれば現苦小牧市の西部地域の旧小糸魚村・錦多峰村・寛生村・樽前村の中心地は樽前地区であつたことが推察できる。錦多峰が開けてくるのは次の時代をまたなければならなかつた。

明治二年、錦多峰は高知藩の支配を受けることになった。⁽¹⁾その引渡書に「ニシタブ此所平地通行小川橋有、会所持漁小屋有、鰯漁業出稼有、一里杭有、コエトイ迄一里」とあつて鰯をとる出稼ぎの漁師が錦多峰に来往していたことがわかる。

右の記録と同時期のものと思われる史料に当地方の永住人として、樽前村四家族計一三人、ヲホフ村二家族計六人⁽²⁾

ニシタフ村五家族計二二人、コエトキ村三家族計一三人が、合計して四カ村五四人が住んでいたと記録されている。これによると苦小牧西部地域の四カ村の中では錦多峰村の人口がもっとも多くなっている。

しかし、明治二十年になるとこの地域の人口は激減する。北海道開拓使初代長官・岩村通俊の日記によれば小糸魚二戸・人口五人、錦多峰一戸・人口二人、覚生四戸・人口二一人、樽前二戸・人口九人となっている。

明治二年の苦小牧西部地域の総人口五四人に対して明治二十年の人口は三七人で、一七人の減少となっている。その後、各種産業の発達にともなうて逐次人口の増加がみられている。

明治三十年、一八戸・一一八人 大正十三年、一二六戸・ 六三〇人

明治三十四年、七八戸・二三〇人 昭和二十五年、二四五戸・一、三三三人

大正四年、一〇〇戸・四五〇人

出稼漁業者 昭和四十八年八月、本市は開基百年を迎えたが、それ以前の寛政十二年（一八〇〇）に勇払場所

林重右衛門 土着して開懇と警備にあたった八王子千人同心は本市開拓の先駆者として大いにクローズアップされ、開基百年にはこの千人同心などの墓が整備され、八王子市と苦小牧市が姉妹都市を結ぶなどはなばなしものがあった。

このころから、錦岡、覚生^{おぼまつぶ}の国道と国鉄線間に古い墓碑があり、地元古老の間で問題となり、市史編さん室の堀江敏夫編集長にも「天保十亥年九月十日 南部異国間 俗名林重右衛門 法號釋遠澄」と書かれたメモが届けられ、調査の依頼があった。しかし、このメモだけでは林重右衛門の人物像に対する説明の手がかりとはならず、調査も中断されていたのである。

ところが、昭和五十年になって地元苦小牧民報社の竹馬記者がこの問題に感心を示し、数回にわたり林重右衛門を

民報紙上に取りあげた。この記事を読んだ錦岡の古老高井吾作が、息子が八戸市内に住んでいて『南部』とあるから何かの手がかりがあるかもしれないと、これを息子の高井重雄に照会した。これは同年七月二十二日付の夕刊『東奥日報』にと取りあげられ、これを読んだ下北郡風間浦村易国間に住む林紘二が、「その人物は私の先祖にあたる人」であると名乗り出て子孫が見つかったのである。

林紘二は重右衛門の分家筋にあたり、林家本家は九代目当主が函館市五稜郭に住む林馨であることも判明した。

このことを知った林馨、林紘二は昭和五十年八月十七日、来苦して関係者の案内で現地に赴き、夏草がうつそうと茂る中にひっそりと建っている墓碑の前で深々と頭を垂れ、一三六年という歳月の重みと先祖への思いに合掌した。

この時、林家に代々伝わる過去帳と、重右衛門の香尊（典）帳を持参した。過去帳には「釋遠澄 天保十年九月十日 林三代目重右衛門西松コト」と書れ、香典帳には「天保十亥年九月十日 タルマイ場所ニテ病死」となっていた。ただし、「五代重右衛門行年三十九才」となっている。⁽⁴⁾

これによって林重右衛門の人物像が極めて明確になってきた。

まず第一にあげられることは、苦小牧地方樽前浜のイワシ漁業の特長であった出稼漁業家（漁業渡世）であったということである。

タルマイ浜では文化・文政年間あたりからイワシ漁業が開始され、天保十年（一八三九）の松前秘説にユウフツイワシ二万石とあって、林重右衛門の没したころから極めて活発になっていた。

ただ、当時の勇払場所は支笏一六場所をかえ、その主体をイザリ、ムイザリのサケ漁においており、イワシ漁は出稼漁業家によって行われていて、場所請負人自身が自らイワシ漁をはじめたのは安政年間からであった。松浦武四郎はタルマイ浜のイワシ漁業のため、当地方の場所請負人はなにもしくても金になる場所であると、請負人をひに

くつた表現をしている。請負人はユウフツからマコマイの漁場を占有し、トマコマイからタルマイまでは出稼人に解放してイワシ漁が続けられた。

タルマイ浜のイワシ漁は他借漁業といって大正年間まで、南部、函館などの出稼人が漁業権を借りて行うものが多く、初期には二八取（二割漁業権者、八割自己収入）の制度があつたが、明治中期以降は金銭貸借が多くなつた。

林重右衛門は初期タルマイ浜のイワシ漁業者であり、おそらくは三〇人以上の漁夫を引き連れて漁を行つた親方であつたと思われる。

こうした意味では、場所請負人とともに本道の産業をささえてきた漁業渡世であり、タルマイ浜の特色とする出稼漁業者のはしりであり、その後のイワシ漁を発展させる一要因をつくつた人であつたといえよう。

漁場 樽前浜のイワシ漁業が盛んになると、函館、南部方面などの漁師から出稼漁の申し出があり、場所請負の変遷 人も苫小牧から樽前の間の沿岸を二八取の条件（漁獲の二割請負人、八割出稼人）で出稼漁業が許可され、以来苫小牧地方の漁業権を持たない漁業者による漁業（他借漁業）の特質となつた。

明治初年には錦多峰村の岡田漁場、井口漁場、覚生村の伊藤漁場、小島漁場、板垣漁場、奥村漁場などが知られるが、いずれも出稼人であつた。

錦多峰覚生地区漁業出稼人

区分	場所	名前	本居地
出稼人	タルマエ	(興村) 六兵衛	箱館大町

区分	場所	名前	本居地
出稼人	ヲホウ	伊藤 弥太郎	箱館大町

勇鰐特第八〇号		苦小牧村	石垣彦三郎	門別村	飯田信三
八一号	門別村	飯田信三	〃	〃	〃
八二号	〃	〃	〃	〃	〃
八三号	函館区	石垣隈太郎	〃	〃	〃
八四号	札幌区	瀬下秀造	〃	〃	〃
八五号	函館区	渡辺佐兵衛	〃	〃	〃
八六号	門別村	飯田信三	〃	〃	〃
勇鰐特第八七号		錦多峰村	(显第九一号)	覚生村	(显第九八号)
八八号	〃	(显第九二号)	〃	(显第九九号)	〃
八九号	〃	(显第九三号)	〃	(显第一〇〇号)	〃
九〇号	覚生村	(显第九四号)	〃	(显第一〇一号)	〃
九一号	〃	(显第九五号)	〃	(显第一〇二号)	〃
九二号	〃	(显第九六号)	〃	(显第一〇三号)	〃
〃	(显第九七号)	〃	〃	〃	〃

※ 显第号は漁場番号で一般的な番号であった。

(『室蘭支庁布令綴』『免許漁業原簿』―勇払郡より作成)

明治中ころになつてもともと上磯郡上磯村の漁師の家に生まれた川村嘉市、勘三郎が錦多峰村に移住し、永住人による本格的な漁業がはじまった。特に川村は定置網による漁業を開始し、地曳網専門だった当時のイワシ漁業に新しい方法を開いたのである。

免許番号	住所	氏名	位置
勇鰐特漁業権者			
六一号	苦小牧町	石垣彦三郎	錦多峰
六二号	〃	川村茂右衛門	〃
六三号	〃	川村嘉市	〃
六四号	〃	川村茂右衛門	〃
勇鰐特漁業権者			
四八号	苦小牧町	石垣彦三郎	錦多峰
四九号	〃	川村茂右衛門	〃
五〇号	〃	川村嘉市	〃
五一号	東京都	中村捨次郎	〃

六五号	東京都	中村 捨次郎	錦多峰
六六号	門別村	飯田 系い	"
六七号	"	"	"
六八号	"	"	"
六九号	東京都	中村 捨次郎	覚生
七〇号	"	"	"
七一号	苦小牧町	向井 睦吉	"
七二号	門別村	飯田 系い	"
七三号	"	"	"
七四号	"	"	"
七五号	苦小牧村	川村 嘉市	樽前

五二号	門別村	飯田 系い	錦多峰
五三号	"	"	"
五四号	"	"	"
五五号	"	"	覚生
五六号	"	"	"
五七号	苦小牧町	川村 嘉市	樽前

九号	苦小牧町	川村 嘉市	小糸魚
一〇号	"	"	錦多峰

五号	東京都	中村 捨次郎	錦多峰
六号	"	"	覚生
七号	門別村	飯田 系い	"

(『漁業権原簿』—勇払郡より作成)

大正のはじめごろになると、錦多峰の番屋はわずかに二軒になってしまった。いずれも川村漁場のもので、明治時代ににぎわった番屋の多くは空家になってしまったという。

大正末期には、川村家が三つの番屋を所有していた。東から順に、川尻・石垣・駅前と呼んでいた。そのころは漁獲高がかなり減少していて錦多峰郷土誌にあるように「昔ノ面影ヲ残スニ過ギナイ」状態であった。

漁獲高の減少は錦多峰だけの問題ではなかった。全道的にみると、北海道の水産物を代表するニシンは、明治三十



錦岡の海岸（昭和50年）
〔苫小牧市史編さん室蔵〕

年ごろから瀬棚・寿都方面の漁が皆無になり、明治末年には岩内・積丹方面の漁も薄くなった。ニシン漁業の中心は雄冬岬とその北方に移っていき、道南の漁村地域は衰微する一方であった。

沿岸の漁業に多くをのぞめない漁村の人びとは、沖合に遠洋に魚群を求めて樺太・沿海州・カムチャツカへと進出せざるを得なかった。

資源の減少した錦多峰の浜辺には、わずかの沿岸資源で生活を営む定住した何軒かの漁家がとり残され、川村漁場もつぎつぎに番屋を閉鎖し、当主は運送業・砂採取業と転業をやむなくされていったのである。

漁獲物 明治六年の勇払外二郡税則更定取調によれば課税の対象となる産物として、鰯・鮭・魚油・鮭の三種があげられている。鰯・鮭は、いわゆる樽前物として名声のあるもので、本州方面へ肥料として一〇〇石（四〇〇〇貫）一五トンあたり六五〇円で取り引きされていた。

魚油は鰯油のことで、鰯粕を製する場合の副産物として製造された。灯油として用いられたが、臭気が強く好まれなかった。しかし、石油にくらべて安価なので、低所得層により使用された。

また、秋になると大量の鮭が錦多峰川で漁獲された。明治二年（一八八九年）には、資源の保全をはかるため、錦多峰鮭魚人工孵化組合が結成された。現在でも若干の遡上（さかのぼり）をみている。

明治末期から大正にかけての主要水産物は、小鰈・鰻・鮭・鮭・北寄貝・海扇（ホタテ）の六種であった。いずれも資源保護の立場から禁漁期があり、それに基づいて漁期が定められていた。すなわち、小鰈（六月十日から七月二十日まで）

鰯（九月中旬から十一月中旬）、鰺（通年）、鮭（六月中旬から十二月中旬）、北寄貝（七月一日から翌年四月十五日）、海扇（七月一日から十二月下旬）となっていた。

そのほかの水産物として次のようなものがあつた。

① 淡水魚 マス・アカハラ・ヤマベ・ワカサギ・コイ

② 海産魚 スナガレイ・ババガレイ・マガレイ・ソウハチ・七ツ星・タラ

③ その他 ウナギ・毛ガニ・ジヨロウガイ

カレイ類は豊富であつたらしく、浜でとれても大部分は魚粕となつた。鮭は網漁が正式だがヤスで突いても一晩に二〇〇三〇尾もとれた。北寄貝は一箱（八貫 $\equiv$ 三〇K $\equiv$ ）が四円で売れ、夕張・旭川・札幌方面に出荷した。

大正七年、高井五作は小樽の高島から四隻の川崎船を呼んで海扇をとつた。川崎船は歸りに勇拂川をさかのぼつて美美から馬車で陸を運ばれ、千歳から千歳川をくだり、石狩川を経由して石狩湾に出て高島に歸つたという。

この時、川崎船が歸つた経路は、江戸時代に千歳越え（勇払越え）と称せられ、太平洋岸と日本海岸を結ぶ重要な交通路であつた。明治以来は鉄道・道路の発達により千歳越えはあまり用いられなかつたと思われるが、前述の高島の川崎船が往時そのままの方法で石狩へ抜けたのであつて、いわゆる千歳越えの最後をかざるものであつたと思われる。

また、ワカサギは大沢の沼（ナカイチ沼）に生息し、ヤマベもよく釣れた。ウナギも多くいて、年に一度の川掃除のとき大量に捕えたという。

漁具と 明治六年の記録によれば、『ニシタツプ 鰯漁具調』として、「網数十六（小目網一、拾四節八、拾節六、足掛網二）

漁 法 袋網四、秋味網三十二、秋味袋二、図合船一、持府船一、胴具船二（其他漁具備付雜品数百点）⁽⁵⁾」の漁具が記録してある。

また、岩村通俊は「苦小牧近傍沿海漁村ノ景況ヲ聞クニ、勇払白老両郡ノ沿海二点在スル漁村ハ苦小牧外七村ニシテ、多クハ鰯鮭ヲ漁獲シテ生計ヲ営ム」と記している。

川辺己之吉筆による『明治の苦小牧漁業の記録』⁽⁷⁾に樽前浜「苦小牧地方を樽前浜と称した」における鰯漁が詳細に記録されているので、要約する。

だし（北風）の日は鰯の群団が沖に去っているが、やませ（南風）の日は群団が沿岸に寄せてくるので、モチツブ船に六、七人乗って「よみ」（見張り）に出発する。

魚群を発見すると、カイの先にムシロをつけて「まね」（合図）をあげる。漁場の見張人はまねをみつけると、番屋の漁夫に知らせ漁夫たちはだしのまま一斉に大船をおろして海に突っこんでいく。

カイは片側十五枚、両側で三十枚、投網要員二名、大船頭、小船頭と三十四、五名が乗りこんでいく。大船頭は「ねりカイ」で舵をとる。

魚群に達すると、先着のモチツブ船の積んでいる片側分の網に、本船の網をつないで、網を海に投げ込みながら陸に向って勢よく進む。

波打ちぎわに着くと漁夫は船の両側から飛びおりる。大船頭と小船頭は船に残って網までもどり、袋網を監視しながら網とともに陸にひかれていく。

陸近くになると、袋網の口をしめて袖網から切り離し、大船に引きつけてタモですくって通い船（くみ船）にくみあげる。通い船の魚は陸揚げされて納坪（なつば）に運ばれ、釜たき場で魚粕に製せられるのであった。

『明治の苦小牧の漁業の記』『郷土の研究第三号』昭和四十六年 苦小牧郷土文化研究会

以上の一連の作業に二―三時間を要し、魚群の厚いときは再度袋網がかけられ、釜たき場では夜通し作業が行われ

た。

また、鰯の群団は社台付近に押し寄せ、東に折れて樽前・錦多峰・小糸魚・マコマイ・サラップを経て厚真まで回遊したものであるという。

樽前粕となるイワシには三種があつた。「『ばか鰻』第一夏鰻之レ二次キ秋鰻ハ低価ナリ、之レ品質ヨリモ季節ニ関係ス、即ハチ乾燥ノ良否ニヨルコト多シ」⁽⁸⁾と、ばか鰻（小ニシン）、夏鰻、秋鰻の順に価格も異なつていた。

鮭漁については、「漁具としては地曳網建網等が用いられた。建網は海岸より一直線に沖合二百間乃至三百間の垣網と称するものを張り結び、魚の通路を遮り、その終端に「コシタ」と呼ぶ箕底の如き底のある網を斜に沈めておいて魚が垣網に遮られて沖合に走ればコシタ網に必ず陥る様に出来ている。巻網も建網と大同小異であるが直線には張らず、群魚を取巻いてコシタ網に追い込むのである。之等の大きさは大體曳網と匹敵し漁期は九月下旬から十二月下旬に至る冷却期が選ばれる」⁽⁹⁾と大量に漁獲された有様がうかがわれる。

鮭は漁獲されるばかりでなく孵化放流事業も試みられ、明治二十二年、水島彦右衛門・小島和市は錦多峰鮭魚人工孵化組合をつくり、千歳孵化場から鮭卵三五万粒の下付を受けて覚生川に放流した。

北寄（ホッキ）漁では、はじめヤスが用いられたが、のちマンガンが用いられた。マンガンを使用するときは、モチップ船に三人がのりこみ、二人はマンガンをろくろで巻き、一人は貝を『ムキ』でむき、貝がらはその場で捨て、一日に千四、五〇〇個のホッキをとつた。

漁場 苦小牧町史によると、苦小牧地方全域で、塩鮭三、七四一石、鰯搾粕七、六三八石、鰯油八〇三石の産の経営 高があつた。また、明治二十年の鰯漁獲高及価格に、錦多峰・収五五〇・四九五〇……とあるが、五五〇石の漁獲量にて四、九五〇円の価格と思われる。

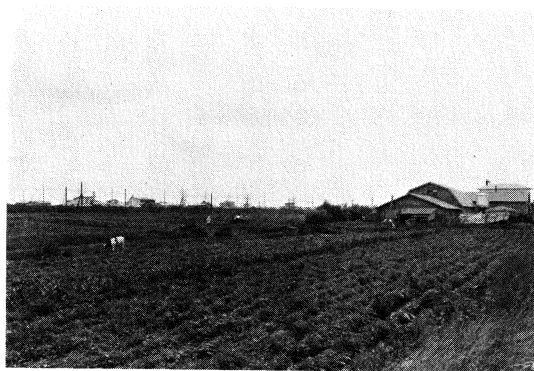
一方、明治二十年の岩村通俊日記によれば、乙部村において「鯨粕ハ現今其価格七百三拾円ナリ、本年ハ最初五百五拾円位ヨリ漸次騰貴シタル者ニシテ、平均六百四五円⁽¹⁰⁾」の価格であつた。前述の明治二十年の町史の記録とくらべると乙部の鯨粕は百石あたり六五〇円、樽前粕は百石あたり九〇〇円となり、「鯨粕ハ所謂ル樽前粕ニシテ肥料中最上等二位シ……」⁽¹¹⁾と岩村通俊の日記の記事を裏書きしている（一〇〇石は四〇〇〇貫¹¹約一・五トン）。

大正初年ごろには、鯨粕一本（二五貫）が四円二〇銭で一〇〇石あたり六七二円の価格であり、カレイ粕は一〇〇石で八〇〇円に売れたという。これらの魚粕を函館の仲買人が買入れ、関西方面に売りさばいていた。とくに干鯨は南部・津軽・出羽方面で一八世紀ごろから肥料として用いられていた。

明治二十〜三十年代の漁師の給料は、船頭五〇〜六〇円、爺及下船頭三五〜四〇円、一番雇二八〜三〇円、二番雇二五、六円、三番雇二三、四円となっていた。

大正から昭和にかけては、船頭一〇〇円、下船頭五〇円、漁夫四〇円と賃金の上昇がみられる。そのころ、鯨など大量漁獲の際、近隣の人々を出面として臨時雇をしたが、その出面賃は一時間あたり二〇〜二五銭で、当時の国鉄職員の日あたり三五銭にくらべると高賃金であつた。ただし、網おこし・沖あげ・釜たたきなど夜通し作業が行われ、相当の重労働であつた。

漁場を経営するには、どの程度の経費がかつたのであろうか。苫小牧町史に見る大正末期から昭和初期と推定される記録により試算してみると、網具三、四五〇円、漁船八五〇円、肥料製造設備二、七一〇円、人件費一、四七〇円、食料・燃料費三四〇円、雑費一〇〇円となり、合計は八、九二〇円である。これらはイワシ地曳網漁業および魚粕製造に要する経費であるが、このほか、カレイの手繰延縄九〇〇円、北寄貝二五〇円、海扇二五〇円、鮭魚（規模の大小により異なるが、三、〇〇〇〜二〇、〇〇〇円）も行うとなれば、一万五、〇〇〇円から二万円の資本が必要であつたと



錦岡の農業地帯（昭和50年）
〔苫小牧市史編さん室蔵〕

この面積では農業だけでは生活することは不可能であり、おそらく漁業が主なる生活の手段であつたと考えられる。

明治十八年上半期の農業調によると、錦多峰村の作付反別は、大豆五畝・小豆九畝・大角豆一反・馬鈴薯二反八畝・蘿蔔（大根）二反五畝となつてゐた。

明治三〇年代前半の農業戸数はつぎのように記録されている。

農業戸口数		畑開墾面積	
明治三〇年	三戸	明治三〇年	六・六反 一七五円
三一年	四戸	三一年	九・二反 六〇円
三二年	五戸	三二年	九・四反 二四円
三四年	十一戸	三四年	十七・三反 三六二円

〔苫小牧町史〕 昭和十五年 苫小牧町

明治三四年からの人口増にともなつて作付面積も増加してきていた。

また、明治三十年代の苫小牧地方は主産業の漁業が衰運をたどり、商業もまた活況を失つていたが、周辺地域では農業入植者が増加して、厚真・安平・鷗川の三村が独立分村するなど一つの転換期をむかえていた。

明治末期から大正のはじめにかけて、作田高之助・山本藤次郎ら農業開拓者が入植してきた。作田高之助は山口県佐波郡和田村の出身で、明治二十一年、篠路に入植したあと、明治四十二年、錦岡の原野二七八町歩の払下げを受け、翌四十三年に入植して開墾にあたつた。

山本藤次郎は、長沼村の岡田馬太郎の所有地四町六反を二五円の小作料で借りて耕作にあたった。

ばれいしょ・にんじん・だいこん・かぼちゃ・トーキビなどがつくられた。肥料は漁場の魚の煮汁が用いられ、水で倍にうすめて使用された。のちに魚粕・過燐酸石灰が使用された。

だいこんはよくでき、一反あたり五〇〇〇六〇〇貫も収穫した。一本あたり五厘でいどだが、大正七年ごろの高値のときは、一本二銭前後にもなった。キャベツは十貫俵で三八〇四五銭であった。

大正十三年には、大根を貨車で一二八台（一台に二五、〇〇〇本積む）も出荷した。販路は、夕張・小樽・札幌・旭川・名寄などであった。貨車一台六〇〇七〇円の売値だが、運賃を差し引くと純益はすくなかった。

耕作方法は馬耕を主としたが、畝きりには鋤を用いた。畝にヤナギの棒で穴をあけ、種子と肥料を入れた。

農繁期には臨時の農夫を雇った。一日二五―三〇銭の出面賃であった。

蝗害には石油乳剤をかけてきり抜けたが、ヨトウ虫には閉口した。

水田 作田高之助は入植と同時に造田をはじめた。四反の水田をつくり中市沼から水をひいた。大正二年は凶耕作 作だったが、翌大正三年には豊作で反当たり六俵の収穫があった。

大正五年から本格的な灌漑溝を堀った。水田は八反となり、収穫した米は自家用とした。播種は直まきと苗代の両方で行った。

大正十五年、気象条件等を考え、水田の耕作は中止された。

大正時代の農産物

種別	年 区分	大正一一年		一二年		一三年		反 当 り
		反 別	価 格	反 別	価 格	反 別	価 格	
大根	一七、三〇〇 ^反	六九二、〇〇〇 ^円	二二、八一〇 ^反	九二二、四〇〇 ^円	二四、三三〇 ^反	九七三、三〇〇 ^円	三千本	
ばれいしょ	四、一〇〇	二〇五、〇〇〇	六、九〇〇	三四五、〇〇〇	六、八三〇	三四一五、〇〇〇	二五俵	
かぼちゃ	一	一	一	一	八、五七〇	二七四二、〇〇〇	四〇俵	
たまねぎ	二、〇二〇	八〇八、〇〇〇	三、八〇〇	一五二、〇〇〇	四、八三〇	一九三二、〇〇〇	五俵	
大豆	一、七六〇	四六五、二〇〇	一	一	二、九九〇	八〇七、三〇〇	三俵	
小豆	二、二九〇	七四九、七〇〇	一	一	二、五五〇	八四一、五〇〇	三俵	
かんしょ	一	一	一	一	一、八六〇	一五六二、四〇〇	七百×	
米	五、七〇〇	二七三六、〇〇〇	五、七六〇	二七六四、〇〇〇	三、四〇〇	一六三二、〇〇〇	三俵	
えんばく	五〇〇	一〇〇、〇〇〇	一、五〇〇	三〇〇、〇〇〇	一、五〇〇	三〇〇、〇〇〇	五俵	
その他	一、二六〇	五六七、〇〇〇	五、八四〇	二四五二、八〇〇	一、九九〇	八九五、五〇〇		
計	三四、九三〇	一四三九五、九〇〇	四六、六一〇	一九六一、一六〇	五八、八五〇	二三八五九、七〇〇		

『苦小牧町史』 昭和十五年 苦小牧町

牧畜 昭和三年、錦多峰実行組合牧場が発足し、錦多峰でも牧畜が行われるようになった。各農家でも乳牛を飼育し、酪農をはじめるようになった。

大正時代の家禽

年	区	種別	大正					
			一	二	三	四	五	六
年	鶏	三	八	〇	一	〇	五	一
	アヒル	二	一	〇	五	一	〇	五
	ガチョウ	六	三	一	〇	五	一	〇
	七面鳥	六	二	一	〇	五	一	〇
	卵	一	〇	五	一	〇	五	一
	卵	一	〇	五	一	〇	五	一
年	鶏	三	八	〇	一	〇	五	一
	アヒル	二	一	〇	五	一	〇	五
	ガチョウ	六	三	一	〇	五	一	〇
	七面鳥	六	二	一	〇	五	一	〇
	卵	一	〇	五	一	〇	五	一
	卵	一	〇	五	一	〇	五	一

『苦小牧町史』 昭和十五年 苦小牧町

ホルスタイン種を一頭一五〇〜二〇〇円で購入、はじめは野草で飼育したが、のち牧草のチモシー、クロバー、オーチャードを栽培し飼料とした。三種のうちチモシーが主としてつくられた。

乳牛一頭から一日一斗五升の生乳がとれ、一升あたり四錢五厘で雪印乳業へ出荷した。

また、明治末期から大正時代にかけては、石垣牧場・山田牧場・高木牧場（覚生）などがあり、主として馬を放牧していたが、入植者の増加にともない、しだいに閉鎖していった。

林業 樽前山麓には、エゾマツ・トドマツを主体とする美林が带状に連なり、早くから官有林として開発がすすめられていた。

明治十三年、樽前官有林の樹種の調査が行われ同十四年には森林派出所が設けられた。同年三月、錦多峰官有林は小糸魚・樽前などの官有林とならんで旧公林に準じ、調査仮条令によって撰択林種表を作成した。錦多峰産の木材は勇拂方面等に送られ、家屋・船材・橋梁等に用いられた。

明治四十二年七月、官用材の管理と開発をはかるため、帝室林野局札幌支局苦小牧出張所錦多峰分担区駐在所が設置された。

駐在所は、一、一一六町歩に及ぶ所管面積を持ち、毎年約三〇町歩の面積に九万本のエゾマツを植林するとともに、

用材および燃料の払下げを行った。

おもに樹種として、エゾマツ・トドマツ・ナラ・ヤチダモ・アカダモ・カツラ・アオダモ・シナノキ・ホウノキ・ハリギリ（センノキ）・ハンノキ・キハダ（シコロ）・ドロ・シラカバ・イタヤ・アサダなどがあつた。

錦多峰分担区駐在所所管面積

名称	区分	面積	針葉樹材積	闊葉樹材積
錦多峰御料所		三、六六町九反七畝四歩	五七千石	四六千石
覚生御料所		一、一七町七反四歩	一三三石	三六千石
小糸魚御料所		一、八七町九反五畝九歩	四一石	三〇千石
計		一、二六町七反二畝一五歩	七〇千石	一、〇七千石

（『錦多峰村郷土誌』 錦多峰尋常小学校編）

年	区分	角	燃料
大正一〇年		六、三三石五	一、九四棚七
一一年		五、二〇石九	一、二三棚四
一二年		七、五九石六	八二棚五

※ 七石をもって一棚とする。

（『錦多峰村郷土誌』 錦多峰尋常小学校編）

木炭 太田の沢を中心とする五〇〇町歩ほどの山林で木炭の製造が行われた。二、三〇個の炭焼き窯があり、

製造 炭焼き、山子など三、四〇人が住んでいた。

木炭は、樹種により一等炭（イタヤ・アサダ）、二等炭（ナラ）、三等炭（シナ・ホウ・ハン）に格付されていた。

大正十二年に一七、三三〇俵、十三年には三三、五四〇俵が生産された。

価格は一俵あたり二〇〜三〇銭で、苦小牧、室蘭方面に出荷していた。

（三）鉱工業

砂の 大正年間、漁場経営不振から立ち直るため、川村嘉市は浜砂採取を行った。大正十一年に五、四二八ト採取し、十二年には一〇、八七四トンを採取し、夕張その他に出荷した。

大正十三年には、資本金二五、〇〇〇円で砂採取株式会社が設立され、全村あげて株主となり事業の推進にあたった。

マツチ 明治二十九年、井上利三郎によって井上製軸所が設立された。ついで、村山壬子郎が同三十三年に村山工場を設立した。井上製軸所ではマツチの軸木がつくられ、村山工場では小函マツチが製造された。工場で使用する接着剤は野生のノリウツギ（サビタ）の皮から採取したので、マツチ工場のことをサビタ工場とも呼ばれた。軸木にはエゾマツが用いられた。

村山工場は、創立当初職工二一人であったが、のち三工場となり、職工も一〇〇人を超えて活況を呈していた。

罐詰工場 昭和八年、高橋水産の錦多峰蟹罐詰工場が三群のあたりに建設された。毛ガニの罐詰が製造された。

養狐業 大正九年、山田直之助を社長とする資本金一〇万円の日本養狐会社が設立された。一〇数頭の銀黒色・十字・三毛などの狐が飼育された。この会社は大正六年にカナダから二〇匹を輸入、樺太で経営していたが、大正九年に錦多峰に移ったものという。

狐のエサは、魚肉（カレイ）、牛肉、馬肉、豚肉、鶏肉、兔肉、牛乳と多種にわたっており、年間経費一、四〇〇円を要したという。

五 教育と文化

錦岡 明治二十三年、錦多峰・覚生・樽前・小糸魚の四カ村しだいに人口が増加したので、小学校設立の機運がもりあがり、錦多峰村四カ村総代小島新五郎、苦小牧外十五カ村総代木村亀太郎の二人が代表となって設置願を提出、戸長山岡昌仲の副申もあつて設置許可となつた。

当時は、四カ村で戸数一三戸、人口八二人、生徒数男一〇人・女三人・計一三人であつた。校名は苦小牧小学校覚生教育所と称せられ、修業年限四カ年であつた。

明治三十年代には、マツチ工場等が設立されて急激な人口増加がみられた。村山工場の村山壬子郎は一〇〇人をこえる使用人の定住をはかるとともに教育の重要性を認識して校舎・校具及び俸給の一部を負担して覚生校の分校として錦多峰特別教授所の設置を出願し、明治四十年に許可された。

明治四十五年、錦多峰特別教授所を覚生校に合併した。

大正十一年八月、覚生尋常小学校を錦多峰小学校と改称した。同年十一月、川村嘉市より校舎敷地の寄付を受け、錦多峰村に校舎を新築した。（現校舎敷地に建坪八〇坪で建設）

大正十二年八月、尋常補習科（修業年限二カ年）を設置した。

昭和十五年、高等科を併置した。

昭和二十一年、苦小牧町立錦岡小学校と改称した。

昭和二十三年、苦小牧市立錦岡小学校と改称した。（五学級）

昭和二十八年、鉄筋ブロックの新校舎が落成した。（六学級）

昭和五十年度には、児童数七四〇人（二〇学級）を数えている。

凌雲 六三制の新教育制度の発足により、昭和二十二年六月、苦小牧町立西中学校錦岡分校として開校した。

中学校 同二十四年、錦岡中学校として独立、同三十一年には樽前中学校と合併凌雲中学校と改称、同五十年には生徒数二九七人（八学級）を数えている。

苦小牧 国立苦小牧工専は、昭和三十九年十二月三十日、文部省が苦小牧市に設置することを決定、校舎を錦岡に工専 新設することになり、同三十九年四月、弥生中学校を仮校舎に開校した。

校舎の新設工事は、昭和三十九年度から三カ年計画で進められ、翌四十年四月、第一期工事が完成移転した。

開校当初は電気工学、機械工学、工業化学の三科だったが、昭和四十四年に土木工学科が新設され、同五十年度の学生数は四科、七五九人である。

婦人 大正のはじめ、愛国婦人会苦小牧支部錦多峰分会が会員五名をもって発足した。大正十三年には会員一三団 体 人を数えた。

昭和十三年、大日本国防婦人会苦小牧分会錦多峰支部会が発足、出征兵士の見送り、留守家族・遺族の世話などにあたった。また、会費で食器・座布団などを購入、学校の教室で結婚式等を使用した。同二十年、終戦により解散した。会員数は発足時に八〇人、解散時に七〇人であった。

昭和二十二年、錦多峰（のち錦岡）部落会婦人部が会員三〇〇名をもって発足、映画会・料理講習会・編物講習会、各種講演会などの事業を実施した。国防婦人会当時の食器・座布団の貸出しによる資金があり、財政的には豊かであったが、会員数が多いため運営面で行きづまり、同四十一年に解散した。解散時の会員数は四三人であった。

昭和四十一年四月、錦岡婦人会（初代会長高橋クニ）が会員六〇人をもって発足した。解散した部落会婦人部有志によ

り結成されたもので、研修旅行・料理講習会・手芸講習会・祭典手伝い・文化祭参加・道婦連研修会参加・炊事遠足など多彩な事業を実施し、今日に及んでいる。

青年 青年団体については、次のような各種の団体があつた。

団体 大正四年三月、錦多峰青年団が発足した。

大正十一年三月、錦多峰処女会が発足、昭和四年に錦多峰女子青年団と改称した。

大正十五年七月、錦多峰青年訓練所が設立された。

昭和十年七月、錦多峰産業組合青年同盟が設立された。

樽前神社 明治二年の高知藩引継書「勇拂郡神社書上」として、錦多峰付近の神社名が記録されている。それに

と円空仏 よるとタルマイには権現社（梁間三間・桁間三間）、稻荷社（梁間九尺・桁間九尺）があり、錦多峰には稻荷社（梁間九尺・桁間九尺）があつたと記録されている。

権現社は樽前神社のことで、創建年代は不明だが、円空の鉦作観音をまつる権現社として知られている社殿である。明治二十年ごろ覚生にうつされた。鉄道の開通にともない、現錦岡付近が繁栄するようになり、大正十二年、社殿は再び遷座し、今日に及んでいる。

本尊の円空仏は、全高一尺五寸三分（四六センチ）、うち像高一尺四分の大きさのオンコの佛像で、背面に『たろまへのたけごんげん』と記されている。

作者の僧円空は、美濃国竹ヶ鼻（現岐阜県羽島市）の生まれ、入滅は元禄八年（一六九五年）と推定されている。

生年については諸説あつて一定しないが、寛永五年（一六二八年）、元和七年（一六二二年）、元和二年（一六二六年）などがあげられている。



錦岡の樽前神社（昭和50年）

〔苫小牧市史編さん室蔵〕

二十三才のとき出家して富士山や加賀国の白山にこもって修業をつみ、美濃国の池尻弥勒寺を再建、師勝村の高田寺で金剛・胎藏両部の密法を受けたのち、諸国遊行の旅に出た。北海道に渡ったのは、寛文五年から六年にかけてと考えられ、錦岡樽前神社権現像をはじめ約四〇体の佛像を道内で製作していた。

六 交通と通信

錦岡駅 錦多峰駅は明治三十一年二月に北海道炭鉱鉄道室蘭線錦多峰駅初代駅長濃美銀作）として開業された。戸数八〇戸、樽前山麓の木材輸送を主なる業務としていた。

明治三十九年十月、北海道炭鉱鉄道が政府に買収されて国鉄室蘭線錦多峰駅となった。

大正六年、駅舎の改築が行われた。大正末期には、建築用の砂の採取が盛んとなり、品質も良好であったので需要が増加し、錦多峰駅は道内でも屈指の砂の発送駅となり、多忙を極めた。

昭和十八年、男子職員が応召等により減少したので、九名の女子職員が採用された。

昭和二十五年九月、駅名を錦多峰駅から錦岡駅に改称した。

乗車旅客数および発送貨物数の推移は次のとおりである。

年次 乗車旅客数 発送貨物数

大正四年 一〇、六〇一人 五、五七一屯

大正十二年 二三、三〇〇人 一五、〇四〇屯

昭和二十七年 八〇、一五〇人 三七、二四三屯

昭和三十五年 七二、七〇九人 一一〇、五四四屯

また大正十一年当時の主な発送貨物は、砂・木炭・木材・薪・魚粕・野菜・鮮魚などであり、到着貨物としては木材・米麦・ワラ製品・石炭・雑穀・酒類・味噌・醤油などが記録されている。

錦岡郵便局 昭和三年八月、錦多峰駅前に錦多峰郵便取扱所が開設された。(所長川村嘉市)

昭和四年、錦多峰郵便取扱所は無集配三等郵便局に昇格した。

昭和十四年、電信および通話事務が開始された。

昭和十七年、電話交換業務が開始された。

昭和二十年、錦多峰郵便局を錦岡郵便局と改称した。

昭和三十三年、現在地に局舎を新築移転した。

町営電気 大正十三年、白老村では苦小牧の王子製紙から電力の供給を受けることになった。その配線経路地の錦多峰では、この計画に便乗して電灯点火が計画された。

大正十四年に、白老村、苦小牧町および王子製紙と電力送受と工事費負担方法に関して契約が結ばれて工事が開始された。

翌十五年一月四日、待望の電力が錦多峰に供給された。

運送業 明治三十一年二月に小保方卯市が貨物取扱所早達組代理店を開いたが、同三十三年に苦小牧駅前に移った。

大正八年、川村嘉市は川村運送店を開業、錦多峰駅公認運送店として、木材・木炭・薪・水産物などの運送にあたった。

大正十二年、山田佐右衛門が共同運送店を開業し、主として砂の運送にあたった。

樽前 錦多峰から樽前山への登山路は早くから開け、大正十二年に樽

登山 前登山案内組合（組合長・奥山俊次郎）が結成されて、登山客の案内にあたった。樽前登山案内組合帳によると、当時の登山の実態がうかがわれる。

▽里程・錦多峰駅より麓まで二里、麓から頂上まで一里十八町。

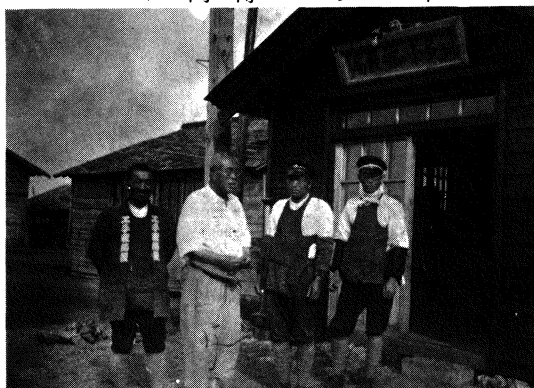
▽時間・往路五時間、復路四時間。

▽案内料・一人三円五十銭。支笏湖を廻る場合は二円、夜行を要するときは五十銭を加える。

▽宿泊・大人二円、学生生徒は一円五〇銭。毛布・弁当を持参する団体ならば小学校宿泊の便を与えられた。

▽携帯品・水は「涸沢ヨリハ一滴ノ水モ無シ故ニ一人当リ五合位ハ必ず用意スルコト」とあり、「弁当ハ可成多ク、薬品ホウ帯、五月又ハ十月ノ寒キトキニ登山スル方ハ上衣一枚モ余分ニ用意スルコト」と注意を加え、『酒類ハ一切持参セザルコト』と指導していた。⁽¹²⁾

注 (1) 『苦小牧町史』昭和十五年 苦小牧町



錦多峰郵便局と工手（昭和7年）

〔苦小牧市史編さん室〕

(2) 『高知藩引継書』明治五年 高知藩

(3) 『紋鼈函館江差巡回紀行』新しい道史第四卷一号

(4) 『林重右衛門一件書類(写)』苫小牧市史編さん室編

(5)

(6) (3)に同じ

(7) 『郷土の研究第三号』昭和四十六年 苫小牧郷土文化研究会

(8) (9) (1)に同じ

(10) (11) (3)に同じ

(12) 『錦多峰村郷土誌』錦多峰尋常小学校編

糸井

一 部落の起源

地名の 糸井はもと小糸魚こいといと呼んでいて、アイヌ語「コイ・ド・イエ」で（コイ・浪、ド・イエ・くずす、イ・ところ）という

由来 意味。ここは海岸で土地が低く、時化しげのたびに浸食され、土地が削られたことに由来したものである。この地名は相当古い絵図にも見られるが、明治六年の勇払郡開拓使出張所の郡内村落整理統合時には小糸魚村が確立し、東は有珠川、西は小糸魚川、北は十哩停留所アール西方の地点を結んだ細長い一帯をその村地域とした。

その後、小糸魚村は一つの自治区域を形成してきたが、人口が極めて少なかったことから、錦多峰（錦岡）村との合同によって行われる場合が多かった。昭和十九年一月の字名改称地番整理の実施により『糸井』と改称した。

遺跡の この地の海岸から四キロほど奥は海岸線とほぼ平行に丘陵地帯が続いており、これは以前の海岸線を示**分布** すもので、この丘陵地に遺跡が分布しているが、パトロールによって発見された程度で、本格的な発掘調査が行われておらず、詳細については不明である。

現在まで知り得ている遺跡と主な遺物をあげれば次のとおりである。

①有珠川遺跡、有珠川上流の左岸、台地の崖下から発見されたもので、縄文後期の土器片と後北式土器の大型破片が出土した。②糸井A遺跡、昭和三十四年、苫高郷土史研究部のパトロールにより発見、同四十一、四十二年に表面採集や部分的な調査が行われた。遺跡は小糸魚川の右岸で、西にのびた舌状台地上で、現在はまなすゴルフ場にな

つてゐる。遺物は、縄文早期・絡糸体圧痕のタンネトーE式をはじめ、前期・中野式、中期・余市式、晩期・タンネトーL式、続縄文など各層にわたっており、石器の種類も多い。③糸井B遺跡、糸井駅の北方五・五キロの地点、有珠川と小糸魚川の中間にあたる丘陵の西緩斜面、宅地造成のため一部丘陵地が削られた時に遺物が出土、縄文早期から晩期、続縄文、擦文期にいたるかなり長期間にわたる遺跡である。一部には擦文期の墳墓が存在するものと思われる。④泉沢遺跡、昭和四十八年、糸井B遺跡の北、市清掃センター向かいの整地された丘陵緩斜面で発見、擦文式土器片がみつかつてゐる。

二 自然環境

地 質 戦前糸井の国道沿いに『長尾の沼』という細長い沼があり、これは有珠川、そして苦小牧川に続いていてここではスケート大会や製氷も行われ、コイの養殖なども行われていた。

国鉄線路から山側は平原が続き、その奥に樽前山の秀姿と噴煙を仰ぎ、反対側は太平洋に臨み、有珠川、小糸魚川の河川の流域に当たり、一帯は支笏、恵庭、樽前の各火山灰層で構成され、その厚さは二メートルから数一〇メートルにもおよんでいる。丘陵部には有珠ノ沢、小泉ノ沢、ブタノ沢など各沢が深く入り込んでいる。

植 物 その昔は海岸段丘から沼地一帯の湿原、草原、山林と続く多様な地形で植物も極めて豊富であつたが、最近になって宅地造成が完全に近いほどどこされ、植生にも大きな変化があつた。

海岸砂丘にはハマボウフウ、ハマヨモギ、ハマエンドウ、ハマナスなどがみられるが、護岸工事が進みその数も極めて少なくなつてゐる。

海岸段丘からの草原にはその昔はスズランも咲き、樹木もほとんどなかったので牧場に利用されていた。国道と鉄



糸井国道沿いの植物

(昭和50年)〔苫小牧市史編さん室蔵〕

道線路間にはイタドリが群生し、一部にキヌゲの群落、ユリ類、アヤメなどがみられる。丘陵部では、イタヤ、アサダ、ナラ、シナ、ホウ、セン、カツラなどの樹木が多く自生し、樽前山麓にはエゾマツ、トドマツが多い。

動物 宅地造成の行われる前の草原にはヒバリの巣が無数にあった。そのほかベニヒワ、ウグイス、オオヨシキリ、オオジシギ、山林では今でもカッコウ、シジュウカラ、コガラ、シマエナガ、シロハラゴジュウカラなどがみられる。コウライキジも多い。山麓近くではヒグマ、キタキツネも見られる。

三 部落の変遷

部落の

形成

漁業家として早くから根をおろしていた。

小糸魚ハ白島萬吉宿屋アリ、土堀ヲ環シタリ、外ニ鍛冶屋アリ、舊道ニ沿フテ寺アリ、東京芝ノ別レナリト云ヒ居レリ、僧侶ハ神主之ヲ兼ネ居レリ。

(『苫小牧町史』昭和十五年 苫小牧町)

慶応年間に移住した八戸伊代吉は小糸魚の様子を伝えており、明治六年の『北海資料』にも「苫小牧ヨリ半里計リ(当時の苫小牧は現中央院付近が中心地であった)手前ニ小糸魚ト云所アリ人家五、六軒萬吉ト云旅籠屋アリ」と記している⁽¹⁾。小糸魚は安政末期から白島萬吉を中心に小さいながらも宿屋、鍛冶屋^(カジ)、お寺などがあつて一つの集落を形成していた。この場所について、明治四十三年に小糸魚で生まれた菅原平治は現在の…三星の工場付近で、鍛冶屋の跡があ

つたといつており、この辺が糸井部落発祥の地と思われる。

明治四年、高知藩が行つた勇払郡永住人調査では、菊地定吉四人、白島萬吉九人（息子夫婦と二世帯）が永住人で、ほかに橋本勝蔵二人、榊瑞枝二人がいた。⁽²⁾ 白島萬吉は勇払郡惣小頭で、村役人をしており、榊瑞枝は神主兼僧侶であつた。その後、白島萬吉は漁業を辞し、小糸魚村は一時衰退し、春から夏にかけて出稼漁夫でにぎわいを見せるのみであつた。

漁業・農業 明治末期になると漁業の田村馬吉、吉田鉄太郎、菅原徳右衛門、農業・牧畜の港定吉、和久井今朝の定住者 次郎などの定住があつて、その基礎がかためられていった。

大正六年六月一日、国鉄室蘭線の小糸魚信号所が設立され、苫小牧駅長管理により、信号事務と一部旅客列車の発着を取り扱い、有珠ノ沢、小泉ノ沢、ブタノ沢などに炭焼きが入るようになり、大正十二年には三〇戸を数えるようになった。職業別では漁業（雇を含む）一〇戸、農業・牧畜三戸、炭焼き・日雇一〇戸、信号所七戸で、農業の方はまだまだの状態であつた。

また、明治三十年四月一日、国有未開地処分法の施行があつて、小糸魚地区は明治年間に無償貸付けをうけた件数は旧法で一四件、新法で三四件であつたが、未着手、未成功のため取消し命令をうけた件数が六割にものぼっているのが特色で、農業には適さないと見られていたのである。

大正年間にもぼつぽつと入地が続いていたが、昭和三年に丸拓会社の造田事業が開始され、同五年には四三戸、三二人で、丸拓の事業のため男が二二四人と極めて多くなつてゐた。同十年には民有未墾地の入植があつて、七四戸、四四五人となつた。

この人口は戦後まで続いていたが、同二十五、二十六年に開拓者の入植が続ぎ、同三十年には一一一戸、六一八人

となった。

住宅地

戦後、苫小牧港の修築により本市は著しい発展をとげたが、苫小牧市街に近い糸井地区は住宅地としてに姿貌 大きくクローズアップされるようになった。昭和三十五年に糸井東に一六戸の福祉住宅が建設されたのはじまり、昭和四十九年度末には糸井地区に第一種六六八戸、第二種二六〇戸、糸井東地区に第一種一六六戸、第二種一四八戸、福祉一五〇戸の公営住宅が建って本市最大の公営住宅街を形成している。

一方、苫小牧市は本市のように発展のめざましい都市にあっては、市の将来を考えた機能的なまちづくりが必要であるとし、昭和四十二年度から五カ年計画をもって一一八万平方メートルのニュータウンの建設に着手した。そして、市民のマイホーム建設の要望にこたえて同四十四年度から一般住宅地の分譲が開始され、同四十八年度までに一般住宅四四万平方メートル、商店・商用地二万平方メートルが分譲され、年々家が新築されていった。また、一般不動産業の土地造成も続き、日軽金をはじめ、苫小牧ケミカル、日東肥料、北日本倉庫、北海土建、苫小牧海運などの住宅街も形成され、この住宅地内には学校、幼稚園、保育所、郵便局などの公共施設もでき、スーパーマーケットや商店の進出もあって見がえるようなニュータウンとなり、ほとんど昔の面影がなくなってしまった。人口の方も同四十五年、四、八三七人、同四十七年、一万九〇四人、同四十九年には六、二五六戸、一万九、六三四人となっている。

苫小牧と糸井の境界となっている有珠川は近年になって整備され、山手地区の丘陵部前を通し、旧佐羽内沼付近から山に入る河川が新設され、市では護岸整備とともに河原に桜などの樹木を植え、川岸公園として新名勝にする計画である。また、市内の有志をもって結成された『ななし会』では、有珠川が魚の住める川にし、苫小牧のふる里づくりをしようと啓蒙運動、稚魚放流などを実施することになっている。

四 産 業

漁 業 小糸魚地区はイワシ漁場として相当古くから、出稼人による漁が行われていたが、安政年間になって白島萬吉の定住があり、白島は勇払郡ではただ一人永住人としてイワシ漁を行い、かたわら宿屋の経営も行い、初期勇払郡の実力者の一人であった。

明治三年、高知藩が開拓使に報告した文書の中に「永住人白島萬吉、コイトイ第二番屋居住、萬吉五十九歳、妻五十四歳、長男鉄藏二十五歳、鉄藏妻二十三歳、鉄藏妹十六歳、畑四反六畝所有、持馬五十八頭、雇人数人」とあり、当地方永住人の中では第一位の産家であった。

開拓使は明治三年、場所請負制度を廃止し、漁場持制度とするが、内容的には請負制度とあまり異なることはなく、便宜的に名称を変更したにすぎないものであった。だから、漁場持以外の者が、自給自足のためではなく、企業として漁場の権利を持ち、生産をあげるということは容易なことではなかった。ところが、白島萬吉はこの一角に食込んでいたのだ。

明治五年、勇払郡出産税（国税）取立調をみると、三、六八四円二七錢五厘で、漁場持山田文右衛門がその約三分の一の七、〇九五円六〇錢五厘六毛の生産額で、税は一、〇六四円四錢九毛であり、あとは十二人の出稼人と永住人一人で、いずれも一、五〇〇円前後の生産額で、二〇〇円前後の税であった。永住人とは白島萬吉であり、漁業生産額では一、二二七円、税が一五〇円八錢五厘七毛であった。

イワシ漁というのは、明治中期まで函館の豪商の仕込みをうけなければできない、というほど一度に多額の費用を必要とした漁であった。これを白島が自費をもって行っていたことは、相当の資産家であったといえる。

他の出稼人についてみると、これらすべてが山田文右衛門とのつながり、あるいは商取引のある問屋筋のものであった。文右衛門、出

稼人のすべてが「函館大町福島屋与吉売払代」などあって、すべて函館問屋を相手に製品（魚粕など）を売りさばいているのに対し、白島は「仁恵丸五郎売払い」とあって、漁場持や他の出稼人の製品を積みとりに来た船頭との直接取引であった。こうしてみると、白島萬吉こそ苫小牧地方最初の実業家であったといえる。

（堀江敏夫『ふるさと百話』昭和四十七年 朝日新聞）

出稼人漁業家としては函館内濶町の秦理四郎、同白鳥宇兵衛などであった。なお、白島は明治十年代後半に漁業をやめている。

明治三十五年、漁業法が制定公布され、七月一日付で出願漁業者に漁業権が免許されたが、小糸魚地区はイワシ地曳網一三漁場で、苫小牧村の石垣彦三郎、中山清作、渋川平八郎、京谷卯之松、錦多峰村の川村勘三郎など地元漁業家の進出があったが、小糸魚の漁業家はなかった。

小糸魚地区漁業権者一覧表（明治三十五年七月一日現在）

免許番号	漁業権者住所氏名	漁場の位置	免許番号	漁業権者住所氏名	漁場の位置
勇鰐特第六五号	函館区 桂久藏	小糸魚村（畠第七六号）	勇鰐特第七二号	門別村 飯田信三	小糸魚村（畠第八三号）
六六号	苫小牧村 石垣彦三郎	（畠第七七号）	七三号	函館区 渡辺佐兵衛	（畠第八四号）
六七号	〃 渋川平八郎	（畠第七八号）	七四号	〃 〃	（畠第八五号）
六八号	〃 石垣彦三郎	（畠第七九号）	七五号	錦多峰村 川村勘三郎	（畠第八六号）
六九号	〃 中山清作	（畠第八〇号）	七六号	苫小牧村 石垣彦三郎	（畠第八七号）
七〇号	函館区 筑前善太郎	（畠第八一号）	七七号	京谷卯之松	（畠第八八号）
七一号	〃 〃	（畠第八二号）			

（『免許漁業原簿』北海道経済研究所蔵）

明治末期になって田村馬吉の移住があり、このころから漁業による定住者があらわれ、雇漁夫もこの地に住みついて各漁場で働くようになった。

大正十一年度の地方税水産税免許漁業割では、着業しない漁場もあったが、九漁場で漁が行われ、税額は一等（春秋）三七円三八銭、二等（春）一八円六九銭であった。

大正十一年度着業漁場一覧表

等級	免許番号	位置	賦課額	氏名	等級	免許番号	位置	賦課額	氏名
一	勇鰐特第六五号	小糸魚	三七、三八 円 銭	桂久藏	一	勇鰐特第七二号	小糸魚	三七、三八 円 銭	前田健之助
一	六七号	〃	三七、三八	田村馬吉	二	七三号	〃	一八、六九	藤田平太郎
一	六八号	〃	三七、三八	中村捨次郎	一	七六号	〃	三七、三八	中村捨次郎
一	六九号	〃	三七、三八	中山清作	一	一二三号	〃	三七、三八	田村馬吉
一	七一号	〃	三七、三八	谷川鶴治					

（『議決書』 大正十二年 苦小牧町会）

大正末期より樽前浜の地曳網漁は不振をたどり、昭和に入ると次第に定置網への切換えが行われ、小糸魚では田村長太郎、中山清作、杉本福松、小堤甚三などが定置網漁業権を得て漁を行った。

戦後を迎え一時イワシの大群が押し寄せたこともあったが、昭和二十六年をもってその終末を告げ、苦小牧の漁業にも大きな変化があった。糸井沿岸はホッキ貝が多く、カレイなどもみられるが、今後はホッキ貝を中心に育てる漁業が必要であり、東部漁場を失った苦小牧漁業にとって糸井以西に寄せる期待も大きいものがある。



かつては漁船が並んだ糸井海岸も護岸されてしまった
(昭和51年)〔苫小牧市史編さん室蔵〕



森漁場跡(昭和51年)
〔苫小牧市史編さん室蔵〕



三星糸井工場(昭和51年)
〔苫小牧市史編さん室蔵〕

現在糸井沿岸には田村長太郎の「苦小サケ定第二号、同三号」のサケ小型定置漁業権があり、北洋漁業に出漁している森七次の漁業事務所がある。

農業 糸井地区で農業をはじめて行つたのは永住人の白島萬吉で、明治三年には一反四畝二歩の耕地を所有していた。そのほかでは同四年に橋本勝蔵が八歩、神瑞枝が六歩を開墾した。⁽³⁾

明治十一年の收穫物では馬鈴薯^{ばれいしょ}八石、大豆一斗二合、胡瓜^{きゅうり}一、〇〇〇顆、大根一、五〇〇本であつたから漁業などのあい間に農作業を行う程度のものであつた。

その後、港定吉、和久井今朝次郎などが牧畜を兼ねながら農業を行つていた。

大正に入ると苦小牧町は『産業指導方針』をたて、これまで本町では植苗、ニナルカ、樽前などごく限られた地区でのみ稲作が行われていたが、土地改良事業の一環として水田造成可能区域があげられた。これによると糸井地区では、小糸魚川を灌水流域とし、水田可能見込面積一〇〇町歩、有珠川流域で三〇町歩の二カ所であつた。

そして、昭和二年になって丸拓会社が造田事業のため小糸魚およびニナルカ地区に入地し、翌三年から水田事業に着手し、本町の水田面積が飛躍的に増加することとなった。すなわち、同二年の米作では作付面積約二六町、收穫高三六石であつたものが、同三年には作付面積二六七町、收穫高一、〇〇四石、同四年には一二二町、收穫高一、〇五一石というものであつた。⁽⁴⁾

昨秋以来巨資を投じ小糸魚、厚真の大豆野を開拓造田せる丸拓會社の水田は何人も收穫を氣遣ひつ、あつたことは疑ひない事柄であるが、天候順調ならざりしにも拘はらず、既に大部分は結實完全にして反當り三俵確實の收穫豫想を得た。柴田組庭前の立木数株を移植し、二般の参考に供しつ、あり、丈三尺乃至四尺五寸分けつ十本乃至三十本穂長三寸乃至八寸と斷言する。之れに依て膽振不毛の原野は美田と化し大苦小牧建設の基礎を強固に築かれ食料問題解決の曙光を見、且不況を嘆きつ、ある苦町の經濟界の眠りを覺まし生



糸井の農家（昭和50年）〔苫小牧市史編さん室蔵〕

活安定の前示を與へるものである。

（胆振中央新聞『昭和三年九月二十八日号』）

しかし、こうした丸拓の造田事業に対する期待にもかかわらず、昭和六年、七年の凶作により、特に同七年には一四町歩の作付けがありながら、わずか四四石にとどまった。そして、小糸魚での水田事業も試作程度にとどまり、その後も水田事業はあまり活発には行われなかった。

戦後を迎え農地解放が行われ、糸井地区の国鉄線路より丘陵地にかけての一带に開拓者が入植した。当初は荒地のため相当の苦労があつたが、野菜や鶏卵の都市近郊型農業によって次第に農業基盤も確立していった。

だが、本市の発達は著しく、この地は本市の住宅タウンとなり、農家も一戸、二戸と農地を手ばなすこととなり、昭和四十七年末現在で専業農家八戸、兼業・自給農家が八戸となり、現在ではさらに減少している。

その他 大正期にはいわゆる木炭ブームがあり、本町の産業は木炭を原料としたカーバイト工場が立地し、その需要が大きく、農家においては副業として製炭業を行うも



糸井の商店街（昭和51年）〔苫小牧市史編さん室蔵〕

のが多く、さらに製炭事業家が多く、焼子を作ったの焼子制度による木炭製造も発達し、本町の森林地帯には多くの製炭夫の入林があった。糸井地区では、有珠ノ沢、小泉ノ沢、ブタノの沢を中心に製炭業を行い、一時は糸井地区人口の半数を製炭夫が占めることもあった。しかし、これも昭和初期にはそのピークも過ぎ、次第に減少してわずかの人が細ぼそと炭を焼く程度となった。

有珠川より少し西方の方に細長い沼があったが、『長尾の沼』といって、ここでは製氷事業、コイの養殖事業が行われ、苫小牧に出荷していた。また、この沼ではスケート大会も行われたことがあった。

そのほか、農家の副業、あるいは兼業として養鶏、養豚事業が小規模ながら行われた。

最近では自動車関係の整備、板金工場、モータープール、プロパン工場、それに駅前にあった三星製菓のパン工場などがある。

商業では、スーパーマーケットとして生活協同組合の糸井店、糸井北店、糸井ショッパーズ、糸井総合スーパー、糸井

リビングセンター、宮の森スーパーなどがあり、飲食店もあつて一部では商店街の形成もみられる。

五 教育と文化

小学校 戦前、糸井地区には小学校がなく、苫小牧の小学校まで歩いて通学しなければならなかった。また、青の設置 年団などや各種組合活動についても、苫小牧あるいは錦岡のそれに加わって行動していた。

明治四十三年、糸井の地で生まれた菅原平治は小糸魚当時のことについて次のように記している。

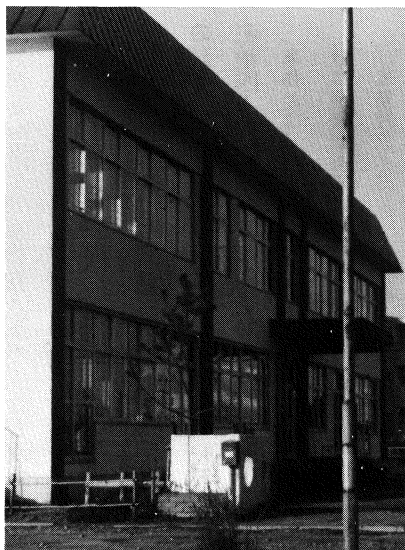
糸井とは、昭和の初めまでは小糸魚と呼ばれ、一望の原野に人家が点々とあるに過ぎぬ一寒村でありました。わずかに国道の南側だけに漁家があるといった具合でありました。そして春になると漁場には本州よりたくさんの漁夫が来て相当な人口です。漁場が終れば又寒村です。

沿岸は樽前場所（又は漁場）と言われ、遠くまで鳴り響いた有名な所でした。当時、大漁の時などは、夜勇払から白老あたりまで漁火と申しますが、海も陸もたいまつ一色でみるからに見事な夜景でありました。最近はずばりいwashもとれなくなりました。現在は年々人家も増えて苫小牧港の開港により大糸井に変貌致しました。

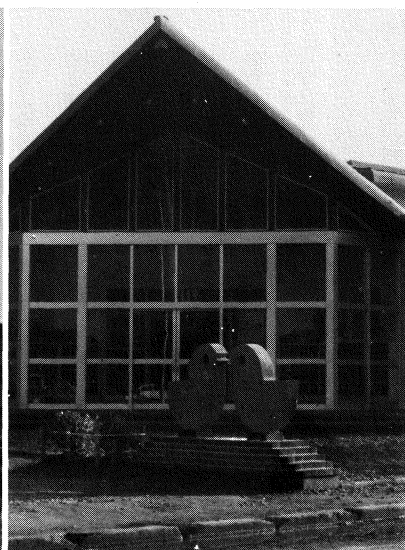
今思うと私の出生を申さねばなりません。私は、北海道胆振国勇払郡苫小牧村大字小糸魚村字小糸魚番外地という所で生まれました。何と長い地名ではありませんか。そして現在地より六歳にして公立苫小牧尋常高等小学校へ入学し、約五軒の道程を毎日徒歩で通学を致しました。二年生の時、新しく出来た分校である東小学校に転校し六軒の道程を一年通学致しました。昔の事で和服に下駄ばきでありました。今国道三六号線を流れるように走る車の姿を見るにつけ今昔の感ひとしおのものがあります。

〔糸井〕 昭和五十年 苫小牧市立糸井小学校

苫小牧港の開港後、本市の住宅地として著しく発展した糸井は、小学校新設が急務となり、昭和四十八年一月一日、



ピノキオ幼稚園 (昭和50年)
〔苫小牧市史編さん室蔵〕



いとい北保育園 (昭和51年)
〔苫小牧市史編さん室蔵〕



糸井の高層住宅団地 (昭和51年)〔苫小牧市史編さん室蔵〕

日軽金住宅などでふくれあがる山側地区に日新小学校、同五十年四月一日、海側に糸井小学校が開校した。さらに現在中学校新設計画が進められている。

幼稚園と

糸井ニュータウンは計画的な街づくりによって造成が進められ、その区画事業においてもあらかじめ、保育園 公共施設などの設置場所が決められており、昭和四十五年から急速な発展をとげ、この地域での幼稚園設置者を募集した。

昭和四十六年九月に室蘭市の学校法人坂本学園が設置を希望して申請し、これは同年十月八日に契約者として決定し、坂本学園の苫小牧進出が決定した。

昭和四十八年二月十五日、『学校法人坂本学園ビノキオ苫小牧幼稚園』は道教委の設置認可を受けたが、当初は資金がつかず、二学級八〇名をもって同年四月十日に入園式を挙行したが、夏休み期間中に二階部分を増築して、翌四十九年には七学級二八〇名となった。

保育園は昭和五十年五月一日、市費七、七五〇万円をもって補強コンクリートブロック造り平家建て六六〇平方メートルの『苫小牧市立いとい北保育園』が開園した。

昭和五十年五月現在一二〇名を収容している。

糸井 糸井には小魚糸川の上流にある小山に山の神社、国道沿いに海の神社がある。

神社 山の方の神社は小魚糸川が沢となって入っていく手前の小山にあるが、この小山は河川作用によってできたものと思われ、高さ二〇メートルほどで神社はこの山頂にある。この小山の奥にはニュータウンとして知られる宮の森団地があり、苫小牧としては変わった地形である。

大正末期に建立され、祭神は八幡様で六月十五日が祭日となっている。



山の神社(昭和50年)〔苦小牧市史編さん室蔵〕



海の神社(昭和50年)〔苦小牧市史編さん室蔵〕

海の方の神社は国道沿いの海側にあつて祭神は稻荷神社、祭日は八月九日、十日である。

六 交通と通信

国 鉄 糸井駅は昇格するまで小糸魚信号所といつて、大正六年六月一日に設置され信号事務と一部旅客列車の発着を取り扱つた。その後、同地区の開拓が進められ、昭和七年には信号所勢圏戸数が五八戸を数えることになり、苦小牧町は同年三月、鉄道大臣、室蘭運輸事務所長に簡易駅に昇格させる陳情運動を行った。

小糸魚信号所ヲ簡易駅ニ昇格ノ件陳情

膽振國小糸魚信号所ヲ簡易停車場ニ変更セラルル様特別ノ御詮議相仰度此段及陳情候也

昭和七年三月二十二日

苦小牧町長 飯田 誠一

鐵道大臣閣下

理由書

膽振國小糸魚信号所ハ同國苫小牧駅ト錦多峰駅間約十料ノ中間ニ在リ、附近開拓ノ進捗ニ伴ヒ現在戸数人口産額等別表ノ如ク、尚今後開懇利用シ得ヘキ地積多ク交通ノ便加ハラハ一段其ノ進展ヲ促進シ得ヘキハ疑ヲ容レス、而シテ現今ハ全所ニ於テ信号事務ノ外上リ二六二列車及一二〇列車並ニ下リ二一七列車ノ各客車ノ停留交換ヲ取扱ハレツツアリ、依リテ該各列車ニ旅客ノ乗降ヲ許サルレハ附近住民ノ幸福交通上ノ利便ハ之ニ過キス、尚進ンテ各列車ノ停留回数ヲ増加セラレ一般貨客ノ御取扱ヲ開始セラレ普通駅ニ改メラレンコトヲ懇願ノ至ニ不堪關係地域住民ヲ代表シ茲ニ謹テ陳情候也

小糸魚停車場附近戸口産額調

区分	現在戸数	将来戸数	現在耕地面積	将来耕地面積	現在生産高	将来生産高
農業	三五	二二〇	一、四八二	五、一八二	一三、五二八	五一、八二〇
漁業	二三	四四	一	一	五六、〇二八	七七、五二八
計	五八	二五四	一、四八二	五、一八二	六九、五五六	一二九、三四八

〔苦小牧町史資料―陳情集〕 苦小牧町〕

その後もしばしばこの運動は続けられたが、一向に実現をみなかった。そして、この運動は戦後に持ち越されたのである。しかし、昭和三十年九月になって、国鉄は赤字財政を緩和するために小糸魚信号所ほかを廃止する計画をたてたのである。

苦小牧市は、市の発展は西部にも伸びており、工場誘致などの計画もあつて、是非とも必要であること、小糸魚信号所廃止よりも駅に昇格すべきであると、札鉄局ほか関係者への猛陳情を続けた。そして、市費五七〇万円をもって駅舎とホームを新設することにより、昭和三十一年四月一日、『糸井駅』に昇格した。

市 営 市営バスの乗入れは昭和二十八年三月、錦岡線八・五キロの免許を得て、その通過地として停留所が設けられ、一旦二往復したのにはじまり、その後の本市の発展によりバス本数も増加し、昭和五十年十二月には三条糸井線（苦駅前―三条糸井）一四往復、糸井団地環状線（大通り・西高校前経由）三〇回線、そのほか糸井・宮の森線（苦駅前―宮の森団地）、糸井・常盤団地線、シーアイ団地線、鉄北線、急行糸井団地線などがあり、市街地と住宅団地を結ぶ交通路は極めて便利になった。

郵便局 糸井地区は、宅地造成によって本市の新興住宅地として発展し、日軽金など進出企業の社宅団地も形成の設置 され、昭和四十二年ころから見る見る発展していった。このため、同四十四年九月一日、糸井三四八番地に『糸井簡易郵便局』が開設された。その後も糸井地区の発展はめざましく、郵便局新設という地域の要望が高まり、同五十年十月八日、糸井三二番地に特定局の『苦小牧糸井郵便局』が開局、これまでの糸井簡易郵便局は『苦小牧糸井北簡易郵便局』と改められた。

電 気 苦小牧市街には明治四十四年十二月から電灯がついたが、糸井地区には昭和四年七月一日、白老村への送電 配電線路の契約を一部変更して国鉄小糸魚信号所に供給したのが最初であった。この時、部落民からも部

落供給についての強い要望があったが、当時は昭和初期の不景気な時であり、苦小牧町（当時は町営電気）はその費用を捻出することができないとして実現しなかった。その後、同八年になって、部落需用者一同から総工費の過半におよぶ寄付の申し出があり、町もこれにこたえて五一灯に供給することになった。同年七月二十日、工事に着手し、配電線延長の二、三六メートルは八月五日完成、同月七日より供給を開始した。

注（１） 林顯三『北海資料』明治三十五年 富山房

（２） 『高知藩書類』明治五年 高知藩

（３） 『勇払郡各村畑反別調帳』明治五年 開拓使

（４） 『事務報告』昭和三、四年 苦小牧町

弁 天

一 部落の起源

地名の 勇払川東岸に弁天社（財天社）が建立されたことがあり、
由 来 この付近にある沼を弁天社に因み『弁天沼』とよび、後
に付近一帯を『弁天』とよぶようになったのであろう。

昭和三年に設定された苫小牧町の字名中には『苫小牧町大字勇払
村字弁天沼』とあり、『弁天』は古くは『弁天沼』と呼ばれていた
のである。弁天沼には適当なアイヌ語名が見当たらないが、浜弁天
付近は『トユウフツ』とよばれていた。ト（沼）ユウフツ（勇払（川）
とは「沼のある勇払（川）」という意味であるので、現在小規模に残
っている沼が、かつては大きな沼、湿地帯があり勇払川にそそいで
いたので名付いたのであろう。^{（1）}

一一 自然環境

位置 苫小牧市の中心部から見ると北東に位置し、南は太平洋
に臨み、東は静川地区をはさんで厚真町と接し、西は安平川を境界
に勇払、北は柏原地区と接している。

地質と 今から約五、〇〇〇年前ころは内陸深く海が進入し、



やがて変ぼうする弁天地区（昭和50年）〔苫小牧市史編さん室蔵〕

地形 その先端は美々、御前水付近まで達していた。今日台地に残っている貝塚はこのころのものである。この時期には弁天沼もなく、すべてが海の底にあった。やがて海退がはじまり、徐々に陸化が進み今日の姿を現しはじめたのである。こうして勇払原野は形成されていった。

弁天地区の地質は、ほとんどが第四紀の堆積物からなっている。地形は、勇払原野本来の平坦な湿原が広がり、弁天沼をはじめ小規模な沼が点在する。部落名の由来となった弁天沼は、河川が運搬する土砂により埋められた勇払原野の中にあつて、埋残された地域（沼）となつて今日に残っているのである。その面積は、かつては今日より大きなものであつたであろうことは容易に想像することができ、年ごとの植物生産により生じる堆積物、排水工事などにより現在の姿になつてきた。

植物 弁天地区は海岸線に砂丘が発達し、この背後に低湿地が一面に開け丘陵部まで続いている。こうした地形環境のもとに植物相も変化し、次のような植物が見られる。

浜弁天地区は、ハマボウフウ、ハマエンドウ、シロヨモギ、ハマナス、コウボウムギ、ハマヒルガオ、ハマニガナなど海滨植物が多く、弁天沼を中心とする低湿地帯はヨシが優占種で、他にマコモ、アブラガヤ、ススキ、ナカボノシロワレモコウ、ワタスゲ、サワギキョウ、クサフジ、エゾヨモギ、エゾミソハギ、ホザキシモツケなど各種の植物が見られ、ヒオウギアヤメやエゾスカシユリなどの花期は美しい。その他、弁天沼周辺の湿地では食虫植物として知られているモウセンゴケも見られる。

樹木は少なく、丈の低いヤチハンノキ、エゾノコリンゴ、イヌコリヤナギ、ノリウ



弁天地区の海滨植物（昭和48年）
〔苫小牧市史編さん室蔵〕

ツギなどが見られる。

動物

弁天沼周辺の湿原は、鳥類にとって絶好のすみかとなっている。鳥類は、オナガガモ、コチドリ、チュウダイサギ、マガモ、ヒシクイ、オオハクチョウ、ハクセキレイ、キンクロハジロ、コウライキジ、ノゴマ、セツカ、マキノセンニュウ、ヨシガモ、カワセミ、コサギ、カルガモ、ノスリ、トビ、タンチョウ、ウズラ、シジュウカラ、アオサギ、カワラヒワ、コミミズク、クイナ、オオヨシキリ、シヨウドウツバメ、ヒバリ、アカハラ、アトリ、ノビタキ、ムクドリ、キジバト、コムクドリ、シヨウビタキ、モズ、キビタキ、ツグミ、マヒワなど多くの種類が確認されている。

昆虫類は、カワゲラ類、トビケラ類をはじめトンボ類などの水生昆虫が多く、水辺ではヘイケボタルも見られる。比較的乾燥した草原ではゴマシジミ、フタスジチョウ、ヒヨウモンチョウなど北海道の低湿地を代表する蝶類が多く湿原を好むセスジアカガネオサムシも生棲している。

三 開拓・発展史

弁天地区に入植者があつたのは、大正末期から昭和にかけての時期であつた。それ以前は漁業関係者が漁業期間中のみ訪れていた場所であつた。

弁天地区の開拓・発展の足跡は、浜弁天地区の漁業、旧弁天・弁天開拓団の酪農業の異なる二産業を目的に入植した人々が、それぞれ独自に築きあげた歴史であつた。すなわち、各地区間の交流は極めて希薄なもので、弁天部落の中にさらに小部落があるようなものであつた。

これらの地区の開拓・発展史を便宜上戦前・戦後の二期に分けて述べてみよう。

(一) 第一期 戦前の弁天

浜弁天へ 苫小牧地方の沿岸は『樽前浜』とよばれ、幕末よりイワシ漁が栄えたところであった。しかし、当時の入地はまだ同地方に定住する者はなく、出稼人が漁業期間中のみ当地を訪れていた時期であった。その後イワシ漁はますます盛んになり、次第に定住する漁業者も増えていった。当時『浜弁天』は トユウフツと呼ばれていたことは先に述べたが、同地では明治末期から数人の漁業権者により漁が行われていた。やがて、造材土木建築請負を本業とする中村組中村捨次郎の漁業分野への進出により、樽前浜の漁業権はぬり替えられていった。大正七年、石垣彦三郎より漁業権の譲渡を完了した中村組は、トユウフツ（浜弁天）をはじめ勇払前浜、サタップ、マコマイ、苫小牧浜小糸魚、錦多峰、覚生と大半の漁場とその名前をつらねることになった。

岩手県出身の沢口清之造は、トアヅマ（浜厚真）からトユウフツ（浜弁天）に入地したのは大正十三年のことで、これが初めての定住者であった。当時の様子を沢口清之造の長男である沢口幸一は次のように語っている。

私の祖父勘次郎は岩手県より北海道に渡り樽前浜各地で漁夫をしていました。その後、父清之造はトアヅマ（今の浜厚真）に定住しました。当時はイワシ漁が盛んで、父の人生も漁業一筋の生活で、トユウフツ（今の浜弁天）に移ったのもイワシを求めて来たようなものです。

入地した当時この付近には中村組の番屋があるのみで、私達はこの番屋を借りて生活をはじめたのですが、私達が漁師だと知って中村組に番屋のあけ渡しを申し渡されました。それで仕方なくトアヅマにある自宅を解体し、材を馬車で運んで家を建てました。中村組の番屋にいたのは二、三カ月ほどでしょうか。そのころは、私の家のほかに前記の番屋があるだけの寂しい浜でした。安平川の河口付近には大島漁場があり、私の家との間には只野さんという方が住んでいました。

旧弁天地区

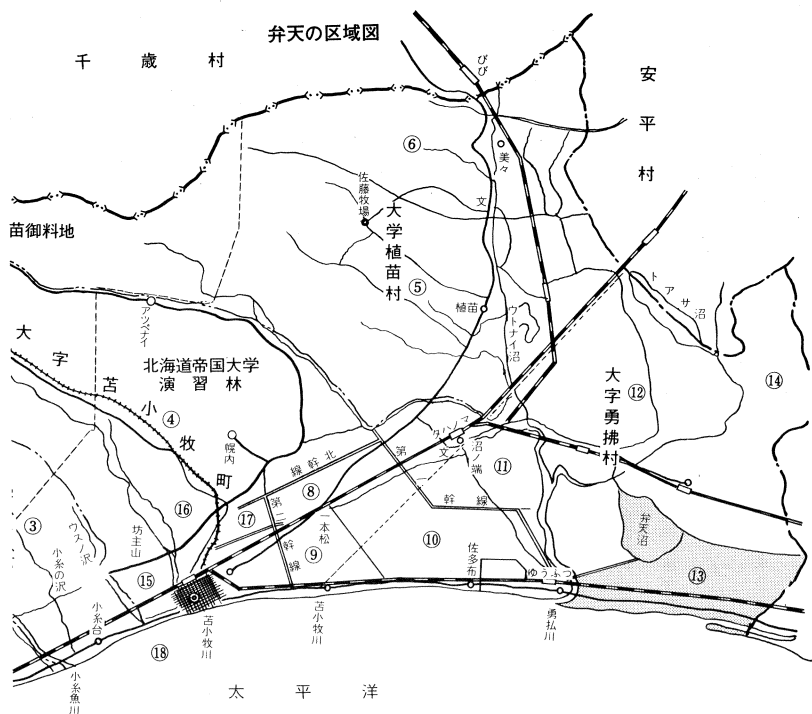
明治三十年四月一日に施行された国有未開地処分法は、開墾希望者には無償で土地を貸付し、一定への入植 期間中に開墾に成功した者には土地を付与するというものであった。同法の施行により苦小牧地方でも苦小牧村をはじめ樽前、覚生、錦多峰、小糸魚、勇払、植苗などに入植が盛んになった。こうした開墾の夢と意気に燃える真面目な入植者とは別に、一部の山師的土地占有者により開墾を名目に不正貸付を受ける者が相次いだため明治四十一年、同法を廃止し、新たに国有未開地処分法が制定された。

一方民有未墾地は、昭和初期の道庁調査では二五万町歩にのぼり、苦小牧地区においては昭和三年以降、民有未墾地の開放が行われ、樽前、植苗、遠浅地区には多くの入植者があった。

こうした背景のもとに各地に開拓者が入りこんでいったが、旧弁天地区（後に入植した弁天開拓団地区と分けるため、最初に入植者があった地区をこう呼んでいた）に定住者が入植したのは昭和初期であった。当時勇払に住んでいた進藤要次郎は、酪農業を目的に旧弁天地区に移住したのが最初であった。⁽³⁾その後、民有未墾地の払下げを受けた上水清貴が、日高から馬二八頭と牛三頭を引きつれ、草深い旧弁天の地に入植したのは、昭和九年十月のことであった。当時の様子を上水さんは次のように語っている。

私は、日高から馬二八頭と牛を三頭引っぱって入植したのですが、付近一帯は草ぼうぼうの草原でした。入植して二、三日後に、らに牛一二頭買ってそれでやったんです。ところが、三、四年のうちに牛馬はばたばたと倒れてしまいました。草はヨシ、チガヤとか白い色をした長い草は沢山あったが、栄養分がないことと、水が非常に悪かったので皆まいつてしまった。

これはいかんということで牧草づくりをはじめたが、初めのころは牧草も育たない。芽は出すがいつの間にか全部消えてしまう。それでも一生懸命頑張らしてね、四、五年目になってやっと出来るようになりました。畑は、はじめは大豆づくりからやったがこれもダメでした。莢はあるんだが、実が全く入らない。それが肥料、土壌の研究によって、だんだん莢の中に一粒入るようになり、二



縮尺 一五万分之一

粒入るようになりました。

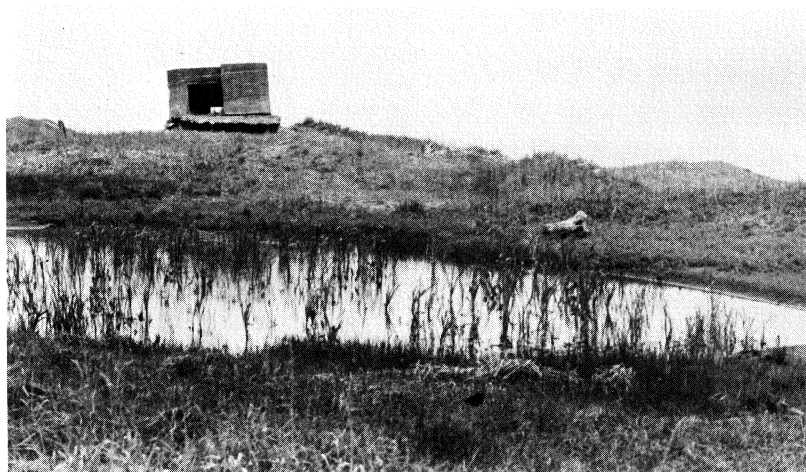
〔機関誌苦小牧市史編さんNo.1〕昭和四十六年 苦小牧市史編さん室より抜すい〕

その後同地区にはさらに数人の入植者があつた。しかし、皆こうした辛苦をなめながら牧草づくり畑づくりに努力していた。旧弁天地区の人々の存在は、後に入植した弁天開拓団の人々にとって大きな支えになったことであろう。

弁天部落 苦小牧の字名および

の誕生 び地番は昭和三年、

設定した一五町名と七大字名により区割され、大字名はさらに七〇の字名に分割され、その多くはアイヌ語をそのまま使用したため読みづらく、また字の境界もあいまい



浜辺に残るトーチカ（昭和50年）

〔神田正五蔵〕

であった。当時弁天地区は苫小牧町大字勇払村に属し、『字トユウフツ』、『字川口東方』、『字弁天沼』などの地名があった。こうした不便を改正するべく、昭和十九年一月一日、字名改称地番整理が実施され、これまで使用されていた旧名は廃止され、新たに『弁天』が正式な部落名となった。

このころは、浜弁天地区と旧弁天地区にわずかに入植者があったのみで、字名改称地番整理官民協議会において字名を決める際、『豊野・草野』などいかにも当時の弁天の自然を表現するような名前も候補にあがったという。

弁天部落の字界、起源などは次のとおりである。

字界

南ハ太平洋モ臨ミ東ハ厚真村ニ界シ北ハ道路ニヨリ静川丘陵地ニ接シ
辨天沼ノ北縁ヲ過ギテ安平川ヲ下リ勇払川ニ出デモ之ヲ下リ河口附
近ニ至ル一團地

起源又ハ語源

本字内ニ辨天沼ト稱スル瀉湖アリテ其ノ縁辺ヲ辨天ナル小名ヲ以テ
呼バルルニ付辨天ト名付ク

（『苫小牧町名改称地番整理二関スル一件書類』昭和十八年 苫小牧町）

トーチカ 国道二三五号線を様似方面に向かって走ると、右側の浜辺にコンクリート造りのトーチカが点々と残造り っている。このトーチカは、敗戦色が濃くなった昭和十九年、浜弃天地区に派遣された部隊により造られたものである。

昭和十九年、第一陣二一名、第二陣四八名が沢口清之造宅の雇（出稼人）の宿泊所に泊まりこみ、トーチカ造りに従事していた。第一陣は武器を片手に、第二陣は武器をスコップに持ち変えてトーチカ造りに専念していたという。⁽⁴⁾



弃天開拓団に親しまれた石碑（昭和45年）
〔苫小牧市史編さん室蔵〕



弃天会館（昭和45年）
〔苫小牧市史編さん室蔵〕



弃天開拓団解散式風景（昭和46年）
〔苫小牧市史編さん室蔵〕



開拓者に利用された弁天停留所（昭和38年）

〔苫小牧市史編さん室蔵〕

（二） 第二期 戦後の弁天

弁天開拓 戦後の食糧難は、国土の縮小のうえに多数の復団の入植 員軍人、外地引揚者をかかえ極限に達した。こうした食糧危機を救うため、政府は「緊急開拓事業実施要領」を閣議決定し、農林省において五カ年で全国一五五万ヘクタールの農地開墾計画を決定したが、北海道においては未利用農耕地七〇万ヘクタールが政府緊急開拓事業地となった。緊急開拓事業は国営を原則とするが、そのすべてを国が直接施行することは困難なため道独自の開拓事業代行規定および取扱要領を定めて行われた。

弁天開拓はこの緊急開拓事業に繰込まれ、すなわち国営事業として昭和二十二年二月二十八日、その第一陣六戸が弁天沼東北地に入植してきた。開拓第一陣として入植した阿部善吉、綱木広治、的場鉄男、中山一夫、佐久間福松、吉田善作ら一行は秋田出身の阿部植綱木以外はすべて道内出身者であった。開拓者の大半が農業経験者で、自信のある仕事ができ、また自分の土地が持てるという夢と希望を胸に入植したが、乾くことを忘

れたかのような湿地帯はそう簡単に開拓者の希望をかなえてはくれなかった。勇弘原野の開拓は排水が第一条件であることは古くから知られており、明治三十年ころの調査報告にも次のようにある。

植苗勇拂の一部苦小牧は、殖民地としては有望なるも該地は何れも滞水多きを以て容易に開拓すること能はず、速かに排水をなし、滞水を除くに至らば千有餘の農家を移植するに足る有望の地なり

昭和初期から排水事業は行われていたが、弁天地区は特にひどいところであった。

（『苦小牧町史』 大正十五年 苦小牧市）

開拓団第一陣が入植したころは、二間に五間の共同小屋に仮住まいし、後に入植者小屋一戸につき八、〇〇〇円の資材助成金が支給され、この資金をもとにぼつと個人住宅が建てられていった。こうして開墾に着手したが、人力による開墾では能率もあがらず、作付けしても收穫物が無い状態が数年つづき、開拓者の脳裏には悲觀的思いがよぎったであろう。収入といえば日当六七〇円の開墾補助金以外期待できないので、入植時に持ってきた物を売ったり、雪中茅刈りに出たり、会社や工事現場にデメンとり（日雇労働）に出かけ、なんとか生計を維持してきたのであった。⁽⁵⁾ 弁天地区には第一陣入植者以降毎年のように入植者があつたが、皆同じようにただ黙々と開墾の汗を流したのであった。こうした生活に見切りをつけ、あるいは病気で農業ができなくなり離農していった者も少なくなかった。

年度別入植戸数表（昭和四十五年一月一日現在）

入植年度	昭和二年	三年	四年	五年	六年	七年	八年	九年	三〇年	三一年	三二年	三三年	三四年	三五年	三六年	三七年	三八年	三九年	合計
入植戸数	六戸	一	六戸	二戸	三戸	七戸	一五戸	五戸	七戸	一	二戸	五戸	一	二戸	一戸	一	一	一戸	六戸

※ うち一戸離農

（『弁天開拓・開拓団解散記念』 昭和四十六年 弁天開拓団解散実行委員会）

《歴代団長》

弁天開拓農事実行組合

初代 綱木 広治 昭和二年二月～二年八月

二代 佐久間福松 二年八月～三年一月

弁天開拓団々長

初代 佐久間福松 昭和三年一月～五年一月

二代 森 篁一 五年一月～六年一月

三代 佐久間福松 六年一月～八年七月

四代 綱木 広治 八年七月～九年四月

五代 阿部 善吉 九年四月～一〇年四月

六代 綱木 広治 一〇年四月～一一年四月

七代 川口 越雄 昭和三年四月～三年四月

八代 森 篁一 三年四月～四年一月

九代 児玉銳之助 四年一月～四〇年二月

一〇代 森 篁一 四一年一月～四三年二月

一一代 亀谷 正一 四四年一月～四五年二月

一二代 綱木 広治 四六年一月～

（『弁天開拓』 昭和四十六年 弁天開拓団解散実行委員会）

客土の開

始と問題

昭和二十五年から道庁において勇払原野開拓の地区別計画がまとめられ、苫小牧市では弁天地区の湿
地帯を客土によって土地を改良し、ここに開拓者を入植させる計画であった。これが政府のとり上げる
ところとなり道開発局では総工費一、八〇〇万円により二十六年度から三十九年計画で同地区二〇〇町歩の客土を施行
することに決定した。

ところが、隣の厚真村から思わぬ問題が提起された。すなわち、弁天地区の客土に使用する粘土は隣接地の厚真村
字東厚真のものを使用することになっていたため、厚真村では独自に村内開拓計画のもと浜厚真、上厚真、牛志別地

区一、一〇〇町歩を東厚真地区の粘土で軌道客土することになっていた。このため、東厚真の粘土を苫小牧に持つて行かれては自村の開拓ができなくなる、と弁天地区の客土に反対表明をしたのである。しかし、すでに予算化したあとのため急ぎよ別の地区から粘土を運ぶわけにもいかず、またこの問題が難行を続けると今後の胆振管内開発関係国費工事にも影響するとあって、結局胆振支庁が仲介役をつとめこの問題の解決にあたった。

昭和二十六年十一月十五日、厚真村から山田助役、上田村議会副議長、地主代表など五名が胆振支庁を訪れ協議した結果、厚真村側では三カ年継続事業のうちとりあえず初年度分についてののみ一応了承し、地代や取土場所など詳細については現地で話合うことになり、二年以降は継続協議することに落着いた。⁽⁶⁾



弁天地区の客土作業風景（昭和30年）
〔苫小牧市史編さん室蔵〕



開拓者のブロック住宅（昭和38年）
〔苫小牧市史編さん室蔵〕

こうして弁天地区の客土は思わぬ難問につきあたり開発計画の施行があやぶまれたが、その後特別な支障もなく実施されていった。当初三カ年計画であった客土事業は、その後長期間にわたって施行された。客土は馬車、トラックなどを使用し厚真側から進められ、昭和三十八年ころには弁天地区の個人面積の約八〇％が終わった。⁽⁷⁾

こうした大規模な客土の実施により不毛の原野はよみがえり、一大酪農郷への大きな基盤となったのである。

ブロック住 弁天地区をはじめ苫小牧近郊に入植した開拓者の住宅は非常におそまつなカヤぶき小屋に居住して宅の普及 いる者が多く、なかには住居を持ってない開拓者もあった。こんなことから入植計画が難行していたが早くから入植した開拓者の間にブロック建築による自主的住宅難解決の傾向がたかまり、昭和二十七年には一〇余戸のブロック建築をみた。このため市では、これにこたえて住宅補助（国庫補助）で柏原、弁天地区など数カ所に六戸を試験的に建てたが、費用が安く建築も容易なことから好評なため、二十八年度から本格的に奨励することになった。市はブロック製造機一台を無償で開拓者に貸与し、開拓者は自家労働でブロックを製造し住宅を建てることになった。費用は一〇坪で三万円、この他室内建材代を入れても一五、六万円で済み、開拓者には当時住宅資金として八・九万（立木地帯八万円、無立木地帯九万円）の国庫補助があり、これを基にすれば六、七万円の自己資金で家が建てられたのである。⁽⁸⁾

なお、ブロック製造は容易に出来、一〇坪分を製造するのに二日もあれば十分で、弁天地区をはじめ各地区からこの製造機の貸与を受けて住宅を建てる者が多かったという。

両地区間 弁天地区には、酪農業を主とする旧弁天および弁天開拓地区と漁業を主とする浜弁天地区が存在したこの交流 とは先に述べたが、当時両地区間の交流は全くといってよいほど無かった。自治会もそれぞれ独自に持つており（浜弁天は結成後のトラブルのため消滅）、祭りなど部落行事もそれぞれ別に行われていた。これは距離的にはなれていることもさることながら、職業の違いによるものが主因であろう。

このように弁天という単一部落内に、さらに二部落があるような状態が今日まで続いてきたのである。

変わりゆ 弁天をはじめ柏原、静川地区は、苫小牧東部開発にともない立ちのきを余儀なくされた。すでに弁天く弁天 開拓団は解散して人影はなく、浜弁天地区も昭和五十一年度中に立ちのきが完了されようとしている。

莫大な金と開拓者の涙と汗がしみ込んだ原野は再び静けさをとり戻し、浜辺には廃屋が風砂にさらされている。いま、弁天は急激な変貌をとげる脱皮時期を静かに待っているかに見える。この地に金属音が響くとき、あるいは苦小牧人から弁天という地名すら忘れさられる日が来るかも知れない。

四 産 業

農 業

(畑作農業)

昭和二十二年の入植当時はわずかに六七・五一ヘクタールの耕地面積は年ごとに増加し、客土が行われた二十九年ごろから急にその面積が増加した。

年 度	昭和二十二年	一三三年	一三四年	一三五年	一三六年	一三七年	一三八年	一三九年	一四〇年	一四一年	一四二年	一四三年	一四四年	一四五年
面 積	七・五 _{ha}	七・八	八・〇 _{ha}	一〇・一七	一三・七四	一七・二八	二〇・二六	二五・九〇	三〇・五三	三六・四〇	四二・五二	四八・六四	五四・七六	六〇・八八

年 度	昭和三十四年	三三五年	三三六年	三三七年	三三八年	三三九年	三四〇年	三四一年	三四二年	三四三年	三四四年	三四五年
面 積	七・九 _{ha}	七・五	七・六	七・七	七・八	七・九	八・〇	八・一	八・二	八・三	八・四	八・五

『弁天開拓・開拓団解散記念』 昭和四十六年 弁天開拓団解散実行委員会

弁天地区の農業は、土壌、気候に恵まれず開墾当時は惨憺たるものであったが、開拓者たちは開墾した土地に大豆・小豆・馬鈴薯・カボチャなどを蒔きつづけた。食糧の自給生産は、現金収入のとばしい開拓者にとって必要欠くことのできない作業であった。しかし、弁天地区はそもそも畑作には適していないことは開拓者自身よく知ってお

作物別作付面積表

(昭和四十五年一月一日現在)

区 分	面 積
大 豆	〇・二 ^{ha}
小 豆	一八・四
菜 豆	〇・一五
馬 鈴 薯	三・七
野 菜	一一・〇
ビ ー ト	二〇・〇
え ん 麦	二〇・〇
青刈飼料	二四二・七五
牧 草	四七七・四五
飼料用根菜	一一・一
総 数	八一四・七五

『弁天開拓・開拓団解散記念』
昭和四十六年 弁天開拓団解散
実行委員会

り、天候に左右されないより安定した生活を求めて、農業の主流は酪農へと切り変えられていった。これにともない農業生産物はビート、えん麦、牧草、デントコーンなどの飼料が重要な作物となり、機械力を導入した近代農業が行われるようになっていった。こうして農業の主流は酪農へ切り替えられたが、現金収入額の高い小豆・野菜などを中心に畑作も行われていた。

(酪農)

開墾が進み弁天地区は苫小牧近郊でも一、二の農業地帯となり、どうにか個人収入もあがりつつあった。しかし、昭和二十八、二十九、三十一年と連続的な冷害、凶作に見舞われ、今までの苦労も蓄えも水泡に帰したのである。それからは畑作農業に見切りをつけ、酪農に重点をおいた混同農業に転換し、牧草、飼料生産が急ピッチで進められていった。

一方、苫小牧市では、戦前から混同農業をとり入れた農家ではかなりの実績をあげていったことから、勇払原野の農家は冷涼湿潤な気候と広大な土地における農業は酪農を中心にすべきであるということになり、昭和二十六年一〇頭の牛を買い、これを営農意



牧 場 風 景 (昭和48年)
〔苫小牧市史編さん室蔵〕

欲が旺盛で土地を持つてゐる農家に最初に産まれた子牛を返すという条件で貸付牛制度を開始した。その他、馬・羊・鶏・豚などの貸付けも同時に行われた。また、同年道においても同様の貸付制度が設けられ、市・道二本立ての貸付制度が施行されることになった。

弁天地区の人々もこの制度を利用して着々と生産をのびし、生活も安定していった。開墾当時水びたしであつた弁天地区は、こうして多くの施策と開拓者の血のにじむような努力によつて、一大酪農郷への道を歩みはじめたのであつた。

乳牛飼養頭数及び牛乳生産推移表（昭和四五・一・一現在）

年 度	頭 数	年 間 乳 量	日 乳 量	生 産 増 率
昭和二六年	三七頭	五一・八	〇・一四二	一〇〇%
二七年	三九	五七・五	〇・一五八	一一一
二八年	五六	八五・一	〇・二三三	一六四
二九年	六六	一〇四・八	〇・二八七	二〇二
三〇年	九二	一五一・一	〇・四一四	二九一
三一年	一〇九	一八五・三	〇・五〇八	三五七
三二年	一四四	二五六・三	〇・七〇二	四九四
三三年	一七〇	三〇六・六	〇・八三八	五九〇
三四年	二三四	四二六・一	一・一六七	八二二

昭和三年	二〇一 ^頭	三九四・二	一・〇八〇 ¹	七六一 [%]
三六年	二二二	四五二・九	一・二四一	八七四
三七年	二五三	五三二・九	一・四六〇	一、〇二八
三八年	二六九	五八九・四	一・六一四	一、一三七
三九年	四一七	六五六・二	一・七九七	一、二六六
四〇年	四〇四	六八四・七	一・八七六	一、三三一
四一年	四五七	七一二・四	一・九五二	一、三七五
四二年	四七一	七四一・三	二・〇三一	一、四三一
四三年	四九八	七六六・五	二・一〇〇	一、四七九
四四年	五〇五	七八五・四	二・一五二	一、五一六
四五年	五三二	八四八・二	二・三三四	一、六三七

（『弁天開拓・開拓団解散記念』 昭和四十六年 弁天開拓団解散実行委員会）

（椎茸栽培）

入植当時、農業多角経営の一環として椎茸の栽培が奨励されていた。特に弁天開拓団や静川部落は有望視され、一戸あたり二、三、〇〇〇本のホダ木を使用して精力的な栽培にのりだした。しかし、実際に栽培してみると氣候が合わないのか収穫量が非常に少なく、春秋二回収穫できるものが春一回しか収穫できず、かつ栽培には意外に手がかかるとあって次第に下火になっていった。こうしたことから将来性が無いと早々に見切りをつけ、中にはホダ木を薪に



当時の作業風景（昭和32年）

〔沢口清之造氏蔵〕

漁業

使う者さえ現れ、組織的な椎茸栽培は失敗したのであった。

入地当時の浜弁天地区における漁法は、他の漁場同様地曳網によるものが唯一の方法であった。魚の対象はイワシ、子ニシン、チカ黒ガシラ、ホッキなどで、大正末期から昭和中期ころまでは魚粕用のイワシ、子ニシン漁が主なものであった。

浜弁天の漁業者は、六月から十月一杯までつづくイワシ漁のため日本海側の春ニシン漁を終え帰郷する途中のヤン衆、昭和初期ころからは白老、萩野方面から雇（出稼者）を二、三〇人ほど使っていた。雇は漁業者（主）の家屋の一部を仕切った部屋に寝泊まりし、食事は雇い主が負担するならわしであった。このため、ごく一部の漁業者以外は資金面で力不足のため、大半は『仕込親方』というバックがあった。すなわち、漁業者は雇を使って魚をとり、魚粕を製造してこれを仕込親方に渡し、仕込親方は米、味噌、醤油などを漁業者に与えていた。さらに仕込親方は集めた魚粕を仲買人などに売り、漁期が終了した時点で売掛金と仲買人などに売った魚粕代金とを差引計算し、残った代金を漁業者に支払っていた。

この他の収入といえば春の黒ガシラ漁と冬のホッキ漁などであった。当時浜弁天の浜は黒ガシラの水揚げ量が多く朝早くこれを馬車に積んで三星市場まで勇払街道を通ったという。また冬のホッキ漁は、二、三人の雇を使って小遣錢程度の漁を行っていたという。

樽前浜のイワシ漁は昭和期に入ると年々先細りになり、従来の地曳網による漁法は通用しなくなった。地曳網は、



浜弁天の漁場風景（昭和36年）
〔沢口幸一氏蔵〕

魚層が厚い場合は最良の方法であったが、魚層が薄くなると労多くして魚獲が上がらないという欠点があった。これは昭和五、六年の大不漁のとき、早くから定置網を採用していた人はまずまずの漁獲であったが、地曳網にたよっていた漁業者はお手上げであったという事実が物語っている。こうした現実と直面したこともあり、漁法は地曳網から定置網へと移り、浜弁天地区でも昭和七、八年を境に定置網へと切り替えられたのである。

やがて、イワシの回遊量は年々少なくなり、浜弁天地区においては昭和三十年をもつて魚粕製造は終わりを告げ、新たにサケ・マス定置網、シシヤモ、ホタテ、ホツキ魚など今日の姿へと変わってきたのである。

五 衛生・医療

水道の 開拓者の生活は水に随分悩まされた。水はいたるところにあっても飲み水にはならず、牛馬の飲み水に敷設もならなかった。弁天地区（特に開拓団が入地した地区）は火山灰の下に厚い泥炭層があり、掘っても掘っても赤しぶの混じった水ばかりで、とてもそのままでは飲めたものではなかった。

こうした飲料水の問題を解決するため昭和三十八年ころ水道管が敷設されることになり、ボーリング調査などにより良質の水を探し求めたが、結局セリ沼の水を利用することになった。水道工事は引込み管だけが自己負担で、あとはすべて国庫補助で行われた。敷設後の管理は水道管理組合をつくり、料金を決めてこの経営にあたった。

この簡易水道は、当初弁天開拓団の家屋へのみ給水され、その後かなり遅れて旧弁天地区へも給水されるようになった。しかし、浜弁天地区まではとうとう給水管が敷設されず、今日まで浜弁天の人々は井戸水生活をつづけていた。

医療 弁天地区に医療機関ができたことは今日までなく、この地区の人々は特に病氣に対する恐怖感を持ちつ機関 づけていた。浜弁天へ入地した人々は仕事の都合で町へ出る機会が多かったので比較的恵まれていたが、弁天開拓団の人々は大変であつた。

開墾初期は労働もきつく、また夫婦二人で働かなければ生活していけない時代であつた。こうした生活の中で家族特に子供の病氣に対する心配、不安は想像以上のものであつたであろう。当時は勇払にも病院、診療所がないため子供を亡くした人も沢山いた。急病の子供がでもすぐに行く方法はなく、病氣の子供を背負つて勇払駅まで走り、汽車で苫小牧の病院へ行き手当てを受けていたが、手遅れになつたこともしばしばあつたという。弁天地区に開拓者として入植してから一五、六人が亡くなっているが、このうち約七割は労働の疲れが原因と思われ、いかに労働がきびしいものであつたかを知ることができる⁽⁹⁾。

その後勇払に診療所ができ、交通機関も発達し不幸な時代は終わりをつけた。

六 教育

弁天地区内に学校が設置されたことはなく、同地区の子弟は勇払小学校へ通学しなければならなかつた。浜弁天、旧弁天地区の子弟は若干距離的に近く比較的恵まれていたが、弁天開拓団の子弟は大変であつた。夏は徒歩で通学していたが、冬の大雪のときなどは子供を背負つたり、ドサンコ（馬）に乗せたり、馬ソリなどを使って送り迎えしなければならなかつた。

こうした状況を見るにつけ同地区（特に開拓団）の人々は通学バスの運行を機会あるごとに陳情していた。やがて、昭和二十八年、弁天線が開設され同地区の子弟は通学の苦勞から解放された。

七、交通

市営バスが弁天地区に入るまでは、同地区へ通じる公的交通機関はなく、弁天の人々は徒歩で勇払駅などに出向いて苦小牧へ出ていた。

苦小牧市営バスは昭和二十八年三月、市内二条通り線、錦岡線と同時に弁天線の免許を受け、同年四月五日から運行を開始した。一日の運行回数は午前と午後の各一回の運行で、当時のコース、発着時刻は次のとおりである。¹⁰⁾

運行コース及び発着時刻

弁天線 Ⅱ 勇払駅前⇄学校通り⇄弁天開拓口

発着時刻 勇払駅前発―午前八時・午後二時四十五分―学校通り着―午前八時五分・午後二時五十分―弁天着―午前八時二五分・午後三時一〇分

後三時一〇分

勇払駅前発―午前八時三〇分・午後三時一五分―苦小牧駅前着―午前九時二分・午後三時四七分

（『市営バス時刻表』 昭和二十八年 苦小牧市交通課）

昭和二十九年十月、同三十一年七月、さらに路線延長の免許を受け、弁天線の総路線長は五、二二二キロメートルになった。

やがて東部開発計画が具体化するにおよび徐々に弁天地区の人々は離散していった。これにともない市営バスの使命は終わり、昭和五十年十二月二十四日、浜弁天線の廃止をもって完全に弁天方面へ通じる路線は姿を消したのである。

苦小牧市史 下巻

注(1) 扇谷昌康 『苦小牧市のアイヌ語地名』 昭和四十六年 「郷土の研究第三号別冊」 苦小牧郷土文化研究会

(2) 『苦小牧市自然環境現況図』 昭和四十九年 苦小牧自然保護協会

(3) (4) 沢口幸一氏談より

(5) 『弁天開拓』 昭和四十六年 弁天開拓団解散実行委員会

(6) 『苦小牧民報』 昭和二十六年十一月十七日 苦小牧民報社

(7) (5) と同じ

(8) 『苦小牧民報』 昭和二十八年三月二十九日 苦小牧民報社

(9) (5) と同じ

(10) 『苦小牧民報』 昭和二十八年三月三十一日 苦小牧民報社

静 川

一 部落の起源

地名の由来 静川はもと『ニナルカ』と呼ばれていたが、語源はアイヌ語「ニナル・カ」で、(ニナル・川沿いの台地)、(カ・の上)の意味である。土地が一段高くなってどこまでも平坦に続いている所で、静川の場合、元静川小学校付近の安平川の左岸にある低い台地をさしたものであった。

ニナルカは大字勇払村に所属し漢字で『仁成花』とあてたこともあったが、昭和十七年以来進められた苦小牧町字名改称地番整理によって『苦小牧町字静川』と改められ同十九年一月一日より実施された。この語源については『改称字名及其ノ区域調書』に「本字西端ヲ流ルル安平川ノ自然勾配甚ダ緩ニシテ溶々タル河水葦ノ枯葉ヲ浮ベテ流ルル静寂ニ名ヲ取り静川ト名付ケタリ」と静かに流れる安平川をさしたものであった。

遺跡の分 布 静川地区はゆるやかな台地が続き、有望な遺跡がある。

柳館遺跡は静川台地の最南端の本市と厚真町境界に位置し、昭和三十六年八月ころに発見され、同年十月に藤本英夫によって最初の発掘調査が行われた。同四十四年には佐藤一夫によって一部調査され、住居址の一部が確認された。また、同四十六年六月、この部分から大量の貝が発見され、本市最初の貝塚発見地でもあった。この遺跡の遺物は、縄文前期、静内中野式土器から円筒下層式が中心の住居址群で、遺跡内には石錘、石冠などを作ったと思われる石器製造址、ヤマトシジミを主体にアサリ、ウネナシトマヤガイなどによって構成された貝塚などで、本市



柳館遺跡発掘風景（昭和44年）

〔佐藤一夫氏蔵〕

によって極めて貴重な遺跡の一つである。

ニナルカ遺跡はかなり古くから知られた遺跡で、元静川小学校のグラウンド横の台地で、昭和三年にはこのグラウンドが造成されたが、この時にすでに土器片などの出土があったものと思われる。最近の遺物では恵山式土器、北筒式土器片が出土した。なお、この遺跡において、昭和四十八年度から実施された苫小牧東部工業地帯埋蔵文化財分布調査の鍬入れ式が行われたことで有名である。そのほか、東部工業地帯埋蔵文化財分布調査によって発見、確認された遺跡に静川1遺跡、静川2遺跡、静川3遺跡、静川4遺跡などがあるが、縄文中期から晩期のものが多く、土器の小破片などの出土が多い。

二 自然環境

位置

南は字弁天に接し、北および東は厚真町との境界、西は安平川をもって字柏原に隣する一円である。本市の市街地中心部より最低一五キロ最高二五キロの距離がある。

地形と

静川地区は東北部は台地で、その昔はこの静川台地から内陸に海が入り込み、勇払湾を形成していたものと思われる、安平川流域から安藤沼にかけて原野、湿原が続き、各種地形にとみ、特に安平川流域および平野部では早くから農業が発達した地区である。

地質は支笏、恵庭、樽前の各火山灰層でおおわれ、その厚さは五メートルから数一〇メートルにおよんでいる。

植物

安平川流域から安藤沼にかけての湿原、原野植物、静川台地の森林植物、樹木があり、内陸部植物とし

て多様にわたっている。

平原地ではエゾミノハギ、オグルマ、ナミキソウ、ノコギリソウ、ノリウツギ、ホザキシモツケ、ハスカップなどが多く自生し、湿原地的要素を持つものとしてクサレダマ、ナガボノシロワレモコウ、クサフジなどがあり、帰化植物のヒメジヨオン、オオハンゴンソウ、メマツヨイグサなどが目立っている。樹木ではヤチハンノキ、ヤチダモから林内にはカシワ、シラカバ、イタヤ、ナラ、シナ、ホウ、セン、カツラ、エゾマツ、トドマツなどである。

動物 平地ではウグイス、ベニヒワ、ノビタキ、シマアオジ、シメ、カワラヒワ、オオジシギ、安平川流域にはアカシヨウビン、カワセミなどの鳥類、山地ではカッコー、コウライキジ、ヤマガラ、アカゲラ、フクロウ、エゾムンクイ、ゴジユウカラ、エナガ、キクイタダキ、キジバト、カケス、アオバト、オオワシなどが見られ、農家付近には無数のスズメが見られ、カラスも多い。魚類では安平川にそ上するサケ、アカハラのほか、淡水魚のコイ、ウグイ類、フナなどで、農家ではコイを養殖したところもあった。

エゾシカ、ヒグマも見られ、小動物ではエゾタヌキ、キタキツネ、エゾリス、野ウサギ、野ネズミも多く棲息し、この地はアオダイショウの多いのも一つの特色である。昆虫類ではイブリシジミ、ウラナミアカシジミなどめずらしい蝶をはじめシジミ類、アゲハ類など極めて豊富な蝶が棲息している。

その他セミ類、オサムシ類、クワガタが多く、静川橋付近は本市の昆虫採集会などでよく選ばれる地である。

二 部落の変遷

部落の形成 ニナルカ地区には明治三十九年、キング木工場が設置され、これにともなう工夫、造材夫の入地があった。この地が開かれることになり、同四十二年の六月、七月に国有未開地処分法の適用をうけ七、八町歩の畑

地を得て亀力森徳太郎、伊藤寅松などの集団入植があつて部落を形成するようになった。しかし、この期に入植を希望した人たちは数人を残し実際には入植せず開墾を放棄したため、処分地の取消命令をうけたのである。

その後、葛森百一、岩田辰次郎などの入植があつて一つの部落として確立し、大正三年四月十四日には勇払郡苫小牧村第一六部長としてニナルカに村長の命をうけて部落内の行政指導を行う部長が置かれ、初代部長（のち区長となる）に亀力森徳太郎が選任され、胆振支庁から辞令をうけた。

しかし、その初期には農業生産は思わしくなく、多くは製炭業、運搬業（馬車追い）に従事し、出来上がった木炭は馬車で遠浅に運ばれていた。中でも葛森百一は大がかりな製炭事業を行っていた。

農牧業 国有未開地の処分にあつては、多くは畑地をもつて処分を受けたが、農業だけでは生活が成り立たず、

の開始 当時の木炭ブームもあつて、現金収入となる製炭業へ飛びついた入植者も次第に農業を重視するようになり、中でも大正初期から葛森百一、亀力森徳太郎などは、米づくりを行つており、耕作地も年々増加していった。

昭和二年になると、丸拓合資会社が造田事業を目的に勇払原野開墾に着手、静川には保喜元四郎農場監督ほか六名が入地し『丸拓第三農場』が開設された。ついで、葛森百一も牧場を開設、岩田善之、茶木次郎吉なども米づくりを行うようになり、農牧業は次第に活発化していった、

しかし、依然として製炭業も盛んで、特に焼子の出入りがはげしく、多い時には五〇戸以上を数えたが、二、三年すると他の製炭林を求めて移動し、この地の人口が一度に半分に減つてしまうこともあった。

戦時下体制が強化されるにつれ、ニナルカ地区の退歩がはじまり、部落民の一部には他に転住退去する傾向もあつて、昭和十五年のニナルカ部落会は、葛森百一（農業）、阿部栄吉（酪農）、伊藤寅松（農業）、亀力森兼吉（農業兼運送業）、保喜元四郎（農業）、岩田善之（農業）、小笠原藤芳（農業）、渡辺喜作（酪農）、平戸栄作（牧畜兼牛馬商）、長尾睦人（教員）、藤原みなる（農業）、

斉藤末治（農業）、高橋祐之助（農業）、平野健治郎（杣夫）、三木田武夫（酪農）、柳館神太郎（農業）の二六戸であった。⁽²⁾

戦後の農

戦後になって農地解放や緊急開拓事業要領の実施により各地に帰農を目的とする開拓者が入ったが、

業と離農

静川地区では小作人がほとんどなく、その初期には開拓適地とはならず、開拓者の入植がなく、昭和二十五年の戸口は戸数一五戸、人口八三人であった。

だが、昭和三十年を前後して新規入植者や弃天などからの移転者もあって、同三十一年には二七戸、一二九人となり、同三十五年には、戦前の木炭ブーム時なみの三二戸、一三一人となった。そして、静川は弃天、柏原とともに苦小牧農業の中核地帯を構成する有畜農業地となった。

しかしながら、苦小牧港の整備拡充にともない、勇払原野は北海道の工業基地として注目され、第三期北海道総合開発計画において、苦小牧市、鷗川町、厚真町にわたる勇払原野に苦小牧東部工業基地を建設することになり、昭和四十四年十月から北海道の手によって用地の買収が開始された。当初においては農地を簡単に手放す人は少なく、交渉も難行して静川の見晴台付近には『押しつけ価格（坪六六〇円）応じられぬノ地権者連盟』などの立札も立ったが、同四十五年以降、東部地区の買収が進み、静川地区の農家も一戸、二戸と減って、同四十五年三月八日には静川部落会の解散式が行われ、同月二十日には静川小学校の廃校式が行われ、同四十九年には一戸、五人が静川地区に居住するのみとなって、静川部落は消滅したのである。

静川地区人口の変化一覧表

年次	戸数又は世帯数		人口	
	男	女	計	口
大正 九年	三七	七九	一七〇	
昭和 五年	二八	八五	一六〇	
年次	戸数又は世帯数		人口	
	男	女	計	口
昭和 一〇年	一九	五五	一〇七	
二五年	一五	四〇	八三	

昭和二十七年				昭和四〇年			
三〇年	二四	六五	三八	一二四	四五年	二九	六〇
三一年	二七	六七	六二	一二九	四七年	一四	二八
三五年	三二	七〇	六一	一三一	四八年	二	四
三七年	三三	七一	六一	一三二	四九年	一	二

の地にとどまりこれを引き継ぎ、その後も農業を続け、この地で病死した。

一方、薦森百一も牧場を開設し、その基盤を固め、この地の実力者となった。

だが、昭和十年代に入っても、日雇が多く、農業生産は思わしくないものがあり、離農や転出が目立った。

▼勇払村ニナルカ

當部落は年々退歩の状態にして前年より一層不況の感あり、茶木氏経営水田以外全く見るべきもなく、却って部落民は他に轉住退去せるやと思惟せられ、同地方将来の爲善後策を講究するの必要あり。

〔室蘭毎日新聞〕 昭和十二年八月三十日号

昭和八年、農村部落の福利増進を目的とし、各地区ごとに農事実行組合が設立されることになり、同年、樽前と錦多峰に組合の設立があつた。そして、翌九年に苫小牧町経済更生産業五カ年計画が樹立され、その実行基礎団体網として農事実行組合を各地に設置すべく極力勸奨した。これによってニナルカにも農事実行組合が設立され、①時間励行、②生活改善、③農業簿記、④耕地防風林、⑤畑作五割増収、⑥家畜増飼、⑦菜種圃、⑧堆肥増産、⑨優良農具購入、などを実行事項とした。

昭和十二年七月、日華事変のぼつ発を境として、わが国は時局体制を強め、農業政策に大きな変化があつた。すなわち、農業報国精神の振興策確立と戦時体制下における経営改善による生産確保、増産が強く打ち出されたのである。そして、この促進活動網となつたのが農事実行組合であつた。

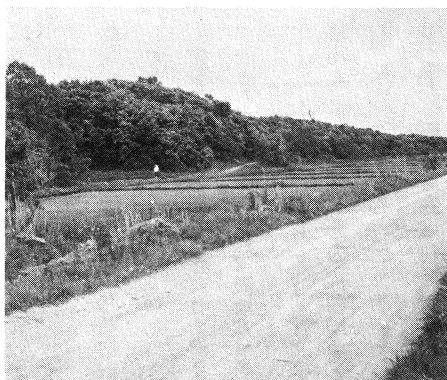
特に、勇払原野は火山灰地で、多量に施肥しなければ、増産確保がむずかしいところから、各組合間による堆肥共励会が行われてきており、時局下販売肥料の入手困難となるや、自給肥料の増産改良が必要欠くべからざるものとなつた。この堆肥共励会において最も優秀な成績をおさめたのは、小じんまりとしてまとまりのあつたニナルカ農事実

行組合で、昭和十四年には三年連続優勝をなしとげ優勝旗の永久交付をうけたのである。

このころから、静川地区の農業も再び活発となり、米、玉ねぎ、えんばく、野菜類を耕作した。しかし、この地区の人口の増減はほとんどなく、定着した感があった。

なお、昭和十四年二月、苫小牧町農地委員会が設置されたが、ニナルカから薦森百一が委員に命ぜられた。

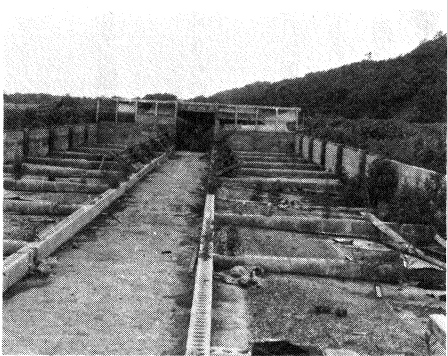
戦後を迎えてわが国は極度の食糧難となり、柏原、弁天をはじめ勇払原野にも帰農を目的とする緊急開拓事業実施要領による開拓者が入ってきたが、その初期には静川地区には入植者はなかった。しかし、昭和三十年前後になって、入植者や弁天などからの転入者もあって、人口も同三十七年には三三三帯、一三二人となり、水田事業や各種農業が行われていた。



静川の水田地帯（昭和30年）
〔苫小牧市史編さん室蔵〕



静川のパス停留所（昭和48年）
〔苫小牧市史編さん室蔵〕



廃墟となった農家と豚小屋（昭和48年）
〔苫小牧市史編さん室蔵〕

だが、この地を含む勇払原野の東部は第三期北海道総合開発計画による苫小牧東部大規模工業基地が造成されることになり、同四十五年より離農がはじまり、同四十九年には一戸を残すのみとなり、明治末期以来続いた二ナルカ・静川の農業は消滅したのである。

製炭業 明治三十年の国有未開地処分法の施行により本道への移住者が続き、開墾が開始された。当地方においても農耕適地である各地に入植者があつて、二ナルカ地区には同四十年代から入植がはじまつた。

しかしながら、勇払原野は火山灰地のため収穫も少なく、農業だけでは生計維持は不可能であつたから、入植者は分別なく山林に入つて木炭を製造し、これを補つていた。当地方の木炭製造はもともとは農家の主要な副業としてはじまつたものであつたが、早来を中心とする胆振東部は道内木炭製造の中心でもあつたからこれをいつしか本業とする者も少なくなかつた。二ナルカにおいても例外ではなく、蔦森百一はこの地方の木炭王と呼ばれたほどであり、岩田辰次郎も一時は木炭製造を専業としたほどであつた。

二ナルカで製造された木炭は馬車で遠浅駅に運ばれることが多かつたが、北海道鉄道金山線の二ナルカ駅や北松田駅にも一部が運ばれた。

わたしが学校に入るころは、このあたりは一面の森林で、あちこちに炭焼きがまがたくさんありました。そして、朝になると、できた木炭をいっぱい積んだ荷馬車が十台以上も並んで、遠浅に向つて威勢よく出発したものでした。

わたしの父も、その運搬仕事をしていたものですから、夕方、馬車をひいて帰る父が、きょうは何を買ってくるかと楽しみに待ったものでした。

(高橋スエノ『廃校記念誌あゆみ』 昭和四十五年 苫小牧市立静川小学校)

この木炭製造によつて、二ナルカ地区は一時五〇戸を数えたほどであつた。しかし、昭和十年代に入ると石炭の普

及や木炭を原料としていた苫小牧のカーバイト工場の閉鎖、それに原材料の不足などにより、木炭製造は急速に減退し、多くは本来の農業に切り換え、同十年以降はわずかの人が炭を焼くにとどまったのである。

その他 明治三十九年、木材資源に恵まれたニナルカはその開墾入地に先立ち静川神社の東隣付近にイギリスの産業 函館領事の『キング木工場』が設けられ、部落発祥の基となったが、数年にして終わったため詳細についてはわかっていない。

昭和十七年、遠浅の山口という人の創案により無限ともいふべきアシ、ヨシなどより建築用材をつくるテックス工場をニナルカに新設する計画があり、近代工場の出現に部落民も希望をもったが、運送の都合などから遠浅に移ることになり、近代工場は実現しなかった。

四 文化と交通

小学校 ニナルカ地区は明治末期から開拓者の入植があつて古くから開けた地であつたが、小学校が開設されるの設置 まで児童は厚真の小学校に通学していた。

大正に入ると木炭製造の発達により、この地に入地する者が多く児童数も四〇名を数えた。このため、小学校設置が急務となり、大正四年九月一日、元キング木工場の事務所を改造して修業年限六年、一学級の沼ノ端簡易教育所ニナルカ特別教授場として設置された。

大正八年四月、岩田辰次郎ほか部落有志二四名の寄付により三六坪の校舎を新築したが、同教授場の所屬校はその後、苫小牧尋常高等小学校、沼ノ端尋常小学校など数回にわたつて変更があつた。

同教授場は開校以来三〇名から四〇名前後の児童数であつたが、大正十二年には最高の五二名となり、上級生は廊



静川小学校の廃校式（昭和46年）
〔苫小牧市史編さん室蔵〕

下に机を置いて授業したほどであった。しかし、この増加の最も大きな理由は炭焼き人夫の入地によるものであったから、これらの人びとは二年程度で他地へ転住する傾向があり、同教授場の児童数は常に増減がはげしかった。

兄や姉たちは、ここに、まだ学校がなかったもので、山道を下駄ばきで、厚真の学校に通っていました。雨の日も、雪の日も二里も歩いて行くのですからたいへんなことだったろうと思います。大雨や大雪で学校に行けなかったことも度々あったように思います。

ここに学校ができた翌年の春、わたしは一年生に入りました。姉たちも転校していました。

新しい赤いカバンをさげて学校に行った時のうれしさは今でも忘れられないことです。

今思うと、一年生から六年生まで四十人以上も一つの教室に入っていたようですし、わたしと一緒に入学した人たちも、途中でずいぶん転校していなくなりました。六年間、ずっと一緒に終った人は二、三人よりなかったように覚えています。炭焼き、馬車屋とい

う仕事の家がほとんどでしたから、一、二年するとよそに移って、いなくなつたのでしょう。また、狭い教室に入りきれない上級生が、廊下に机を並べて勉強していた姿が今でも眼に浮びます。

（高橋スエノ『廃校記念誌あゆみ』昭和四十五年 苫小牧市立静川小学校）

大正九年四月、葛森百一より学校敷地として三、〇〇〇坪の寄付をうけ、昭和十五年九月に三五坪の校舎を新築した。

だが、木炭ブームの終わった昭和七十年代から児童数が減少し、同十三年には一九名、同十五年には一六名となった。

昭和十六年四月一日、「国民学校令」により沼ノ端国民学校ニナルカ特別教授場となり、同年五月一日には『仁成花国民学校』となつて、ここには

じめて独立した学校となった。同十九年一月一日からは管下字名改正により『静川国民学校』となった。

昭和二十二年四月、新学制の施行により『苦小牧町立静川小学校』となった。

本校は明治末期の入植と大正期から昭和初期の木炭ブームにより一時は四〇名、五〇名の児童数を数えたが、昭和七年から二〇名台となり、戦後若干の増加はあったものの一時は教員も学校長一名という時代もあった。

しかし、この地が苦小牧東部工業基地の建設地に決まり、用地買収が開始されると一戸、二戸と離農し、児童数も極端な減少となったため、昭和四十五年度をもって廃校が決定し、同四十六年三月二十一日、本校の閉校式が行われ五五年にわたる歴史を閉じたのである。

なお、廃校時の児童数はわずか四人であった。

鉄道と 本地区の鉄道は穂別、辺富内地区の鉱物を採掘し、それを運搬する目的で室蘭の檜崎平太郎などにより北
市バス 海道鉱業鉄道として沼ノ端・辺富内間に鉄道が敷設されることになり、大正十一年七月二十日には一期工事の沼ノ端・生鼈間が開通し、同時にニナルカ駅が設置された。

その後、辺富内地区の鉱物採掘は経営上採算があわないことになりこれを断念したため、社名も北海道鉄道株式会社と変更し、同鉄道は金山線となり、王子製紙が製紙材運搬のためこれを買収して昭和十八年の国有買収まで経営していた。

国有鉄道になってから沼ノ端・豊城間を廃線として、金山線は富内線として日高線鷗川駅に接続することになり、昭和十八年八月一日、ニナルカ駅も閉鎖した。

鉄道の廃線により同地区の人びとは沼ノ端駅まで歩かねばならなかったが、昭和二十七年九月、市営バス静川線の開通があり、直接苦小牧市街地と結ばれることになった。

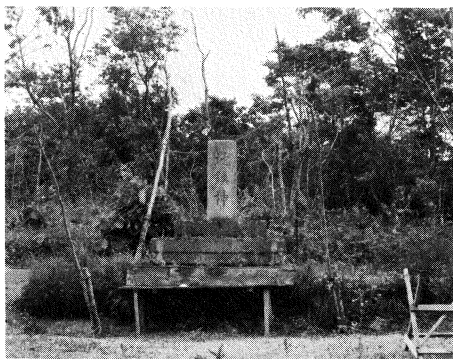
静川 明治三十九年、この地に木工場ができ、これにともなって工夫、造材夫の入地があり、さらに同四十二年には国有未開地処分法の適用をうけ入植者があり、開拓の成功と豊作を念願するためにも神社が必要となり、同四十四年九月に建立した。

当初は学校のグラウンド近くに建てたが、のち高台に移された。祭神は天照皇大神宮、樽前山神社、八幡神社の分神、

そのほか、地鎮神、馬頭観音菩薩像があった



静川小学校 (この奥の小山に神社があった)
(昭和46年) [苦小牧市史編さん室蔵]



地鎮神 (昭和45年)
[苦小牧市史編さん室蔵]



荒れ放題の神社坂道 (昭和51年)
[苦小牧市史編さん室蔵]

注 (1) 『苦小牧町名改称地番整理ニ関スル一件書類』昭和十八年 胆振支庁

(2) 『苦小牧町民税賦課等級表』昭和十五年 苦小牧町

柏原

一 部落の起源

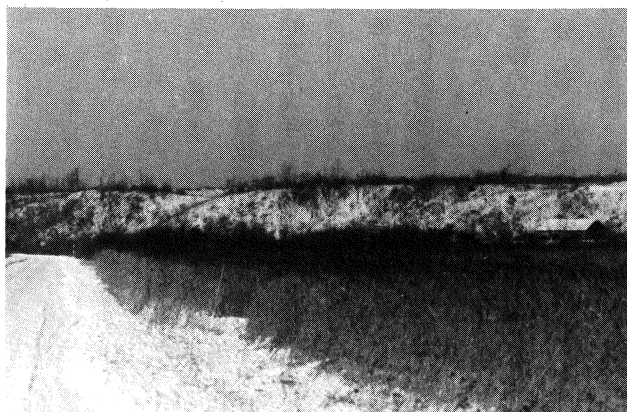
地名の 柏原の地は、もと「勇払遠浅」（ユウフツトアサ）と呼ばれていた。遠浅（トアサ）とは、アイヌ語の『トア由来 サム』（TO-ASAM）のことで、「沼の奥」を意味すると考えられている。⁽¹⁾

現在、「遠浅」と呼ばれているのは、国鉄遠浅駅（勇払郡早来町）付近で、かつては東の方は「東遠浅」、植苗に近いところは「植苗遠浅」、そして勇払寄りには「勇払遠浅」と呼ばれていた。

昭和十九年、勇払遠浅の住民代表は苫小牧町役場へおもむいて、勇払遠浅の地を『柏原』と改称することを願ひ出て許可された。すでに地元では昭和十一年ごろから『櫛ヶ原』と呼称していた。

勇払遠浅は苫小牧町に属していたが、遠浅の地名は隣の早来町にもおよび、遠浅駅（早来町）があつたりしてまぎらわしかったからである。勇払遠浅の地は、多くのカシワ（柏）が自生していたので、『柏原』と名づけられたのであつた。

遺跡の 柏原地区は平坦な台地が多いが、昭和三十年ごろに中沢久宅の裏丘陵部で発見された中沢遺跡、それに昭和分 布 四十四年九月に市営柏原放牧場で発見された柏原アイヌ丸木舟程度のものであつたが、同四十八年度から苫小牧東部工業基地開発にともなう埋蔵文化財分布調査が行われ、多くの新しい遺跡が発見された。



柏原5遺跡(昭和48年)

〔苫小牧市青少年センター蔵〕

柏原1遺跡は柏原台地の南西端で発見、縄文後期の見晴町式、タンネ
トール式などの土器片、剝片、礫などの石器が出土した。そのほか、こ
の台地では柏原2、柏原3遺跡が発見され、縄文晩期、擦文式土器と思
われるものが出土した。柏原4遺跡は道々苫小牧―上厚真線の柏原入口
付近の台地で発見された。

柏原5遺跡は柏原台地南東端で、遺物の分布する範囲が広く、縄文早
期から晩期、続縄文、恵山式土器など約三〇〇点が出土、この地区では
第一級の遺跡と思われる。

そのほか、柏原6、柏原7遺跡がある。

二 柏原の自然

位 置 柏原は国鉄苫小牧駅から北東に約二〇キロ、もよりの室蘭本

線遠浅駅から南に約三キロの距離にあり、西方に遠浅沼(昭和四十六年干
拓により消滅)、南方に弁天沼、西方にウトナイト、北方は植苗に続く海抜

約一五メートルの丘陵地域である。

地 質 柏原をはじめ、勇払原野一帯は支笏火山噴出物および樽前山降下物にあつくおわれている。

柏原病院(佐藤病院柏原分院)建設の際、地下水の調査をしたが、その報告によると、表層・樽前降下物・三メート
ル、第二層・支笏火山降下物(降下軽石降下物)・二五―三〇メートル、第三層・野幌層(海成洪積層)・五〇―六〇メ

ートル、第四層・第三紀層となっている。

住民が飲料としていた井戸水は、支笏火山降下物の下半分に滞水しているものを用いていることも判明した。⁽¹⁾

植物 地名『柏原』の名があるのとおり、カシワが多いが、その他の植物も豊富で、開拓当初のおもかげを残している。

樹木としてはカシワをはじめ、ミズナラ、イタヤ、シラカバ、ヤチダモ、ハンノキ、シコロ、ニシキギ、ドロ、エゾヤマザクラ、ヤマハギ、ハリギリなどがある。

山林の下ばえや農道のそばには、オオバコ、アカザ、ゲンノシヨウコ、ススキ、オグルマなどの間に、セイヨウタネボボ、ヒメジョオン、オオマツヨイグサの外來種や、チモシー、アカツメクサの牧草がまじっている。

動物 野鳥が多い。この地域は、山林と湿地と牧草地で構成されているため、山地の鳥、湿原の鳥、草原の鳥がそれぞれの環境に集まるからである。

春には、ウグイスをはじめ、アオジ、ホホジロ、ヒバリ、シジユウカラ、コガラ、ノビタキなどが、よいさえずりをきかせてくれる。

夏には、カッコウ、ツツドリ、キジバトの独特の声があり、カワセミ、ハクセキレイの姿は水辺に美しくはえる。

ドバト、エゾライチョウ、コウライキジ、アオサギのような大型の鳥もあり、トビ、ハヤブサ、エゾフクロウ、コノハズクの猛きん類もよく姿をみせる。

カラフトスズメやコムクドリは年中多い。カラスはすくない。

冬には、シベリア方面からオオハクチョウ、ヒシクイ、マガモなどがウトナイトや遠浅沼に飛来するのをみかける。哺乳類では、以前ウサギが多く豆畑などに損害を与えたが、近年は減り、代ってキツネがふえてきた。シマリスも

姿をみせる。ネズミの類は多い。

ヒグマはほとんど現われなかったが、昭和四十一年十月十七日、市放牧場で一五〇キロのオスグマが射とめられた。モンシロチョウ、モンキチョウをはじめとしてチョウの類も多い。昆虫では、夏の暑い夜にホタルが飛んでいることがあるという。

三 開拓の概要

柏原に人が住むようになったのは、明治以降である。柏原の開拓の歴史を概観すると、第一期松田牧場時代（明治三十一〜昭和六年）、第二期第一次開拓時代（昭和七年〜同二十年）、第三期第二次開拓時代（昭和二十一〜同三十六年）、第四期変革と廃村（昭和三七〜同四十八年）の四期に分けることができる。

（一）第一期・松田牧場時代

概要 明治三十年、国有未開地処分法が施行された。同法は、国有未開地を開墾に供する土地は一五〇万坪以内、牧畜は二五〇万坪、植樹は二〇〇万坪、組合、会社には各二倍の土地を無償で貸付けし、一定期間中に開墾した者に無償で付与し土地の所有権を与えるものであった。そのため、全道的に投機的土地占有の傾向があらわれた時代でもあった。

柏原付近では、アビラ（現東遠浅）で札幌に住む薮惣七が二二六町余歩の払いさげを受けた。いまでも『ヤブソウ』なる地名が残っている。苫小牧付近（苫小牧市、厚真町）で明治三十年まで三〇万坪以上の払いさげを受けた者、じつに九一名を数えた。

このような状況のなかで、北海道牧畜合資会社（代表山本元三郎、業務担当社員松田利三郎）はこの法律の適用を受け、

勇弘遠浅の山林原野二、六〇〇町歩の払いさげを受けた。利三郎は元治元年（一八六四年）兵庫県住吉の生まれ、明治三十一年五月に現場の責任者として勇弘遠浅に入植したと伝えられる。この北海道牧畜合資会社の牧場は通称『松田牧場』と呼ばれていた。

利三郎は、勇弘遠浅の地が火山灰地ながら一面のカシワ等の樹木におおわれている地勢に着目、牛馬の放牧をはじめたのであった。柏原の南端にあたる佐藤宅がその事務所の跡で、古いコンクリートの床があり、アカマツの老木、庭園の池、巨大なサイロが残っている。また、佐藤貞の入植当時（昭和三十五年）、ゴミを処理していたところ、『苦小牧村字沼ノ端・松田牧場』と記された木印が出てきたという。

牧畜 明治の末期の松田牧場には馬一三七頭・牛一〇二頭が飼育されていた。大正十四年には、松田牧場の放牧馬は一五〇頭余と記録されている^②。

昭和のはじめころには、牧場に世話役一名、牧夫二名、奉公二名が勤めていた。牧夫の給料は二〇円ぐらいであった。馬種は、ベルシュロンやアングロノルマンで、おもに軍馬用に飼育されていた。

薪炭業 松田牧場の二里四方におよぶ広大な牧場地は、三〇〇頭ほどの牛馬の放牧には広すぎる面積であった。また、大部分は山林であったから牧場地として使用するには樹木をきり倒す必要があった。

そこで、利三郎は牧場地内に木炭製造業者を入れて木炭の製造にあたらせた。業者は、ひと山四〇〇円ぐらいで立木を買い、炭焼きをやとって五年ぐらいで焼きつくすのが例であった。

木炭にする樹木は、ナラ・カシワ・イタヤ・ハン・カバなどであった。価格は大正のはじめ一俵（四貫メ）、一〇〜一二銭で、末期には一七〜二五銭であった。一カ月に三〇〇俵（一カマで一〇〇俵焼く）ほど生産し、遠浅に馬で運んで売ったという。

炭焼きに従事した戸数は、年代によっても異なるが、一〇〜二〇戸ほどであったと思われる。金山線の北松田駅の近くに大きな木炭倉庫がつくられて、木炭の集荷にあてられたのは大正十一年のことであった。

水田 昭和四年、松田牧場では遠浅沼に面した低湿地に造田を開始した。翌五年に五〇町歩、六年には三〇町歩の水田が開墾された。美唄からの集団入植者があり、合計一二戸の小作農家が水田づくりにとりくんだ。この年、部落名が勇払トアサと決定されている。

ところが、昭和七年は冷害のため収穫皆無、昭和八年も連続冷害のため収穫皆無となり、戸数半減し、水田耕作は断念されることになったのである。

(二) 第二期・第一次開拓時代

昭和七年、北海道牧畜合資会社は、牧場の北半分にあたる六〇〇余町歩を解放した。最初の入植者として中沢久らの五戸が、開拓の鉤をおろした。一戸あたり二五町歩の割りあてで価格は六八五円であった。

木炭業者が伐採した樹木の切り株が笹やスキの間に乱立し、柏の若木が群生した広ばくたる火山灰地を開墾して、トウキビ・イナキビ・エンドウ・バレイショ・大豆・小豆・大麦・エンバクなどをまいたが、その年は冷害となって収穫はほとんどなかった。

そのため、北海道牧畜会社の牧場や鉄道の“出面”をして、生活費を得る開拓者もあった。牧畜会社牧場での出面賃は、一日あたり九〇銭であった。

昭和八年、開拓者たちは農事組合（勇払第一農事実行組合）を組織し、食料・肥料・飼料の自給を当面の目標として結束をかためた。バレイショ、トウキビ、カボチャ、アワ、ヒエを栽培して自給食料とし、開拓を続けたのであった。初期の開拓者として氏名の明らかな人を次に記す。

中沢久・金子広吉・阿部要助・林秀吉・山辺兼太郎・村岡長三・平野辰雄・荒谷市助・松本顕一・水島留三郎。

昭和九年ごろから開拓者たちは、元の地主のすすめもあって、酪農をはじめた。しばった牛乳を遠浅まで馬車で運び、馬車のきかないときは、背負って出荷したという。

昭和十一年ごろには、勇払遠浅の開拓地を『樺ヶ原』と呼ぶようになった。乳牛も六〇頭を数え、サイロを建設する農家も増えてきた。

昭和十四年、乳牛一〇〇頭・耕地九〇町歩となった。人びとは乳牛一〇〇頭を記念し、一〇〇頭祭を行い、共同作業場を建設した。共同作業場は、開拓当初よりの共同と努力を記念するとともに、今後の部落の中心施設として集会所も兼ねて建てられ、青年団の会合はじめ各種の行事の場とし活用されることになった。

共同作業場の敷地は、佐々木喜三郎の寄付によるもので七反歩あり、のちに家畜検査場・乳牛品評会場が付設されて、柏原の産業・文化の中心地となったのである。

昭和十五年、入植以来八年を経過し、酪農地域としての基盤は着々と整備された。この年、中沢久ほか一一名は、土地解放の恩人・北海道牧畜合資会社業務担当社員の松田利三郎の喜寿にあたり、その恩徳を謝して頌徳碑を建立した。

昭和十六年、太平洋戦争がはじまった。戸数二〇戸を超え、酪農経営も軌道にのりつつあった柏原にも戦時色がただよってきた。

戦況は、昭和十七年のミッドウェー海戦以来、日本軍の守勢に転じ、昭和十八年六月のマリアナ海戦により敗勢は決定的となった。

本道でも、太平洋海岸線一帯に米軍の上陸を想定しての防備体制が軍部によりすすめられた。柏原地区は、米軍上



柏原の農家(昭和25年)
〔苦小牧市史編さん室蔵〕

陸の際は札幌への至近距離にあたる重要防衛拠点とされて、熊部隊および稔部隊の駐留があり、戦車壕・さん壕・防空壕などの構築が行われた。熊部隊は、陸軍第七師団の別称で昭和十九年八月、早来に旅団本部を置き、石狩低地帯南部の防衛と野戦陣地の構築を目的として駐屯した。遠浅に中隊本部があり、柏原には一個中隊が派遣されていた。

中隊は、歩兵陣地構築・連絡道の建設などの作業にあたったが、菜園をつくって食料の自給も行なった。木炭の製造も行われた。野戦の際、薪を使用すると煙があがって味方の所在が敵に知られるので、煙の出ない木炭を使用するつもりであったという。

稔部隊は、昭和十九年に編成された第七七師団の別称で、熊部隊が東部警備に転進したあと、苦小牧付近の予想作戦海岸の防衛準備にあたった。

早来に独立中隊本部がおかれ、柏原に一個分隊が派遣されていた。

国鉄沼の端駅から柏原へ向う道路が勇払川を横切るところに稔橋があったが、これは稔部隊の架設したものであった。(いまはない)。

昭和二十年七月十五日の夕方、当時の陸軍新鋭重爆撃機『飛竜』一機が千歳上空で米軍機に攻撃されて柏原に不時着、雑木林に突込んで炎上した。

この『飛竜』は、計根別の飛行第七四戦隊の所属で、軍務で樺太の落合飛行場へ行った帰途、米軍機に右エンジン

を撃たれたのであった。

飛竜には、機長佐藤久常大尉ら七名が乗り組んでいたが、同機を操縦していた山田林^{はやし}軍曹だけは奇跡的に救助され、残りの六名は焼死した。

昭和四十年、山田元軍曹は二十年ぶりに柏原を訪ずれ、付近住民の建てた『六勇士戦死の碑』の前で、なき戦友の冥福を祈り、救助してもらった現地の人びとと再会した。

(三) 第三期・第二次開拓時代

昭和二十年の敗戦は、わが国の政治・経済・産業・国民生活に多くの変革をもたらした。昭和二十一年から実施された農地改革は、そのもっとも大なるものであった。

未解放地域を多くかかえていた北海道牧畜会社の松田牧場も農地改革によって、山林や湿地の一部を除き、農耕適地とされた大部分の牧野を接収された。接収された松田牧場は、昭和二十二年から『北海道勇払開拓試験場』として再発足した。勇払開拓試験場は、つぎの事業を行うこととなった。

- 1 開拓に必要な農業土木に関する試験ならびにその経済効果に関すること
- 2 土壌の技術的研究
- 3 土壌に関する物理・化学的研究
- 4 開拓入植者の生活合理化に関する研究
- 5 研究資料の調査・収集
- 6 開拓入植者に対する開墾・営農・生活の現地指導
- 7 勇払原野総合開発事業推進のための社会的経済的調査研究



毎日苦小牧の工場に送られた収乳罐
(昭和40年)〔苦小牧市史編さん室蔵〕

試験場には、金田一場長・事務官・技官（場長兼務）ら三名の職員が配置され、事務所には旧松田牧場の事務所があられた。事業は二年間行われ、昭和二十四年に第二次開拓がはじまるとともに閉所された。事務所および職員住宅は、その後柏原小学校敷地内に移転し、公民館および教員住宅として活用された。

『市勢要覧』 昭和二十四年 苦小牧町

昭和二十四年、開拓試験場で管理していた旧松田牧場の用地のうちの農業適地を、開拓地として一般に解放した。一戸分二〇町歩で四三戸分、八六〇町歩が用意された。

その年、広島県から小田、河野、桧山、三好、又場・山中ら一五戸が初年度開拓者として入植した。価格は一戸分約三、〇〇〇円であつた。その後、岩手県などからの入植者があり、昭和三十三年までに四三戸が旧松田牧場の南半分に入植して新しい開拓部落を形成した。

開拓者として入植するには、農業経営の意志ある者で自己資金を有し、稼働労働力二人以上が必要とされた。最初に入植した広島県の出身者たちは、初年度は住宅を建設するだけで過ごし、二年目から本格的な開拓にとりかかった。

開拓者たちは、長岡開拓団長を中心に国から支給される開拓補助を頼りに、山林や原野をきりひらいて畑作を行った。昭和二十五年は、イナキビ・アズキ・バレイショが豊作であつた。しかし、火山灰地のため畑

作を行うには多量の施肥を必要とするので、肥料代に追われて経営は苦しかった。

そこで、安定した現金収入と肥料の自給をはかるため、酪農にとりくむ農家が増えてきた。道の貸付牛一頭から酪農をはじめめる農家もあったが、冷涼湿潤な気候と広大な原野は酪農経営を安定したもののにのばしていった。昭和三十年代には、平均一〇頭前後の乳牛を飼育するようになった。既存農家地区でも戦前から酪農の伝統があり、開拓地区とあわせて柏原は苫小牧市の近郊農業地域としての経済性を高めてきたのであった。

開拓入植戸数

年次	昭和二十四年	二五年	二六年	二七年	二八年	二九年	三〇年	三二年	三三年	三三年	計
入植戸数	一五	八	五	〇	四	一	〇	九	〇	一	四三

『開拓入植者原簿』（苫小牧市役所農林課調）

(四) 第四期・宅地造成と養鶏時代

昭和三十七年、ようやく農業経営が安定しつつあった柏原に二つの変化が起った。宅地造成と養鶏がそれである。

昭和三十三年、苫小牧港の内陸掘り込みが開始されると、土木建築業関係者をはじめ、人口の社会増がみられるようになった。すでに苫小牧市は、西町、緑町に公営住宅の建設および分譲地の造成を行ってきたが、さらに人口の社会増が見込まれることから、宅地造成の気運が市内外にもりあがってきた。

そこで、多くの不動産業者が、糸井、錦岡などの西部地域、中野、沼の端、ウトナイ湖周辺の原野などを買収して宅地造成にのり出した。昭和四十一年の苫小牧市の不動産業者数は四八を数えている。

昭和三十七年八月、苫小牧市内佐藤病院の佐藤玄二院長は、柏原に分院建設のため用地を取得した。ついで同三十

八年四月、苫小牧市道南拓地会社は旧松田牧場南端の低湿地一四八町歩を買収した。この土地は昭和三十八年二月に松田武雄（松田利三郎の子息）が売却した二五〇町歩の半分にあたっていた。

道南拓地会社は湿地を埋めて整地・区画し、分譲地として売り出した。

また、昭和三十五年ごろから養鶏が行われるようになった。当時は、わが国の経済成長がはじまった時期にあたり、生活水準が向上して食生活の内容も変化し、鶏卵の需要が増加しつつあった。苫小牧市も工業港の掘り込み開始による関連産業の活発化などで人口増加がいちじるしく、鶏卵の需要も増加していた。

このような時期に、鮭川長司（のち養鶏組合長）、牧義一（昭和四十一年・既存農家組合長）、佐藤貞（昭和四十一年・開拓農家組合長）などが中心となって養鶏にとりくんだのであった。

すでに大部分の農家では自給用に平飼いのニワトリを数一〇羽飼育していたが、これをケージ飼いとし、農業改良普及所の指導を受けながら、一戸で一〇〇〇〜二〇〇〇羽を飼育するようになった。

昭和三十九年、柏原の養鶏の発展を祈念して鶏魂碑が建立された。八月二十日、篠田耕作国務大臣、大泉源郎苫小牧市長らが出席して盛大に除幕式が行われた。以後、この日を例祭日と定め、鶏の供養、養鶏組合員の研修および慰安会が行われるようになった。

養鶏農家は、これを専業とするものは少なく、酪農で一〇頭前後の乳牛を飼育しながら養鶏を行う形式の養鶏農家が多かった。

次に昭和四十一年における養鶏の実態を紹介する。

ひなは岐阜県の後藤養鶏場から一羽八五円の価格で仕入れた。育すう期間は一八〇日で、一羽分約八〇〇円の育すう費を要した。



柏原鶏魂碑(昭和45年)
〔苫小牧市史編さん室蔵〕

飼育にはケージを用い、設備費は一羽分約一八〇円を要した。飼料は、配合飼料を用い、ビタミン剤・カキ殻を混入した。配合飼料は一袋二〇キロのもの七七〇〜八二〇円で購入した。成鶏一羽あたり年間一〇キロを必要とした。

集卵は毎週木曜に行われ、一キロあたり一八〇〜二一〇円の卵価であった。

鶏種は、ロックホーン、アストーン、ハイスドルフ、白色レグホーンが飼育された。伝染病のニューカッスル病、コクシジュームの伝染を防ぐため、鶏舎への部外者の立入は厳重に制限された。

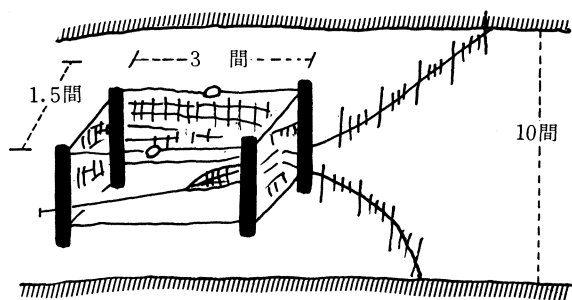
養鶏は平均七〇パーセントの産卵率によって経済的に維持される。したがって、産卵率の低下した個体は廃鶏として淘汰され、精肉業者に売却された。廃鶏の平均年令は、生後一年半から二年で、一キロあたり一六〇円でひき取られた(一羽平均二キログラム)。

平飼いと比較してのケージ飼いの長所は、小面積で集中的に給じ、採卵などの作業ができる、伝染病のまん延を防止できる、けんかによるけがないなどがあげられる。

これに対して、平飼いに比較しての短所は寿命が短い(平飼いなら数年は産卵率が落ちない)ことがあげられている。

四 淡水漁業

大正十三年、山形県出身の鮭川勘次郎が柏原に移住してきた。勘次郎は農業のかたわら付近の遠浅沼で漁業をはじめた。



◇待ち網の図……鮭川長司氏による。

漁法は主として待ち網を用いた。この網は勘次郎の創案によるもので、永久的に遠浅沼の海側の出口付近に仕掛けられ、遡上してくる魚が仕掛け網に入ったところ、上の網をはずし、タモですくって漁獲した。

水産物としては、コイ、ウグイ、フナ、ウナギ、エビ、ワカサギ、ヤツメ（ヤツメウナギとは別種）など商品として出荷できるものと、ドジョウ、カジカ（ゴタツベ）、サクラガイ、カラスガイと当時商品価値のないものがあげられる。

これらのうち、主産物はウグイ（漁期は春・秋）、ワカサギ（秋）、コイ（夏で、とくにウグイは秋に海から川にのぼって越冬し、春に海にくる習性があるので通路に網を仕掛けて大量に漁獲した。

往時は、年間一万貫（三七・五トン）の水揚げがあったという。また、遠浅沼にはジュンサイが生育しており、これを採取して販売したこともあった。

鮭川勘次郎が記録していた大福帳によると、つぎのような価格がみら

れる。

ウグイ 焼ばし 鹿の谷 一箱七円五〇銭（一箱は一〇貫 $\equiv$ 三七・五kg）

チカ（ワカサギ） 二貫 一円六〇銭

コイ 一本 一貫四〇〇〇匁 四円二〇銭

ウグイは焼きぼしにされたあと一五尾ずつ串にされ、三〇連を一箱に納められた。（一箱は四五〇尾となる）。

これらの漁獲物は、おもに道内の炭鉱（歌志内・夕張・幾春別・上砂川・茂尻・赤平・美唄）に送られた。焼きぼしは採炭夫の食卓に供せられた。主婦は夫の無事を祈って、毎日おかしらづきのウグイを食膳につけた。いうまでもなく、おかしらづきの魚としてはウグイがもっとも安価だったからである。

第二次大戦後の食料難時代には、町から石油かんを背負ってきた人たちに、直接タモですくって販売したという。

その後、釣人の増加などにより魚類の減少の傾向があらわれたので、昭和二十七年に勇払川淡水漁業協同組合が設立された。組合は、勇払川水系一帯（勇払川・安平川・勇振川・ウトナイ湖・第一幹線・遠浅川・美々川など）の漁業権をもち、柏原から鮭川長司（勘次郎の子）、松本顕一が組合員となって（沼の端の四名を加えて六名で組合を構成した）、お互いの利益と資源保護につとめた。

組合は、勇払川水系一帯の河川などで釣りをする人から入漁料をとる権利を有していたが、広大な地域では実行できなかった。また、アオサギ、アイサガモ、カワセミなどによる魚類の害も無視できなかった。アオサギは浅瀬でアイサガモは水中でそれぞれ一〇センチ前後の魚を捕食し、カワセミはもっと小さい魚をとっていた。

このような人為的、自然的原因による水産資源の不足を補うため、有用魚の稚魚の放流を行った。コイは札幌中の島のふ化場から取り寄せて昭和四十年まで一万二、〇〇〇尾、ワカサギは大沼、洞爺湖からとり寄せて六、〇〇〇万

尾を放流した。サケの放流も行われ、昭和四十年には三、〇〇〇尾を捕獲した。

五 教育と文化

明治・大正期の軍馬と乳牛の松田牧場時代が過ぎ、第一次・第二次開拓農家が入植すると、定住人口は増え子弟の教育のための学校その他の施設をのぞむ住民の要請が高まってきた。

遠浅特別

大正五年三月、北海道牧畜会社の業務担当社員である松田利三郎はこの牧場で働く牧夫や農夫、炭焼教授場 き人夫の子供たちのため、これまでにあった私設簡易教育所の教科書を除く一切を寄付し、公設の苦小牧尋常高等小学校所属遠浅特別教授場が設置された。

大正五年の児童数は男一〇名、女五名の一五名であったが、児童が少ないことから、同十年にはニナルカ特別教授場に合併され、廃校となった。

柏原小学

松田牧場時代は、傭いの牧夫、出稼ぎの炭焼夫など単身者が大部分の住民であったため、学校の必要校の沿革 性はなかったが、家族をともなった開拓農家が入植すると、学校の設置が切実な問題となってきた。開拓者の子弟は、地元小学校がないため、二里も離れた遠浅の小学校まで通学しなければならなかったのである。

昭和十年、学校設置の陳情書が提出されたが、人員が少ないという理由で却下された。昭和十五年ごろに第二回目の陳情を行ったが、前と同じ理由で実現に至らなかった。

昭和二十一年、三たび学校設置の運動がもりあがってきた。有志たちは、部落の共同作業場を校舎として小学校を新設してもらいたいと、当時の西田苦小牧町長あて陳情書を提出したのであった。

学校誘置運動を行った柏原小学校建築期成会は、会長中沢茂、副会長建築係富樫信一、資材係金子友吉、会計係鮭



柏原小学校(昭和46年)
〔苫小牧市史編さん室蔵〕

川長司を役員として構成され、いままでにない熱心な活動を展開していった。

ついに、昭和二十二年十二月五日、沼ノ端小学校付属分教場設置が認可され、二十三年二月二日、柏原七十一番地の共同作業場を校舎として、三五名（男一九名・女二六名）の児童が入学した。地元住民の一〇年余にわたる念願がかなえられたのであった。

長尾睦人が分校主任として赴任したが、まもなく昭和二十三年四月一日、柏原小学校として独立、初代校長となった。

長尾校長は、宮城県石越村の出身、苦学して教育免許をとり、志を立てて来道、大正十三年苫小牧西小学校の准訓導となった。その後、樽前小学校・沼ノ端小学校に勤務した。昭和十六年に仁成花（静岡）小学校長となり校下住民の信望をあつめていた。

昭和二十五年、待望の新校舎（八〇坪）が落成した。旧校舎の作業所から柏原一五番地の新校舎に移転した。国費六〇万円・市費九五万円の計一五七万円の建設費であった。校地は、地元有志の努力により開拓予定地三町歩、部落地二町歩、計五町歩が用意されていた。

昭和三十二年に調理室増築、同三十六年に長さ一〇メートルの水泳プールがPTAの協力により設置された。同三十七年には、へき地集会所を兼ねた七〇坪の体育館が完成した。同四〇年には理科室、普通教室、渡り廊下が増築されて、学校としての施設・設置がしだいに充実すると

ともに柏原の教育文化の中心施設としての機能を發揮してきたのであった。

昭和四十四年の秋、苫小牧東部工業港の建設計画が発表され、柏原は工業団地用地に予定された。同年十二月から用地買収がはじまった。

昭和四十五年度に入ると、離村がはじまり、実に二一名の転出児童を記録している。

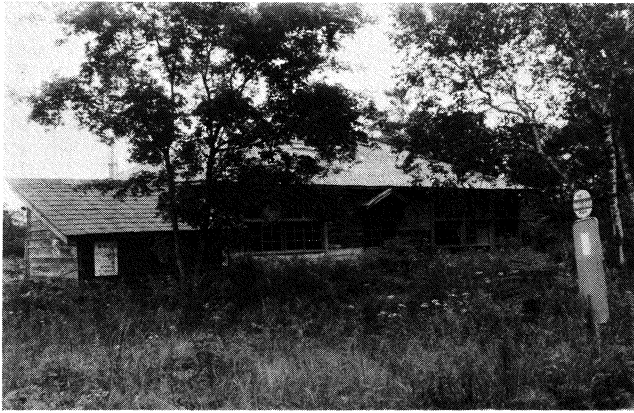
昭和四十六年三月十九日に第二回卒業式、三月二十三日には修了式とあわせて廃校式が行われたのであった。

柏原公民館 昭和三十二年、柏原公民館設定期成会（会長福永寿一、と保育所 副会長中沢久）が組織された。公民館といっても、新築す

るのでは多額の経費がかかるので、旧松田牧場の事務所の建物を柏原小学校の校地内に移築する計画であった。その建物は、松田牧場閉鎖後、勇払開拓試験場の事務所として使用されていた。まもなく試験場も閉場されたので、公民館として活用することになったのである。

昭和三十五年、移転工事は完了した。新しい公民館は、青年団、婦人会、部落会の会合、映画会、学芸会（小学校に体育館ができるまで）などに利用されたが、もっとも柏原の人びとに好評を得られたのは季節保育所であった。

昭和三十七年五月十日、保育所開所式が行われ、三〇名のこどもたちが入所した。初代保母として柏原小学校長夫人鎌田クニが保育にあたっ



柏原集会所(昭和43年)
〔苫小牧市史編さん室蔵〕

た。以後、保育所は毎年七月―九月の農繁期に開設された。

昭和四十四年、かつて柏原小学校の仮校舎ともなった共同作業場がとりこわされ、その跡に福祉会館が建設された。二月に作業場の解体がはじまり、住民の協力により五月には竣工した。

青年 柏原の最初の青年団は、昭和十三年に山田貢を会長として発足した。苫小牧町檜ヶ原青年団と称し、**活動** 員は一〇名であった。まもなく戦時体制となり、昭和十六年に解散した。

昭和二十一年、栗津周吉を会長として柏原青年同志会が誕生した。農事研究・相互親睦・社会奉仕を目的とし、機関誌『輻^{はく}』『火山灰地』の発刊、演芸会での『瞼の母』上演などを行った。

昭和二十四年、青年回復活準備会が発足、翌二十五年に柏原青年団再発足総会が開催された。団長に鮭川勘一が選ばれた。団員の減少により、二年間の活動で解散した。

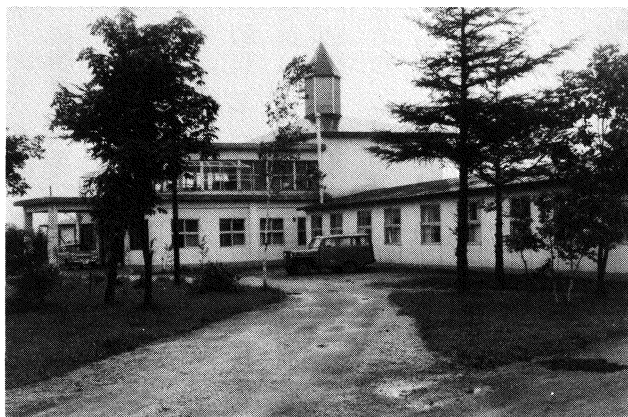
昭和三十年には、柏原青年同志会（会長黒沢美代高）の再発足と4日クラブ（会長福永栄）の結成が行われた。

昭和三十三年には、開拓農家地域に柏原酪農青年研究会が発足した。会長は三好武広で、酪農の経営設計の研究を目的として会誌『柏原酪青』を発行した。

4日クラブは昭和三十八年まで活動が続けたが、その後は自然消滅した。

昭和四十一年、柏原青年学級が発足した。二二名の青年が参加し、学級長には栗津寿夫が選ばれた。高浪良雄学級主事の指導のもとに、講演会、視察旅行、運動会、ダンス講習会などが行われた。

以後、青年学級は毎年開設されて活発に活動が続けた。昭和四十六年三月二十七日、解散総会とサヨナラパーティーが開催された。最後の学級長は鮭川聖司、学級生は一二名であった。



柏原病院(昭和43年)
〔苫小牧市史編さん室蔵〕

柏原病院 昭和三十七年八月、苫小牧市内佐藤病院の佐藤玄一院長は柏原に五町七段の土地を購入した。矢代町の病院が手狭まになったので、リハビリテーションの治療部門を分離して分院を建設するためであった。

昭和三十八年八月起工、三十九年一月竣工、二月一日に奥村分院長が派遣されて開院となった。

佐藤病院が昭和二十九年、矢代町に建設されるとき、精神科のため地元住民の反対運動があったので、柏原病院建設にあたっては地元住民の不安・反対の動きがあるものと予想された。

建設工事はじまると予想された反対運動は起らず

「近くに病院ができれば、急病の場合お願いできる」「大きな病院ができれば、近くに住宅や商店ができ地域が発展する」「地価があがるので、遊休地を処分すれば不足な営農資金にまわせる」など、病院建設歓迎の声があがってきて、柏原病院建設期成会がつくられて、病院建設を側面から支援した。

開院後、期成会は柏原病院協定会と名称をかせ、病院の事務に協力した。

昭和四十五年二月、柏原病院は六年半にわたる柏原での業務を終え、苫小牧市樽前に『道央佐藤病院』として移転した。

神社 柏原病院の前に小さな神社がある。祭神は八幡大菩薩で、昭和七年に室蘭の八幡神社から勧請したもので、昭和十年に現在地に祭られた。毎年六月十五日に例祭が行われていたが、同三十七年ごろから九

月十五日に祭典が行われるようになった。祭典には、社殿の前で家畜の共進会も開催された。

六 交通と電気

交通 北海道鉄道株式会社は、日高国鷗川流域の石炭および鉱産物を開発するため、沼の端・富内間の鉄道敷設

工事を大正九年五月に着工した。大正十一年、沼ノ端・生鼈間が開通し、柏原にも北松田駅が設置された。

大正十五年には、北海道鉄道札幌線沼ノ端・苗穂間が開通し、柏原北端に近い場所に植苗駅が開業した。昭和九年には、金山線の苦小牧駅乗り入れが実現し、柏原住民の札幌および苦小牧方面への足の便が確保されたのであった。

昭和十八年八月、北海道鉄道は日本国有鉄道に買収され、札幌線は千歳線に、金山線は富内線にそれぞれ名称が変更になった。その年十一月には富内線の沼ノ端・豊城間は廃止となり、日高線の鷗川から富内に接続することになった。北松田駅も廃止となったのである。

昭和二十七年九月、金山線が撤去された跡に市営バスが通じることになった。柏原西口・柏原中央・柏原東口の三つの停留所が設置された。同三十八年の柏原病院建設にともなってバス路線は柏原小学校まで延長され、翌三十九年には柏原病院前に停留所が設置された。

さらに、昭和四十一年六月、国鉄室蘭本線に並行して国道二三四号線が開通し、早来バスの運行もはじまった。

電気 電燈線は、昭和二十四年に沼ノ端から架設された。同二十四年に入植した開拓農家へは同二十九年に電燈線が通じた。

昭和三十二年に有線放送が設置され、戦時中からの回覧板連絡に終止符がうたれた。

七 農業経営の実態

苫小牧市役所農林課の昭和四十年年度宮農実績集計総括表により、農業経営の実態をふり返ってみる。

農業 農家戸数は、既存農家二〇戸、開拓農家三七戸、計五七戸（いずれも昭和四十年年度）である。農業人口の内人口 訳は表のとおりになっている。

農家一戸あたりの家族数は七・九人となり、全国平均四・〇五人（昭和四十年国勢調査）をかなり上まわっている。就業労働力は、一戸あたり二・七人となる。また、昭和四十年十月一日の国勢調査によれば、柏原全域の総人口は四八七人（戸数八六戸）であった。

柏原の農業人口（昭和四十年度）

	就 業 人 口		家 族 数 （就業人数を 含まない）	計
	男	女		
既存農家	三八	三〇	一二七	一九八
開拓農家	四五	四三	一七一	二五九
計	八三	七三	二九八	四五四

（『宮農実績集計総括表』昭和四十一年 苫小牧市農林課）

土地 柏原の総面積および土地利用状況は次表のようになっている。農家一戸あたりの所有面積は、平均二・一・九ヘクタールとなる。そのうち耕地は一戸あたり八・一四ヘクタールである。

土地利用・単位 ha (昭和四十年年度)

平一戸あたり均	%	計	開拓農家	既存農家	耕地		草地		山林		宅地	その他	合計
					畑	樹園	集約草地	その他	人工林	天然林			
		四四・三	三三・三	一四・一	〇	一四・一	三三・三	三五・五	五八・八	一八六・八	五七	六六・七	四六六・一
		〇	〇	〇	〇	三三・三	一一・〇	六四・〇	五一・一	二七五・〇	八・二	八八・六	七六・三
		四六四・三	三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
		三七・八	三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
		八・四	三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八	二七六・六	八・二	八八・六	七六・三
			三三・三	一四・一		三三・三	二二・〇	六四・〇	五八・八				

(『営農実績集計総括表』昭和四十一年 苫小牧市農林課)

畑作地 柏原には、総面積の三七%に相当する畑作地がある。

小豆・大豆・えん麦・バレイショなど二十種以上の収穫物があった。

家畜および施設 家畜・家きんとして多く飼育されているのは、乳牛と鶏である。乳牛は一戸あたり平均七・二頭が飼

び施設 育されており、サイロは四八基を数えた。

鶏は一戸平均二〇七羽であり、近年ケージ飼いが普及して企業的養鶏が行なわれていることは前述した。

家畜および施設

既存農家	乳牛		馬	豚	鶏	山羊	施設		
	成	一歳未満					めん羊	サイロ	
一〇六	一五	一歳	成	繁殖	成	四	一九	〇	育すう器
三一	三一	肥育	二	肥育	若				
一三			二	四、四七七					
				二、二五〇					

計	開拓農家	計	開拓農家	計	開拓農家	計	開拓農家	計	開拓農家
二七一	一六五	五六	四一	八七	五六	三九	二六	二	〇
九	七	一三	二	九、〇二三	二、八〇〇	一八	四八	二	六
二	一〇	二	七	二	一〇	一〇	六		

〔宮農実績集計総括表〕昭和四十年 苦小牧市農林課

農業収入・既存農家（昭和四十年度）

項目	面積	収量	粗収入
大豆	〇・三 ^h	一八〇 ^{kg}	一〇、六七四 ^円
小豆	一三・一	九、四九五	一、〇七三、四五四
菜豆	二・一	一、七二〇	一五四、一一二
馬鈴薯	一・九	二四、二五〇	二四〇、六七五
玉蜀黍	二・〇	二、六四〇	七六、二八六
その他雑穀	〇・一	五〇	二、二八五
えん麦	三・三	五、五一〇	一八一、八三〇
青刈飼料	九・二	二〇六、三七五	五〇七、六八二
デントコーン	二六・五	八〇〇、一二五	一、二八八、二〇一
採草	四三・一五	八六四、八〇〇	八三〇、二〇八
放牧	二五・四	四六四、八七五	四四六、二八〇

項目	面積	収量	粗収入	備考
小麦類	一・五	一、二四〇 ^{kg}	五四、六二 ^円	
大豆	〇・〇五	六〇	三、五四〇	
小豆	二二・一五	一七、四五〇	二、四五五、二三〇	

(畑宮清一郎『柏原開拓史』 昭和四十六年「郷土の研究③」)
農業収入・開拓農家(昭和四十年年度)

計	飼料用根菜	放牧	放牧	採草	根菜類	果菜類	葉菜類	アスパラ	甜菜
二〇八・九	九・九五	三五・〇	一二・〇	一一・八	〇・三	〇・二	〇・四	〇・五	〇・二
二、九九一、三四四	二七五、五六二	一四三、〇〇〇	一四五、〇〇〇	三〇、〇〇〇	六、九三七	三、五五〇	一、一七五	三〇〇	五、八〇〇
六、四一五、七一九	七四四、〇一六	七一、六二五	一三九、二〇〇	二八、八〇〇	六三、六八五	二一、二一八	五六、四五〇	三六、〇〇〇	四一、七六〇

菜豆	四・二五	二、八一〇	二二二、四三二
馬鈴薯	八・七	一三〇、六〇五	一、三四七、一三二
玉蜀黍	六・一五	二三、二八〇	三三一、七二〇
その他雑穀	一・三	六〇〇	二七、四二〇
えん麦	一二・四	七一、六〇五	五八三、〇〇五
青刈飼料	一・九九	一八七、五〇〇	四六二、一九二
デントコーン	四〇・八	一、一八七、五〇〇	二、一八〇、一九二
飼料用根菜	一八・二	四八五、〇九〇	一、二二一、五二〇
採草	八七・四九	一、七一、四五〇	一、七七四、二九二
放牧	七二・二	一、〇四三、〇四五	一、一八九、六四七
甜菜	六・三一	一六一、八三〇	一、一五七、二二一
アスパラ	一・九	五〇〇	一〇〇、八〇〇
葉菜類	一・七五	九、九五〇	一九六、五〇〇
果菜類	三・八五	七一、四四五	五一三、〇二〇
根菜類	四・〇七	四八、九五〇	四八六、〇〇八
採草	三・二	一	九、六〇〇
放牧	三・五	二五、〇〇〇	二四、〇〇〇

飼料

草地改良

採 草	放 牧	計		
			野 草	野 草
一三・一	四一・三	三七八・〇七	一六四、七五〇	八二、三七五
			五一八、六〇〇	一五、二八一、九六四

(畑宮清一郎『柏原開拓史』昭和四十六年「郷土の研究③」)

柏原農業 柏原農業は、大きく分けて畑作・酪農・養鶏の三つの農業形態によって構成されているといえる。その特色として、その一つを主とするもの、二つを組みあわせたもの、三つを兼営するものなどの類型が認められる。

なかにはビニールハウスによるそ菜づくりに専念する農家もでてきたが、平均的な柏原の農業経営の形態は『酪農と養鶏』の兼業であつた。

また、養鶏農家の増加の原因は、労働力が他の農作業にくらべて少なくてすみ、酪農同様に現金収入があることなどがあげられよう。

畑作についてみると、飼料作物のほか大豆・小豆・菜豆などが栽培されているが、これらの作物は土壌・気象条件を考えると収量の増加は期待できないが、苦小牧の人口増による需要にこたえるため、集約的経営によるそ菜づくりが発展するものと考えられた。

そのほか、食肉の需要増を予想して、養豚にとりくんでいる農家もみられた。

二つの 柏原には二つの農業団体があつた。柏原農業協同組合（農協）と柏原開拓農業協同組合（開拓農協）である。

いうまでもなく、当時は農業行政機関が既存農家と開拓農家とに農家を分けて行政指導を行っており、開拓農家に對しては開墾補助、住宅補助、飲料水施設補助などの補助をするほか基本営農資金、振興対策資金などの貸付も行っていたが、既存農家は対象外となっていた。

したがって、部落会も二つに分かれていた。

しかし、柏原に養鶏が企業的に行われるようになると、ヒナの購入・飼育の研究などを通じて『後藤養鶏友の会』が生まれ、既存、開拓両地域の農家が会員となつて、両地域の協力がみられるようになった。

また、牛乳の共同出荷、販路を通じても協力体制が強まつてきた。柏原を含めて、苫小牧農業協同組合、苫小牧開拓農業協同組合および苫小牧市農業共済組合の三者で『農協牛乳』を苫小牧市民に供給していたことはよく知られているところであつた。

八 東部開発計画と離村

昭和四十四年五月、新全国総合開発計画が閣議決定された。苫小牧地区は、重化学工業を中心とする中核工業地帯として開発されるよう計画された。

これを受けて同年九月から苫小牧東部工業港建設のための用地取得が道議会で決まり、十二月から用地買収が開始された。

昭和四十五年五月、第三期北海道総合開発計画が閣議決定された。苫小牧東部地区に二〇万トン級の大型船舶が入港できる掘り込み式の工業港を建設して、鉄鋼・石油化学などの工場を配置する大規模工業基地の建設が計画されたのである。

柏原では、用地買収問題に対処する地主の団体として苦小牧新港対策協議会（会長黒畑徳治のち鯉川長司）が発足した。柏原、静川、弁天、浜弁天の開発対象地域の六〇％が、年内に買収承認の調印をした。

昭和四十六年一月、柏原開拓団（開拓農家部落会）の解散式がウトナイ温泉で行われた。三月に入って柏原部落会（既存農家部落会）の解散式が洞爺湖温泉で開かれた。

そして、三月二十三日に柏原小学校の廃校式が行われ、松田牧場から数えて七六年にわたる柏原の開拓の歴史を閉じたのであった。

注（１）『苦小牧市柏原台地下水調査報告書』昭和三十八年 北海道開発局

（２）『苦小牧町史』昭和十五年、『柏原沿革史』昭和四十六年 柏原小学校、同青年学級

植 苗

一 部落の起源

地名の由来 植苗はアイヌ語「ウエンナイ」で（ウエン・悪い、ナイ・川）という意味。美々川支流にある川をさしたが、けられたものと思う。もともとは小川をさすものが、付近一帯の地名となり、明治六年には勇払郡開拓出張所詰黒沢正吉大主典の郡内村落整理統合によって、ウエンナイ村、ビビ村、タブコブ村、ユウフリ村の合併による植苗村が誕生した。

当初は安平村、つまり早来、追分を含むものであったが、明治三十三年の分村によって現在の地域となった。また当初は『勇払郡植苗村』であったが、同三十五年四月の苫小牧村の二級町村制実施により『勇払郡苫小牧村大字植苗村』となり、現在は『苫小牧市字植苗・美沢』となっている。

遺跡の分布 地質時代のものとしては、支笏火山噴出物（約三万二、〇〇〇年前）に埋まり、自然に木炭のようになった炭化樹木がある。

先史時代のものとしては、美々川をはさむ両側の段丘上やその裾下には縄文時代からアイヌ期に至る多くの遺跡を包含している。このことは、古くから当地方が生活の基本になる食物（シカ、魚、貝など）が豊富だったと思われるのである。

当地方における有名な遺跡をあげれば次のとおりである。

タブコブ遺跡、大島遺跡、平田遺跡、植村遺跡、猿子遺跡、植苗貝塚

二 自然環境

位置 苦小牧市街地中心からみると、北東の方向約一二キロ国道三六号線上の点がその入口である。北緯四二度四一分から四七分、東経一四一度三七分から四七分まで、国有地を含めると樽前山麓まで、北は千歳市と境し、東は早来町と境し、南は柏原に接している。南北約一〇キロ、東西一二キロ、総面積一〇七平方キロで、字植苗七一平方キロ、字美沢約三六平方キロである。

植苗の 開拓当時はこんな大木が生え繁っていたんだと思われる木々が保安林の一カ所に残っている。直径一メートル前後、高さ二〇メートルにもなろうとする大木である。ここにはイシナラ、ミズナラ、カツラ、ハリギリ、これに続いてイタヤ、ヤチダモ、ミズキ、クチグロ、エゾヤマザクラ、シコロ、エンジュ、ヤマハンノキ、シラカバ、トドマツ、エゾマツなどであるが、近年は植林されて林相は全く異なっている。

植樹の主なものをあげると、カラマツ、ドイトウヒ、ストロブマツ、バンクスマツ、朝鮮ゴヨウ。また、現在の林相は開拓以来伐採され、三回目から四回目の植林にあたっている。コブシ、ホホノキ、ヤチハンノキ、フクノキなどもたまに見かけられるが、木材、鉄道枕木として出されたため皆無に等しい状態である。

あちこちにある雑木林に見られるものは、ミズナラ、イシナラ、ハルニレ、ヤマザクラ、カシワ、ハンノキなどである。それに続いて、ヤナギ、タランボ、サビタ、ドシナラなど、湿原地があるため灌木が多いが、この地特有の名物ハスカップが各地に群生をなしている。千歳飛行場に近い三百万坪にもあったが、植樹されたためなくなっている。

ウトナイ沼を中心とする一帯は、海浜植物、湿原植物、原野植物、高山植物が混生する地として多くの植物学者の注目の場となってきた。

海浜植物ではウトナイ沼北東沿岸に大群落があり、ウンラン、エゾカワラマツバ、ツルウメモドキなど、湿原植物ではエゾイヌゴマ、エゾアブラガヤ、ミノゴメ、ミズオトギリ、クサレダマ、クサフジ、ミズトンボ、ミズバショウ、アヤメ、ヤチヤナギ、ホザキシモツケ、タチキギボシなど、原野植物ではイタドリ、トモエソウ、サワヒヨドリ、アキノキリンソウ、エゾミソハギ、カセンソウ、ヤナギラン、オックスアイデージーなど、高山性植物ではエゾリンド



美々川の湿原地帯(昭和46年)〔苫小牧市史編さん室蔵〕



ウトナイトのヒビ (昭和46年)〔苫小牧市史編さん室蔵〕



ハナゴケ(ウトナイト) (昭和48年)
〔苫小牧市史編さん室蔵〕

ウがよく見られる。最近ではメジヨン、アレチマツヨイグサなどの帰化植物が多く、開発のため急速な植相の変化が生じてきている。

ウトナイ、白鳥湖にはかなり広大にヒビがひろがっており、ヒルムシロ、マコモ、タヌモ、ネムコウホネなどもある。白鳥湖の西岸にはイソツツジの群生する地、ウトナイ東南岸の砂丘にはハナゴケ、各地に点在する食虫植物のモウセンゴケなど特色のある植物も多い。

動物 かつては美々にシカ肉かん詰所があつたからシカの宝庫として知られた。エゾヒグマはしばしば人里にあらわれ人畜に多大の被害を与えている。小動物も多種多様にわたりへび類、昆虫類も多い。鳥では冬の白鳥、夏のアオサギに代表されるが、ウトナイ沼にはガン、カモの水禽類をはじめ、各種渡り鳥、コウノトリなどいて、野鳥の楽園となっている。森林地には山鳥も多い。

三 開拓と産業

本項においては各部落が明治以降どのような移り変わりを経て発展してきたかをたどるものだが、植苗美沢地区の過程を便宜上次の五期に分けて述べることにする。

- 第一期 初期開拓時代（明治三十五年まで）
- 第二期 開墾開拓時代（明治三十六年～大正七年まで）
- 第三期 第二次開拓時代（大正八年～昭和六年まで）
- 第四期 第三次開拓時代（昭和七年～同二十年まで）
- 第五期 第四次開拓時代（昭和二十一年～現在）

(一) 第一期 初期開拓時代

井上利三郎が美々にいつごろから入地したか明らかではないが、早來の鶴の湯温泉の発見記念碑の銘に明治四年二月、井上利三郎がこの温泉を発見したと記されている。明治二年、開拓使の設置、同三年には室蘭地方に石川邦光の旧臣が移住、また伊達地方には伊達邦成主従などがそれぞれ移住しているので、このころのことと思われる。

明治五年、室蘭―札幌間の国道建設が起工され、その年、恵庭まで開通し、美々はますますその重要性を増すことを見ぬいた井上は、そこに馬宿や馬を置いて運送業をはじめたのが同六年十月であった。この美々から早來にかけてはシカが多く住み、また美々川にはサケがのぼってきており、狩猟生活者の往来が多かった。同七年、この地にシカ燻製所が官認されるにおよんで、シカ猟は最盛期をむかえた。

明治二十二年、フモンケ開基の人となった佐々木駒吉夫妻が美々に入地したのは、同九年であり、この地で安宿業と馬宿をし、かたわら運送業を営んでいた。葭谷三太吏が美々に入ったのは明治十一年ころのことである。佐々木夫妻と同じように馬宿と旅人宿を、今の国道の坂下の湧水のほとりで営業していた。

シカ内燻製所は、この年、官設のかん詰所および脂肪製造所が新設された。また、当所にはかん詰生徒養成の目的もあったので、ロシア式建築の生徒舎を一棟建設した。

このように前途有望にみえたこのかん詰所も、シカの乱獲と明治十二年春の大雪に食をうばわれたシカはへい死し激減する一方であった。このためシカは十勝一国と植苗村美々に四里四方の区域を保護繁殖の禁猟区とした。当然かん詰製造所も同十三年、操業中止となり、同十七年六月には完全に廃止となった。原料の無くなった製造所は廃止となつても、室蘭方面や日高方面への要路はますますその繁栄さを加えていった。

明治十一年、ここを通った大槻翁は「子供のころでよく覚えていないが」と前置きして、「宿屋が何軒もあったことにぎやかだったことは覚えていいる。毎日毎日何人かの旅人中には子供連れの旅人がここを訪ね、そして去っていった」。同じような荷を背にした長い馬の行列が往来していた。

同五年、国道が開通してから、この地点の重要性は認められ、その必要性から休泊所が設けられ、井上利三郎がそこをまかされていた。

このように繁栄した美々も鉄道建設の声とともに大きくゆらいでくる。たまたま、その測量に来た人たちが休泊所の井上利三郎のところに宿泊したがために、これから馬の背による輸送はすべて鉄道輸送に切り替えられることを知り美々の運送業者は次の生活地を求めフモンケや早来に土地の出願届をして、鉄道開通までに移動していった。これらの人々は、フモンケや早来の開祖となった。

一方、美々―苦小牧間の中間、沼ノ端（今のウトナイ沼の所で当時そう呼んだ）に居をかまえた柄沢鶴吉は、明治五、六年の二カ年国道建設に従事してここを通ったが、ウトナイ沼付近が一番よいとして、この地を選んだのである。入地は何時ころか不明だが、当時植えた庭のナシの木が九〇有余年を経ていることや、同十四年九月、明治天皇の当地方巡幸の際、沼ノ端の御小休所の仕事をしていることから、おそらく九年ころまでに居をかまえていたと思われる。その後、駅通などをしていたが、今もその家の一部が改造されて残っている。柄沢家の隣に入地したという小原宗四郎は次のように話している。

植苗で百姓をするつもりで入地した。当時植苗三二番地に苦小牧から勇払を回って入った。（この地貸付申請、明治二十九年八月二十日、面積畑地五町六反八畝一歩となっている。）柄沢さんは駅通をしていた。大木を切って焼払って畑とした。大変な苦勞であった。

柄沢鶴吉は植苗開拓の第一号であったと思われる。

今までの人は、馬宿業をし、また輸送業をしていたために宅地やわずかな畑地を出願しているのみであったが、小原宗四郎は五町歩以上も申請して成功した。やがて、明治三十年、北海道国有未開地処分法の施行により未開発地に農地を求めて入地する者が現れるようになった。

一方、これより三年ほど前に、植苗はドロの木に恵まれていたので、マッチ軸木、同小函素地工場の立地があった。大きなものは水力を動力としたので、この条件をみたす場所として勇振沢のアップナイ、ペンケナイの上流などが好適地であった。

今のウトナイの入口付近にマッチ小函素地工場、ペンケナイの上流中州に軸木工場、美々の元かん詰工場跡に軸木工場があった。この軸木は舟で毎日運んだといわれる。

中央院の過去帳によると、明治三十一年、植苗村アップナイには野村製軸所、同三十六年には櫛引定之助の工場が同じアップナイにあった。

だが、植苗地区の明治中期唯一の工場たるマッチ工場は、原料の枯渇と経済界の変動によって明治末までに姿を消していった。

植苗地区のマッチ工場

名 称	代 表 者	創 立 年 月	資 本 金	生 産 高	職 工	動 力	操 業 日 数
櫛引製軸所 金高工場	櫛引定之助 高野祐一郎	明治二七・六 三四・二	五、〇〇〇円 七五、〇〇〇	二四、〇〇〇円 二、二八〇	四〇 一二	水車 蒸気	三〇〇 三〇〇

小坂製軸所	小坂 正治	三四・九	一一〇〇〇	八六四	八	人	力	三〇〇
甲燐寸軸木製造所	加藤 勇之助	一八・二						
野村製軸所	野村 新八郎	二八・七						
乙燐寸軸木製造所	加藤 勇之助	三〇・四						

〔苦小牧町史〕 昭和十五年 苦小牧町

(二) 第二期 開墾開拓時代

鉄道の開通と同時に再度この地は見直された。その理由は、まだ多くの森林が健在であること、鉄道が近いこと、それに洪水が起らないことであつた。明治三十六年、この地の開墾の祖となつた岡田伊松は「水と土地は悪いが水害だけはなくてよい。水は山麓の湧水を利用し、畑はまめに動いて堆肥を入れればよいが、水害だけはどうにもならない」と語っている。

開墾者は一メートルもある大木と取り組みながら、日の出から日没まで切り開き作物をつくつた。開墾のかたわら日銭をかせぐために、炭焼をした人もあるが、それが主になつた者も多く現れた。また、馬の放牧地として求める者もでて、牧場にするには立木を切倒し、その木で柵を作り、一部は用材や枕木として出した。明治四十三年ころの美々川は帆かけ船が上下していたし、ペンケの奥やパンケの奥に土場があつて、そこから枕木が沢山流送されていた。そのため美々川の水量も多く、きれいであつた。この枕木は、国内向けの六尺ものと、外国向けの七尺ものがあり、小樽港より主に船積みされていた。

北部落の開祖は明治二十九年の村上留三郎、明治三十五年の岡田伊松、平田重人、林与助、二年ほど遅れて入つ

た植村伊之助である。この三十六年前後に開拓者が入ったこと、植苗簡易教育所が同年に設けられたことなどから、この明治三十六年を植苗村開基の年とした。

美々部落では、佐々木駒吉夫妻がフモンケ地区に移ったのは明治二十二年秋である。早来町史によると「その後、井上利三郎、葭谷三太連続いてこの地に」となっているが、葭谷は明治二十三年七月二十日、植苗村で死亡しており（中央院過去帳より）、この年代では早来もフモンケも当然植苗村に属していたのである。

井上利三郎は、息子は早来に行ったが、自分は苦小牧村に出て漁業に手をだしたり、マツチ軸木工場などにも手をだしたりして多面的な経営をしていた。この人たちが去ったのち、馬の背に荷物を乗せ、数頭をつらねて運送をしていた大島岩太郎、五郎松親子が美々に居をかまえたのは明治三十四年ごろのことであった。大島は、開墾のかたわらに製炭も行い早来の炭問屋に出した。また冬は、サケの運送や枕木流しや山出しに精を出し、当初においては開拓の方より山仕事の方が多かった。本格的に耕作に着手したのは大正四年ごろからであったが、数年は収穫物は少なかったが、カボチャとイモ、ソバ、ヒエなどを植えた。

大島と前後して入地した者には、牧場の炭焼などをして居をかまえた猿子鳥次郎、長谷川幸之介、佐藤吉兵衛、石原金助などであった。

佐藤吉兵衛は、今の美々坂付近に入り、明治四十四年ごろ水田五〜六反を作っており、美々の水田の元祖でもあった。当時、古米を持っているぐらい収穫があったといわれるが、反当たり一、二斗ほどで、米はまだ貴重品であったので、今のように日常の食物ではなかったであろう。佐藤は昭和二年植苗小学校の運動会に寄付金を出しているの昭和初期ごろまでいたのであろう。

現在のコンクリート橋の下流に当時は橋があった。国道二六号線からこの橋を渡って左側に事務所、右側を少し

行くと鳥類研究家の折居彪二郎の住家である。明治四十五年、当地を訪れた折居は、美々川に黒い陰を落として繁る自然林とそこに生棲する動植物に魅せられて、大正二年、ここに家を建て半農半獵の生活に入った。ここを根拠地にして採集に出かけていた。一戸しかなかったので昔のまま今も北部落に入っている。

大正三年、沼ノ端居住の小沢花次郎は沼ノ端植苗南間に馬鉄軌道を敷設し、その背後地より出た角材を運んでいた。また、美々川を流送した角材もここから陸送された。各地の牧場と称されるものは、木を切って角材を出し、用材以外は薪炭にしたが、農家もその手助けをした。そして邪魔になる不用木は焼払われた。大正六年はまた凶作に見舞われたため、木材の搬出や製炭には拍車がかかり原木不足を促した。

南地区は、柄沢鶴吉の家の跡に亀田茂平が入って駅通をしていた。この人以外はみな農家で、国道二六号線に沿って家が点々と並んでいた。大正二年は凶作で、当時の記録を見ると、植苗の農家六五戸、耕地一三〇町歩とあることから想像以上の農家があったようである。

明治四十一年に伊藤喜三、大正六年五月に丹治索が入地している。

(三) 第三期 第二次開拓時代

第一次欧洲大戦による経済の膨張は物資の流通を促し、その輸送路の鉄道は、室蘭線の複線化や金山線の着工、苗穂線の認可等となって現れた。

枕木や原木の供給地の当地方は共有地に手をつけ森林資源の開発に着手した。このことは健全な農家の育成をも目的としていた。しかし、実際に本腰を入れて営農をしたかどうかは疑問で、木を食いつくし、さて農業となると大抵は出ていってしまった。

共有地は長谷川幸之介が主体で、多くは美々から入った。焼子は各地から入地し、年を限定したために集中的に人が集まった。そのため児童の教育のために共有地特別教授所が設けられたが、この教授所は一五カ月の命で大正十年一月に植苗本校に統合された。共有地に主力を送り出した美々は、当然児童も連れていったので、学校の児童数は減少した。共有地に行く前美々にいた焼子たちは共有地に移動し、そこから沼ノ端や早来方面に出て行った結果、植苗や美々の児童は減少した。それで三校を統一して中間点の植苗北に統一校を建てたのである。統合されたときは一一五名の児童がいたが、わずか一年たらずの間に二八名も転出しており、そのほとんどは焼子の子弟である。転出児童の保護者は夕張、厚真、早来などへと移っていった。

三百万坪は農業振興策の一環として自作農創設の目的で入植したのである。物資などは千歳が近いのでほとんど千歳から移入した。信用購買販売組合をつくり、そこを窓口にも米、味噌などが入った。そんな関係で生産された用材と木炭は千歳との取引となっていた。入植した人々は共有地から来た人も、また外から来た人もあったが、木だけが目的で木を食ってしまったら出て行く人もあった。それは日常生活の水が三〇メートル以上の深井戸であるし、井戸を掘るにも枕木を積み重ねて作るのだが大変な苦勞であった。そのうえ土地と水が悪いことでみな出ていった。一時は二〇数戸入ってにぎわったのであるが、一人、二人と出て行き、大正一二年春から始まった三百万坪の開拓はわずか四カ年でその幕をとじた。

その後、三百万坪は民有地の自然林として一部は北炭の造林地として用途変更し、薪炭林となった。周期は一五年から二〇年であるので、次の薪炭材として切り出されるのは昭和二十年代になる見込みであった。

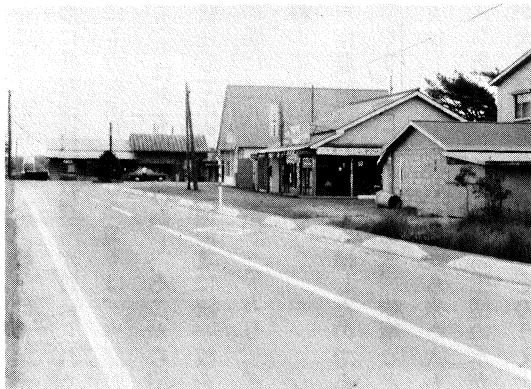
美沢地区は共有地の開拓に入った人たちがみな帰ってきた。学校も統合されたので、今の美々橋のところに立派な橋を作って通学にさしつかえないようにするとともに、馬車も通れるようにした。美々の人々は段丘の下の方南向きの

ところに並んで点々と家を建てて入っていた。美々の学校の建物は斉藤が買受け、自分の家にして建て直した。下の平地には水田を作り、段丘上は畑と、そして前に切った後地の若木は木炭に焼いてもよいほどに成長していた。そこで、日銭を求めて木炭も結構生産されていた。ここで生産した木炭は、地理的關係から早来に出されていた。フモンケが近いことから、この影響を受けた人は馬の生産に力を入れ、馬喰^{ばくちやう}をやりながら馬の生産にはげんでいた。大島五郎松はその一人である。

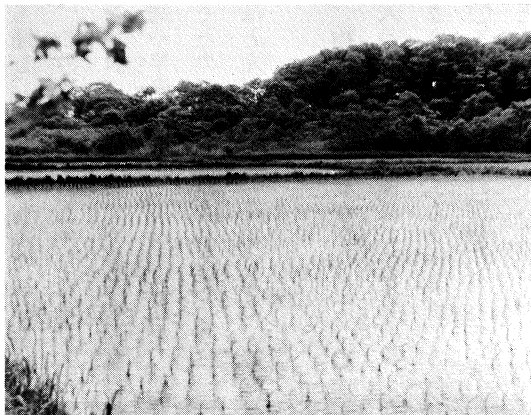
北地区の人々も出て行く人の土地を買付け、自然萌芽を伸ばしておけば二〇年もすればまた木炭を作ることができ



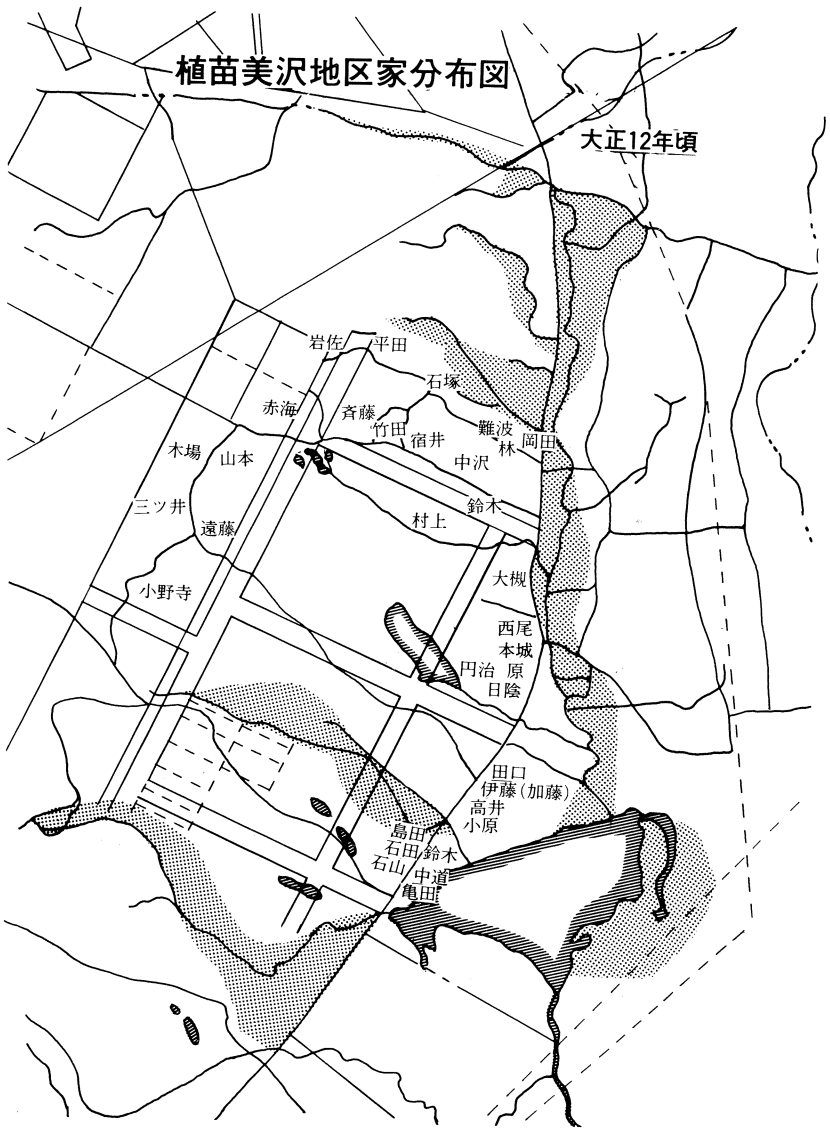
美々鹿肉かん詰工場（明治12年）〔苦小牧市史編さん室蔵〕



植苗中央地区（昭和50年）〔苦小牧市史編さん室蔵〕



植苗地区の水田（昭和50年）〔苦小牧市史編さん室蔵〕



るので、自分の土地の木を焼いたり他の人の立木を買付けて焼いたりして、農業のかたわら製炭をしながら生活をつづけていた。一方、共有地は町有地となり、カラマツが植栽された。エゾマツ、カラマツ、ドイツトーヒなどを民有地に植栽する人もあったが、これらの山仕事を請負って仕事をする者もいた。畑仕事、山仕事と大変な重労働であったが、食生活のもとになる米は自分の生産でまかなう人が多かったので、それができた人たちは腰を大地にすえていった。

南地区は、大正九年、高井右一が岩見沢より入地するにおよんで酪農業を行う人たちが出てきた。酪農業は北海道農業の重要な営農形式の一つであって、特に当地のような土地のやせた地方では、牛馬の厩肥を大地に還元して土地改良をする一方、牧草などを植えて、これを緑肥とするとともに牛馬の飼料とする。牛馬がいれば自然的に厩肥が増産される。このように、今まで馬のみによる生産から乳牛による生産へと移行した。馬は放牧が主で、厩舎に入れるのは冬のみであるが、牛は一年中放牧するのではなく、舎飼いする。

略奪農業ではなく、地力を増進させながら作物も増産するという方法は、やせた火山灰地には最も適した営農方法ではあったが、牛一頭に一町歩もの粗飼料畑を必要とするので、並大抵の苦労ではなかった。南地区はこの時期が一番営農者も多く、にぎわっていたようである。

現在の植苗中央地区は金丸一牧場と称していたし、植苗トアサ地区は隣のフモンケの影響ですべて牧場であった。共同牧場、島口牧場（島口勝太郎所有）や二―三人の所有地で牧場のようにして放置されていた。

(四) 第四期 第三次開拓時代

苦小牧町においても画期的なことは、植苗トアサ地区が酪農地帯になったことである。昭和五年四月、空知郡滝川や新十津川の酪農家三二戸が早来地区に入地したが、翌年道が植苗トアサ地区の民有地（共同牧場や島口牧場その他）を買上げて貸付した。一戸二五町内外の一区画を二戸分名義をとって入った人たちが多く、総数一九戸であった。しかし、想像以上に地力はなく、二、三回切られた若木は人の背丈ほど伸びていたが根だけは太く、拔根は苦勞の種であつた。幸い不況のことで、朝鮮労働者が徒党を組んで拔根作業に従事してくれた。反当たり二円位、馬耕一円五〇銭、これに対して道の開墾補助金は反三円から五円の範囲でもらえた。この補助金はその年の償還金の元金や金利に当てられた。開墾が続くうちはその金が入ったので、納めることができたが、開墾が終わってしまうと金が入らなくなり、そうかといってデメンとりに出れば畑作業に力が入らなくなるので、お互い齒をくいしばってしましめ合い、酪農食という主食はゆでたばれいしよに牛乳をかけたり、あんかけにして食べていた。できるだけ自給自足の農業一本の生活であつたので、これに耐えられずに出ていった人たちもあつた。

植苗の駅に近い方の人たちは酪農が主体で、現在道内有数の酪農家になっている溝口嘉一などその一人である。フモンケに近い方の人たちは牛より馬が多く、当時農家の動力の主体は馬であつたので、よい馬を手に入れることは仕事の能率向上に直結したのである。こうしたことからよい馬の生産に力をそそぎ一方、満州に手を出した軍部の馬に対する需要も増加し、それらに支えられて馬の生産に力を入れていた人たちもいた。橋向清藏、田中太三郎、工藤英雄などがそうであつた。

この方面の人たちは、学校もフモンケの学校が近いので、みな地域を越えて早来地区に通学し、卒業したのである。

開拓当時より耐え抜いた人たちは現在有数の酪農家に成長しているが、耐えられず離農した後地には、昭和十七年、野幌機農学校が植苗酪農実習農場として、当時酪農家を夢みる二〇歳前後の後継者の養成を主眼に開校した。

植苗中央地区は、昭和六年、干場長太郎が滝川より、上野川口地区は苦小牧から佐藤作治、糸井早太、室岡三蔵など近隣より入地、同八年、多田貞一が山梨より入地するにおよんで、植苗トアサと同じ牧場地帯であったこの地も、農家が点在するように開けてきた。

大正十五年、沼ノ端―苗穂間に私鉄が開通し、植苗には無人駅が設置されていた。駅前にはこの辺の大地主で自分の所有地に鉄道を通し、室蘭線トアサ駅前からこの地に移って来た渡辺喜蔵が店を経営しながら運送と製炭事業を行っていた。渡辺の店は同地区における唯一の店でもあった。

(五) 第五期 第三次開拓時代

悪夢のような第二次大戦も終わりを告げ、農村は別な意味で活気を呈した。それは、大都市に出ていた息子や娘が食糧難と失業により農村に帰ったからである。それに加えて男たちが復員してきて、貧しい中にも楽しい冬を迎えることができた。町からは買出しと称する人たち、物々交換に来る人たちや行商人が毎日のように来ていた。大きな農家は物々交換する物を持ち合わせたが、小さな農家はそれを持っていなかった。

昭和二十一年春、それはこの小さな地区にも大きな変化がみられた。数家族をかかえてふくれあがった農村は、早速食糧増産にとりかかった。薪も炭も人手もあり、活気をみせた。さらに精神面の発揚をはかるため、同二十一年七月六日、部落大運動会を行った。運動会寄付金は総額三七三円であった。

翌二十二年二月十一日、新憲法実施、三月二十九日、教育基本法（法律第二五号）が出るにおよんで、植苗地区にも

新制中学の分校が決まり、校舎建設が始まった。今までとかく部落中心ですべての活動がなされていたが、学校を中心に物の見方、考え方をせまられるようになった。六地区を一つにした大きな組織、植苗振興会が同二十五年、この考えのもとに発足した。そして会の発展と指導に大きく貢献されたのは金森定雄であった。金森は、常に精神面の高揚と産業の発展と合わせて地域の向上を計り、それはとりもなおさず児童生徒の生活環境の向上に結びつき、学力の向上にも結びつくという大きな教育理念に立つてもの事を進めていたのである。会の発展過程の中で特筆すべきは有線放送の導入であった。これによってコミュニケーションは密になり、ラジオも聞けるようになって、大人、子供ともども世の中の動きを直接吸収することができるようになった。

農地改革によって不在地主より農地を手に入れた人々は自作農とはなったが、その割には発展しなかった。そして逆に農地を転売して町に出る人々がでてきた。

転出によって一番寂しくなっていた南地区に、三十三年、「ウトナイ温泉」が開店し、三十五年、市は「ウトナイユースホテル」を建設した。これが導火線となつて翌三十六年、白鳥湖遊園地が誕生し、同地区は一大レジャーランドとして変貌をとげた。

昭和四十九年、植苗地区は、三九六世帯、八四四人で、このうち農業戸数は三八戸であり、専業戸数は二一戸となっている。

丹治林業と

丹治林業は、昭和二十五年五月三十一日、個人企業として発足、主に製炭とその販売を業とした。

白鳥湖温泉

昭和三十五年五月、有限会社丹治林業とし製チップは三十七年二月、製材は同年七月より開始した。

昭和三十六年五月五日、チャイウツシユナイトを『白鳥湖』とあらため、千歳市の五十嵐が白鳥湖観光ホテルを経営開始したが、同四十四年十二月、丹治林業がこれを買収しレジャー業務に進出し、同四十八年十一月に株式会社に

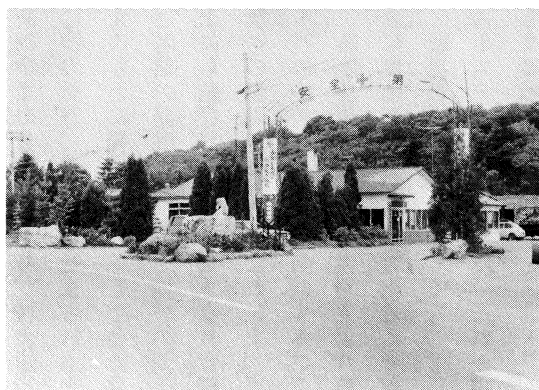
改め、現在の営業種目はホテル、製炭、製材、製チップである。

ウトナイ 苫小牧の駅前通りで富士館を経営していた先田秀吉は、昭和三十二年、観光ホテルの前身である一

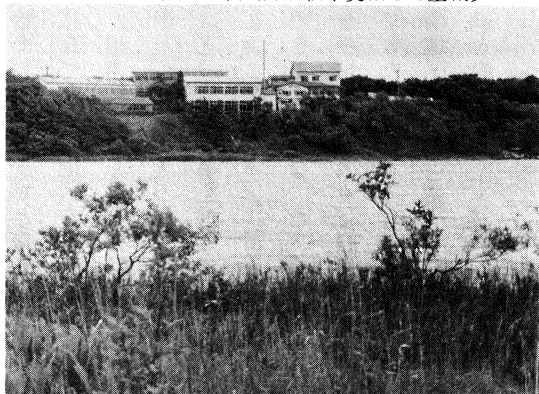
観光ホテル 棟四室の建物を建てて経営、冬は休業したが、翌三十三年からは年間をとおして正式に営業に入った。

その間、電気がないので自家発電で点灯し、掘抜きを掘るなど苦労を重ね、昭和三十五年暮れに、北電の電気が導入され『ウトナイ観光ホテル』として、冬はスケートに白鳥、夏はボートとして知られるようになり、一、五〇〇メートル自噴

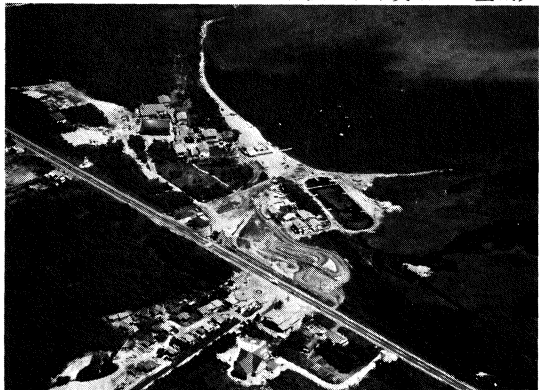
三四度、毎分四〇〇リットルの茶褐色透明の食塩泉を得て、苫小牧市民をはじめ、札幌などにも知られる観光地となった。



丹治林業(昭和49年)(苫小牧市史編さん室蔵)



白鳥湖と観光ホテル(昭和50年)[苫小牧市史編さん室蔵]



ウトナイ湖と観光ホテル(昭和50年)

[苫小牧市史編さん室蔵]

四 教育と文化

植苗小学

分村以前の植苗村は、室蘭線の北側を追分町まで含めた区域であつて、特に追分地区は鉄道敷設後著
校の創立 しい發展をとげていたので、明治二十七年十月三日、苫小牧尋常小学校植苗分校として開校した。記録
によると児童男子八名、女子一二名、計二〇名であつた。この分校は現在の追分小学校の前身であり、また場所も現
在の追分町の地にあつた。明治三十六年七月十七日には追分尋常小学校と改称したので、植苗小学校とは、はつきり
区別すべきである。

現在の苫小牧市字植苗地区には、明治三十六年十二月十日に植苗簡易教育所として開設されたのはじまる。当時
の室蘭支庁の辞令簿を見ると

十月三十一日

小田 一郎

植苗簡易教育所代用教員ヲ命ス
月俸八円給与

〔辞令簿〕 明治三十六年 室蘭支庁

とあつて、教員は十月三十一日付にて発令されている。この点については福井ゲン（林ゲン）も「開校当時は小田一
郎が教えていた」といつている。

校舎坪数はわずか四四坪二合五勺（約一四三平方メートル）で、当時の場所は大字植苗村南一線で、苫小牧尋常小学校
所属、同学校長がこの教育所の学校長を兼任したから、初代は長浜暁であつた。明治四十一年、教育制度の改革によ

り四年制が六年制となり、この時全校児童は四二名であつた。

大正六年四月一日、特別教育規定により植苗尋常小学校と改称されたが、五月に新校長が着任した。

五月十一日

小樽区色内尋常高等小学校

尋常科訓導

岡 定彦

勇払郡植苗尋常小学校訓導兼校長二命ス

勇払郡美々尋常小学校長二命ス

〔辞令簿〕 大正六年 室蘭支庁

美々尋常小学校と

植苗特別教育所

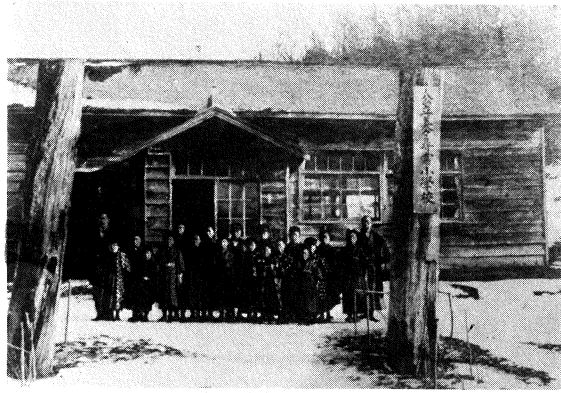
美々小学校については、植苗校の沿革史によると、美々教授所として明治三十七年に開設され、これは誤りであり、大正初期に開校されたものと思われる。胆振支庁には大正五年の辞令簿がなく、不明な点が多いが、同四年以前には美々教育所の名が出てこないことから、美々校の開校は大正五年ないし六年と思われる。すなわち、同六年の辞令簿に五月十一日付をもって新旧教員の発令があることから明らかで、五月十一日以前には桑原元市、桑原イトが教員であつた。

五月十一日

勇払郡美々尋常小学校代用教員

桑 原 元 市

願ニ依リ代用教員ヲ解ク



美々尋常小学校（大正7年）
〔苫小牧市史編さん室蔵〕

五月十一日

勇払郡美々尋常小学校代用教員

桑原イト

願二依り代用教員ヲ解ク

同日

勇払郡植苗尋常小学校准訓導

今野万吉

勇払郡美々尋常小学校准訓導ヲ命ス

二級上俸給与

同日

同代用教員

今野きよ

勇払郡美々尋常小学校代用教員ヲ命ス

〔辞令簿〕 大正六年 室蘭支庁

その後、美々は開墾の進展につれて、大正八年九月には渡辺吉次郎を初代専任校長として迎えることになった。これは胆振支庁にも、苫小牧市にも資料がなかったが、幸い、彼の孫にあたる渡辺正が当時の祖父の日誌をもっており、明らかとなったものである。

その後、学校は大正十年一月、植苗小学校に統合するのであるが、その時の引継書によると

引 継 書

別紙目録ノ通り及御引継候也

大正十年一月十五日

元美々尋常小学校長 渡 辺 吉次郎[㊦]

右ノ通り引継ヲ了シ候也

大正十年一月十五日

植苗尋常小学校長 中 島 儀三郎[㊦]

〔植苗校沿革資料〕 植苗小中学校

美々の学校は特別教授所以来数カ年にしてその幕をとじることになった。

また、美々に専任校長が来ると同時に、植苗特別教授所が植苗村有地に開設されている。大正八年九月一日、植苗村有地（現在市有地）は長谷川幸之助が年を限って開墾したため、一時に移動者が激増し開設されたのである。教員は加藤留次郎であつた。たまたま、大正九年七月二十一日付、室蘭支庁長法亢盛行あての私事旅行承認報告や、当時長谷川幸之助の人夫をしていた駒沢群二によつて確認されたものである。

彼によれば「学校は笹屋根で二〇坪以上の五間の七間程の建物で、そばに先生の住宅が作つてあつた。加藤先生は奥さんなく、男の子供が二人いた」。この教授所も美々と同じく大正十年一月、統合され、わずか一年四カ月である。

植苗小学校の 植苗小学校の大正九年四月一日付の学級編成によると次のとおりである。統合された学校は、平統合と争い 田重八が用地として土地約三〇アール（三反歩）を寄贈し、そこに工費一万一、〇〇〇円をもつて

單 級

学年	一 年	二 年	三 年	四 年	五 年	六 年	計
男	六	四	七	七	二	四	三〇
女	三	五	五	五	二	二	二二
計	九	九	一二	一二	四	六	五二
教室	一 (二〇坪)						

校舎並びに付属建物約六〇一平方メートル（二六七坪）を新築する。

この校舎統一については、植苗北地区の人たちにとつては、近くなるので賛成であつたが、通学距離の遠くなる南地区の人たちにとつては、根強い反対運動がなされたのである。表面的には大正九年九月一日付、植苗学校長より町長あて児童の南地区の者の集団転校通知を報告している。

植第二七号

大正九年九月一日

植苗尋常小学校長 中 島 儀三郎

苫小牧町長 鈴 木 善 治殿

退学児童報告

別紙児童本日退学二付氏名及報告候也

〔植苗校沿革資料〕 植苗小中学校

当時、学校のあつた南一線から新校舎の所までは約二キロ余北に移動することになるのだが、距離はともかく途中に美々川の支流パンケナイ川があり、その川の前後は湿地であつたので通学に困難であつたようだ。この問題は後に同盟休学へと発展するのであるが、九月一日付の集団退学報告に対し、町長は次の如く回答を求めている。また、児童の机、椅子についても保管移転について答申している。

苦第四六八二号

大正九年九月七日

苦小牧町長 鈴木善治

植苗小学校長殿

退学児童報告ニ関スル件

本月一日付植第二七号ヲ以テ報告有之候退学児童ニ就テハ退学ニアラズシテ沼ノ端小学校へ転校ノ者ト思料シ得共本件児童ヲ収容スベキ沼ノ端小学校ニアリテハ器具ノ設備等ナキノミナラズ通路ヲ開クベキ予定ノ処未ダ実行ニ至ラザルモ転校ニ就テハ各々児童保護者ノ希望ニ依リタルモノニ候力、何分御回答ヲ得度此段及御照会候也

植第二九号

大正九年九月十日

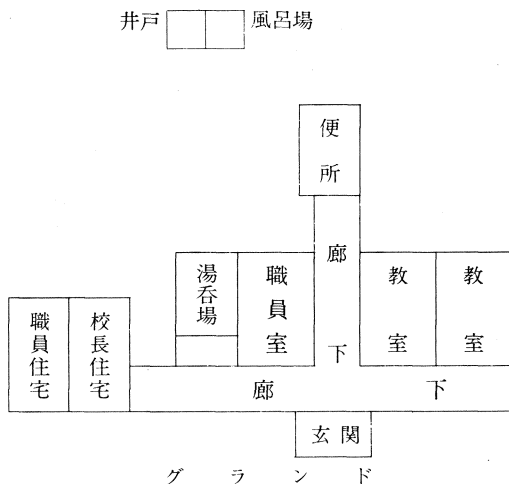
植苗尋常小学校長 中島儀三郎

苦小牧町長 鈴木善治殿

退学児童報告ニ関スル件

本月七日付苦第四六八二号ヲ以テ御来照ノ本件右ハ本月一日児童保護者一同ヲ代表シ笹川惣右衛門ヨリ本件児童ノ沼ノ端小学校ニ転学ハ当該児童保護者一同ノ希望ノ旨申出有之候結果処理致シタル次第第二有之候条御了知相成度此段及回答候也

『植苗校沿革資料』 植苗小中学校



この後町長より学校長あて仮校舎選定について依頼の文書が出されているが、この建物は旧校舎より六〇〇メートルほどの近距離に法華宗のがらんで仮説教所ともいうべき建物があった。この建物の大きさを問い合わせている。

このことは前に述べた集団休学の本拠ともなり得る旧校舎を早く取壊す必要があったのであろう。校長の報告があると、折返し校舎取壊しの通知を学校長あて出している。しかし、旧校舎は同盟側のたてこもりにより取壊しは不可能となつたのである。

苦第四二〇一号

大正九年九月十六日

苫小牧町長 鈴木善治

植苗小学校長殿

仮校舎選定ノ件

貴校舎移転ニ伴フ本件選定ニ付テハ附近ノ寺院用建物ヲ借り受ケ充用可致目下同建物管理者ニ対シ承諾ヲ得ベク交渉中ニ付承諾アリ次第云々

（『植苗校沿革資料』植苗小中学校）

とあり追伸に平面図を知らせてくれるようにとのことで、学校長より次のごとく報告が出されている。

植第三〇号

大正九年九月十八日

植苗尋常小学校長 中島儀三郎印

苫小牧町長 鈴木善治殿

付編 部落史・植苗

仮校舎選定ノ件

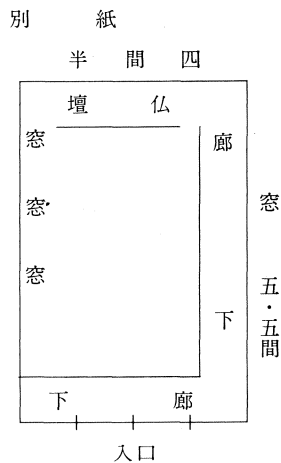
本月十六日付苦第四二〇一号ヲ以テ御来意ノ本件了承就テハ今回御選定ノ寺院平面図別紙ノ通り及送附候也

苦第四七二六号

大正九年十月二十三日

苦小牧町長 鈴木善治

植苗小学校長殿



法華寺院の平面図

学校取壊ニ関スル件

新築工事進捗ニ伴イ貴校取壊ニ着手可被候ニ付テハ新築校舎完成迄ノ間貴校在籍児童ハ沼ノ端美々共有地内適宜通学セシメ居ラレ度此段及御通知候也

〔植苗校沿革資料〕 植苗小中学校

なお、この当時の植苗地区の公的区分は二種林、植苗南、植苗北、共有地、美々の五地区であった。

苦第四七二六号

大正九年十月二十八日

苦小牧町長 鈴木善治印

植苗小学校長 中島儀三郎殿

仮校舎ニ関スル件

本月二十三日付苦第四七二六号ヲ以テ御通知置候件其後取壊ノ番ニ至候旧校舎ハ第九部落ニ於テ買受ケ校舎新築ニ至ル間仮校舎ニ充

当ノ旨同部落ヨリ申出之有ニ付引統同校舎ニ於テ教授相成候様至度此段申達候也

追テ新校舎落成期限ハ十一月三十日マデニ候

予テ通知ニ依リ他校へ通学中ノ者ハ本人ノ任意ニセラレ度申添候也

苦第五四一〇号

大正九年十二月二十二日

苦小牧町長 鈴木 善治

植苗尋常小学校長殿

新築植苗尋常小学校開始ノ件

予テ新築工事中ナル植苗尋常小学校ハ大正十年一月十二日より授業開始ニ付其旨各児童ニ周知方御取計相成度此段及御依頼候也追テ植苗小学校児童ニシテ地勢上沼ノ端尋常小学校へ通学スルヲ有利ト認ムル者ハ同校へ通学スルモ差支ナキ旨併テ御注意相成度申添候也

（『植苗校沿革資料』植苗小中学校）

校舎移転にとまなう一連の公的面の文書の交換を列記してきたが、表面的には一応何事もなく移行しているが、現地における状態は困難なものがあって、対立は激しかった。しかし、時の流れには勝てず、一人二人とぐずれ払下げを受けた校舎も処分の仕様がなく、ついに丹治にこれを押し付け、丹治はやむなくこれを買受けるを得なかった。丹治の自家はこの材を骨組に建てたので大きな家であった。

南地区の人たちも、通達のとおり保護者の自由にまかせたので自然に解決していった。

植苗小学校所属三百万坪特別教授場
学級編成表（大正十五年四月一日現在）

学級	学年	級 単 一						男	女	計
		一 年	二 年	三 年	四 年	五 年	六 年			
合 計	学 年	三	四	四	一	五	一	一八	一九	三七
		三	六	四	三	三	〇	一	一	一
		六	一〇	八	四	八	一	一	一	一

教室一（坪数一八坪）

間仕切のない大部屋の一角に設けられていた。

統合後の植

苗小学校

本校の記録に大正十三年三月、片道二〇町以上の通学児童の報告がある。在籍児童数の現況が現在

また、当時の運動会は児童だけでは少ないので、部落あげての青年を加えて行っていた。また、新聞社にメタルの寄贈をお願いしたりしている。買物も運動会買物帳と印し校印を押し、裏には「本買物帳ニ記載セル物品ノ代価ハ植苗小学校長支払ノ全責任ヲ有ス」とした買物帳で一切を買入れ、支払いは各購入店を下に領収と同時に押印する。

三百万坪特 植苗小学校は、やっと二学級になったのもつかの間、別教授場 大正十二年、三百万坪に特別教授場が新設されるにお

よんで、また単級となった。三百万坪特別教授場は昭和二年三月まで続くが、植苗共有地と違って面積が大きいので、開墾といっても製炭が主体で、木を食いつくすのに時間がかった。初代は長利輔友、二代山本亀吉、妻ノブ、三代根本秀一、妻タカ、四代遠田喜久で統合廃止となった。大正十二年五月一日現在の在籍児童は三一名であった。

大正十年までは皆ペン書で報告書を出しているが、大正十一年からはカーボン紙を使って報告している。しかし、三百万坪のはペン書のうえ、にじんでいるので、はなはだ判読せねばならなかった。三百万坪に関する資料は、上記学級編成表と昭和二年の卒業生二名の氏名のみである。古老の話によると、学校は五間の一四間の大きな建物で、



植苗小中学校（昭和50年）
〔苫小牧市史編さん室蔵〕

学年	一	二	三	四	五	六
男	五	一〇	六	四	三	三〇
女	四	五	七	四	二	二七
計	九	一五	一〇	一	六	五七

（大正十三年三月）

片道二〇町以上の通学児童

賞品類は学用品が主体なので中原商店からの購入品が多かった。

大正十四年四月一日、児童の自然増による二学級編成、これは共有地と三百万坪の間に八五町歩があり、これらも共に開墾されていたからである。開墾が早ければそれだけ原木の尽きるのも早く昭和三年四月一日には、また単級にもどっている。

戦後の 植苗小学校は、昭和二十二年四月、新学制の施行により植苗小中学校 苗国民学校から苫小牧町立植苗小学校となった。

また、従来の高等科は新設の新制中学校となり小学校に併置され、当初は苫小牧東中学校植苗分校であったが、昭和二十六年四月に植苗中学校として独立し、学校長は小学校長が兼務したので『植苗小中学校』と呼ばれた。

本校は大正十年以来、美沢二〇四番地にあったが、ここは千歳飛行場に近く騒音がひどいことから、しばしば問題となっていた。ところが、昭和四十六年になって、防衛施設費による整備校に指定され、場所も植苗五〇番地に移して防音装置をほどこした立派な校舎が出来上がり、同四十七年三月に小中学校ともども移転した。

植苗振興会と 従来植苗地区は中央、南、北、西、美沢、トアサの**植苗連合町内会** 六部落に分離し、明治の開拓以来一貫して行政も分か

れたままで進められてきた。

この事は利害関係にもおよび、学校移転などに根強くあらわれ、対立をまねく原因ともなった。そのほか当地区全体で考えなければならぬことも、しばしば一地区だけの問題として処理され、不幸の原因ともなってきた。こうしたことがなく、大きな視野に立つて諸問題を考え振興発展させるため、昭和二十五年四月、六部落を合併した植苗振興会が設立され、苫小牧町会の発足により植苗連合町内会となった。

ラジオ共同

昭和十八年、北海道喜茂別村に有線によるラジオ共同聴取施設第一号が設置されてから、電気と文聴取施設 化施設に恵まれない農漁村に急激に普及発達し、同二十九年七月現在、電波監理局に登録済みの施設は数において六〇〇カ所、聴取戸数は実に九万五、〇〇〇戸に達した。

植苗地区においては、昭和二十六年春、発議以来、経済的技術的困難を乗り越えて建設工事を進め、同年十二月二十三日完工、二十五日のクリスマスプレゼントとして第一声を各戸に送り、当地区全戸がその喜びにひたつたのである。

一、施設年月日 昭和二十六年十二月二十三日

二、電線延長距離 五〇キロ 単線四八キロ 複線二キロ

三、加入者数 中央、南、北、西、美沢、トアサの六地区 当初八八戸

四、工事費 建設費 七二万八、〇〇〇円

内 訳

市補助金 二〇万円

個人負担 五二万八、〇〇〇円

五、維持費 毎年一戸八〇〇円程度

『ラジオ共同聴取記録』 植苗連合町内会

以来十数年、植苗電気利用組合が発足し、電化されるまで、この設置は当地区の重要な連絡網であるばかりでなく、社会的文化的あるいは経済的に大きな貢献をした。

植苗電気利用

農村電化促進法の制定で北海道の未電灯地帯に明るい光がさしはじめると同時に、当地方でも沼

組合と電友会 ノ端から植苗白鳥湖までは北電の施設となり、その先の北部落（学校を含む）から植苗中央一帯は私設配電として昭和三十五年十二月二十二日に仮使用認可、翌年一月十九日、正式認可となり、ここに永年にわたる無電灯地帯であったこの地の一部に電灯がついた。

だが、この時わずか二〇名の人たちの結集による組合組織の『電気消費組合』であった。当時、一戸一二万円という負担金は血のにじむ思いであり、このほか自己の屋内施設の負担もあった。以来十二年間、昭和四十七年五月五日、北海道電力に移管となるまで電気利用組合によって運営されたのである。

北電引継ぎ後も集金業務と検針業務は組合の仕事として残され、利用組合は解散とし電友会として行うことになった。また、移管に際しては施設の改善のため、ほとんど無償で移管したのである。

植苗

明治四十一年、炭鉱汽船株式会社事務所に來ていた退役少尉川上力之介を初代会長に『植苗青年会』と

青年団 して発足した。大正五年の記録によると本会会員二五名、苦小牧青年会四五名とある。何時ころから青年団となったのか、明らかではないが、大正六年に苦小牧連合青年団が組織されているので、このころであると思われる。

その後、団長は学校長があたり、女子は女子青年団となって分かれていった。

昭和に入り軍事色が強くなると、青年学校が設けられ、青年団と結ばれていった。

戦後、昭和二十一年四月、改組植苗青年団として発足、男女合わせて五六名の団員を数え、会館建設目的をもって兵舎払下げ運動を行った。

しかし、農村の過疎化と中学卒業者の他市への就職転出により次第に団員が減少、自然消滅となつてしまった。

その他 昭和三十二年六月十九日に発足した植苗自警団は、郷土の平和を確立し、自治的治安秩序を保持するたの団体 め、犯罪防止で警察業務に積極的に協力するほか、交通事故防止の協力にもあたっている。

植苗自衛消防団は自警団の人たちが横すべりして組織し防災に備え、沼ノ端第二消防分団の系列下に入り、野火の発生などの警備にあたっている。

植苗各地 植苗地区はすでに述べたとおり、その初期においては六部落が別々に発達したため、神社も各地に設の神社 立された。

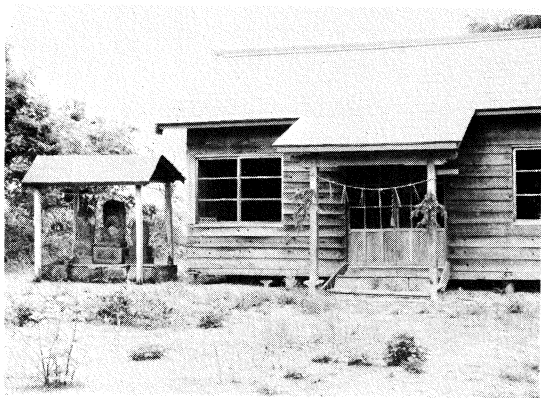
・植苗南地区神社

小原宗四郎が讃岐の故郷より分神受領してきたものを、すでに入地していた柄沢鶴吉とともに、明治三十二年ころ草分神社として設立、当地北炭に山神の立派な神社があつたが、これとともに併合した。御神体は八幡様である。祭日は旧暦八月十五日であつた。

・植苗中央区神社

植苗駅前にかを建て萬屋の店を經營していた渡辺喜蔵の屋敷内にまつてあつたお社を分神し、道地忠八所有の土地に社地を設け中央神社とした。祭神は八幡様で、祭日は九月十五日である。

・北地区神社



植苗神社（昭和50年）
〔苫小牧市史編さん室蔵〕

北三線の市道、旧植苗小学校前から二〇〇メートル入ったところに、間口七間、奥行五間余の社を構え、まわりをエゾ松にかこまれた神社で、祭神は八幡様、祭日は九月十五日である。

・美沢地区神社

美々道路のちょうど中間点近くの丘の上にまつられたお社、美々の住人長谷川友蔵の言によれば千歳神社の分神であるという。

祭神は天照大神で、祭日は九月五日である。

・西地区神社

西地区は木材、製炭、製薪と木に関する事業が多かったことから、山に入った事業者が山の神を祭った。大木に『ごへい』をまわし、鳥居を建てていたが、これを社屋に入れるようになって神社となった。場所は遠藤治良所有の丘の上に祭った。祭神は山の神、祭日は九月十二日である。

・植苗神社

南、北、中央、美沢の四つの御神体を一カ所に合わし、祭日を九月十五日としてお祭りをすることにした。しかし、いろいろな問題から失敗があり、一〇年後の昭和三十一年に第一回の合同祭りが行われた。翌三十二年には各神社の解体移転が行われ、再建され、ここに完全な合同が完了した。

・寺院・信者

古くは植苗地区にお寺があったが、現在はない。住民の多くは禪宗で、一部が門徒宗である。キリスト教は一戸の

みである。

沼ノ端

一 部落の起源

地名の由来 沼ノ端地区は、明治三十一年、同地に駅が設置される以前は住む人もない草深い場所であった。やがて駅を中心集落が形成されると、同地区北方にウトナイ沼があり、この沼の端にある部落ということで、『沼ノ端』と名付いたのである。

沼ノ端には適当なアイヌ語名は知られていないが、ウトナイ沼は古くから交通（勇払越え）の要衝として知られていた。ウトナイトとはアイヌ語で「ウツ」肋骨、「ナイ」川、「ト」沼を意味し、「あばら骨のような川のある沼」というように考えられている。アイヌにとって川は生き物であり、川的主流（勇払川）を腹にたとえるとこれに流れ込む川は肋骨と考えたのであろう。¹⁾

アイヌ 昭和四十一年七月、旧道々苫小牧―上厚真線にかかる稔橋近くからアイヌ丸木舟五隻が発掘され話題に**丸木舟** なった。この丸木舟は、当初三〇〇年前という絶対年代が得られたが、その後の調査ではさらにさかのぼる七七〇年前という絶対年代が得られているという。発掘された丸木舟は『勇払越え』を裏証する貴重な出土品で、苫小牧市青少年センターに永久保存されることになり一般にも公開されている。

二 自然環境

位置

苦小牧市の中心部より見ると北東に位置し、国鉄苦小牧駅より八・八キロメートルの距離にある。南は苦小牧、東は勇払、柏原、北は植苗、西は丸山に接している。

地質と

勇払原野は今から五、〇〇〇年前ころから海退がはじまり、それまで海底にあった今日の市街地、工場

地形

用地などの平坦地が現れてきた。このため平野を構成している地層はほとんどが第四紀の堆積物で、地表は厚く樽前火山噴出物により被われている。沼ノ端地区一帯はこの勇払原野の一部で、大半が市街地および工場用地として利用されている。このため自然の残存度が低く、沼ノ端駅北側よりウトナイ沼にかけての湿原および古川付近に勇払原野本来の自然が残されている。

沼ノ端の背後には部落名の由来となったウトナイ沼がある。ウトナイ沼の生成過程は勇払原野の生成そのもので、前記した海退がはじまるころ、海流により運搬される土砂により糸井方面から真小牧、佐多布にかけ、また沼ノ端から勇払、明野付近にかけて砂丘が形成された。これと並行して美々川、勇払川および苦小牧川などの河川が運搬する土砂による埋立作業が行われていった。こうして勇払原野は静かに形成されていき、埋残されたのがウトナイ沼などの沼として今日に残ったのである。このため、江戸時代の地図、文献などを見ると、ウトナイ沼は今日よりはるかに大きな沼であったことがわかる。

沼ノ端の

沼ノ端市街地およびその周辺は工場、住宅が立ち並び、開拓初期の植物相は知るすべもない。わずか

動・植物

に残された地域には、背丈の低いエゾノコリンゴ、ヤチハンノキ、ヤチダモ、イヌコリヤナギなどからなる林が見られ、名物のハスカップ（クロミノウグイスカズラ）の群棲地となっている。同駅からウトナイ沼、勇払

川付近にかけての湿・草原には良好な自然が残されており、ホザキシモツケ、エゾミソハギ、ミズギボウシ、サワギキョウ、エゾスカシユリなど勇払原野の花が美しく、砂丘部にはハマナス、ウラジロタデ、イワブクロ、ハナゴケ類など海浜、高山性の植物が見られ、貴重な地域として保護されようとしている。

動物は、勇払川、ウトナイ沼周辺にオオハクチョウ、アオサギ、オオジシギ、マガモ、マガン、ヒシクイ、カワラヒワ、カッコウ、キジバト、アオジ、コムクドリ、ノビタキ、オオジュリン、トラツグミなど多くの鳥類が飛来する。ウトナイ沼には五、六〇センチメートルもあるコイをはじめフナ、ウナギ、ウグイ、ヤチウグイ、ワカサギ、ウキゴリなどの魚類も豊富で、スジエビ、サワガニなども見られる。勇払川にはかつてサケ、マスの捕獲場があったほどそ上したが、最近では激減してしまった。また、勇払川を有名にしたユウフツヤツメ（ミツバヤツメ）の記録もあるが、その後の再記録はない。

この他ネズミ類、野性化したミンク、ヘビ、カエル類も見られ、昆虫類の数も多い。

三 開拓・発達

沼ノ端の 北海道炭硯鉄道株式会社の沿線拡充計画により駅舎が建設される前の沼ノ端は、ウトナイ沼付近一帯
あけぼの をさし、苫小牧、勇払、植苗の三村にまたがる広大な地域であった。そのころはまだ今日の沼ノ端市街地はなく、福田儀平宅が一軒あるのみの寂しい場所であった。福田は明治三十四年、沼ノ端駅通の取扱人をしたり、同三十五年、村長の行政事務補助者として同地区の初代部長に任命されるなど当時の実力者であるが、その人物像は定かでない。

明治三十一年二月一日より沼ノ端駅は業務を開始したが、植苗、勇払地区に入地していた開拓者にとって駅の開設

により受ける恩恵は大きなものであった。また同駅は、日高路との分岐点として各産業に貢献し、その存在価値は重要なものであった。

このように駅が設置されると、将来の発展を洞察した東北地方出身の人々が同地に入地し、駅前を中心に住居が建ち並びはじめたのである。これが沼ノ端市街地および予定地で、今日の沼ノ端部落の母体となったものである。

こうして沼ノ端は、駅舎が建設されたのを契機に部落が誕生し、開拓、発展の歴史がはじまったのである。

森林資源 駅が設置されたころの沼ノ端周辺は、今日からは想像できないような森林があり、この森林資源を利

の開發 用した産業が栄え、沼ノ端駅はこれらの産物の取り扱いでにぎわった。当時同駅で扱った産物は、マツ

チ軸木、木炭、枕木、角材などであった。特にマツチ軸木は明治時代を代表する産物で、美々、植苗地区の美々川流域にあった工場で生産された軸木を箱舟を利用してウトナイ沼まで下り、さらに勇払川に入って沼ノ端駅に最も近い地点で陸揚げされ、馬車で運ばれていたという。また、枕木、角材なども同様の輸送方法をとっていたが、やがてウトナイ沿岸から沼ノ端駅裏までレールが敷かれ、馬鉄でこれらを運んでいたという。² こうして同駅に集められたマツチ軸木は室蘭港に集められ、さらに神戸へと輸送されていたのであった。

一方木炭は、明治三十年、国有未開地処分法の施行により各地に開拓者が入地し、沼ノ端付近でも植苗村地区などに入地した人々が、開墾の片手間に手がけたのがはじまりであった。しかし、片手間仕事をいつしか本業とする者も現れ、前記処分法の適用を受けて入地した者の中には開墾もせずに木炭業に専念する者さえあって、同地域の山林は乱伐がくり返される結果となった。こうして生産された木炭は、近くの駅から札幌、小樽方面へ運ばれていたが、大正時代における沼ノ端駅の取扱量を見ると、早来、遠浅、苫小牧各駅に次いで第四位であった。

このように駅舎の設置が契機となって林産物の集散地として活気を見せはじめ、駅前を中心に商店、運送店、旅館

などが立ち並ぶようになったが、まだまだ小規模な部落であった。

牧場経営

沼ノ端地区に入地した者の中には、新、旧国有未開地処分法の適用を受け、国有未開地の貸付けもし者の出現 頃は売払いにより入手した広面積の土地を所有し、牧場経営を行う者が現れた。同地域は、地形が平坦で積雪量も少ないうえ年中凍らない小川が流れていることから、牛馬の放牧には適しており、主目的が投機型副業であつたかどうかは別にしても、牧場経営者の出現は当然であつたのであろう。

大正十四年ころの同地域に存在した牧場および規模は次のとおりである。

〔宮崎牧場〕	駅より	北へ	二里	地積	五五三町歩	馬	二五頭
〔工藤牧場〕			北へ	三里	二九三町歩	馬	一〇頭
〔荒井牧場〕				東へ三〇丁	六〇町歩	牛・馬	八〇頭
〔星野牧場〕				西北へ一〇丁	一〇〇町歩	馬	二〇頭
〔松田牧場〕				東へ二里	二、〇〇〇町歩	牛・馬	二〇〇頭

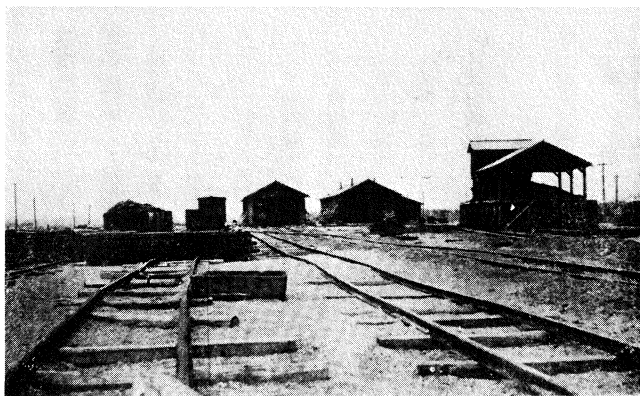
〔北海道鐵道各驛要覽〕 大正十四年 札幌鐵道局

金山線の開通

北海道炭砒鐵道株式会社により設置された沼ノ端駅は、明治三十六年十月一日、同社が国有としてと沼ノ端 買収されたことにより、国有鐵道沼ノ端駅となつた。

その後、檜崎平太郎など当時の道内海運業者が中心となり北海道鐵道株式会社が創立され、その第一次工事として沼ノ端―辺富内（富内）間約七三キロメートルの敷設工事が開始された。第一期工事は大正九年に着工され、同十一年七月二十四日、沼ノ端―生鼈旭岡（いぐべつ）がまず開通し、同十二年十一月十一日には辺富内までというように次々に開通し、沼ノ端駅は国鉄と共同使用駅となつた。

さらに北海道鉄道株式会社は、辺富内周辺で採掘した石炭を輸送するために沼ノ端―苗穂間に札幌線を敷設する計画であったが、辺富内周辺の石炭は企業として成り立たないことが判明したため採掘中止となった。しかし、石炭は見込みがなくとも木材資源は豊富にあり、これの輸送を目的に同社は大正十二年、札幌線の工事に着工し、同十五年八月二十一日、営業を開始した。



国鉄・北海道鉄道沼ノ端駅構内（大正14年）
〔苫小牧市史編さん室蔵〕

このように沼ノ端は国有、私有鉄道の開通により鉄道事務所、職員宿舎、宿屋、飲食店などができ、活気をみせた時期であった。

やがて、北海道鉄道の経営は王子製紙に移り、従来沼ノ端が始発駅であったものも昭和九年十月一日から苫小牧駅に変わり、事務所も東札幌へ移ると沼ノ端は往年の活気を失うようになってきた。

このように、沼ノ端は鉄道の変遷とともに移り変わってきた街なのである。

拓勇部落 沼ノ端地区に本格的な開拓団が入地したのは、ほかの部落の誕生 より遅く昭和初期のことであった。

昭和十年三月、胆振拓殖実習校卒業生の中から選抜された佐藤信、平松久吉、高井嶺男、岩淵章吉、村上勇および木津勇太郎の五名が沼ノ端市街地西方の原野に入地した。これが拓勇部落で、拓勇とは不毛の地といわれる勇払原野をなんとか開拓しようという願いから名付いた名称であったという。こうして入地した開拓者には一戸当たり一〇町歩の特定地が貸付けら



沼ノ端勇部落（昭和48年）
〔苫小牧市史編さん室蔵〕

れたほか、今後の営農成績によつてはさらに五町歩を貸付けするという道庁の施策であつた。また、これらの人々には住宅として一戸一〇坪の住宅兼畜舎、畜牛一頭が与えられた。

こうして開墾に着手したが、開拓者の努力により初年度からかなりの好成績をおさめ、同年秋の収穫時には佐上北海道庁長官が同部落を視察したほどであつた。その後も同部落には入地者があり、恵まれた条件の中で着々と好成果を上げる一方、沼ノ端郵便局に勤務する者も現れて、開拓農家としては安定した部落であつた。

変わりゆ

鉄道とともに発展してきた沼ノ端地区は、苫小牧市の発展にく沼ノ端 ともない急激な成長をとげようとしている。東部開発にともなう工場の出現をはじめ、ベツトタウンとしての宅地造成が急ピツチで進みつつある反面、公害問題がクローズアップされるなど今後の発展上もろもろの問題を包含した地域となっている。

四 教育・文化

沼ノ端小学 明治三十一年、沼ノ端駅が設置されると、沼ノ端地区は農

校の沿革 林産物の集散地および日高方面への分岐点として活気を見せはじめ、住民も次第に増加していった。これにともない教育施設の設定が急務となり、当時の有志福田儀平、工藤栄太郎、星野藤七などの努力と部落の人々の協力により、校具の寄付を受けるとともに民家を借り上げ、これを校舎に当て沼ノ端簡易教育所を開設したのは明治三十六年四月のこ

とであった。簡易教育所とは、道庁において明治三十一年、「簡易教育規程」を制定し、さらに同三十四年に一部を改正し、尋常小学校を設置する費用を負担できない町村は「簡易教育所」を設け尋常小学校に替えることができるというものである。

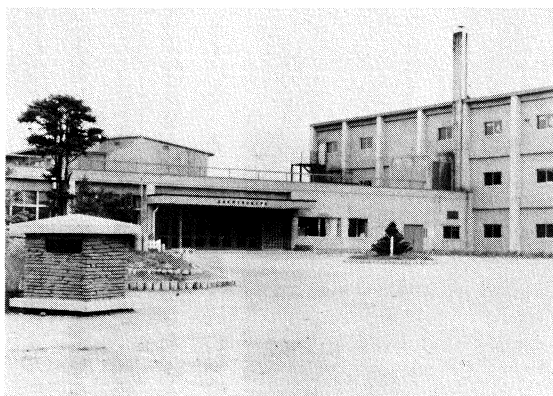
大正五年十二月一日、「改正特別教育規程」の施行によりこれまでの簡易教育所の名称を廃止し、新たに沼ノ端尋常小学校として認可され、同十二年六月、待望の新校舎が落成（工費四、九五〇円、校地九〇〇坪、校舎八八坪）した。

やがて、昭和十六年に制定された「国民学校令」により沼ノ端国民学校と改称されたが、終戦後の新学制実施により苫小牧町立沼ノ端小学校となったのは昭和二十二年四月一日のことであった。

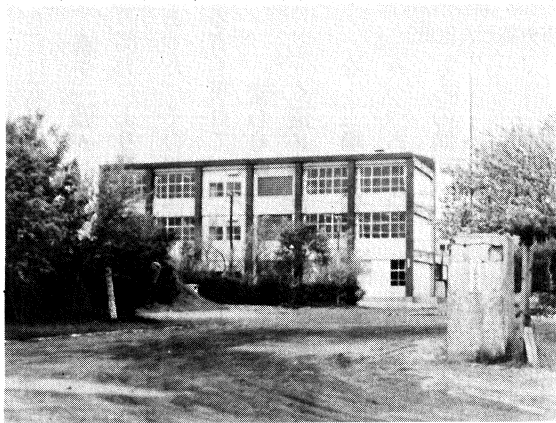
沼ノ端中学 新学制実施により

校の沿革 昭和二十二年四月一

日、町立沼ノ端小学校内に町立東中学校の沼ノ端分校として発足し、同二十六年四月一日、独立昇格して市立沼ノ端中学校となった。その後、生徒数の減少により昭和三十一年三月をもって廃校となり、沼ノ端地区の子弟はスクールバスにより東中学校



沼ノ端小学校（昭和50年）〔苫小牧市史編さん室蔵〕



沼ノ端中学校（昭和50年）〔苫小牧市史編さん室蔵〕

へ通学することになった。

しかし、同三十七、八年ころから同地区も次第に発展し、生徒数の増加もあつて中学校新設運動が起り、関係各方面に対する陳情が行われ、同四十年にはこれが実現して四月開校となつた。

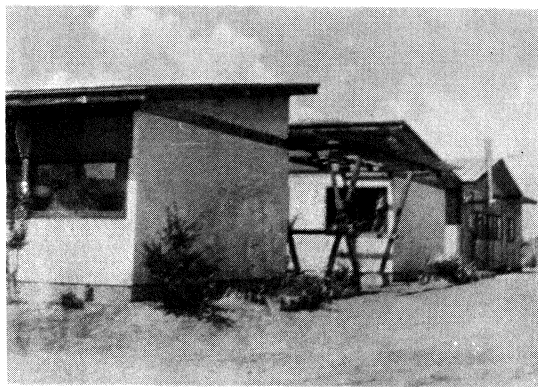
開発青年

第二期北海道総合開発計画が第一歩を踏みだす前年の昭和三十七年、本道開発のため建設機械を駆使隊の沿革 する青年技能者の育成を主目的とする北海道地方産業開発青年隊が誕生した。同隊は道庁土木部直属の一機関で、本部を苫小牧市（現・日の出町土木現業所付近）に置き、全道各地から隊員を募集することになった。応募規

定は一八歳から二五歳未満で高等学校卒業（同程度の学力を有する者）の独身男子に限られ、「働きながら学ぶ」ことをモットーにしていた。発足当時は、一年の養成期間中に色々の資格が取得でき卒業後の就職も心配ないとなつてなかなか好評で、初期の応募状況を見てみると定員二五名に対し一一二名の応募者があつたが、年ごとに減少していった。

昭和四十年、青年隊の実習を兼ねた勇払川改修工事が道費で行われることになり、同年六月、沼ノ端に木造モルタル平屋建て四一二平方メートルの実習隊舎が完成し、一五名の隊員が作業に従事することになった。やがて同年十一月、本部が奈井江町に移転したが、沼ノ端の隊舎はその後も使用され、毎年実習に訪れる隊員に利用され、四十六年度を最後に閉鎖されることになった。⁽³⁾

この間、丸木舟の発掘調査、集中豪雨による防災出動など数々の協力を



開発青年隊沼ノ端実習所（昭和41年）
〔北海道開発青年隊本部蔵〕

受けたことも忘れられないことである。

電気の 北海道鉄道金山線の敷設にともない沼ノ端地区の人口は増加の一途をたどり、それと並行して電気供給供給の音が一段と強くなりつつあった。沼ノ端地区の電気供給に関する裏話として、星野藤二郎さんは次のように語っている。

父（星野藤七）が札幌の宿でフロに入っていると、隣で何やら話し合っている人がいましてね、聞くとともになしに聞いていると、近々に勇払電灯という会社ができ、王子から電氣を買って早来や厚真方面に売るといふ話なんです。それで、父は帰ってくる早々に役場へ出向き、実は近々勇払電灯が……との話を持ち込み、この際ぜひ、料金の安い村営の電氣を沼ノ端にも回して欲しいと申し入れたんです。

（『とまこまい昔がたり⑧―星野藤二郎 昭和四十八年「広報とまこまい」』）

この話の中にもある『勇払電灯株式会社』とは、王子製紙苫小牧工場の発電所から電氣を購入し、これを早来、厚真周辺に供給する目的で大正八年七月十三日、創立されたもので、本店は早来町にあった。苫小牧町では、前記のような要望もあり、かつ全行政区域内に電氣供給を行う第一歩として発展著しい沼ノ端地区に供給を開始することになった。

大正九年、王子製紙と供給区域変更に関する契約を完了し、翌十年、沼ノ端市街地電氣工作物新設工事を勇払電灯会社で施行する等々の交渉が成立、同年二月四日、電力売買契約が締結され各戸に送電が開始された。

契 約 書

勇拂郡苫小牧町長鈴木善治（以下單ニ甲ト稱ス）ト勇拂電燈株式會社專務取締役青柳猶吉（以下單ニ乙ト稱ス）トノ間ニ電力賣買ニ關シ契約ヲ締結スルコト左ノ如シ

第一條 乙ハ三千五百「ヴォルト」周波數六拾「サイクル」ノ三相交流電氣ヲ甲ニ供給スルモノトス 但シ供給地點ハ苦小牧町字沼ノ端トス

第二條 甲乙兩者間ニ於ケル送電上ノ責任ハ乙ノ工作物外ニ於テ甲設置ニ係ル開閉器ヲ以テ分界點トス

第三條 乙カ甲ニ供給スヘキ電力ハ甲ノ經營スル沼ノ端ノ電氣事業ニ使用スヘキ電力量ヲ以テ限度トス 但シ電動力ノ場合ハ甲ニ於テ使用ノ都度豫メ乙ノ承認ヲ得ルモノトス

第四條 甲ノ毎月電力使用高ハ甲ノ散宿所内ニ裝置セル積算電力計ニ示ス所ニ依ル

前項ノ計器ノ取扱ハ乙之ニ當リ毎月廿一日其表示ヲ記錄スルモノトス 但シ該計器箱ノ開閉ハ甲立會ノ上乙之ニ當ルモノトス

第五條 甲カ乙ニ支拂フヘキ電力使用料金ハ乙カ王子製紙株式會社ト契約セシ一キロワット時ノ料金二一、二ヲ乘シタル額ヲ以テ算定スルモノトス

第六條 電力使用料ハ毎月二十日ヲ以テ締切り計算シ翌月五日迄ニ甲ヨリ乙ニ支拂フモノトス

第七條 天災其他不可抗力ニ因リ乙ニ於テ停電若クハ甲ニ於テ受電シ得サル場合ニ生シタル損害ニ對シテハ甲乙共ニ其ノ責ニ任セサルモノトス

第八條 毎月王子製紙株式會社苦小牧分社電氣工作物ノ掃除及手入ノ定日ニ限り日出ヨリ日没前一時間迄送電ヲ停止スルモノトス

第九條 甲ニ於テ本契約ニ違背シタル場合ハ乙ハ直ニ送電ヲ停止スルコトヲ得

前項ノ送電停止ニ依リ甲ノ蒙リタル損害ニ對シテハ乙ハ其ノ責ニ任セサルモノトス

乙ノ工作物ニ變更又ハ修繕スル場合ニ於ケル送電停止ニ對シ甲ハ異議ヲ申立ツルコトヲ得ス 但シ此ノ場合ニ於テハ豫メ乙ヨリ甲ニ其旨通知スルモノトス

第十條 乙ニ於テ本契約ニ違背シ甲ニ損害ヲ與ヘタル場合ハ乙其ノ責ニ任ス

第十一條 本契約有効期間ヲ契約ノ日より満十箇年トシ期間満了三ヶ月内ニ双方協議ノ上繼續スルモノトス

右契約ヲ確保スルタメ本書貳通ヲ作製シ各壹通ヲ保有ス

大正十年二月四日

苦小牧町長 鈴木善治

勇拂電燈株式會社專務取締役 青柳猶吉

『町営電氣事業三十年史』昭和十八年 苦小牧町

やがて王子製紙第四発電所の竣工により送電距離が短縮され、勇払電灯株式会社では同発電所―早来間に新たに送電線を建設し、従来の王子変電所（苦小牧）―早来間の送電線を取外すことになった。一方、苦小牧町としては従来の状態に決して満足はしていなかったため、これを機会に苦小牧―沼ノ端間に独自に送電線を建設し、苦小牧町で直接王子製紙より受電して供給することになった。

従来の供給方法によると、沼ノ端地区における一年間の電力使用量は約四万キロワット時で、勇払電灯より購入していたころは一キロワット時につき四錢であったが、新供給方法によると一キロワット時二錢五厘となり、送電損失を使用電力量の五パーセントと見込んでも、年間電氣購入費で五五〇円を節約できることになった。これは苦小牧町にとつて大きな成果であるとともに、従来の間断ない事故を防ぎ、かつ今後の勇払原野開拓の大きな原動力となったのである。

五 衛生・医療

医療 沼ノ端地区には長い間医療機関がなかったが、昭和二十七年、国保直営診療所が開設された。建設資金は三機関〇〇万円を予定し、うち八八万円を国庫補助にあおぎ、五五坪の診療所が完成した。医療施設は、ポータブルX線機などを備えて主に内科を扱い、医師一名、看護婦二名程度で始められたが、次第に医師の確保が困難になり診療所の前途は多難であった。その後、苫小牧市内の開業医の協力を得て週一、二回の出張診療が行われていたが、これも長くはつづかなかつた。また、沼ノ端地区の人々も直接苫小牧へ出て診療を受ける者が多くなり、診療所は有名無実のものになってしまった。

その後、同診療所の跡にルカ医院が開業し同地区の診療に当たっている。

水道の 沼ノ端地区に水道が敷設されたのはかなり後のことで、人々は長年井戸水生活をしていた。

敷設 昭和三十年十月七日、沼ノ端簡易水道工事は着工され、同年十二月二十五日、竣工した。当初の給水計画

人口は一、一五五人程度を見込み、三十一年三月一日より給水が開始された。給水当初はまだまだ受水者は少なく、井戸水と水道水兼用の時代がしばらくつづいた。なお、水道施設の内容は次のとおりである。

水源 水源は沼ノ端市街地西端において小学校に近く内径一〇〇ミリメートル深さ一五〇メートル、白銅管を以て深井戸（さく

井）の自噴水を取る。計画取水量は約一二〇リットル毎分に対して現在自噴水量は三四〇リットル毎分である。

ポンプ場 自噴水は一旦地上約四・五メートルの内径一・八メートル容量五・〇立方メートルを有するヒューム管製貯水槽に入れ塩素滅菌（次亜塩素酸溶液）を施しその後ポンプ室へ導水する。ポンプは口径五〇ミリ揚水量〇・二立方メートル毎分揚程二八・五立方メートル馬力にて圧力水槽へ圧送し常時一・五―二・八キログラム（二平方メートル当り）の圧力にて自

動スイッチにより市街地へ配水される。

配水管 配水管はすべて白鋼管を使用し口径三吋五〇八メートル口径二吋七九三メートル計一、三〇一メートル布設してある。

給水栓 給水栓は公設共用栓一一本専用栓二七本である。(但し学校等大口も一件当り一栓とした)

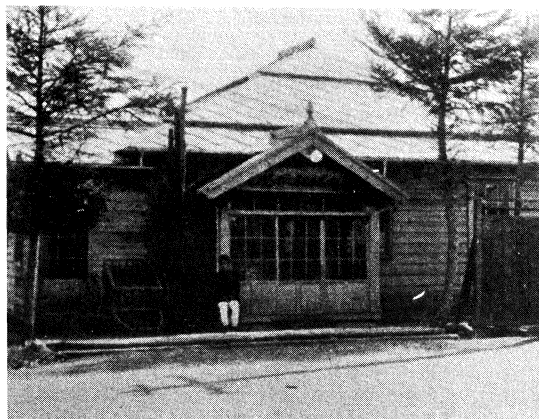
(『市勢年鑑』 昭和三十二年 苦小牧市)

公衆 沼ノ端地区には、大正時代ころの駅前通りに一軒浴場ができたことがあつたが、その後廃業し、長い間公衆浴場がない時代がつづいた。上富良野で農業を営んでいた中沢富美雄は、将来の発展を期待して沼ノ端の土を踏んだとき、町内会からの要望もあり昭和四十八年八月、「富美の湯」を開業した。今日これが同地区唯一の公衆浴場となっている。

六 交通・通信

沼ノ端郵便 明治三十五年十二月一日、沼ノ端郵便受取所が開設され、同三十八年四月一日、三等郵便局(無集局の沿革 配)に昇格した。同四十四年四月二十一日から集配事務を開始し、昭和十六年二月一日、三等郵便局を廃止して沼ノ端特定郵便局と改称し、今日にいたっている。

一方電報電話は、昭和十八年十一月二十一日、沼ノ端郵便局において磁石式交換方法による電話交換事務を開始した。しかし、事務開始当時は電話の普及率は極端に低く、佐藤敬吉、沼ノ端陸軍飛行場などほんの数台があるのみであった。やがて電話加入者も増加の一途をたどり、電信電話部門の郵便局からの分離も逐次実施され、同三十七年一月十六日をもって沼ノ端局は廃止され、苦小牧電報電話局に吸収された。



沼ノ端郵便局（大正14年）
〔苫小牧市史編さん室蔵〕



沼ノ端駅（昭和43年）
〔堀江敏夫蔵〕

沼ノ端駅 沼ノ端は鉄道の変遷により発展してきたという特色を持っている。明治三十一年二月、北海道炭砒鉄の沿革道は、これまで苫小牧駅しかなかったが、国有未開地処分法の施行により周辺地区への入植が相次いだことから西に錦多峰駅、東に沼ノ端駅を新設した。

特に沼ノ端地区は駅設置当時は人家らしい人家もないところであったが、これが一つの契機となって駅を中心に部落が形成されていった。そして、その初期には植苗地区の木材、マッチ軸木、木炭などにより苫小牧管内では最も貨物取扱いの多い駅であった。

大正十一年七月、北海道鉄道株式会社が沼ノ端に本社をおいて富内、苗穂に路線を拡張し、ますます発展していったのである。

沿革

- 沼ノ端駅は明治三十年十月に北海道炭砒鉄道株式会社が沿線拡充計画により一坪の駅舎を新築し、明治三十一年二月一日より同会社の経営により開業した。

- ・ 明治三十六年八月、信号梃子扱所を新設する。
- ・ 明治三十九年十月一日に北海道炭砒鉄道は国有として買収されることになり、国有鉄道沼ノ端駅となった。
- ・ 大正十一年七月二十四日、北海道鉄道株式会社により沼ノ端・生鼈(現 旭岡)間が開通し、同駅は共同使用駅となった。その後大正十二年十一月には辺富内まで開通、また同会社は大正十五年八月二十一日に沼ノ端・苗穂間を開通し、苗穂・辺富内間は社線として同駅を接続駅として沿線の旅客、貨物輸送に貢献した。
- ・ 昭和五年三月三十一日に渡線車手動のものを設備する。
- ・ 昭和十八年八月一日、北海道鉄道は国有に接收されることになり、苗穂・富内間は国有鉄道所屬となり、社線構内配線設備の全般が同駅に移管された。

・ 昭和十八年十月、陸軍飛行場の新設にともない駅構内設備の増改築が行われた。

一、貨物一番線延長一四五メートル、貨物二番線五四メートル(昭和十八年十一月二十日竣工)

二、貨物二番線に堅ホーム新設、貨物一番ホーム増設(昭和十八年十一月二十日竣工)

三、貨物上屋並に保管庫改築(昭和十八年十一月二十三日竣工)

・ 昭和二十七年十二月二十五日、構内設備の一部改良を行う。

・ 昭和三十七年十二月二十日、駅付属公衆便所新築落成する。

・ 昭和三十九年八月五日、広島燃料興業株式会社の設立に伴い専用線及び受渡線敷設する。これに関連し石炭庫、小荷物保管庫は四番線山側から現位置に移設された。
(堀江敏夫『苫小牧地方鉄道史』昭和四十三年 苫小牧地方研究会)

注 (1) 扇谷昌康『苫小牧市のアイヌ語地名』昭和四十六年「郷土の研究第三号別冊」苫小牧郷土文化研究会

(2) 星野藤二郎氏談による

(3) 『流汗』 昭和四十八年北海道地方産業開発青年隊

丸 山

一 部落の起源

地名の

『字名改稱地番整理』が実施される以前は丸山という名称はなく、王子輕便鐵道（山線）の駅名である

由来

『一三マイル』と呼ばれていた。その後、前記の字名改称が実施され、昭和十九年一月一日より正式に『丸

山』と命名されたのである。

部落名となった丸山は、北西に位置する標高三二七メートルの『丸山』に由来するが、いつころからこの山を『丸山』と呼ぶようになったかは定かでない。ただ、起伏の少ない樽前山麓においておわんを伏せたような地形は目につきやすく、人々のよき目標になったであろうことは想像に難くない。このようにして、誰いうとはなく名付けられた山の名前が部落名として採用されたことは、ごく自然の成行きであつた。

丸山の 千歳川水系、勇振川水系の下流域より遺跡が発見されているが、丸山部落内からは現在のところ遺跡、遺跡 遺物は発見されていない。

二 自然

位置

苫小牧市字丸山一番地（いわゆる丸山部落）は、苫小牧市の中心よりみると北西に位置し、国鉄苫小牧駅よ

り二キロメートルの距離にある。経度は、東経一四一度二六分、緯度は、北緯四二度四五分、海拔二三八メートルの地点にある。

地質と 丸山部落および周辺一帯は樽前火山山麓の台地で、丸山遠見（海拔三三七メートル）、モーラップ山（海拔

地形 五〇六・六メートル）など一部を除き起伏の少ない火山性緩斜面である。

基盤は第三紀層の集塊岩、凝灰岩などで主に形成されており、その上部は樽前火山系の火山碎屑物で厚くおおわれている。このため土壌も一般に見られる森林土壌とは異なり、火山灰、砂礫土などの火山灰性未熟土（ I_m ）である。

河川は、丸山部落内を勇振川が流れ、途中苫小牧市管内では唯一の滝を見ることができる。

植 物 樽前山麓の針葉樹林、特にエゾマツ、トドマツ

の美林は有名であつた。しかし、昭和二十九年の台風一五号により多大な被害をうけ、天然林相が一変した。その後の植林により森林は復活したが、大半が造林地になり、台風の被害をまぬがれた天然林は河川両側斜面部の広葉樹林程度になつてしまつた。



丸山の滝（昭和50年）

〔苫小牧市青少年センター蔵〕

この地域の主な木本植物は、イタヤカエデ、ヤマモミジ、ハウチワカエデ、ヤチダモ、ミズナラ、ハリギリ、カツラ、マカバ、ダケカバ、シラカバ、エゾヤマザクラ、シロザクラ、アオダモ、ミズキ、ナナカマド、ハルニレ、キハダ、ホウ、ワタドロ、アズキナシ、コブシ、ヤマハンノキ、コマユミ、ツリバナ、シナ、コシアブラ、ヤマネコヤナギなど多種の広葉樹、クロエゾマツ、アカエゾマツ、トドマ



丸山の杉林（昭和50年）

〔神田正五蔵〕

るクロミノウグイスカズラ（ハスカップ）も少ないながら見られ、マルバシモツケは反対に低地では見られない高山性植物である。

草本植物は、エゾエンゴサク、ミヤマエンレイソウ、シラネアオイ、ヨツバヒヨドリ、ミヤマハンシヨウズル、ベニバナイチヤクソウ、ハンゴンソウ、オトギリリウなど多種の植物が自生している。

動物 四方を森林に囲まれた丸山部落および付近一帯は、多くの動物にとつて絶好の住み処となっている。

哺乳類は、エゾヒグマ、エゾタヌキ、キタキツネ、エゾシカ、エゾイタチなどが見られる。エゾヒグマは、モーラツ山、風不死岳山麓に多く、エゾシカはまれに目撃されているが、日高方面からの渡り途中のものであろう。

げっ歯類は、エゾリス、シマリス、エゾヤチネズミ、エゾヒメネズミなどが知られているが、ネズミ類はさらに多くの種類が棲息しているものと思われる。

ツ、イチイなどの針葉樹、このほか植林したカラマツ、ストローブマツ、バンクスマツ、リキダマツ、欧州アカマツ、日高ゴヨウなど外来種も見られる。また、興味深いものとしてスギがある。このスギは、大正末期ころ、同地域で働いていた浦田定夫により植えられたものの一部で、現在丸山小学校裏に二二本、一二マイルに一本が確認されている。この他、林内にはエゾアジサイが多く日当たりのよい道端にはノリウツギ、エゾニワトコ（サビタ）などが多い。また、勇払原野ではごく普通に見られ

この他、エゾノウサギも見られ、コウモリの飛翔も見ているが種類は分かっていない。オサムシ（昆虫採集用トラップにトガリネズミが入ったこともあり、これらの仲間も棲息しているのであろう）。

爬虫類は、カナヘビ、シマヘビ、アオダイショウなどが見られ、両生類のエゾサンショウウオ、アマガエルなども水辺で見ることができる。

魚類は極めて種類が少なく、部落内を流れる勇振川でハナカジカ、アメマスが見られる程度である。

鳥類は、アカゲラ、モズ、エゾライチョウなど森林性の留鳥が見られ、溪流付近ではセグロセキレイ、キセキレイなども見られる。渡り鳥は、コマドリ、オオルリ、コルリ、キビタキ、カクコウ、ホオジロなどの夏鳥、ベニヒワ、マヒワ、ウソ、ツグミ、キレンジャクなどの冬鳥、このほかにもかなり多く鳥類が棲息している。

昆虫類は、苫小牧市街地近傍の丘陵地、平地とは若干異なり、山地性の種類が多くなる。セダカオサムシ、エゾクロナガオサムシなどの甲虫は、平地部では見られないが丸山地域では多い。反面、平地性のセアカオサムシ、セスジアカガネオサムシなどは見られない。トンボ類は、林間をオニヤンマが飛び交い、平地の湖沼から移動したアキアカネ、ノシメトンボなども多い。溪流を好むサナエトンボが見られないのは意外であった。蝶類は、ミヤマカラスアゲハ、カラスアゲハ、キアゲハなどの大型アゲハ類が林道の水たまりに群をつくり、北海道では少ないアゲハも見られる。道端のアカツメクサで吸蜜する純白のエゾシロチョウは初夏に多く、林内のトラノオの花にはキバネセセリ、ヒヨウモン類、カラスシジミなど多くの蝶が集まっている。

三 開拓・発展史

丸山部落およびその周辺に人が住むようになったのは、明治時代の中期ごろと推測される。以来、同部落は山林事

業に従事する人々により盛衰が重ねられ今日にいたっている。このように単一事業に従事する人々によって部落が形成されるケースは多々あるが、発祥以来一貫してそのパターンを保っているのは同部落のみで、苫小牧周辺の部落では特異な存在であろう。

同部落の開拓・発展の足跡を便宜上大きく四期に分けて述べることにする。

(一) 第一期 明治時代

御料林編入 明治二年七月、開拓使が設置されて以来、北海道各地の森林はその管理下に置かれるところとなつた。までの経過 た。もちろん、苫小牧周辺の森林も例外ではなかった。特に、樽前山麓に帯状に繁茂するエゾマツ、トドマツを主体とする美林は早くから注目され、同十三年三月には樽前官林の樹種調査が行われた。翌十四年一月、開拓使札幌本庁地理課の森林派出所が設置され、同地域の森林はこの管理下となった。

明治十五年二月八日、開拓使が廃止され、北海道は函館、札幌、根室の三県に分割された。森林は農商務省の所轄するところとなり、その管理は三県に委託された。やがて、同二十一年、道庁に林務課が新設されたのを機会に、全道一八カ所に林務課派出所が設置され、本格的な森林管理がスタートした。

その後、皇室財産の安定確立のため、明治二十三年九月、北海道官有林の一部を御料地に編入、札幌に御料局札幌支庁を設置し、各地に出張所を設け道内各地の御料地の管理に当たった。樽前御料林は札幌出張所の所轄となり、郡役所庁舎内に苫小牧分担区が置かれた。

明治三十六年一月、札幌出張所より分割され苫小牧出張所を新設、白老郡、勇払郡、千歳郡の御料地五万一、七〇四ヘクタールを所管することになった。これを三事業区、七分担区に分け管理経営され、職員は所長一名、事業区員

三名、内勤二名の六名であつたが、その後各分担区ごとに分担区員を置き一〇名となつた。新設当時の苦小牧出張所は、国道三六号線沿いの幸町付近に仮庁舎があり、後に王子製紙の工場用地の一角に新庁舎を建設したが、完成まもなく焼失した。その後、同四十三年、王子製紙苦小牧工場の操業開始と時を同じくして、同地に六八坪ほどの庁舎が再建された。^①

当時、丸山地区は苦小牧分担区に所属し、営林事業の最前線基地的な存在となり、終戦までの長い期間御料林の管理経営に当たつたのである。

マツチ工 明治時代の丸山を代表する先駆者として津田震一郎がいた。神戸市在住の津田は、樽前山麓に繁茂す**場の設置** るエゾマツに着目し、明治二十九年六月、北海工場というマツチ小函素地工場を丸山に設置した。マツチ小函素地は、本来檜を主体に杉、楡などが使用されていたが、高価な材を小函に当てることに抵抗を感じた津田はエゾマツに活路を求めたのである。

北海道に於ける小函素地製造の原材料は、蝦夷松、楡の二種なるが就中蝦夷松最も多く使用せらる。其故は蝦夷松の質堅くして容易に毀損せず、且つ函の歪むこと少なきに依れど、眞に小函に適するは楡材に如くなしと云ふ。而して今往時を追想するに其蝦夷松が今日の如き有用の材たるを得し効は一に津田震一郎氏（神戸在住）に歸せざるを得ず、即ち氏は蝦夷松の木質が最も小函素地に適せんことを覺知せしも、其頃は専ら楡材の需用盛んにして到底大勢に逆ふべからざるを以て暫く黙して傍觀せしが、楡材の如き貴重品を之に充つるを黙視するに忍びず殊に適ま大阪の製燐家松田善七氏の之に賛するありしを以て明治二十九年膽振の国に於いて試製し阪神地方へ輸送して聲價を問ひしも、事草創にあるを以て製品に厚薄不同あり、為めに排斥を受けて非常の損害を蒙りしかど、徐々に大器晩成を期して遂ひに今日あるに至らしめぬ。之れ素より氏等の銳意精勵に依るにあれど、又た機期の宜しきに投じしなり、即ち氏等開業の後三年には同道各所に起業者あるのみならず、従來の斯業者も亦た蝦夷松を使用するに至り、斯くて現今の輸入高は

一ヶ月平均五千梱＝七千萬組を下らざるが、是等は何れも三箇取り位の薄板に半製しあれば一定の寸法に截断して筋付けだにせば直ちに函に製作するを得、而して其價格は安全燐寸並函一萬組に付き壹圓五拾錢乃至貳圓貳參拾錢とし、外函は凡そ二萬個分、抽斗は其の外像六萬個分位を筵包として輸送し來るもの。(略)

『日本燐寸界名鑑』明治三十七年 打田橋三郎發行

このように多大の損害と三年の歳月を費やした結果、津田はエゾマツの商品化に成功した。これを契機にマツチ小函素地は、単価が安く丈夫なエゾマツに切り替えられ、北海工場の前途は洋々たるかにみえた。しかし、後に操業を始めた④素地村山工場(苫小牧村村山壬子郎経営)におされ、ときちようど日露戦争の不況時期とも重なり、明治三十八年一月をもって閉鎖された。このように、北海工場は丸山地区最初の企業であるとともに、津田震一郎の業績はエゾマツ素地小函を開発した点において高く評価されてよいものである。次に同三十四年当時の工場内容を掲げると

工場名	工場主	創立年月	資本金	職工		動力	廃業年月	年間就業日数
北海工場	津田震一郎	明治 二九年六月	一三、二五〇円	三九男	九女	人力	明治 三八年一月	三〇〇日

『苫小牧町史』昭和十五年 苫小牧町

なお、明治三十七年、北海道視察旅行の際当地を訪れた鈴木梅四郎(王子製紙専務取締役)もこのマツチ工場で一夜を過ごしており、彼の報告書中にその名を見ることができる。

九月二十九日

(前略) 此處より千歳川を横過し進むに隨て益々林中に進入し、午後四時ビスクシューブリ津田マツチ工場に至り宿泊を依頼す。(後略)

『王子製紙社史―第一卷』昭和三十二年 王子製紙株式会社

丸山の 明治三十七年、丸山地区の一角にはじめてクロエゾマツ三六六ヘクタールが植栽され、これが苦小牧営植林 林署管内における造林事業のはじまりであつた。⁽²⁾

当時の造林は、天然更新を補助する程度の植栽で、ヘクタール当たり八〇〇、一、三〇〇本が補植されていた。当時は、まだ苗畑は無く、補植用の苗は山間を点々と探し求めて採取していた。苗長は三六センチ前後に限定し、採取には根を痛めないよう細心の注意が払われていた。このようにして採取した苗木は作業員により馬車道まで背負つて出され、馬車で植付現場までその日のうちに運搬、仮植され、翌日には植栽を完了させていたかなりの重労働であつた。⁽³⁾

明治三十七年よりはじまった植林は、四十二年を除き毎年実施され、現苦小牧営林署管内における明治年間の植林地面積は、実にその九九パーセントが丸山担当区内であつた。

明治年間の植栽面積表

(単位 ha)

年度	エゾマツ	カラマツ	計	丸山担当区内	比率
明治三十八年	一九・一六		一九・一六	一九・一六	一〇〇・〇%
三十九年	一四・四三		一四・四三	一四・四三	一〇〇・〇
四〇年	三・七四		三・七四	三・七四	一〇〇・〇
四一年	二七・一五		二七・一五	二七・一五	一〇〇・〇
四三年	一・七八		一・七八	一・五四	八六・五
四四年	一二・六四	〇・一三	一二・七七	一二・六三	一〇〇・〇
四五年	一二・一三		一二・一三	一二・一三	一〇〇・〇
計	九一・〇三	〇・一三	九一・一六	九〇・七八	九九・六

(苦小牧営林署資料より作成)

山線の

苦小牧に新工場設置を決めた王子製紙は、明治三十八年四月十五日、千歳川水利権の許可を得、同年四

敷設

月十日には御料局札幌支庁に対し「御料地使用願」を提出し、鈴木梅四郎専務自らが視察した千歳川の水力発電所建設に着手したのである。明治四十年五月、工事はまず千歳川の水路工事よりはじまった。これと同時に工事資材、人夫および食料品など物資搬入のため林道の整備が行われた。物資はこの林道を馬車に揺られながら運搬されていたが、工事が進むにつれ物資の量も多くなり、輸送能率のアップが急務となった。そこで、苦小牧駅西側に室蘭線とほぼ並行に馬車軌道が敷設されることになった。この工事は明治四十一年四月に完成し、この上を二トントロ馬車が進んだのである。しかし、さらに工事が進むにつれ必要物資は増加の一途をたどり、単線によるトロ馬車では輸送に限度があり、また馬借上賃金の増大もあつて機関車による輸送を図ることになった。

王子製紙株式会社

専務取締役 鈴木梅四郎

明治四十一年三月十七日申請ニ係ル膽振国勇拂郡苦小牧村苦小牧停車場附近ヨリ千歳郡烏柵舞村及苦小牧海岸ニ至ル専用鐵道敷設ノ件免許ス

明治四十一年六月十六日

通信大臣 子爵 堀田 正養

〔王子製紙社史―第二卷〕昭和三十二年 王子製紙株式会社

明治四十一年六月十六日、右記のとおり専用鐵道運輸が許可になり、同年八月十四日、米國製デンダー機関車は正式に動きはじめた。これが王子輕便鐵道、いわゆる山線であつた。⁽⁴⁾

千歳川第一発電所は明治四十三年九月に完成したが、この間、山線が輸送した人員は八、〇〇〇余人、輸送トン数六



山林中を行く王子山線（昭和10年）〔苫小牧市史編さん室蔵〕

万八、〇〇〇余トン、発電所側小運搬四万トン余という大量の輸送にあたり、無事その使命を果たした。

こうして敷設された山線は、単に発電所の資材、人員の運搬のみならず、山林事業、教育、文化、日常生活などに多大の貢献をした。山林事業一つをとってみても、明治四十三年にはじめて作成された御料林の施業案の中にもその一端をかい間見ることができる。

木材運搬は発電所建設用として敷設された通称王子山線軌道による外ないのでこれを買収するか、又は特別の条件で運搬契約を結ぶかが緊要であるとし、一方支笏湖は風波高き故に航行極めて危険なので、石油発動機船を数隻備える必要ありとし、更に交通の安全を期するが為め、湖畔の周囲及社台台上とシシャモナイを結ぶ経路を開くことが、支笏事業区の開発上必要の要件なるが如し

（『支笏事業区施業案説明書』明治四十五年 帝室林野局
苫小牧出張所）

この買収は実現しなかったが、当時の木材運搬上いかに重要な輸送機関であつたかを知ることができる。

当時はまだ丸山なる地名はなく、王子輕便鉄道の一三マイル駅が、後の丸山部落そのものであった。

クルミ材 木材で最初に商品価値を認められたものはドロノキ、エゾマツ、クルミであった。ドロノキはマツチと**銃床**の軸木に用いられ、当時苦小牧をはじめ各地に大小のマツチ軸木工場があり、明治時代を代表する木材産業であつた。また、エゾマツはマツチ小函素地に使用されたことは先に述べた。

クルミは、もっぱら鉄砲の銃床に使用され当時銃床を砲台といつて明治二十九年ころより由仁で買いうけており、クルミの木を見つけるとそれを切つて小遣錢にするのに町へ背負い出したといふ。^⑤

日露戦争の勃発にともない武器需要が急激に高まり、樽前御料林内のクルミ約一、〇〇〇尺メが払下げられた。

林木の払下げ 苦小牧進出を決意した王子製紙は、千歳川発電所工事と並行し、工場用地の買収、国有未開地の払下げ製紙用原料木材の払下げ等々の出願をしていた。千歳川流域を調査、視察した鈴木梅四郎は、樽前山麓の森林に高い評価をせずに帰途についたが、明治三十九年九月二十日、御料局札幌支庁に林木払下げを出願した。同月二十二日、契約は成立し、明治四十年より一〇年間毎年八万尺メの払下げを受けることになった。

立木売買契約書

(前文略)

第二条 前条売渡の期間は明治四十年より全四十九年迄拾ヶ年間とし、其材積は毎年八万尺メを目途とし払渡すものとす

(以下略)

明治三拾九年九月二十二日

売主 御料局札幌支庁長 理事 田町 与三郎

買主 専務取締役 鈴木 梅四郎

こうして樽前山麓の伐採に着手したが、実際に伐採をはじめてみると当初予想したより歩止まりが悪く、わずか一年でこの地域の伐採は中止されたのである。

吉小牧に工場敷地を選んだ最大の強味は支笏湖から流れ出る千歳川の水力発電にあるが、また一つは付近一帯の千歳御料林の鬱蒼たる密林から、製紙の原料を豊富に仰ぎ得ることであった。

しかるに一旦この御料林の伐採事業に着手してみると、案外に払下げを受ける原木が少なく、殊に風雪の烈しいためか、樹木がみな曲りくねり、枯枝も多く、製材して良材を得る歩止が少ない、しかもその搬出には二十哩程の鉄道敷設を要するが、果してその敷設費用を償うほどの原木を輸送出来るか否かが疑問である。その結果、第一回の三万尺締の払下げを受けたのみで、この方面の山林は伐採を中止した。

(『王子製紙社史—第二巻』昭和三十二年 王子製紙株式会社)

(二) 第二期 大正時代

丸山宿泊 山線敷設以来、その沿線には有人、無人の駅が設置された。丸山は当時の一三マイル駅であったこと所の完成 は先に述べたが、御料林造林飯場は一二マイルにあった。また、一二マイルには他に王子発電所関係および保線関係の宿舎が各二軒ほどあった。一方、丸山(二三マイル)には中村組の飯場、事務所、造林小屋などが立ち並び集落を形成しつつあった。やがて、大正末期には御料林の宿泊所(主任小屋)が丸山(二三マイル)に移転し、今日の丸山部落の基礎が確立した。新設された宿泊所は、当時としては珍しいタタミ敷きの立派な小屋で、吉小牧より毎日通って来る主任のほかに、視察に訪れた客人にも利用されていた。

林間苗畑の開 明治時代および大正初期の植林は『山引苗』を使用していたが、大正六年からは『養成苗』をと
 設と作業内容 り入れるようになった。大正十三年、エゾマツの養苗に成功した丸山地区で、巾二五メートル、長
 さ五〇メートルの帯状に林間苗畑を開設した。これが苦小牧営林署管内で最も古い歴史をもつ丸山苗畑で、多い時期
 には五〇余カ所も林間に点在した。こうして養成された苗木は丸山地区のみならず、各地に運ばれ植林されていた。
 明治期の植林は大半が丸山地区内であったが、大正期は丸山地区の植林面積は激減し、全体の二六・九パーセント程
 度になった。

大正年間の植栽面積一覽表

年 度	エゾマツ	トドマツ	ドロノキ	計	丸山担当区内	比 率 %
大正 二年	二五・二五			二五・二五	一八・七〇	七四・一
三年	一八・一〇			一八・一〇	一八・一〇	一〇〇・〇
四年	三・七一			三・七一	三・七一	一〇〇・〇
五年	三・二八			三・二八	一六・二六	一〇〇・〇
六年	一七・〇二		一二・九〇	二九・九二	四〇・五二	五四・三
七年	四〇・五二		七・八七	四八・三九	一三・三三	二六・八
八年	四四・五四		五・二二	四九・七六	三七・五七	二・五
九年	一四七・六二		四・三八	一五二・〇〇	四四・五三	七・七
一〇年	六二・一〇			六二・一〇		
一一年	五八・〇五	二・九九		六一・〇四		
一二年	五〇・五七	〇・七一		五一・二八		
一三年	五〇・九七	〇・九二		五一・八九	五・六七	一・一
一四年	六三・五九	二一・六七		八五・二六		
一五年	九五・七〇	一〇・九九		一〇六・六九		
計	六八一・〇二	三七・二八	三〇・三七	七四八・六七	二〇一・六七	二六・九

(苦小牧営林署資料より作製)



丸山苗畑の作業風景（昭和13年）

〔金田一氏蔵〕

苗畑の作業員は、丸山地区の婦人をはじめ、大正十一年四月から一般乗客も乗車を許可された山線を利用して入山した人々であった。こうして開設された林間苗畑も集中機械化、台風被害による林相破壊などにより昭和三十五年を最後に、実に三十七年間におよぶ歴史に終止符が打たれたのである。

当時の森林事業は苦小牧分担区により実施されていた。事業の内容は斫伐、造林、土木と幅がひろく、山線を利用して入山した作業員は三三マイル（丸山）に根拠地をおき、主に山泊形態をとっていた。建物は丸太で組立て、屋根はカヤ、笹などを使用して建てられたが、奥地で仕事をするときには建物は造らず、野営することもしばしばあった。一日の仕事はじめは、朝六時に出発し、終了が五時であった。大正四年ころは米一俵が四円八〇銭、作業員の賃金は一日七〇銭、新米で四五銭程度であった。⁽⁶⁾こうして一定期間山中で作業、生活した作業員は、再び山線を利用して

苦小牧へ戻っていったのである。

烏柵舞地区の

丸山地区と隣接する烏柵舞地区は、王子第四発電所より支笏湖畔にいたる千歳村の約半分を占

苦小牧編入問題

める広大な地域である。当時烏柵舞村の住民は王子製紙発電所で働く者が大半で、衛生、教育、

郵便、交通などのもろの面において苦小牧町の恩恵を受けており、反面千歳村は税金をとるだけでなんの施策もしてくれないといった不満があったようである。こうした不満は、大正八年二月、同地区住民より時の北海道庁長官俵孫一

に同地区の苫小牧編入に関する請願書の提出という形で表面化した。

行政区劃変更ノ義ニ付請願

本部落ハ千歳郡千歳村ノ南端ニ位シ、王子製紙株式会社苫小牧分社ノ附属発電所々在地ニシテ、苫小牧町ヨリ車道通シアルノミナラス、輕便鐵道ノ便モアリ、且警察及郵便等ノ区域ハ總テ苫小牧町ニ屬シ、常ニ円満ナル施政ヲ受ケ居リ候、然ルニ独リ町村役場ノミハ我等部落民カ未タ嘗テ見タルコトナキ深山幽谷、而モ岐嶇タル山道ヲ隔リタル千歳村ノ管轄ナリト云フハ、一輪ヲ失シタル車ノ如ク不具的行政区劃ニシテ、我等部落民ノ不幸甚タシク、衛生教育ハ申スニ及ハス、其他ニ於テモ更ニ施ス所一モナク住民タルノ故ヲ以テ税金ヲ賦課セラルルノミニシテ、殆ント地方自治機關ノ設備ナキカ如シ、不得止交通至便ナル苫小牧町ノ恩恵ニ依リ、同町住民カ一時的出張居住シ居ルカ如キ体ニシテ、町医ノ派遣或ハ出生死亡等ヨリ兵事關係ニ至ルマテ、一二苫小牧町ニ於テ用ヲ弁シ居ル次第ニ有之候、故ニ若シ一朝同町ニシテ他管轄ノ故ヲ以テ是等ノ取扱ヲ拒ム事アランカ、我等部落民ハ暗夜ニ燈火ヲ失シタルカ如ク一日モ安スル不能次第ニ御座候間、何卒御憫察ノ上特別ノ御詮議ヲ以テ、特急苫小牧町管轄ニ変更ノ御詮議ヲ仰キ度、部落民一同連署ヲ以テ此段及請願候也

大正八年二月十八日

細川 キク

外三十七名連名

北海道長官 俵 孫一殿

(『千歳市史』 昭和四十六年 千歳市)

この請願書の提出に驚いた千歳村は、急きよ村会を開き反対陳情書を提出することになった。千歳村にとって烏柵舞地区を失うことは、村半分を失うことのみならず、王子発電所の税金(歳入総額の三分の一以上)をも失うことになり、こ

れを失つた場合、村の財政が窮地に陥ることは明確であつた。

行政区劃變更反對陳情書

千歳郡千歳村字烏柵舞村住民細川キク外三十七名ノ請願ニ係ル、行政区劃變更即チ前記烏柵舞村ヲ勇払郡苫小牧町ノ管轄ニ移サムトスルハ、地勢上行政区劃設定ノ原則ヲ蹂躪シ、地方自治体ノ基礎ヲ破壊スルノ行動タルハ、同地方ノ実狀ニ通曉スルモノノ疑ハサル処ナリト信ス、玆ニ情ヲ具シ反對ノ意見ヲ開陳セムトス。

我カ千歳村ハ東北ハ長都沼ヨリ馬追沼ヲ經テ馬追山脈ヲ東西ニ中斷セル一線ヲ以テ石狩トノ国境ヲ為シタ張郡長沼村及同郡由仁村ニ接シ東南ハ安平山脈ノ分水線ヲ以テ勇払郡安平村ト背触シ南方即チ本件ノ烏柵舞村ハ樽前嶽ノ分水嶺ヲ以テ勇払郡苫小牧町及白老郡白老村ト背接シ北走シテ安平山脈ニ連リ西ハ白老嶽ノ分水線ヲ以テ有珠郡徳舜別村ニ隣リ又漁嶽ノ嶽ニ至ル線ヲ以テ札幌郡豊平町ノ一部及本郡恵庭村ト接比シ四方天然ノ地形ヲ相シテ行政区域ヲ劃定セラレタルノニシテ若シ彼等ノ請願ニシテ容レラレムカ畸形的不自然ナル郡ノ境界トナルノミナラス実ニ次ノ如キ自治団体ヲ構成スルト共ニ其不便亦次ノ如キモノアリ

千歳村ハ周圍五十里東西最長二十二里南北最長四里面積三十九方里ノ細長キ地区ニシテ苫小牧町亦三十七方里二分ノ地域ヲ有シ而シテ變更セントスル烏柵舞村ハ広袤二十方里ナルヲ以テ請願ニシテ採択セラレムカ結局千歳村ハ十九方里苫小牧町五十七方里二分ノ茫大ナル行政区域ト為リ烏柵舞村住民ハ管轄役場及物資ノ集散地タル苫小牧町市街ニ至ルニ分水嶺ヲ越ヘ近キモ七里遠キハ十三里余ノ行程アリ夏季王子製紙株式會社經營ノ輕便鐵道ヲ利用セハ交通取テ困難ナラストスルモ半歲雪ニ没シ其利用ヲ欠キ住民ノ不便堪ユル処ナランヤ況ンヤ該輕鉄ハ會社ノ私設ニシテ公的ニ一般使用ヲ許ササルモノタリ現在該會社ニ關係ナキ住民僅カニ六七戸ニ過キサラム将来御料林ノ解放ヲ見ンカ相当住民ノ増加ハ勿論ニシテ土地瘠薄ナリト雖トモ二十方里ノ地積将来造林牧畜等ノ事業ヲ經營スルモノアルニ至ルヤ明カナリトス

烏柵舞村部落ノ千歳市街（村役場郵便局村医電信電話アリ）ニ至ル現在ノ交通狀態ヲ示セハ市街ヨリ二里ノ間ハ四季人馬ノ通スル完

全ナル里道開鑿シアリ僅カ六百間ノ歩道ヲ以テ輕鉄ニ聯絡シ冬季輕鉄ヲ利用セサルトモ現住民トノ距離近キハ二里遠キモ七里ヲ出テス苦小牧町ニ至ルニ比シ其便否霄壤ノ差アリト云フヘシ

現在烏柵舞村住民ノ大部ハ王子製紙株式會社苦小牧分社所屬發電所在勤ノ社員及職工ナルヲ以テ其關係上ヨリ推セハ彼等ハ職業上又ハ生活上諸般ノ点ニ於テ苦小牧町ノ管轄ヲ受ケムトスルノ希望ハ一理ナキニアラサルモ該地方ハ將來永久王子製紙株式會社ノ企業地ナリト限ラレタルモノニアラス森林ニ鉦産ニ水力ニ未タ幾多遺棄セラレアル富源アルヲ見レハ慥ニ我烏柵舞村ハ前途アル拓殖ノ未製品ナリト云フヲ得ヘシ然ルニ彼等ハ單ニ目前ニ於ケル自己本位ノ主張ヲ為シ毫モ將來ニ思フ致サス公共団体組織上ノ諒解モナク一時の性質ノ施設タル警察及郵便受持区域ト同一視シ這般ノ變更ヲ請願スルカ如キ無定見ナル其意志寧ろ憐ムヘキモノアリ

請願者ハ千歳村ノ教育衛生交通上ノ施設不充ナルニ藉口シ村当然ノ義務タル教育衛生等ノ施設ヲ欠クト言フカ如キハ是レ本村ヲ誣フル常識ナキ無責任ノ放言ニ外ナラストスルモ此処ニ弁蒙スルノ必要アリ教育ニ付述フレハ發電所創始後本村ハ直ニ特別教授場四季ヲ通セルモノヲ設立繼續大正六年ニ至リシカ王子製紙株式會社ハ完全ナル教育ヲ施サムトノ見地ヨリ自ラ進ムテ私立尋常小学校ヲ設立シ今ヤ校舍校具其ノ他ノ設備殆ント完全ニ近キ施設ヲ為シ教員亦其人ヲ得地方稀ニ見ル教育ヲ授ケツアルヲ以テ此点ニ付不足ヲ訴フルハ無理ナリト云フヘシ附言ス本村ハ會社ヲシテ斯ク多大ノ資ヲ投シ本村当然ノ義務タル義務教育ヲ授ケシムルヲ氣ノ毒ニ感シ過般之レヲ公立ニ資格變更セムト全會一致ヲ以テ可決シ直ニ會社ニ其ノ意ヲ致シタリ然ルニ會社ハ尚一步ヲ進メ理想的の完全ノ組織ト為ス計画ナルノ故ヲ以テ是レヲ峻拒セラル本村亦國民教育上深く厚意ヲ諒トセリ

衛生上ノ施設ニ付テハ從來定期種痘春秋二季ノ清潔法トラホーム検診等ヲ施行スルノ外何等見ルヘキモノナシト雖トモ是レ獨リ烏柵舞村部落ニ限り然ルニアラス村財政ノ關係上一般の漸次改善ヲ為サントスルニアリ而シテ來ル大正九年度ヨリ同部落ニ村医ヲ置クノ計画中ナリ

交通機關ニ付テハ前述ノ如ク不完全ナリト云フハ僅カニ六百間ニシテ該區間ハ御料地内ナルヲ以テ是マ道路開鑿手續上ノ為メ遷延今日ニ至レルモ大正九年度ニ於テ必ラス是レカ開鑿ヲ決行セムトス以上ノ如ク本村ハ各村落ニ對シ殊更ニ偏倚の施設ヲ為スモノニアラス要ハ村財政上ヨリ覈査シ漸ヲ追フテ各種事業ノ施設改善ヲ企圖スルモノナリ

従来本村ハ交通機関ノ不備ヨリ一般拓殖ノ進度後レ去ル大正四年漸ク二級町村制ノ施行ヲ見ルニ至リ現在三十九方里ノ広袤ヲ有シナカラ戸数僅カニ八百人口五千ニ足ラス土質全村火山灰ニシテ随テ農産豊カナラス唯一ノ林産ノ資源近ク尽キムトス然ルニ区域広濶ナル為メ小学校ノ設備道路改修ノ経費嵩ミ現在経常費三万円ニ近シ民力ニ比シ其負担重シト云フヘシ幸ニ村ノ中央ヲ貫通スル千歳川ハ其水量落差等ヨリ考查スルニ流域五里ノ間ニ於テ優ニ三万五千馬力ノ電力ヲ起スニ足ル目下王子製紙株式会社ハ本川ヲ利用シ電気事業ヲ経営シ諸工業ニ電燈ニ約三万馬力ノ動力ヲ供給シツツアリ是レ天与ノ国家富源タルト同時ニ本村ノ一大資源ト云フヲ得ヘシ左レハ是等営業者ノ利益ニ対スル本村公課収入額ハ歳入總額ノ約三分ノ一ヲ超ユ為メニ有無相通シ辛フシテ村財政ノ調節ヲ為スヲ得一朝烏柵舞村ニシテ本村管劃ヲ脱センカ此ノ資源ヲ失フノミナラス又前述ノ企業地帯ヲモ失フニ至リ人口稀薄加フルニ生産力ノ乏シキ本村住民ハ三万ノ歳計ヲ支持スル負担能力ノ堪ユル処ニアラス是レ明カニ本村財政ノ調和ヲ紊シ延テ自治体ノ基礎ヲ破壊スルモノニシテ本村存立上到底忍フ能ハサル所ナリトス

右理由ニ付細川キク外三十七名ノ行政区劃変更請願ハ御採択無之様致度本村会ノ諮問ヲ經此段及陳情候也

大正八年十一月二十七日

千歳郡千歳村会議長

千歳村長 後藤 弥次郎

北海道庁長官 笠井 信一殿

(千歳市史) 昭和四十六年度 千歳市

このように千歳村の必死の反対陳情により本件は落着したかにみえたが、大正十年、この問題が再燃した。千歳村は反対陳情書の中に、大正九年中に村医を置く計画と道路の整備を約束したが、実際にはこれが実現しなかったことに不信感をいだいた烏柵舞村民が、約束不履行をたてに再起したのである。こうして、この問題は泥沼化の兆しを呈

したが、支庁長の仲裁により結末を迎えた。

この出来事は直接丸山部落に関係はないが、子供を烏柵舞部落と同じ学校に通わせ、地理的にも近い丸山部落にとってなんらかの話題になったことであろう。

(三) 第三期 昭和初期（昭和元年～同二十年）

丸山遠見

昭和十七年、当時御料林担当主任であつた金田一技官は山火事の見張小屋建設を計画し、四方の林海の建設を見渡せる丸山山頂をその建設予定地に定めた。計画はただちに実行に移され、樹林の伐採、林道の整備を進め、建設資材は丸山担当区に配備されていたトラックにより運び上げられた。建築は、当時御料林に入入っていた大工宇夫俊吾により行われ、棟上げには御料林関係者全員が動員され、同年秋に完成した。完成した丸山遠見は見張りには致命的な死角を無くするため八角形に設計された二階建ての立派な小屋であつた。

建設当時は山火事の見張りを唯一の目的としていたが、戦時体制中は防空監視所も兼ねることになった。やがて終戦を迎え、小屋の使命は再び本来の目的に戻つたが、老朽化が進み、昭和三十二年、再建され今日の小屋になった。

エゾマツ

戦時体制下の昭和十六～二十年にかけて、旭川の単寧工場より委託された業者が丸山地域に入り込んと単寧でいた。単寧は鞆皮に使用するもので、本来カシワの皮より採取していたが、カシワの減少により目をつけられたのが同地域に豊富に繁茂するエゾマツであつた。

そもそも苫小牧、千歳周辺地域における単寧採取の歴史は古く、明治三十六年、東京の桜組株式会社が早来に製渋所を設置したのが最初であつた。同製渋所は約一〇年間にわたり千歳郡ママチ国有林未開地内および同馬追官林内、また勇払郡安平村、厚真村周辺の山林からカシワ皮を集め、大部分は早来で製造し、一部は皮のまま輸送していた。明治

種類	数量	価格
鉄道枕木	一四四、〇〇〇挺	五〇、四〇〇円
角材	一二〇、〇〇〇石	七二、〇〇〇
丸太材	一七〇、〇〇〇本	一二九、〇〇〇
かしわ皮	八九二、〇〇〇貫	二二、三〇〇
木炭	三八八、〇〇〇貫	一五、五二〇
薪	八〇敷	七二
計	一	二七九、二九二

『早来町史』 昭和四十八年 早来町

職人を呼び寄せることになった。御料林側としても、立木のまま皮を取れるものなら、山子に払う賃金は若干安くなり、反対に皮の売上金が入るとあって決して損な話ではなかった。しかし、枝の多いエゾマツはスギのようにはいかず、結局一度試みただけで従来どおりの作業が続けられたのである。当時同地域で働いていた女性は、烏柵舞、丸山（二三マイル）、苫小牧などから集まった主婦が主で、同地区に飯場を建て作業をしていたという。

土場の出 昭和十五年からはじまった御料林の直営生産官行所伐にともない事務所の設置が急務となり、同年夏**現と山子** はじめて丸山事務所が新設された。直営生産とは従来の林木払下げ方法とは異なり、御料林側が伐採して用途別に払下げる方法であった。

しかし、実際に伐採にあたったのは各地から集められた山子であった。山子は伐採用具一式を持ち、各地の山を渡

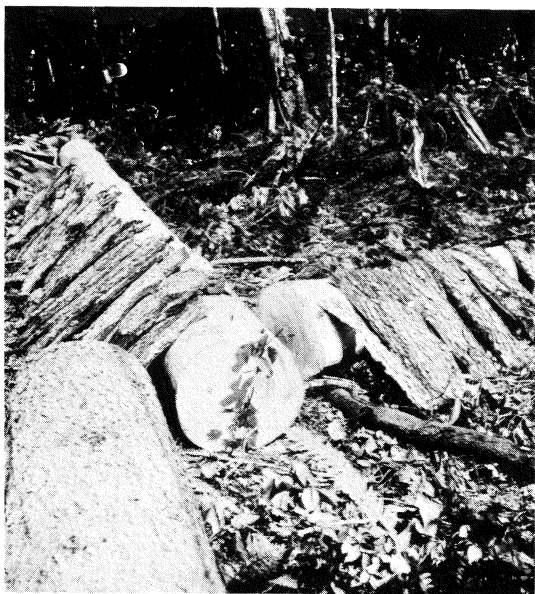
三十六年、早来駅取扱の林産物の輸出高は上表のとおりで、かなりの量のカシワ皮が取扱われていたことを物語っている。^(7,8)

エゾマツはカシワに比べ歩止まりが悪かったが、背に腹は変えられない当時の事情もあり、作業指揮者以下七～八名程度の女性作業員が働いていた。作業は、山子が切り倒したエゾマツの皮を女性作業員がむき、樹皮の表面を日光に当て（裏面に日光を当てると単寧が採取できない）乾燥させ、梱包して旭川に送っていた。

しかし、この方法だと一日の作業量が山子まかせになるくらいであった。そこで、作業能率のアップを図るため立木のまま皮を取る構想が持ち上がり、昭和十六年ころ、秋田からスギの皮むき

り歩いており、丸山地区には約二〇名ほどの山子が入山して伐採にあたっていた。山子の作業は、樹木を切り倒して小枝を払い、樹皮に切れ目（後で皮をむき易くするため）をいれ、切り口に自分の記号（初音など適当に書いていた）を書き込むくり返しであった。検尺夫は切り口に書かれた記号で一日当たりの個人別作業量を集計し、賃金を払っていた。このころで、一日平均約五円程度が山子の稼ぎ高であった。山子が切り倒した丸太を馬に引かせて一カ所に集め補導車（古タイヤを二本使用）で山線近くの土場へ運び出していた。馬は約一〇頭ほど使われており、賃金は一日一〇円（馬と持主）程度で、馬の飼料は持主負担であった。

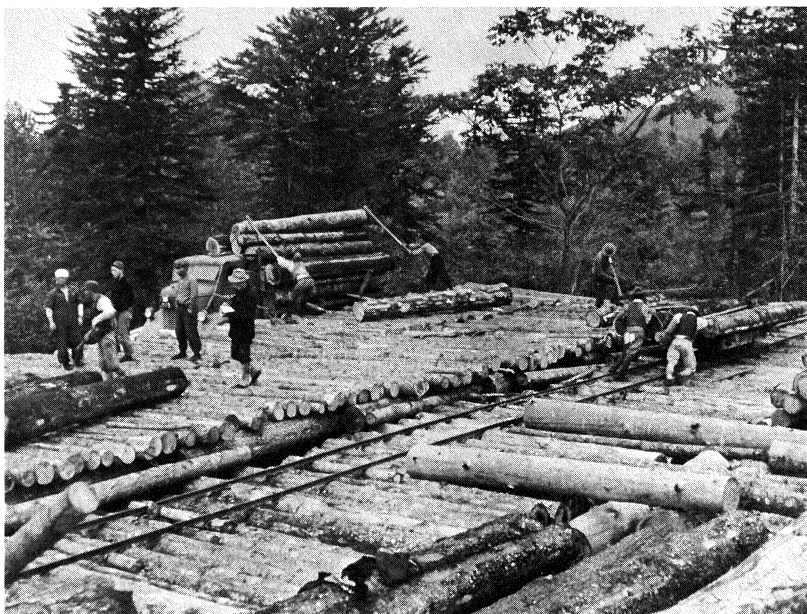
付編 部落史・丸山



単寧採取のため乾かされたエゾマツの皮
(昭和16年)〔金田一氏蔵〕



秋田杉皮むき職人によるエゾマツ皮むき風景
(昭和16年)〔金田一氏蔵〕



丸山土場作業風景（昭和16年）〔金田一氏蔵〕



木炭トラックによる丸太運搬風景（昭和16年）〔金田一氏蔵〕

こうして、山線沿線にはかつてない大規模な土場が出現した。土場に集められた丸太は、人夫により山線に積まれ苦小牧へ運ばれていた。一方、昭和十五年九月、道内の御料林ではじめてトラック二台が配車になり、これも丸太運搬に活用されていた。人夫の賃金は、トビ使いで一日二円五〇銭、雑役夫で一日一円五〇銭程度であった。⁽⁹⁾

丸山部落

苦小牧の字名および地番は昭和三年設定した一五町名と七大字名により区割され、大字名はさらに七〇の誕生の字名に分割され、その多くはアイヌ語をそのまま使用したため読みずらく、また字の境界もあいまいであった。こうした不便を改正するべく、昭和十七年十二月十二日、八巻耕三町長は坂千秋道庁長官に対し、字および地番改正に関する申請を行った。この申請は認可され、昭和十八年五月二十二日、胆振支支庁名をもって実施要領が入った。

字名改称にあたっては、字名改称地番整理官民協議会を開催し、この場で十分な意見交換がなされ、この協議会で決定したものは町会に諮問し答申を得て道庁長官に上申された。

字名改称地番整理官民協議会においては色々な名称が出され、丸山は『大森、大林』といったいかにも山奥の部落らしい名称も出されたが、結局『丸山』に決定した。こうして苦小牧の字名地番は昭和十八年十二月二十五日、道庁告示となり、翌十九年一月一日から実施された。明治以来長い間使用されてきた『一三マイル』という地名は廃止され新たに『丸山』が正式な部落名となった。

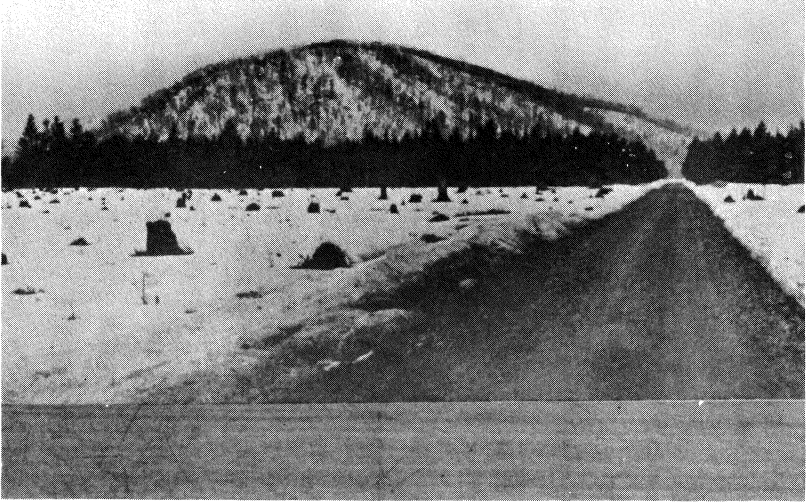
丸山部落の字界、起源などは次のとおりである。

字界

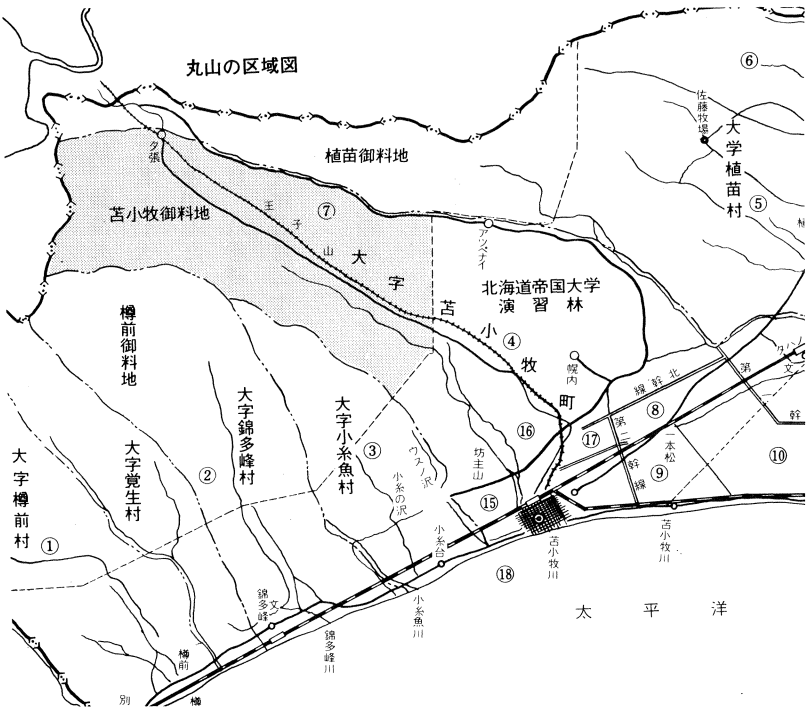
東南ハ字高丘、字植苗、字美澤ニ界シ西南ハ字糸井及字錦岡西ハ白老村ニ接シ北千歳町ニ接スル地域

起源又ハ語源

付編 部落史・丸山



部落名となつた丸山（昭和50年）〔苦小牧営林署造林のあゆみより〕



本字ノ北西ニ丸山ト稱スル標高三二七米四ノ山アリテ樽前ノ裾野ニ異彩ヲ添フル所ヨリ名付ク

(『苦小牧町名改称地番整理ニ関スル一件書類』 昭和十八年 苦小牧町)

(四) 第四期 昭和後期 (昭和二十一年～現代)

御料林

昭和二十二年四月、宮内省の廃止にともない御料林は農林省所管国有林となり、帝室林野局札幌支所苦の廃止 小牧出張所は札幌宮林局が新設されるとその所管となり、同年十月には旧御料林、内務省所管国有林を整理統合し苦小牧宮林署となり、三万一、一〇〇ヘクタールを管轄することになった。こうして、明治二十三年以来半世紀以上におよぶ御料林時代は終わりをつけた。

樺太引揚

昭和二十二年四月より九月にかけて樺太引揚者約四〇世帯が仕事を求めて丸山部落に入居した。入居者の転入 者は、夏期間は宮林署の人夫、作業員として働き、冬は失業保険を受けて生活をしていたが、一部は冬期間出稼ぎに出かけていた。こうして二～三年ほど丸山で過ごしたのち、苦小牧市内の引揚者住宅へ移っていった。

苗畑作業と

昭和二十八～三十年ころ、職業安定所を通じて丸山苗畑作業員として新潟県より女性約三〇名、青出稼労働者 森、秋田県からは男性の出稼ぎ労働者が入った。これまでの苗畑作業員は、丸山部落の婦人および近隣地域の婦人が主であったが、地元から作業員を集めると休む日が多く作業能率が上がらないため、内地労働者を受け入れたようである。

新潟県から来た女性労働者は、引率者兼保護者的役目をする年長者以外は大半が若い娘で、宮林署の寮で全員自炊生活をしていた。毎年四月ころ入山して十月ころまで働き、十一月にはいつから郷里へ帰っていた。作業内容は、苗の植替え、除草剤の散布、ネズミ駆除などを行い、大切な苗を守っていたのである。こうして毎年丸山部落を訪れ



新潟から女性苗畑作業員（昭和28年）〔飯田節子氏蔵〕

る間にロマンズが芽ばえ、結婚して定住した者もあった。

台風 昭和二十九年九月、北海道を襲った台風一五号によ

一五号 り樽前山麓の美林はなぎ倒された。その被害面積は

四、五〇〇ヘクタールにおよび、風倒木は一〇〇万立方メートル

（四〇〇万石）という膨大な数にのぼった。この結果天然林の三分

の一を失い蓄積は二一〇万立方メートル（約七六〇万石）に激減し

残された天然林はアツペナイ地区、丸山、水明地区、勇払川、苦

小牧川など河川の上流沿いに残るのみとなつてしまつた。⁽¹²⁾

一夜にして生じた膨大な量の風倒木処理は、三十二年までの四

年間にわたり行われ、そのうち約八〇万石の風倒木が苦小牧の貯

木場に集積された。この間丸山部落をはじめ口無沼付近には多く

の業者が入り風倒木の処理にあたつていた。特に口無沼付近には

飯場、蹄鉄屋、かじ屋などが立ち並び、今日の同所からは想像だに

できないにぎわいようであつた。丸山部落が栄えたのはこれより

少し後、台風被害地跡の復旧造林のため大勢の入居者があつた三

十一年から三十五年ころであつた。復旧造林は三十一年に着手さ

れ、カラマツを主体に大造林が行われ、五年後の三十五年に終わつ

た。この間の造林面積は、年平均六五〇ヘクタール、最終年の三



根こそぎ倒されたエンゾマツ（昭和29年）

〔苫小牧営林署造林のあゆみより〕

十五年は七八〇ヘクタールという年間最大の記録を残した。

こうして、台風一五号の被害の結果丸山周辺をはじめとした樽前山麓は、他に例を見ない広大な造林地を残すことになった。また、今日林内を縦横に走る多くの林道は、この風倒木整理と大造林が残したものである。

山 線

発電所工事資材の運搬を目的に明治四十一

の廃止、年、運転を開始した王子軽便鉄道は、当初の目的以外に原木の輸送、新聞、郵便など部落民の生活物資の輸送をはじめ、住民の足として衛生・医療・教育などもろの面に貢献した。丸山部落民および支笏湖畔部落民にとって、その存在は必要欠くことのできない苫小牧と部落を結ぶ動脈であった。こうした軽便鉄道も大正十一年四月から一般乗客の乗車が許可されると、苫小牧の住民にも利用されるようになった。これまでごく一部のみにのみその姿を見せていた支笏湖は、観光地として次第に苫小牧住民にも知れわたり、「人命の危険は保証せず」と書かれた乗車券を手に支笏湖へ出かけるようになった。

戦後、観光ブームが押し寄せると各地に観光道路が施設され、苫小牧・支笏湖間にも昭和二十三年四月に自動車道路計画がたてられ、人夫のみで施工すれば一日一五〇人使っても二〇カ月はたつぷり要する大工事であったが、アメリカ



支笏湖観光道路と旧山線軌道跡（昭和30年）
〔苫小牧市史編さん室蔵〕

カ軍貸与の機械力により実施したため正味二二〇日で完成、工事費も一般土木費で行えば一、九〇〇万円を要するものが、わずか八三〇万円で昭和二十五年八月二十四日に完工、二十五日から市営バスの運行が開始され、今まで苫小牧・支笏湖間一時間四〇分かかっていたものがわずか四五分で結ばれることになった。⁽¹³⁾

これにともないトラック輸送の便もよくなり、王子製紙も軽便鉄道に係わる従業員約八〇余名の人件費節減を計り自ら専用バスを運行することになった。こうして『山線』という愛称で親しまれた軽便鉄道は多くの使命を果たし、昭和二十六年八月をもって廃止されることになり、創業以来四十三年間の歴史に終わりをつけたのである。⁽¹⁴⁾

植樹祭 昭和三十六年五月二十四日、国土緑化推進委員会

の開催 および北海道主催の第一二回全国植樹祭が、天皇、皇后両陛下をお迎えしてモーターラップで開催された。

植樹祭は、両陛下の到着を待って午前一一時三〇分から行われ、中央招待者約一、〇〇〇名、道内招待者約六、七五〇名、その他の参加者約一万名の手によってアカエゾマツ約三万六、

〇〇〇本が植えられた。この植樹祭で植えられたアカエゾマツは、丸山苗畑で大切に育てられた五・六年生の苗が使用され、当日は丸山担当区員総出で植樹祭の裏方をつとめたのである。

今日の　こうして木と生活を共にしてきた丸山部落は、今日では戸数も二〇数戸程度に減少し、その大半が営丸山部落　林署の職員および作業員で、苫小牧市近郊の部落としては最も小規模なものである。しかし、交通機関の発達、道路条件の改良などにより丸山はもう「山奥の部落」ではなくなり、人々の生活もうるおいのあるものになっている。むしろ都会人にとつてその環境はうらやましくもあり、春から秋にかけて山菜採り、キノコ採りなどに出かける市民が年ごとに増加しているのもこれを物語るものであろう。

四　教育・文化

丸山小学　明治四十三年、王子製紙千歳第一発電所が完成し、そこで働く労働者の子弟のために同製紙所有の小学校の沿革　屋を借りうけて、千歳村烏柵舞特別教授場を設置したのが大正六年十月であった。王子製紙としては、山奥の発電所に優秀な技術者を赴任させるには教育の充実が必要条件であると痛感し、大正六年十二月、私立王子尋常小学校を設置し、特別教授場を廃止した。さらに、大正十二年四月、千歳小学校に次いで高等科を併置し、王子尋常高等小学校と改名したのである。このことから、王子製紙がいかに学校教育に力を入れていたかをうかがい知ることができる。昭和六年、学校の管理は千歳村に移り、公立烏柵舞尋常高等小学校となった。千歳村にとつては烏柵舞村の苫小牧町編入問題の際、同校の管理を同村に移すべく申告したが、一〇数年目にして実現できたのである。当時、丸山地区、支笏湖畔地区の子弟は山線を利用してこの学校に通学していた。しかし、冬期間は積雪のためしばしば汽車が不通になり、徒歩で通学しなければならなかった。こうした冬期間の障害を克服するため、昭和十六年



丸山分校に使用された営林署車庫（昭和50年）〔神田正五蔵〕



丸山小学校（昭和50年）〔神田正五蔵〕

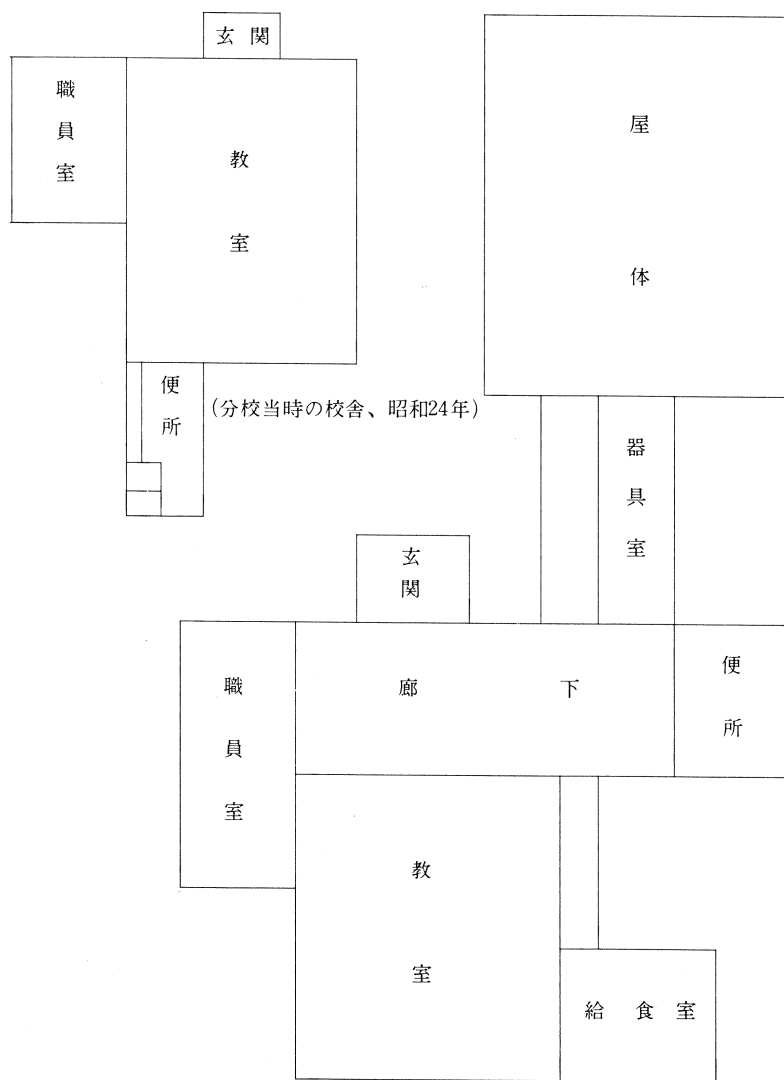
ころ丸山、支笏湖畔両地区の住民が話し合い、分岐点付近に小学校を建設する動きが現れた。だが、行政区割上の問題で実現が不可能となり、いつしか話は消えていった。

支笏湖畔地区の住民はかねてより湖畔に小学校を建てるよう千歳町に陳情する一方、小学校が建設されたあかつきには同校に生徒を転校させて丸山部落民も協力してほし

い旨申し出ていた。しかし、丸山部落民とすれば、長年世話になった王子（烏柵舞）小学校への恩義もあり、これには賛成しかねたのである。

やがて支笏湖畔地区の住民は、昭和二十二年、千歳町の認可を待たず強引に分教場を設置し、翌二十三年十二月、支笏

丸山小学校見取図



湖小学校は正式に認可をうけ創立した。

一方、これに刺激された丸山地区は、荒木元吉、芦名喜造、浦田孝一等の部落民代表、丸山事業所主任勝毛忠男および苦小牧営林署々長西東英雄などの努力により丸山事業所の車庫の使用許可をうけることができた。この許可を持参して苦小牧町教育課へ請願した結果、車庫を改造した三三坪の校舎で、昭和二十四年二月十八日、苦小牧東小学校丸山分校として開校した。こうして開校した丸山小学校は、昭和二十六年四月一日付をもって東小学校から分離独立し、苦小牧市立丸山小学校となったのである。

丸山

大正十二年、関東一円を襲った大震災、この復興には大量の木材を必要とした。樽前御料林（二ニマイル付

神社

近）から震災の復興材が切り出されることになり、南部地方から入山した山子が作業の安全を祈願して丸

山中腹に安置したのが丸山神社であった。その後、山林事業の根拠地は一三マイル（丸山）に移ったが、丸山神社が現在の場所に移ったのはかなりあとのことであった。御料林の直営生産がはじまった昭和十五年、作業の安全を祈願するのに神社が遠いのは不便なため、神社移転が部落会で決まり、これを解体して現在の場所に建立したのは昭和十六年であった。この翌年、木材の運搬などに使用されていた馬と部落の安全を祈り、愛馬報恩碑が建立された。この碑は、当初馬頭観世音碑として建立する計画であったが、戦時色を強調するため急きょ変更になったといういきさつがある。碑に使われた岩は、広島地方から運ばれてきたものである。

こうして移転された丸山神社は今日ではすっかり部落にとけ込み、初詣、祭りなどにはかならず訪れるのである。

御神体は、イチイ（オンコ）の切り株である。

松葉会

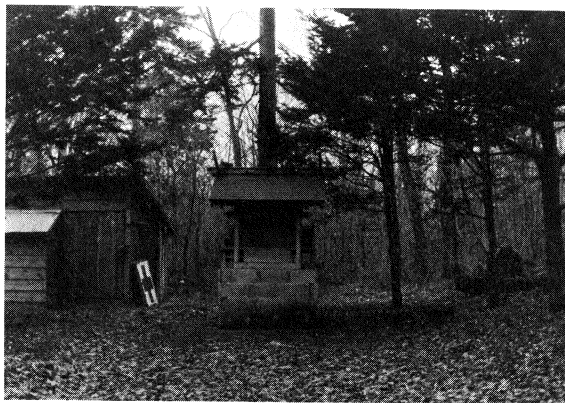
終戦直後の荒廃した時代に山奥の丸山部落でも若者たちの活動が芽ぶいた。営林署、王子製紙等の若者

の結成

が集まり結成された松葉会は、娯楽施設の全くない同部落にとって最大の楽しみの一つであった。活動内容

水道の 丸山部落は水に恵まれており、長い間部落内を流れる勇振川を飲料水に用いていた。しかし、終戦後部
敷設 落の人口が増加するにつれ河川の汚れが著しくなり、衛生上水道施設の完備が望まれるようになった。当
時部落会長および民生委員をしていた荒木元吉は、特にその重要性を痛感し、再三にわたり苦小牧市に請願する一方

五 衛生・医療



丸山神社（昭和50年）〔神田正五蔵〕



愛馬報恩碑（昭和17年）〔金田一氏蔵〕

は、楽団を組織して学芸会、運動会、祭りなどで演奏する一方、学校行事の手伝いなどを行っていた。

丸山の 丸山部落のお祭りは、例
お祭り 年九月十二日ころ行われていた。お祭りには、神社へ続く参道沿いに豆電球が飾られ、一六ミリ映画なども行われたこともあり、部落特有のなごやかなお祭り風景であった。数年前からお祭りの日取りが変わり、小学校の運動会に合わせて六月初旬ころ行われるようになった。



松葉会楽団（昭和21年）

〔飯田節子氏蔵〕

営林署にもその必要性を進言しつづけた。その結果、昭和三十一年ころ苦小牧市より五〇万円、営林署より三〇万円の工事資金の引出しに成功し、待望の簡易水道が敷設された。

医療

機関

王子製紙は千歳発電所に診療所を設置し、鈴木定一が医師として赴任していた。丸山部落には全く医療機関がなく同部落をはじめ支笏湖畔部落民はすべてこの診療所で診察をうけていた。同診療所は山線を利用して往診もしていたが、冬期間山線が不通になった場合は馬ソリに患者を乗せ運ばなければならなかった。しかし、この診療所はあくまでも応急手当をする程度のもので、重病人、手術を必要とする患者は苦小牧へ出て診療をうけていた。

出産は、大半が苦小牧の産院等を利用していたが、烏柵舞の産婆に取上げられた子供も多かった。

注 (1) 『支笏湖と国有林』 昭和四十一年 札幌営林局 苫小牧営林署

(2) (3) 『山づくりのみちしるべ』 昭和三十八年 スリーエム研究会

(4) 堀江敏夫 『苫小牧地方鉄道史』 昭和三十九年 苫小牧地方史研究会

(5) 『千歳市史』 昭和四十六年 千歳市

(6) (2) に同じ

(7) (5) に同じ

(8) 『早来町史』 昭和四十八年 早来町

(9) 金田一氏談による

(10) 『苫小牧町名改称地番整理ニ関スル一件書類』 昭和十八年 苫小牧町

(11) 荒木元吉氏談による

(12) (1) に同じ

(13) (14) (4) に同じ

